THE CENTRAL REVIEW

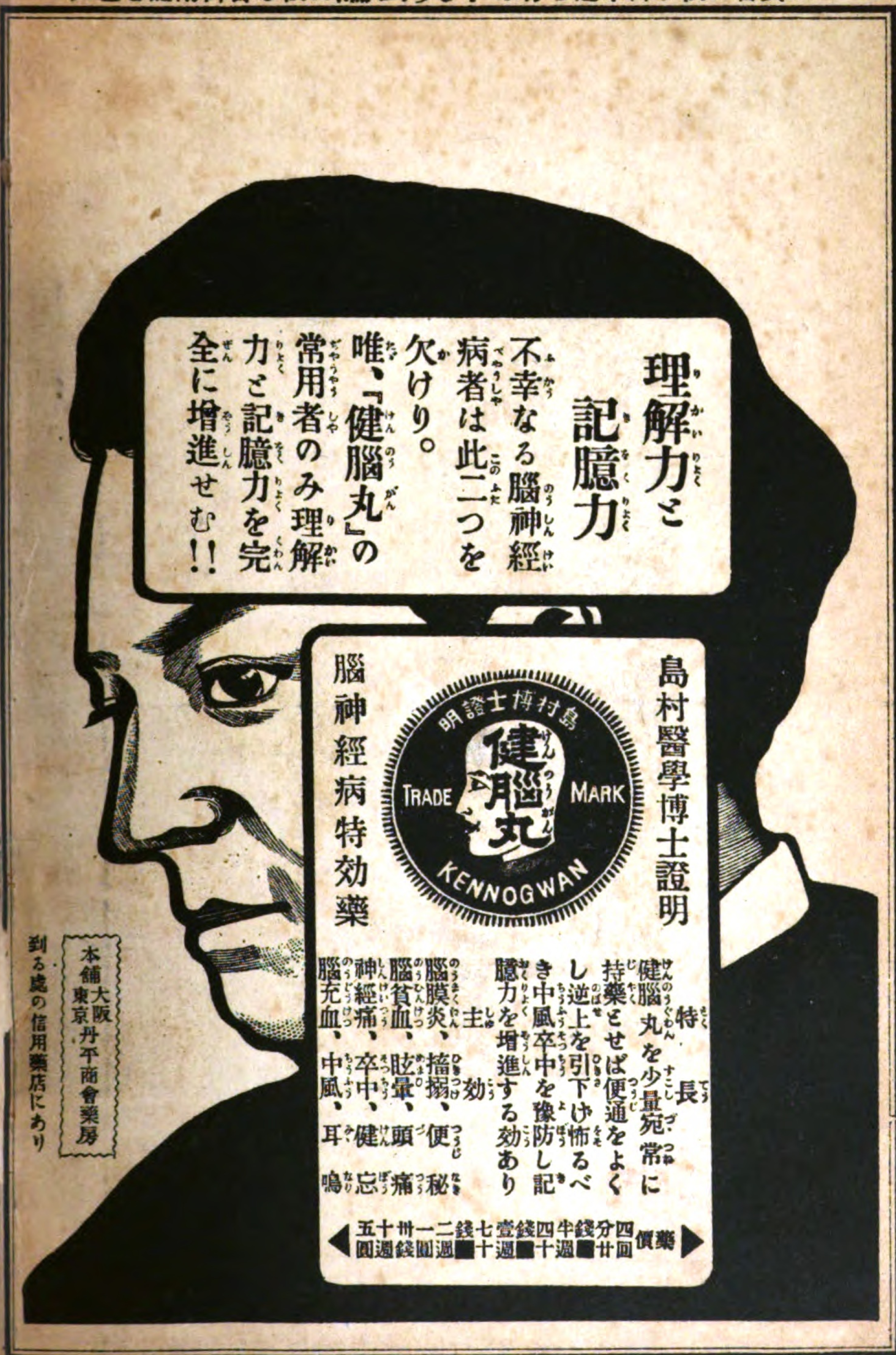
中央公論

1917
no.3

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正六年二月廿七日印刷納本
大正六年三月一日發行（毎月一回一日發行）

三月號

第三十二年第三號 第三百四十一號


理解力と記憶力
不幸なる腦神經病者は此二つを欠けり。
唯、『健腦丸』の常用者のみ理解力と記憶力を完全に増進せむ!!
島村醫學博士證明
島村博士證明
健腦丸
TRADE MARK
KENNOGWAN
腦神經病特効藥
特長
健腦丸を少量宛常に持藥とせば便通をよくし逆上を引下げ怖るべき中風卒中を豫防し記憶力を増進する効あり
主効
腦膜炎、搐搦、便秘
腦貧血、眩暈、頭痛
神經痛、卒中、健忘
腦充血、中風、耳鳴
藥價 四回分廿錢 半週四十錢 壹週七十錢 二週一圓卅錢 十週五圓
本舗 大阪 東京 丹平商會藥房
到る處の信用藥店にあり

耕堂 中野正剛先生著

【忽再版】

世界政策と極東政策

■菊判特製全一冊紙數四百數十頁
■定價金壹圓五拾錢郵稅金拾錢

著者平素東方の救濟に志あり。曩に歐米を漫遊する二年、戰塵の間より具さに歐米外交政策の經緯と列强勢力の推移とを極め、筆を呵して極東の前途と日本の使命とに最後の斷案を下したるもの即ち本書なり。一卷九篇七十餘目、言々皆憂國の至誠に出で、句々悉く經世の雄圖を藏す。行文の雄健、筆致の暢達、能く帝國が世界の那邊に立つかを明かにし、讀者の胸中自ら慨世の熱血を漲らしむ。戰後の變局を思ひ、極東の前途を憂ふるの士に敢て本書を薦む。

發兌 東京市日本橋區本石町 至誠堂
振替口座東京一七四四番

好評忽三版

大庭柯公先生著

【大正名著文庫廿九編】

世界を家として

四六判特製美裝
紙數四百頁餘
口繪挿畫數葉
定價金壹圓卅錢
郵稅金八錢

これ先生が旅行上の感想記なり。先生の足跡五大洲に遍ねく、當代操觚者中眞に東西南北の人なり。獨得の感想、多角の趣味、加ふるに流麗の筆致を以てす。卷を開けば山動き、水流れ、烟霞机上に起る。浴衣がけの輕快なるあり、萬里行の壯絶なるあり。或は偉大なる鄰人を評し、或は海外出稼婦に萬斛の同情を濺ぎ、鄰境に遊んでは時に今昔の感に咽び、時に大陸の大觀に醉ふ。皆これ「趣味の地理」を談ずるもの、山水を想ひ、旅行を好む者の逸すべからざるは本書なり。

創作界の二大異彩

柳川春葉先生作

【家庭の絶好讀物】

二人靜 前篇

忽ち三版

本書は著者最近の傑作小說にして、報知新聞に連載せられ、滿都の好評を博せるもの。名家の末路なる澁江輝雄を中心として、嬌名高き藝妓浪次と、才色双絕の令孃三重子と義理と人情の縺れに縺るゝ所、讀者をして同情の淚に咽ばしむ。滿篇溫かき愛情と哀愁とを漾はす家庭最良の讀物として江湖の一讀を乞ふ

菊判特製頗美裝
紙數三百八十餘頁
口繪オフセット版
定價壹圓貳拾錢
郵送料金十錢

浪六先生著【一大奇書＝熱狂的歡迎】

大正五人男

六版出來

大正五人男は架空の小說的人物にあらずして今日の現在に名聲の聞えたるもの五人こゝに相集まりて本書を成せり。

菊判洋裝美本
紙數三百頁餘
口繪コロタイプ版
定價金壹圓
郵送料金八錢

發兌 東京市本石町 至誠堂 振替東京一七四四四

S.S.S.

藝術界諸名士の好評を博し
好評嘖々天下を風靡しつゝある

サンエス萬年筆

聖上御用品
東宮御用品
各宮家御買上
高等工業學校の指定御用品たる以外諸學校諸會社より殺倒的御注文を蒙る

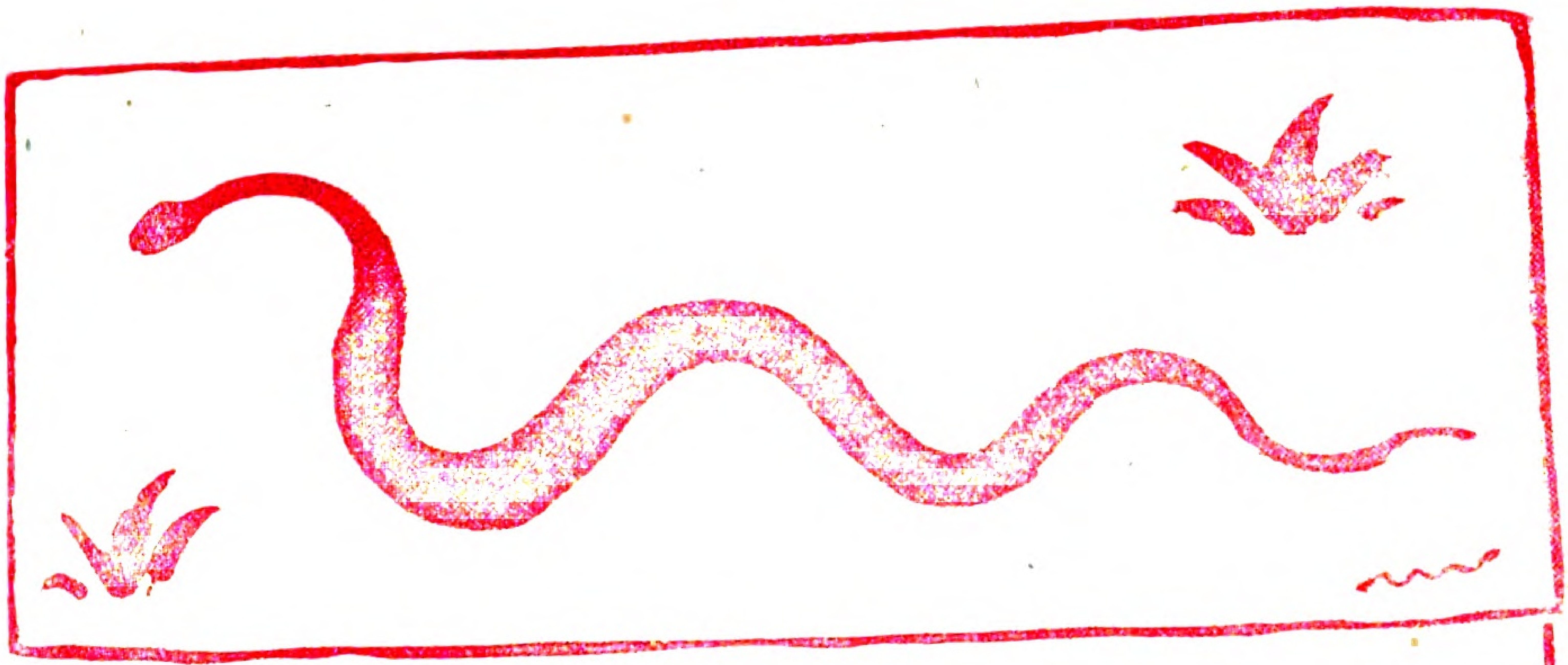
ペンのすべりよく――インキの流出よく
耐久力著大で――無比の廉價
責任保證十四金ペン付一本一圓廿錢以上拾貳圓迄
全國到處の文具店にて賣捌く

目錄進上 御申越次第無料贈呈

俊才育成の目的を萬年筆界には前例なき
獎學資金を提供す

東京馬喰町四丁目▲サンエス萬年筆本舗▲電浪花長一九一四

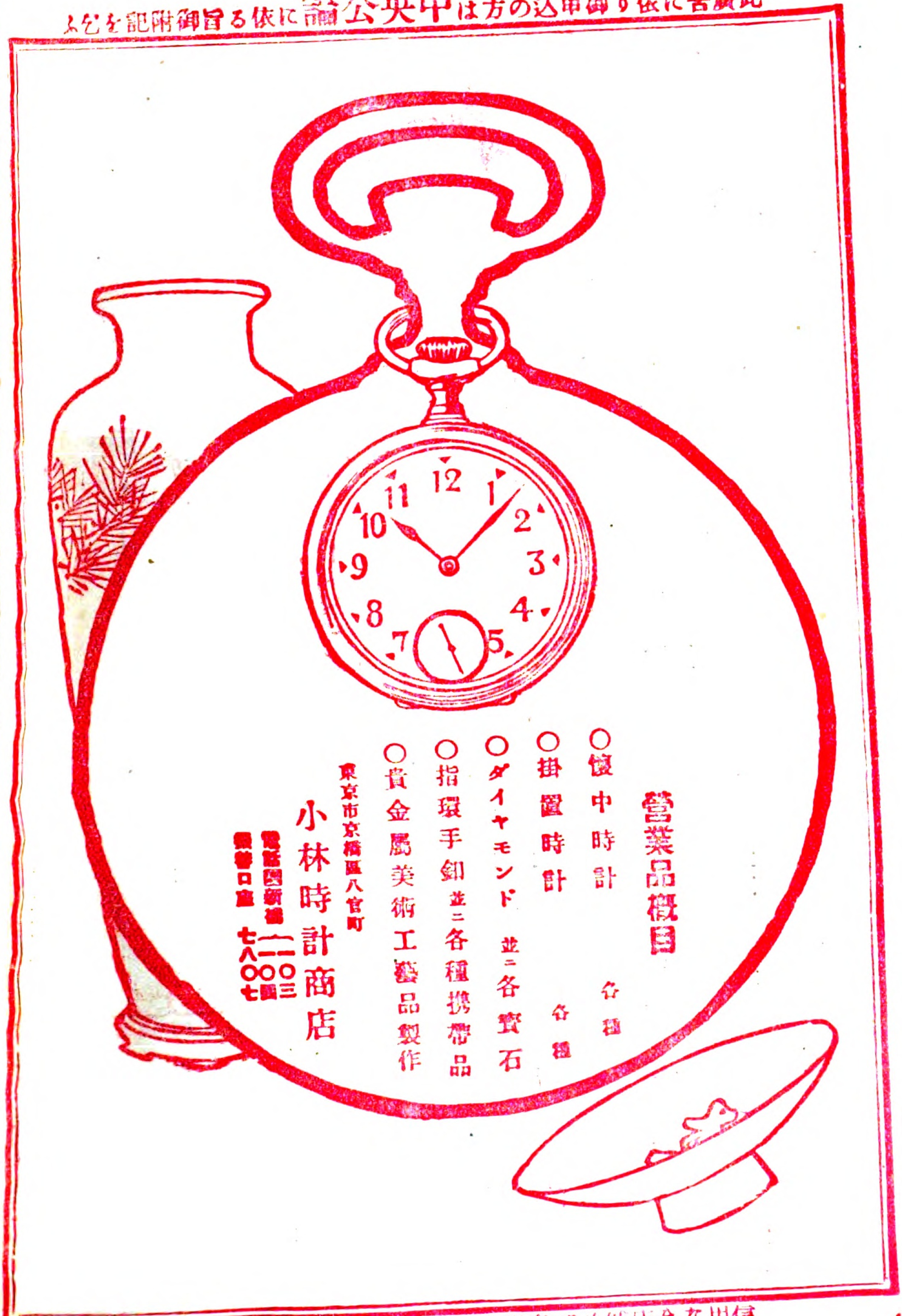




中央公論第卅二年三月號目次



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す


LANDSCAPE BY HENRY DEZIRÉ

PRINTED BY YABUKI-KOSHODO.

三月一日發行

婦人公論

定價二十二錢
郵税二錢
中央公論社發行

三月號要目

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



一九一七年の流行
ペルシヤ模様ネクタイ

ペルシヤ上古時代の模様を現代化したる斬新なるネクタイにして高雅優秀なる新春用として最適す

東京 赤帽印ネクタイ發賣元 大阪

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論

三月號

第卅二年第三號

第三百四十一號



帝國之危機

大谷光瑞

我が大日本帝國は正に衰亡に赴かんとす。其の危き事春冰を渉るが如し。而して擧世皆云ふ。國威正に揚り宇内其輝を仰ぐ、何の處に危きことあらんやと。是即ち危機なり。人皆危きを知らば既に危からず。危きを知らざるが故に危し。夫れ高塔に登て甍瓦を修むるは危し。故に人競て愼む。故に周歳其死を聞く事稀なり。街頭を馳驅するは常事なり。故に死傷日に之を聞かざる事稀なり。今我國擧て其安きを信じ又備をなさず。是實に危機なり。歡樂極て悲哀生ず。今皆其危きを知らず、而して歡樂す。他日

臍を噬むも及ばず。夫遠慮先知を缺くは小人なり。小人國に滿ちて其國の危からざるを聞かず。我帝國の五十年前勃興をなさんとするや、烈士身を忘れ國を救ふ。故に大業終に成る。今は卿相善く身を謀り、市井の屠沽財を恃て侵淩す。皆身を思て國を忘る。故に國運終に衰亡す。我國維新以來功臣朝に當り、其始め聖謨を翼讃すと雖も、終に私人を引き鄕黨を援き、漸く國政を私せんとす。是に於て之に反するもの亦黨を樹て相爭ふ。而して重臣朋黨互に相爭ふと雖も、國政を私せんとするや一なり。夫れ法は死物なり。我國本より憲あり、律あり。毫も踰越を許さゞるが如しと雖も、重臣朝に當れば其私を行ひ、朋黨政を秉れば數を恃て欲を縱にす。故に今の世重臣に阿附するに非らずんば朋黨に加はり、而して榮達を期せざるなし。是を以て賢能上聞せず、志士艸莽に隱る。而して朝に當るもの概ね半死の衰老にして、多くは善く身を謀るの徒なり。而して曰く、是處世の妙術に長ずと。識見なく經綸なく、苟且偸安唯願ふ所は虛譽にあり、令聞にあり。甚しきは子孫の計一家の謀を爲すにあり。氣力既に耗し、難に當るの勇なく、昏々朦々視聽殆ど其用をなさず。肉身既に竭く、心識豈獨壯なるを得んや。國の將に興らんとするや人に生氣あり。國の將に亡びんとするや人に死氣あり。諸葛亮は二十四歲にして既に蜀に在り。耶律楚材は二十六歲にして成吉斯大可汗に從へり。ピット二十六歲既に宰相として英主を輔け、大ナポレオンに抗せり。是皆古の英傑にして例となすに足らずと云ふべからず。我國維新の大業をなさんとするや概ね三十前後の俊傑其事に當れり。國に老臣無るべからず。然れども耄耋のみを集めて之に當らしむるは宇內其例甚乏し。而して皆云ふ、我國實に人なし、之を薦めんとするも以て聖謨を翼讃せしむるの器に非らずと。實に然り。然れども必ずしも人なきに非らざるも、姑く其云ふ所に從はゞ何ぞ

是れが計をなさゞるや。人なきが故に聖謨を翼讃せざるも可なりと云ふべきか。今の世古と異なり、國民擧て參政の權を有し、聖謨を翼讃するの責を分てり。人なきは國民自からの罪なり。而して聖謨を翼讃する能はずとせば不忠是より大なるはなし。明治の御宇聖謨を翼讃し、大正の御宇に至ては能はずとせば、是明治の忠臣たるも大正の亂臣なり。艸莽巖穴の賢良は人是を知らざるを以て姑く論ぜざるも、英傑の出づるを待たざるべからずとせば、是自直の箭自圜の木を索るなり。如此は百世一も有る事なし然して世皆車に乘り弓を執るは何ぞや。隱括の道を用ゆればなり。隱括を恃まず、自直の箭・自圜の木ありと雖も、良工は貴ばざるなり。何となれば乘るものは一人に非らず、射るもの一發に非らざるなり。故に英傑の出づるを待つも、人に百歲なく、國に萬世あり。況や其人なく、車を去り、弓を舍つるをや。故に國民自から發奮するに非らざれば及ばず。即ち國民擧て發奮せば英傑欲せざるも生ずべく、望まざるも來るべし。是隱括の道を用ゆるなり。今の世國民皆恩に狎れ、忠を効さず。朝に在る重臣は善く身を謀り、偸安苟且唯子孫の計をなし。野に在るの庶民は私積以て一家の安を冀ふ。若夫れ國破れ主辱しめらるれば何の所にか子孫あらん、一家あらんや。請看よ、白耳義の慘害の甚しきを。大戰の未だ起らざるに當ては、國富み民樂し、蕞爾たる小國を以て而も殷富大國を凌ぎ。遠く支那に至るまで鉅款を籌し、之に投ぜり。而して一朝戰起るや、君竄し國他の有となる。昔日の殷富は却て今日の厄を招けり。獨軍の兇暴を以て之に臨むや、苛斂誅求至らざるなく、終に今に至ては壯丁を驅て奴隸とし、獨墺に轉買するに至れり。皆曰く、獨墺は虎狼の國なり、其暴は懲さゞるべからずと。實に然り。是が兇暴を除かざれば仁義の師と云ふべからず。然れども白耳義自から恃むべきを恃み、其備を怠たりしは其咎己に在り。

語に曰く、汝に出たるものは汝に還ると。羊にして爪牙あらば虎豹の食とならざるべく、鳩にして堅嘴あらば鷹鶻の餌たらざるべし。今我帝國朝野皆歡樂に耽けり。私爭に勇に、公戰に怯に、屠沽驕富の徒一國瞻望の標となり、口に軍備を唱へば叛逆者の如く之を排し、賦を減じ財を理するを賢能とし、節義を土芥とし、忠孝を抛却し、倫常潰敗し、擧國爭ふ所唯財に在り。如此くして將に來らんとする所の果は如何。汝に出たるもの汝に還らざるの理なし。白耳義の慘禍は是殷鑑に非らざるか。二千六百年天日と光を爭へる我國光は、將に大正の御宇に至て其輝を斂めんとす。大正の國民は果して萬世に不忠の誚を甘受するや。汝等の祖先の忠節に對して更に恥る所なきか。不忠不孝而して猶恬然安を貪らんと欲するや。眠猶醒むべし、死は生くべからず。今にして翻然非を悟り、罪を悔るに非らずんば是死屍なり。死屍は鞭撻するも動かず、雷震の威を加ふるも畏れず。是勇なるに非ず、知覺なきなり。自から好で死屍となる。人誰か死屍たらしめざらんや。我國民七千餘萬を算す。豈一人の義士なからんや。夫物は用を須て始めて生ず。用無んば即ち藏る。今我國擧て貪夫なり。財に狗はざるなし。故に義士深く藏して出でず燈火は夜出て晝藏す。團扇は夏用られ秋捨らる。五十年前は國與らんとし義を尚ぶ。故に志士麕集し、口に勤王を唱へざるを恥とし、市井の無賴に至るまで猶是を稱す。今國亡びんとして財を尚ぶ。故に驕富横行し人財を云はざるなし。參政の卿士に至るまで猶是を唱ふ。義士の如きは人の顧るなし。流離困敗乞丐たらざるもの稀なり。古より云ふ、桑田變じて海となると。其變や大なり。然れども五十年にして興亡踵を旋すが如しとせば其變豈に滄桑の比ならんや。往年幕末秕政百出し、外侮屢至る。此時義士皆身を忘れ蹶起す。幕府以て己に便ならずとし強壓を加へ、志士を執へて盡く囹圄に投ず。而して討幕

の聲愈盛にして終に屈せしむる能はず。此時我國の危き事今日に異ならず。義士救國の宗旨は即ち尊王攘夷にあり。尊王とは之を換言せば討幕なり。攘夷とは即ち獨立建國なり。今志氣衰亡し又人の救國を唱ふるなし。今市に尊王攘夷を口にせんか、人指して狂人となす。六十年前自から是を口にせし人猶存す。而も今日之を唱ふる能はざるは何ぞや。心既に死せるなり。皆曰く、時世を異にすと。尊王の大義は天孫に隨伴し日本島に來れるより、今日に至るまで乃至萬世天壤と共に無窮に存せざるべからず。時世を異にすと云ふが如きは不忠の言なり。攘夷は其字句稍妥當ならずと雖も、獨立建國は又是れ萬世天壤と共に無窮たるべく、尊王大義と別なし。豈時世を異にせんや。往年幕府の執政暴威を振ふ。故に義士是に抗して立つ。今は執政力無く擧世財を逐ふ。故に義士概ね腐敗し終に立たず。夫れ蒸氣は至輕至柔なり。然れども之を抑壓せば大破裂を爲し、是を散漫せば之に觸るゝも威なきに至る。古は是を壓せり、故に大勢力を生ず。今は散ぜり、故に力なし。況や更に啗はすに利を以てす。人の敗れざる稀なり。義士は國の活力なり。活力既に耗し國焉ぞ存するを得んや。往年米艦浦賀に至るや、朝野駭然爲す所を知らず。今日米國堅艦數隻を太平洋に泛べんとす。而して朝野知らざるが如し。往年は艦速毎時八七海里に過ぎず。今は駛艦は三十五海里を行く。然れば往年の五日は今の一日なり。況や菲律賓グワム既に米の有たり。然れば今日米に在るの堅艦は往年浦賀に在りしと何ぞ撰ばん。往年は外國來て我を侮り、強て開港を迫る。今日は我國人外に在るもの皆侮らる。甚しきは其入國を許さゞるに至る。是れ往年辱にして今日榮なりと云ふべきか。然れば外侮の甚しく急なるは古も今も別なし。而して今日人の更に尊王攘夷を口にせざるは何ぞや。是れ維新以來四十餘年の隆盛と對露戰勝の餘威に安じ、財を貪て心を喪へる

なり。夫れ象人百萬は强しと謂ふべからず。喪心酔死せるものは即ち象人に同じ。七千餘萬の象を以てするも未强しと謂ふべからざるなり。象人は共に謀るに足らず。喪心の人は共に談ずる能はず。徇財貪富の徒は雞猪の如し。他の食する所とならずんば幸のみ。如此は論ずるに足らず。流離困敗凍餒の中猶義士の殘するものあらん。是國の至寶なり。或は山林藪澤巖穴の間に在るも、或は囹圄縲紲纆索の中に在るも、或は割烹芻牧飲牛の事に在るも、其卑賤を羞ぢず。古の堅臣は是の中より出づ。伊尹・傅說・呂望・管仲・百里奚等此是の比儔なり。流離困敗は義士の常なり。古の義士獨り富で今の義士盡く窮するに非らず。古は動もすれば斷頭刳腸の厄あり。今は無し。而して猶流離困敗を憂へ起つ能はずとせば是れ義士にあらずして僞士なり。又象人の班のみ。

今我國の憂ふべきもの二あり。一に曰く內憂。二に曰く外患是なり。內憂とは上に云ふ如く大義を忘れ、利是逐て其備をなさゞるなり。今國の酖毒を屠沽の驕富とす。國の蠹害を曲學阿世の識者とす。この兩者を除くに非らざれば國興らず。敗風墮俗人其害を蒙らざる者少なし。夫れ牛乳肉汁は滋養なり。然れども瀕死の重病は是を以て救ふ能はず。今敎育宗敎の力を假て敗風墮俗を救はんとす。此れ是の例なり。先流毒の黴菌を滅するに非らざれば死を救ふ能はず、兩者の害毒に對し是が除去を計るに非らざれば病を救ふ能はざるなり。今我國の識者多く云ふ、我帝國は世界に於ける一等國なり、東西兩洋の間に立ち文明の調和を計るべく、人種間の軋轢に對し是が平和を圖り、永く幸福を增進せしめざるべからずと。何ぞ其言の美なるや。今三尺の童兒ありて大人の爭を裁せんとせば人誰か其僭を笑はざらん。我帝國自ら衰亡に赴きつゝ何の餘力ありて文明の調和を能ふべけんや。況や軋轢の平和を期すべけんや。自

國の文明すら十分の開發を行ふ能はず、墮落せる不健全の思想の滔々汎濫するを阻むる能はず、倫常を敗り猶悟らず。是果して文明と云ふべきか。蜂蟻猶國家あり。我帝國の如く數多の遊民を有せる蜂窩蟻群を見ず。自國すら完全に進歩せしむる能力なくして豈他を顧るの餘裕あらんや。人種間の軋轢の如きは論ずるの用なし。自己の生存の必要の逼れるに拘はらず、是を悟らず。朋黨比周私議紛雜す。我帝國の識者皆云ふ、支那の現狀を見るに國家なく、私黨紛々唯口舌に時を費すのみと。不肖を以て見るに我帝國も亦是と伯仲のみ。既往數年數ば豫算不成立に終り、若くは終らんとするは其罪誰にありや。或は云ふ宰臣宜きを得ずと。或は云ふ政黨雅量を缺くと。宰臣も政黨も共に帝國の臣民なり。外國人に非らず。誰か烏の雌雄を知らんや。然れば支那の國會と國務院の相軋ると何の分つ所あらんや。唯我帝國の猶存立を殆くするに至らざるは　上に聖明の君あるのみ。若是なくば決して獨立する能はざるなり。識者又云ふ我國に國是なく、思想混亂し、其重大なる使命を知らずと。實に然り。然れども國是なきに非らず。開國進取の國是は今日に始るに非ず。二千六百餘年天孫の日本島に降臨し給へるより毫も變ぜず。唯時に隆替あるのみ。今日國是なしと云ふは甚非なり。無きに非らず、國是に從はざるなり。特に對露戰勝以來國民意驕り智昏し、自ら一等國と稱す。素より國力の等級を付すべき度量衡なしと雖も一等の稱何を規準とし之を定めたるや。夫獅子虎豹は獸中の最猛なり。今山猫豺狼自から稱して是と伍すと云はゞ誰か之が僣を笑はざらん。我帝國の危機の生ぜしは實に國民が一等國なりと僣せるより來る。是を除去するに非らざれば遂に亡滅を免れず。不肖暫く數字を列べて其妄を辯ぜん。(別表の數字は盡く大戰以前を採る。戰時は以て規準となし難し)

千九百十三年度

國名	面積	人口	歳入	歳出	輸入	輸出
			英價千磅單位	同上	同上	同上
アルゼンチン	一、一五三、一一九	七、四六七、八七八	三七、一〇八	三七、一〇八	五四、三六三	六九、八五〇
オーストリアハンガリー	二四一、四九一	四九、八八二、三三一	二三八、五四六	二九八、五三三	一一四、七一六	八三、九九六
ベルジウム	一一、三七三	七、五七一、三八七	二三、二九二	三二、二七〇	一一八、三四五	一四三、〇七三
ブラジル	三、二九〇、五六四	二四、三〇八、二一九	三八、九一四	二六、九三〇	三五、四三九	四六、五一一
支那	三、九一三、五六〇	三二〇、六二〇、〇〇〇	八二、〇〇〇	三七、〇〇〇	八六、八一八	六〇、九一五
フランス	二〇七、〇五四	三九、六〇一、五〇九	二一四、九四〇	二〇七、六六五	二四八、〇〇〇	一七六、〇〇〇
ドイツ	二〇八、七八〇	六七、八一二、〇〇〇	一八四、八〇二	一八四、八〇二	五三四、七五〇	四九五、六三〇
日本	二六〇、七三八	五三、六九六、八五五	六五、四二八	五五、九七五	五九、五七三	五九、一一〇
オランダ	一二、五八二	六、二二二、七〇一	二一、二五〇	一九、三八二	三二六、五〇〇	二五七、九一六
ヨーロッパロシヤ	一、八六七、七三七	一二五、六八三、八〇〇	三四三、一二〇	三三八、二九一	九八、八二六	九一、四二二
英本國	一二一、六三三	四六、四〇七、〇三七	一九八、二四三	一九七、四九三	六九七、四三二	五二五、七二〇

米合衆國	三、五七四、六五八	一〇九、〇二一、九九二	二〇九、一二五	二〇九、一二〇	三五七、八五五	四一四、二一一
英領印度	一、八〇二、一一二	三一五、〇八六、三七二	八四、四八五	八二、九九八	一六三、七三九	一七六、三一九
英領濠州及新西蘭	三一、一九二、六六三	六、五六三、四二五	七一、五三五	七一、九四六	一〇三、五〇九	一〇四、五七八

英佛獨米露は實に一等國なり。我果して是と比較して何の點に勝る所ありや。以太利は我と伯仲せり。唯人口と面積（アフリカの沙漠を除き）我彼れに勝れり。而して歳計武備貿易我猶彼か下位にあり。墺は殆ど獨の附庸たるが如しと雖も其國勢猶我上位にあり。若夫れ地の大、人の衆、國の富を以てせば印度の如きは遥かに我の上に在り。最强の五國と相競ふも毫も遜色なし。支那の如きも若し英傑の出で丶之を整理せんか、又我國の上に在るや疑なし。アルゼンチン共和國の如きは我國民は其存在すら之を知らざるもの多し。然れども地の大と國の富を以てせば又我上にあり。唯人少なく武備に缺くるを以て强を稱する能はず。若夫れ强露を破りしを以て一等國たるの要素となさば、往年ノルウェイ猶是れを破りし事あり。卅七八年戰役は我勝利に歸せしは疑なしと雖も是を以て强露を敗りしとなさば大なる誤謬なり。若夫れ强露を敗り得ば沿黑龍州は彼の有たらざるべく東淸鐵道は彼の有たらざるべく、貝加爾湖上は日章旗の船舶往來せんのみ。然るに盡く是を得ざるは露を屈したるに非らず。露自から戰を欲せざりしによる。不肖は如此く我戰勝の光輝を隱蔽せんと欲するものに非らず。我兵の勇武は實に天下に敵なし。今日獨國の精兵を以てするも我兵の勇武を遏むる能はざるべし。然れども國力の微弱は兵の勇武と別問題なり。往年日露の戰役に當ては我兵强くして國弱し。露兵弱くして國强し。故に戰は我彼に勝つ

と雖も、我長驅席卷する能はず。彼猶ウスリー北滿洲に蟠踞するを得、而してルーズヴエルト氏の和を議するや、弱國强兵と强國弱兵と共に之に贊同せざるを得ず。若果して强國强兵と弱國弱兵ならば決して講和の提議に贊同せざりしなり。今やウイルソン氏の獨の講和提議に贊同し、英佛露日以に之を謀るや、聯合諸國は斷々乎として峻拒せり。是當然なり。聯合國諸國の戰勝未赫々たらざるも、講和を望むが如き時機に非らざるなり。然れば往年の對露戰勝は畢竟兵の勝にして國の勝に非らず。故に一等兵なるも一等國に非ず。然るに自から僭して一等國と稱し、而も兵備を減撤せんとす。然れば今後數年を出でざるに一等兵の實すら之を亡ふべく、國と兵と共に數等の下位に沈落せんのみ。夫一等國たるの要素は一に曰く兵、二に曰く人、三に曰く地、四に曰く財なり。兵なくんば國存せず。兵は人なり、人衆からざれば兵少し。地大ならざれば人多からず。地大にして人衆ければ財自から生ず。今支那印度の大を以てして英佛米獨露と相競ふ能はざるは兵を缺くによる。人は五國の强を合するも支印に及ぶ能はず。露の最大を以てするも猶半に過ぎず。地の大を以てするも英露米は支印に勝ると雖も佛獨は及ばず。財は素より五强支印に勝ると雖も、支印も五强の如く交通を善くし、製產を増さば天產の富決して是に讓らず。然るに一は獨立の名あるも實之に伴はず。一は既に英の隸屬となる。是最大の要素たる兵に缺く所あればなり。往年支那康熙乾隆の朝、明君上に在り賢臣之を輔く。是時露亦明君賢臣あるも敢て東邊を窺はず。近時伊犁亂あるや露之を侵すも、猶名將の之が回復をなすあり。然れども是の時既に上に明君なく、淸祚漸く傾く。今日五十餘萬の常備兵を擁し毫も國家を維持するに足らざるは何ぞや。今の支那兵皆私兵なり。將軍私に之を養ひ以て私慾を跋張するの具に供す。故に兵増多くして國増亂る。如此の

は强兵にあらずして實に亂兵なり。若夫英傑の國を治する有て兵を整へば一等國たるも亦難きに非らず。アルゼンチン共和國の如きは地と財は其素を有せり。地一百十五萬餘方英里を出づ。又小と名くべからず。貿易入出十八億圓に及ぶ。又多と名くべからざるも、我帝國の最大たる昨年度と伯仲せり。然れども人口纔かに八百萬に過ぎず。故に海軍の如き財を要する事多く、人を用する事少きは是を行ふべしと雖も、陸軍に至ては不可能たるを免れず。若夫人口四千萬をすぐれば强國たるも亦能はざるに非らず。ブラヂル合衆國の如きは地は三百二十二萬方英里にして强國として十分の要素を有せり。人口は依然寡少一千七八百萬に過ぎず。加ふるに國に英傑なく、秕政百出財政紊亂し、爲に天產の富源を發する能はず。却てアルゼンチンの下風に在り。二國共に人を缺き、爲に近く强國たるべき要素を完する能ず。北米合衆國も人口六千萬を出づるを待て始めて强國たるの實を擧ぐるに至る。今我帝國人口七千五百萬を出で、人口に於ては一等强國の要素なきに非らずと雖ども、兵に至ては甚だ缺陷せり。常備の二十一師團は決して重兵に非らず。六十萬噸の海軍は決して大艦隊に非らず。國防の不十分なるは實に寒心に堪へず。加ふるに地纔かに二十六萬方英里に過ぎず。貿易亦漸く戰時非常の變に乘じて纔かに十八億に達せしに過ぎず。是れを蕞爾たる小國の白耳義の三十五億に比し果して何の顏色ありや。和蘭は地一萬二千六百方英里に滿たざる小國なり。人口亦六百三十萬に過ぎず。是を我帝國に比するに地は二十分の一にして口は十二分の一に過ぎず。而して貿易は戰前に在ては五十八億に及べり。是素より蘭領東印度諸島より吸收せるを以て富庶なるべしと雖も、我國の自から以て一等國となすに比して豈驚かざるべけんや。兵に於ては英佛露獨に甚しく劣り、地に於て英露米支印ブラヂル、アルゼンチン等に劣り、富に於て英

露米佛獨白蘭に劣る。果して何に由て一等の級位を付せるや。度量衡を要せざるも一等に非らざるは明に測定すべし。古より驕て敗れざるなし。備へずして犯されざるなし。國の亡んとするや其民驕る。今我國民心驕て而も備へず。自から稱して一等國とす。夫れ亡びざらんと欲するも得べからざるなり。古呉、越を破り驕て備へず。越遂に呉を破て國亡す。今我帝國嚮きに露を破て備へず、呉の轍を蹈まざれば幸甚なり。露亦近時獨に窘められ生色なし。我昔仇を忘れ提携親朋の如し。然れども古には敵他の境を越へて攻めず。今は海軍を用ゆ。敵軍の來るや遠近を問はざるなり。況や我國の四境國多し。特に米の如きは公然我を敵國となせり。我亦宜く之に應ぜざるべからず。然るに自から僭して一等國となし、驕て備をなさず。軍事當局者の兵備を修めんとするや百方之を妨げ、名けて軍人の私論となし、二ケ師團の增兵すら數年を經て纔かに解決し、數隻の艦船の補充すら未だ了らず。自から平和を唱へ文明を以て任じ、歡樂放歌せり。之に加ふるに朝に當るもの善く身を謀り、姑息偸安以て其職に就くを願ふ。夫大事の秋に當ては非常の努力を要す。國民既に驕て國を憂へず。宰臣朝に立て唯國民の自れに叛かん事をのみ懼る。宛も弱母の驕子に於けるが如し。故に巧言諂語以て一時を糊塗せんとするに非らざれば、無能無爲唯失政の誚を免れざらんとす。巧言を以て人を歡ばしむるは酒を假て歡を取るが如し。醒來て寒前に倍す。無能を以て失政を免れんとするは食せずして財を贏すが如し。財足るの時は身既に亡す。果して之を行ひ之を爲すの時は失政の虞なきを保し難くば、既に宰臣たるの實なきなり。宜しく辭し去て實能に讓れば可なり。是皆驕兒を懼れて一身の毀譽を先づ憂ふ。故に善く身を謀ると云ふ。而して懼るべきを懼れず、懼るべからざるを懼る。宰相數ば其人を更ゆるも一も理財を[illegible]するに足らず。而も

帝國の危機は其重を加へて之を壓し、其速を加へて之に逼る。朝に立つの宰臣は之に處するの道を知らず。驕兒愈驕て殆ど節制なし。不肖を以て之を見るに其危き事幕末の我帝國より更に殆し。幕末は之を救へる志士存せり。今は之を救ふの志士なし。病は等しと雖も藥を缺けり。故に殆し。今宰臣治を圖り危を救はんとせば其職に在て權なきに非らず。夫嚴父は驕兒を更む。故に家を敗らず。然れども兒猶父に黠む。況や相と民とに於てをや。是に於て相懦にして民を恐れ、能く更む能ず。古管仲の齊を更むるや桓公武車を有す。郭偃の晉を治むるや文公官牢を有す。子產は循吏なり。上の二人に比すれば稍緩なり。然れども猶三年國中子產を殺さんと云はざるなし。而して身を忘れ國を愛へ、以て安きに置く。郭偃管仲の國を更むる無くんば晉文齊桓以て覇たらず。子產の國を治るなくば鄭は晉楚の强に介して獨立する能はざるなり。或は云ふ、今は古に異なり、宰臣政を專する能はず、之を國民に計らざるべからず、故に善政を行はんとするも之れが同意を得るに非らざれば不可なりと。是愚論なり。政を專にするは既に亂臣なり。之を國民に計るは當然なり。國民に計らざるべからざるが故に善政も猶行ふ能はずと云ふは誣なり。我帝國議會兩院の中盡く賢良なりと云ふべからざるも、盡く不良なりと云ふべからず。故に是を計るに足らずと云は之を侮るの甚しきものなり。更俗變法は難なり。是が決行を以てせば萬類繼で至る。故に計る能はざるに非らず、行ふ能はざるなり。國民は今日殆ど驕兒なり。或は喧々囂々執政を非議せん。是に懼るなり。何れの時を問はず兩院の中賢良の士は、決して宰臣の善政を欲せずして、驕兒の驕を助くるを喜ぶが如き愚者に非らざるなり。特に我帝國維新以來志士仁人國の爲身を殺し、濺げる碧血は今猶其色を殘せり。是を知るの士老若を問はず猶存す。兩院中亦此人なしと云ふべからず。

若夫善政を行はんとするも兩院擧て之を妨ぐと云はゞ是れ善政に非らず。正理は以て防ぐべからず。至善は以て阻むべからず。故に云ふ所皆努力の足らざるを欺かんとする遁辭のみ。概ね自から人の謗りを蒙るを憂へ人の譽むるを喜ぶのみ。今若し假すに五十年を以てせば之を國民に計るも既に及ばざるべし。今の如くんば國民は墮落沈淪自から是非を辨ずる能はざらん。是時に至れば管仲を以てするも如何ともする能はざるべし。支那四千年、大小興亡數十明かに其實例を示せり。今は否らず國民意驕れりと雖も僅か十餘年に過ぎず。十餘年以前は臥薪嘗膽の聲都鄙猶聞けり。三尺の童子を執へ忠孝を問へば殆ど全部は以て人倫の大本たるを答ふ。唯一部は既に腐敗忠孝を知らずと雖も、日本民族の全部に比せば頗る少部なり。然れども其病結核の如し。黴菌は徐に全身を犯さんとす。故に三尺の童子忠孝を知るも壯年の讀書人は多く是を忘れんとす。是が矯正をなすは正に今日に在り。肺結核は難治の病なり。然れども其初期に在りては治せざるに非らず。然るに宰臣朝に當て善く身を謀り、驕兒の驕を矯むる能はず。國士政に參し私黨比同し國家の大事を忘る。如此くんば實に亂臣なり。一日位に在れば一日の害あり。其流毒決して往年幕末の執政に異ならず。唯彼れは毒急にしてペストの如く、是は緩にして結核の如し。共に身を害するや一なり。義士は奮起以て是れが排除に力めざるべからず。我國家は　陛下の祖宗より受け給へる國家なり。我民族は　陛下の赤子なり。二三子の領有せる國家に非らず。二三子の毀譽の用に供すべき國家に非らざるなり。故に内憂の急なるや今日より急なるはなし。若し夫れ今日にして救ふ能はざれば衰亡を免れざるなり。而して内憂救ひ得べきも猶外患の恐るべきあり。今姑く之を說かん。

今我帝國の四周の國五あり。一に露、二に支那、三に米、四に英、五に佛、獨は往日存すと雖も今我

之を奪て存せず。或曰く他日彼報復を圖らん。或は然らん。然れども姑く四周の內に加ふべからず。或曰く講和の時若し戰前の現狀に復するを基礎として之れが協商をなさば之を還付せざるべからずと。是愚論なり。如此は姑息の講和なり。爲すべからず。若夫講和を爲すの機あらんか、必ず大打擊を獨に加へたる後ならざるべからず。否らざれば聯合諸國獨國に降伏すると等しきのみ。如此は斷じて不可なり。故に今論ぜんとするに當り姑く獨を含くめ不可ならず。五國の中、露我と親交あり。往日は患たり今は朋たり。露も亦我を敵とするの不利なるを知る。故に今日に於ては患たらず。英は我同盟國たり。在亞細亞の英人中我帝國に不利を圖るものなきに非ずと雖も、是枝葉の爭なり。兩國の大方針として依然親密なる同盟を鞏固に持續せざるべからず。是兩帝國の福利なり。故に患と名くべからず。佛は往年獨露と共に我に逼り、遼東を還付せしめ、而も自から廣州灣を占有せり。其不法なる事獨の膠州灣に於けると一なり。然れども今日に於ては共同に敵と戰へり。我亦昔怨を銜むの要なし。故に患と名くべからず。今日に於て最も我國の患たるは米と支那なり。米は我國と親交あり。然るに近時に至り太平洋岸に於て我國民の入國を甚しく拒絕せり。是實に不當なり。米の如き國情に於ては既に自國の特種なる民族を有せず。四方より招徠せる移民により建國せり。而るに白人は入國するを許すも日本人は不可なりと云ふに至ては不當も甚し。若夫れ白人に非らざる人種の入國を許さずと云はゞ洪牙利（ハンガリー）の如きは明かに白人に非らず。歐羅巴露西亞の中白人に非らざる亞細亞種族は雜居せり。是又不可なりや。又人種學上より云はゞ印度パンヂャブの黃種は白人なり。彼是れが入國は日本人と等しきや否や。黃と白との中間者たるセミチック系の諸國人は如何。彼等は漫然有色人種なる名の下

に我國民の入國を拒絕せんとするなり。不當も其極に達せり。然れども猶是を讓り之を考ふるに、米の自國領土內は自國の自由なり。公道より之を論ぜば不當にして許すべからずと雖も、自國內に於て之を行ふは如何ともすべからず。强て之を爭へば事を干戈に於て決せざるべからず。如此は不可なり。然らば其非を鳴らしつゝ默諾するの外なし。故に一步を讓り是を姑く含くも、是に默過すべからざる大事あり。即ち米の軍備擴張是なり。國として軍備なくんば其國亡ぶ。米の大國として軍備を整ふは素より其所なり、怪しむに足らざるが如しと雖も實に然らず。今回の海軍大擴張の如きは明かに我帝國を威壓せんが爲なり。今米の地位を視るに英佛獨露の如く國境交錯せるに非らず。强て之を言はゞ米の危險を感ずるは英なり。英は加奈陀を有し米の北境を壓し、東にバームダ島を以て大西洋岸を脅かし、南バハマジヤマイカ等の諸島に依てメキシコ灣上を脅威せり。加ふるに米本英に叛て立てり。宿怨無きに非らずとせば之に備へざるべからず。然るに之に備へずして我に備ふるは何ぞや。彼西班牙と鬪ふや辭を弄してフキリッピンを奪へり。是地臺灣に近し。故に夙夜我の之を奪はん事を恐る。彼若し果して我の奪ふを恐れば何の故に之を奪へるや。フキリッピン地豐饒ならざるに非らずと雖も米の費す所得る所に償はず。若夫れ西班牙より地を奪はんとせばカナリー諸島、リオドヲル地方、フエルナシドポ等猶殘せり。寧ろ是を奪てフキリッピンを含くの利あるに若かず。然るにフキリッピンを奪て次に是が守禦をなし、進で大海軍を以て我を威嚇せんとす。是實に親交ある國の爲すべき行爲なりや。故に不肖は是を我外患の第一に置かんとする所以なり。米の大海軍に次ぐに大陸軍の建設を以てせんとす。本年の議會は完全なる通過を得ざるが如しと雖も早晩實現すべし。大海軍と大陸軍は何の地に於て是が使用をなさんと欲

するや。不肖は米國に其用途を問ふに先ち、我帝國民に是答案を徴せんと欲す。是に假すに十年を以てせば我帝國は當然米の侵凌を免れざるべし。侵とは必ず戰を指すに非らず。寧ろ戰はずして我を壓するを云ふ。往年は露佛獨戰はずして我を侵凌し遼東を奪へり。獨は佛を侵凌して佛屬コンゴーを奪へり。侵凌の及ぶ所は果して云ふに忍びざるなり。是決して不肖の妄言に非ず。妄説を以て國交を傷くるが如き事を爲さず。今現に我が獨より奪へる南洋諸島占領に對し、彼の領有せるフキリッピングアムを危險ならしむるを以て我に拋棄せしめんとす。是現に明了なる侵凌なり。獨國の之を領有せし時は米に危險ならずとし我が有する時は危險なりと云ふは、明かに我を敵とし我が國交を傷くるものなり。南洋諸島の如きは芥子の如し。我是を有するも何ぞ彼の危險を感ぜんや。若夫れ直に危險を感ずる時は我は決して南洋諸島の如き芥子を使用せず、本國より堂々簾戰すべし。彼愚なりと雖も是を知らざるの理なし。而して敢て是を言ふ、即ち侵凌なり。彼の欲する所は是の諸島を得てハワイとフキリッピンを完全に連系せんとするに在り。故に我の有するを奪ひ之を獨に還付せしめ、而して講和仲裁の報酬として之を領有せんとするに外ならず。卽ち往年露の我に侵凌して遼東を支那に還附せしめ、而して自から後に是を領有せしと同一轍なり。現に如此く今日に於て猶侵凌せり。他日大海軍大陸軍の成るの日は侵凌那邊に及ぶや。是を思へば竦然身毛竪現せんとす。往年露の我を侵凌して以後三十七年一月に至るまで東亞細亞に於ける行動を規矩とし、十年以後の米の亞細亞に於ける行動を測らば決して知り難きに非らざるなり。是我帝國の存立を危くす。患ざるべけんや、懼れざるべけんや。古に曰く、霜を履て堅氷至ると。堅氷既に至れり。今日は霜を履むの時に非らず。而して我國未裁せず、凍死せざれば奇蹟なり。故に米を外

患の第一なりとす。

次は支那なり。皆曰く、支那は兵なし。我を侵す能はず。何の患是あらんと。是大に非なり。我の露と戰ひしも支那の爲なり。支那にして儼乎たる獨立國たらば我の外患に非ず。彼大國にして而も自存する能はず。以夷制夷の術により列强を飜弄せんと欲して而も列强に蠶食せらる。而して中に騷亂止まず東洋の平和一日も攪せられざる事なし。故に外患と云ふ。米の患たるや我を凌ぐにあり。支の患たるや我を擾すに在り。其患たるや一なり。第一革命以來今日に至るまで騷亂逐次相繼ぎ、政府の名あるも實なく、各省獨立し、將軍私兵を擁し、身を謀て國を思はず、詐僞を以て起ち、騙取を以て策とし、群小輩出し、昨と今と言行を二三にして他を欺き、自から欺き、以て一日の安を偸まんとす。我帝國是が擾を蒙り、連歲對支外交の失敗を聞かざるなし。朝に在るの宰臣概ね不明にして常に彼れが欺誑を蒙り、其形を異にすと雖も失敗たるや一なり。而して我朝野皆云ふ、對支問題は我國家の存亡に關すと。而して我の外交失敗多しと雖も對支外交の如く甚く失敗せるものなし。是宰臣の不明なるのみに非ず。國民全部の不明なり。近時の宰臣能く身を捨て國を負ひ、國民を指導するの勇を缺く。故に概ね左眄右顧逡巡進む能はず。國民亦遠謀なく眼前の小利に惑ひ、彼の群小の乘ずる所となる。或は曰ふ、支那の事隣國と云ふも外國なり。我の關する所に非ず超然せば可なり、何ぞ干與するの要あらんやと。是大に不可なり。彼若し獨立自營露國の如くば我何ぞ干與するの要あらんや。唯親交を尋ねて可なり。然れども自存せず。我若し干與せずば他强之に干與す。而して我患たらば是臥榻の下彼の鼾睡を容るに非ずして利刃を容るゝなり。如此き危險は視すべからず。故に彼が獨立自營するまでは干與せざるべからず。是我

自存上の必要なり。或は曰く我は滿蒙を收めば可なり、他は顧る所に非ず。滿蒙は我外屏なり、我之を有せざるべからず。是大に非なり。滿蒙我手中に在るも全支那敵の有たらば決して我外屏たるべからず。然らば山東に江蘇に福建に廣東に外屏を築かざるべからず。豈獨り滿蒙のみを以て外屏たらんや。而して東海岸に盡く外屏を築くも、其西又敵たらば外屏又要なし。如此くば寧ろ支那全土を有するの安きに如かざるなり。滿蒙占有は我國に論者頗る多し。是實に我帝國をして危險に赴かしむる者なり。斷じて其非を唱へざるべからず。或は云ふ、支那は進で我有たらしめざるべからず。是又不可なり。支那を我有と爲す能はざるにあらず。康熙皇帝僅々數十萬の滿人を率ゐ全支那を領有せり。康熙にして能ふべく我にして能はざるの理なし。況や康熙は人種二三百萬に滿たざる滿人の小王なり。我は七千五百萬の大國なり。是能ふべきなり。然れども不可なり。能ふべしと雖も之を行へば我帝國の全力を費し二十年を期し始て行ふべし。而して後永く寇盜所在に起り、全土鎭靜の時は河清と異ならず。我帝國の如き太平は、上堯舜の古より今日黎元洪大總統に至るまで四千餘年の間五十年の平安を見る事無し。是此の國民の常態なり。然らば是をして我有たらしむるも我患を增すに過ぎずして患を減ずるの謂に非らず。是外患を變じて內憂たらしむるに異ならず。其憂患たるや一なり。故に能ふべくして行ふ可からず。我の欲する所は平安なり。我の厭ふ所は擾亂なり。外患は猶是を禦ぐべし。內憂は病膏肓にあり。其害の甚しきや外患の比に非らず。我既に國民の不健在なる思想によりて身を殺すに足るべき內憂を有せり。何の用ありて他の憂を求めて我是を購ふの愚をなさんや。故に不可と云ふ。然れば我進で之を取る可からず。彼自から治する能はず。昨日の如く今日然り。明日又豈に然らざらん。故に永く其患を絕つ能はず。而

して我國常に其擾する所となる。擾亂止まざれば其患止まず。故に外患と云ふ。一に曰く米、二に曰く支那。是れ今日最も我患をなせり。內憂外患既に如此し。然れば我國果して救ふ能はざるか。今我國の病重し然れども未死せず。死せざれば治し難きに非らず。世に死屍あり。之に飲ましむるに藥を以てし、之に刺すに藥を以てし、湯熨冷罨術の施すべきを盡して而も蘇せず。是を死屍と云ふ。既に死せば之に施すの方なし。未だ死せざれば良醫と妙藥を以てせば起死回生又難きに非らず。唯夫れ難治の重病なり。庸醫の能く治する所に非らず。凡藥の能く療する所に在らず。夫れ砒石は猛毒なり。然れども重病は是を用ひざれば治せず。世豈毒と藥の別あらんや。良醫は之を用て能く病を治す。庸醫は是を用て生を害す。今我國の重病を治すべき妙藥二あり。一は軍國主義なり。二は亞細亞主義なり。甲は以て內憂を治すべく、乙は以て外患を治すべし。然れども兩ながら猛毒なり。庸醫是を用ひば死を速かならしむ。今我國の最も索むるに急なるは救國の妙手なり。良藥既に有りと雖も妙手なくんば用ひ難し。不肖茲に於て浩嘆長大息せざるべからず。然れども妙手の有無は不肖の寡聞を以て斷定する能はず。故に良醫の存在せるを信じ、姑く毒藥の用を說かんのみ。

軍國主義は其毒猛なり。然れども之に非らざれば沈湎墮落の黴菌を絕滅せしむる能はず。敎育宗敎の如き乳味は滋養物に非らずと云ふべからず。然れども沈湎墮落の黴菌は之を絕滅せざるのみならず、其滋養により益々繁殖を助く。如此きは今日の急を救ふの良藥に非らず。軍國主義とは軍人をして最高執政者たらしむるの謂に非らず。他の軍國主義は軍人萬能政治を指せり。不肖の云ふ所は然らず。不肖は一國をして治に在て亂を忘れしめざるを軍國主義と云ふ。換言せば戰端咄嗟に突發するも、我帝國をし

て敵の侮りを受けしめず、攻圍百年久しきに及ぶも毫も我帝國をして困厄に陷らしめざるを云ふ。即ち孫子の云ふ昔之善戰者先爲不可勝以待敵之可勝なり。又曰く善戰者立於不敗之地なり。不可勝とは己に在り。可勝とは敵に在り。不敗の地に立たば百年の攻圍患ふるに足らず。而して敵の勝つべきを待たば世を擧て我を攻むるも我遂に敵を敗らんのみ。孫子又曰く、勝兵先勝而後求戰、敗兵先戰而後求勝、善用兵者修道而保法、故能爲勝敗之政と。彼の云ふ修道而保法とは即ち不背の云ふ軍國主義是なり。軍國主義に在ては軍人は唯戰鬪行爲の一部を管するに過ぎず。經濟も司法も交通も産業も皆共一部をなせり。即ち農も工も商も亂に備ふるを基準とし之を行ひ、決して平和を夢想せしめず。財用足るに非らざれば師を擧る能はず。民皆法を犯さば國に秩序なし。國に序なければ國亂れ、敵の侮りを禦ぐ能はず。百般の事物施設計畫盡く敵に備へ是を整ふ。如此くんば敵是を侮らんとするも能はず。今我帝國の軍備は盡く整ひ、號令一下百萬師立ろに擧ぐ。然れども軍備以外は毫も整ふる所なし。故に一たび戰端を開かんか、全國驚愕せざるなし。是備なきを以てなり。今や戰に驚くのみならず、平和にすら驚愕措く所を知らず。我國民の輕佻浮華にして毫も堅實の風なく、喪心氣死せるは是の實例に徵して明かなり。故に亡國と云はざるべからず。今にして軍國主義により萬端の事物を整備せば敵是を侮らんとするも能はず。今世界を擧て我軍を恐れざるなし。是備へ整ふるを以てなり。而して世界擧て我國を侮らざるなし。是帝國朝野其整をなさゞるを以てなり。若し軍の如く他盡く備あらば何の國か能く是を侮るを得んや。然るに擧國是を備へず。宰臣朝に經綸の策なく、參政の國士朋黨比周し、國民醉夢の間に歡樂す。如此くんば百萬の猛兵ありと雖も之を用ゆる能はず。兵强からざるに非らず、用ゆるの術を知らざるなり。利

劍も匣中に藏し蛛絲之を覆ひ塵芥三寸之を積ば其用を忘る。今兵を用ゆるとは戰を云ふに非らず。戰に兵を用ゆるは下策なり。孫子曰く、上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵と。交戰に用ゆるは上に非らず。今云ふは上兵の謂なり。國に備あらば兵直ちに擧る。故に敵恐れて侵さず。兵に備あるも國に備なくば直ちに擧らず。故に交兵を伐たざるべからず。是を下兵と云ふ。國民遊惰を戒め勤勉力行し、百般の施設を軍國に應ぜしめば即ち備なるの時なり。孫子の云く善戰者之勝也、無智名、無勇功と。是軍國主義の勝利なり。今の教育宗教は緩漫なり。急を救ふに足らずと雖も是教育者宗教者の罪なり。教育宗教の罪に非らず。　先帝陛下の下し給へる教育勅語は高明博厚六合に彌るべき規模廣大なり。然るに守儒の孔子を誤るが如く、其眞髓を以て國民の精神を涵養する能はず。是教育者の罪に非らずして何ぞや。我佛教は大慈大悲を以て立つ。濟世救民は本旨なり。是が爲に刀杖劍鋒、辭する所に非らず。無信者を勦滅するは艸樹を刈斫し死屍を斬截する如く罪報有る事無し。是れ明かに大涅槃經中に大聖世尊の金口を以て直說し給へる所なり。然るに今の宗教家等徒らに三乘に滯り一乘を知らず。世諦に凝て第一義諦に通ぜず。懦弱怯惰素より勇猛精進の質を缺く。是れ宗教家の罪に非らずして何ぞや。故に今の教育宗教家を以てせば醍醐猶乳味の如し。重病を治するの藥に非らず。然れども其本旨に於ては萬世を通じて變ずるなく、濟世の大醫王たり、大妙藥たり、大妙術たるや論なし。軍國主義と云ふも是の一端の發現に外ならざるなり。然れども庸醫是の妙藥を用ひば藥變じて毒となる。昔秦王公孫鞅を用ひ、變法自强し、遂に六國を合て嬴政に至り皇帝となる。而して國强くして而も折る。是庸醫の藥を用ひしなり。藥の罪に非らざるなり。藥若し病を治する能はずば秦は富强たる能はざるなり。六國を合する能はざるなり。藥毒

に變ずるに非らざれば一世にして國亡びざるなり。劉項等にして名を成さしめざるなり。是其實例なり。然れども公孫鞅、申不害、韓非、李斯等は眞正の軍國主義者に非らず。故に藥の副作用の害をなすや稍大なり。春秋戰國の間に眞正の軍國主義を稱道せるは齊の管仲なり。孔子の王道に比し霸を稱ふるを以て、世の儒學の徒是を輕ずと雖も、其當時濟世の用たりしは孔子の王道に比し遙かに大なり。宜哉孔子の微管仲吾其被髮左衽矣と云へること。孔子は聖人なり。後の儒學の徒の如き局量偏見に非らざるなり。管仲若し當時にして王道を行ひ得べくば王道を行ひしなり。霸道にして纔かに行ひ得べきにより霸道を行ひしに過ぎず。彼をして成湯に於ける伊尹、武王に於ける呂尙姬旦たらしめば彼は決して霸道を以て滿足するものに非らず。桓公の佐としては是以上の主義の實行は不可能なり。管仲の學二千五百年前の舊に在りと雖も、軍國主義の唱道に至ては今に至て其利なる事刀刃の新に硎を發するが如し。彼の云ふ所殆ど益のみにして害なし。故に良藥にして而も副作用なし。然れども庸醫之を用ひば猶人命を戕ふに足る。愼まざるべからず。不肖是を以て切實に我帝國に一の管仲を欲するの念急なり。藥、毒たるか、毒、藥たるか。實に醫の良否如何にあり。

次に亞細亞主義とは外患を治する妙用なり。即ち亞細亞人の平和と福祉を增進せしめ、他國の來て亞細亞を侵凌暴虐をなさんとするを禦ぐなり。是日本民族の天職なり、使命なり。是を能はざれば我民族は存せず。今支那の如きは明かに此の主義に反せる行動をなせり。國を擧て騷擾紛々一日の安なし。自國に禍するのみならず累を隣邦に及せり。我國是災厄を蒙て而も是を治するを知らず。禍を深くし災を重くし、今日に於ては進で支那を救ふ能はず、退て支那と絕つ能はず。生を求めて得ず、死を求めて得

ず。宛も泥淖に陥れる蹇驢の如し。而して我朝野皆云ふ、支那問題は解決せざるべからずと。何ぞ其言の愚なるや。泥淖深さ幾尺、前趾擧れば後足陥り、左擧れば右陥る。何の時か泥淖を出でんや。迷路は猶出づべし。泥中は出づべからず。今の如くして果して解決し得ば白頭の烏も亦珍とするに足らざるなり。今、我國皆曰く、日支親善せざるべからず。支那又曰く、中日親善ならざるべからず。甚しきは曩日排日の急先鋒たりし者すら今日日支親善の論を唱ふるに至れり。是果して日支親善の大勢兩國に彌蔓せるか。不肖を以て之を見るに實は否らず。兩國とも欺瞞の親善なり。狡詐の親善なり。互に相欺かんとす。故に口に筆に數千萬言を列ねて親善を唱へ、一の實の伴ふなし。是今日欺瞞の大勢兩國の間に彌蔓せるなり。我國民は親善の名の下に支那の未發の富源を奪はんとし、支那は親善の名の下に日本の壓迫を少なくも歐洲平和の後まで延期せんとす。故に欺瞞と云ふ。我國民支那の未發の富源を開發せんと圖るは美事なり。欺瞞に非らずと雖も、現今に於ける行爲を以てせば多くは美擧に非らずして欺瞞なり。由來我國の富豪と稱するもの皆無智無學、利是れ知て義を知らざる無恥の小人なり。故に口に信義を唱へ一諾萬金を擲つが如きも、亦一の虚譽か否かざれば欺瞞に過ぎず。甚だしきは之を資本中に算するなり。決して眞の義に非らざるなり。古管鮑の交るや、鮑の富は管の貧を救へり。今の鮑叔は管仲を欺て其衣を剝がんとす。曩日水口山の借款の起るや。支那當局の不信なるや湖南人士の反對を名とし是れを與へず。而して制錢買收の事起るや又是を妨げ許さず。而して財を先づ得て當を拒む。是事我國の當事者に甚しき失敗ありと雖も支那政府の不信なるや論を俟たず。然れども我資本家も僅々五百萬圓を支那政府に貸すに當を得ざれば能はずと云ふに至ては、不肖實に驚かざるべからず。支那政府貧弱なりと雖

も五百萬圓を返濟し能はざる如きまで窮乏せず。若夫れ如此くんば既に國家存せず。期限既に滿ち猶淸算する能はずば此時當を論ずるも可なり、約を改むるも可なり。既に鑛山の反對を受け其制錢買收に轉ずるが如きは其陋に驚かざるべからず。制錢買收の如きは明かに曾て支那政府の禁ぜる所、其好まざるを强んとす。是管仲の衣を剝ぐ鮑叔たらざるも能はざるなり。若し支那政府の不信を責むる要あらば別に法あり。彼の好まざるに當を强要するは不可なり。是利相爭ふにして義を以て交るに非らず。故に云ふ、我國の富豪は皆利を知て義を知らざるの徒輩なり。唯利權に渴するや渴驥の泉に奔るが如し。驀進左右を見ず。利あれば是徇ふ。故に不信なる支那政府は是を以て飜弄し、終に五百萬圓を奪て當を與へず。是に於て貪利の徒と不信の輩と相依り相欺く。是今日日支間の現狀なり。古我國民の支那に遊び支那を研究せるもの多くは義士なり。今の支那を研究し是と往來せるもの多くは僞士なり。今日は志士多くは隱れ、之に代るに實業家と稱するもの日支間に往來せり。其多くは貪利不信の僞士なり。眞正の我國の資本家既に貪財忘義の徒なり。是に依て日支間を往來し衣食せんとするもの義士たらんと欲するも得ざるなり。況や如此き事に從ふ者皆市井の無賴遊民にして、牙儈を事とし、是に由て飽食暖衣せんと欲す。之に交るの支那人亦不信の輩にして巧言令色唯利に由て深く結ぶ。而して揚言して日支は實業上の親善を圖らざるべからずと。實業上何の處か不親善あらんや。若夫れ不親善ならば相互の貿易は爲す能はざるなり。實業上の親善は假りに日支國交斷絕の時と雖も能はざるに非ず。請看よ、敵國通商は國法の禁ずる所なり。然れども猶無きに非らず。是利あれば敵と雖も猶通ず。況んや平和の日支間に於てをや。是日支親善に非らずして利財の親善なり。支那人由來利を知て義を知らず。而して我國の商界亦利

を知て義を知らず。兩者の期する處相同じ。故に親善行はる。今日の實業親善即ち是なり。而して一朝利是に背かんか。水口山の如し、制錢收買の如し。素より事を紛爭の具に供せりと雖ども其眞意は兩者の利を我に與ふるを惜めばなり。其故に新に公司を起し、制錢改鑄をなせるに非ずや。是制相乖けるなり。今日我富豪の徒支那に放資せんとするは不可ならずと雖も、彼等の卑陋なる念慮と財を恃て矜驕なるを除くに非らざれば、小にして彼の身を害し、大なれば我國家を害し、引いて眞正の日支親善を害す。恐れざるべけんや。卑陋なるが故に廉恥なく、矜驕なるが故に欺かれ易し。彼等利に關しては鳶の中天を舞て地上の腐鼠を見るが如く、百に一を誤らずと雖も、義に於ては生盲なり。故に是を以てせば其欺き易きや三尺の童、九十の叟より容易なり。前年袁世凱の時我國の商賈の徒概ね欺かれたるは此の故なり。不肖の言ふ日支親善は如此き商賈の徒の云ふ日支親善に非らず。日支親善は大亞細亞主義の基礎の上に建てざるべからず。是眞正の親善なり。是を外にして親善なし。今の支那の朝野は盡く不信の輩なり。然れども支那民衆を盡く不信なりと云はゞ誣なり。支那の志士にして是の主義を唱導せるもの無きに非らず。然るに我親善の假面を以て利權を奪はんとし、或は巧言諂語彼の驕心を買はんとするが如きは最も不可なり。利に關しは其眼の鋭明なる事彼遙かに我の上にあり。巧言の欺に至ては我正に彼れを師とせざるべからず。然れば是を以て彼に臨むは梟を驅て烈日の下に鳥と食を爭ふが如く、疲牛に鞭て駿驥を逐ふが如し。誰か其の成らざるを怪まん。利權の如きは之を奪ふ要なし。巧言の如きは是を唱ふるの要なし。彼不信ならば斷々乎として是を責め、其非を改めば可なり。何ぞ恐る所あらんや。良友は諂語せず。今日の如く彼不信ならば苦言辭する所に非ず。宜しく嚴父の驕兒に對するが如く爲さゞるべ

からず。何の要ありて巧言諂語せんや。利權を奪ふが如きは斷じて不可なり。我國の資を投じて彼の富源を發するは最も可なり。是利權を奪ふに非ず。然れども今日に至るまで列國の商賈相競ひ、以て利權を奪ふ。故に眞正の富源を發するも猶彼等は利權を奪ふとなせり。故に姑く時間を與へ、彼の自覺するを待たば可なり。故に資を供するも利權を當とせず、政府を信ぜば可なり。而して彼等をして自から利源を發せしめば共利を享くるもの決して彼國人のみに非らず、我國民亦蒙るべく、他の國人も亦浴すべし。故に是正道なり。而して利源既に發せば彼國自から富饒たるべく、投資の財又濟償に難からざるべし。故に日支の間親善の實を擧げんと欲せば必ず亞細亞主義の基礎の上に立たざるべからず。然らざれば百年を期するも親善の機あらざるべし。今我國の支那に對し最も缺く所は教育なり。往年我教習の多く彼國に聘せらるゝや、同文の聲寰域に滿つ。今漠然として收て又聞かず。是不祥なり。我國の朝野何ぞ是を勉めざるや。近時我國の惡風敗俗の甚しき、利是逐ふを務めとす。教育の事たるや財を糜し毫も得る所なし。故に一人も是を企つるものなし。然れども眞正の親善を期さば國民の識者を養ひ亞細亞主義の大方針を自覺せしむるに非らざれば、兩國政府假りに一致行動すと雖も終に不可なり。然るに是を舍てゝ顧みず。目前の小利權に齷齪し、欺瞞を以て事を行はんとするは不肖の長大息を禁ぜざる所以なり。我が願ふ所は支那の獨立にあり。今支那人皆獨立せりと信ぜり。故に獨立せず。獨立とは自國を完全に統治し、他の侮を禦ぐの實力を有するに至て始て名くべし。自國の統一すら不完全にして政府威力なく、將軍暴威を振ひ、私兵を養ひ、政府の他に轉任を命ずるや命を拒むに非らざれば私兵を伴ふに至る。是れ獨立の國に見るべからざる事なり。如此くして各意を恣にして國を思はず。或は云ふ今日支那の安全なるは一に將

軍の兵を擁し地方の安危に任ずるにありと。是愚論なり。今日各省の督軍の兵を擁し、爲に地方の平を見るが如きは即ち薪を負ふて火を救ふなり。薪多ければ火暫く燃へず、是の理なり。若し一朝各省の權衡敗れんか、私兵盡く禍亂の用たるも鎭靜の用に非らず。是を以て之を觀るに、將軍の私兵漸く多くして國の禍亂愈深し。古唐の亂るゝや節度使皆私兵を有す。河北最甚し。一たび淮西に勝て憲宗皇帝漸く藩鎭の私兵を廢す。元和の政是なり。今大總統既に力なく、政府亦群小相伍し、寧ろ藩鎭と相結で私兵に依て一日の安を偸む。議會は口舌の雄にして唯紛々事を論ずるのみ。二十二省の山河分離し、一の國を思ふの傑士なく、私兵横行し、民其禍を蒙らざるなし。故に亡國と云ふ。何の處にか獨立の實あらんや。如此くんば百年河淸に同じ。若夫れ我國外患を弭めん欲せば、先づ支那を獨立せしめざるべからず。米の外患たるや猛なりと雖も、我是に備あらば彼決して漫りに我を辱しむる能はず。是に應ずるや易し。支那に至ては我是に備ふと雖も、彼の獨立に對しては貢献する所なし。彼をして自覺せしめ奮勵せしめ、以て獨立の實を擧げしめざるべからず。是至難なり。然れどもこの至難を濟すに非らざれば我外患の絕るの期なし。故に至難を冒して是を濟さゞるべからず。今日支那に於ける最も知名の士にして名の實より大なるあり小なるあり。我邦の人士其欺く所とならざるもの稀なり。特に財に關する者を甚しす。是れ我富豪等の無恥の小人なるを利用し、其好む所に投ぜんとす。故に誤らざるもの稀なり。然れども支那民衆四億に近し。豈二三の濟世の略を有する者無らんや。不肖を以て之を見るに濟世の略を有する支那人の少なきを憂ふるに先て、是を佐け獨立の實を擧げしむるに至るまでの我邦人の傑士の少なきと、我國民の忍堪と勇氣との缺乏を憂へざるべからず。若夫れ我國民にして勇氣と忍堪を有し、而も是を佐くるの人傑を得ば、支那の獨立は期して待つべく、決して不可能に非らず。故に重て之を言ふ。我外患

を除き東洋百年の平和を得んと欲せば、一に曰く我國民の勇氣と忍耐、二に曰く獨立の實を舉ぐるに佐くる我國民の人傑、三に曰く支那民族中濟世の略を有する人傑。この三を得ば能ふべく、その一を缺けば能はず。而して一と二を得ば三は決して得難きに非らざるなり。或は云ふ、支那の獨立は支那の事なり、支那民族中英傑あらば何ぞ外援を須ひんや、既に外援を請ふは獨立の實なきなりと。是の論一見其理なるが如くして否らず。若夫れ外援を請はざるも獨立し得べくんば今日既に獨立せしならん。經世の業は如此き單純なる物に非らず。學徒等の論壇に於て口舌を鬪すが如き空論に非らず。若し外援を賴むを英傑に非らずとし、是に依るを獨立の實なしとせば、往昔米國の獨立に際しワシントンは凡庸にして、是に依て獨立せし米國は其實なしと云ふべきや。ワシントンにして英傑なるべく、米國にして獨立の實あらば、外援を須つも必しも獨立の名に負かざるなり。況や英傑の出づるを河の圖の如く麟の來る如く待ち、其爲すべきを爲さず、漫然外患を絕つの計に出でざるは、我國民の無策無智を悲み且つ憫れざるべからず。支那にして英傑なくば凡人にても可なり。古より支那の建國の主を見るに、唐の李世氏は不出世の英雄なり。然れども趙匡胤の如きは庸材なり。兩漢南北朝明の如き皆庸材にして唯風雲に乘ぜしのみ。其の英傑を云はゞ李世氏の外成吉斯大可汗と康熙皇帝あるのみ。故に必ず英傑たらざるも能はざるに非らず。要は我國民の決心如何にあり。支那に於ける人材の有無は患ふる所に非らず。今日の如く欺瞞を以て經とし、甘言と威嚇を緯とし、以て支那問題を解決せんとす。其患彼に非ずして我に在り。憫れざるべからず。故に曰く、支那問題の解決は大亞細亞主義の基礎の上に立ち、支那の完全なる獨立をなさしむるにあり。是を除て他策なし。日支親善と云ふも是を行ふに非らざれば決して其實を期する能はざるなり。

上に云ふ如く我帝國の內憂外患は軍國主義と大亞細亞主義の二に依て完全に死を救ふべく、是により

借すに三十年を以てせば眞の健康を回復し、宇宙恐らくは强を爭ふもの無らん。不肖の云ふ兩主義は徹底して領土侵略を排す。一般にこの兩主義を唱ふるものは領土侵略を伴ふ。故に云ふ、藥變じて毒となる。庸醫是を用ひば人を殺すとは此の謂なり。領土侵略の必要あるは無人の境にあり。地球は人と他の動物と共に生息し、安樂を享受すべしと雖も、人は地の主なり。故に無人の地は先づ主を建て之を領有するも可なり。決して猿鹿等をして主たらしむるの要なし。然れども今日無人の境とは、陸に在ては沙漠と兩極地方と、海にありては大洋是なり。沙漠と兩極は乾と寒の爲動物の生息に不便なり。況や人をや。大洋は人は魚と異なり、水中に生息する能はず。然らば何の處にか侵略すべき領土あらんや。今我國兵强く國富まず、天下の不義を討ち、人民の疾苦を救ひ、强暴他を凌ぐを懲し、以て世界人類の幸福を益さしめざるべからず。是王者の師なり。故に兵益强くして威愈揚り、兵數擧て人皆恩に浴す。是此の賜なり。良醫の毒を用ひ藥となすは此の謂なり。不肖の云ふ所は即ち王道なり。假りに王道に至らざるも覇道は必ず克くすべし。管仲を以てこの主義の先人となすも其理此に存す。此に依て我國人最も奮勵努力せば三十年を期して事成らざるに非ず。故に不肖の愚鈍を以て我帝國の危機を唱へざるべからず。國民危機なるを知り相警めば既に危機に非ず。危機の一轉は唯國民の心理の轉換にあり。二千五百餘年の光輝ある歷史は大正に至て明滅の機に際せり。我等をして忠臣たらしむべきか、亂臣たらしむべきかの境に置けり。半億の我國民は是に對して猶覺らざるが故に、不肖は不遜不恭を顧みず、泣血以て國民の奮起を冀はんとす。若夫れ管仲の有無に至ては不肖の知る所に非ず。在天祖宗の英靈と　聖明の叡慮は必ず半億の中より是を擧げ給はんのみ。玆に謹で不遜不恭の言を列ねたるを謝し、併て僭越の行爲を敢てせしを恐懼す（一月十三日）

物價騰貴と中流社會の生活難

法學博士　堀江歸一

中流階級とは何ぞや

社會の階級を其生活の狀態に依て、上中下の三種に區分するは、古來の因襲なるが、何を以て上流階級とし、何を以て下流階級とし、又何を以て兩者の中間に居る階級とす可きやの區別に至つては、正確なる標準の據る所あるを知らず。現行所得稅法に於て、第三種所得卽ち公債社債の利子並に法人の所得を除きたる人の所得に對して、年額四百圓を以て、免稅點とし、此程度以下の所得を得る者に對して、全然所得稅を免除するの規定を設けたるの一事なり云ふときは、所得年額四百圓に滿たざる者は下流社會と認むるを得るが如しと雖も、一方に稅法は中流社會並に上流社會に對しては幾何の所得を以て、之に充てんとするものなるや、明ならず。又文武百官に就て見るに、親任官勅任官の如きは、官吏社會の上級に居り、又其官階勳等も自ら高くして、宮中に於て特殊の待遇を賜はるを以て、世間に於て上流階級に居るものと認めらるゝが如し。而して其官吏として得る所得は如何と云ふに、勅任文官の受くる俸給の最低額は三千圓にして、(會計檢査官、行政裁判所評定官二級俸、判檢事五級俸)勅任武官の俸給は四千圓內外に居り、帝國大學敎授、文部省直轄專門學校の校長敎授の如きは、官等勅任官に上るも、俸給の格外に低きものあるを以て、官制の定むる區別に基き、親任官勅任官を以て上流社會とし、奏任官を以て中流社會とし、判任官以下雇員を以て下流社會とするも當れりとする能はず。隨て吾輩も亦本論に於て、中流社會を以て、年額若干圓の所得ある者に限るとするが如き窮屈なる標準を設くることを避け、

家長一箇の勤勞又は其所有する財產に依て、家族の生活を稍や豐富なる程度に維持し、文明の恩澤を相當に享受し、自己に從屬する子弟を敎養して、次代の文明國民たらしむるの餘資を有する者を以て、中流生活を營む國民と認むるに止めんとす。一國の社會に中流階級の存在することの必要なるは、屢々社會先覺者の說く所にして、時に此階級を以て、社會の基礎とし、支柱と認むるの說あり。蓋し上流社會に於ては一家の家長たる者多く巨額の財產を有し、然も子々孫々に之を傳ふるが故に、其子弟たる者、多く安逸に慣れて、勤勞の尊ぶ可き所以を知らず、父祖傳來の財產を失ふときは到底自己一身の存在すら全うし能はざるが如き輩あるに加ふるに、其數に於ても全國の人口に比較して、寡少なるに反し、中流階級に至つては、其生活の狀態に於て、家長の身を持すること自ら謹嚴ならざるを得ざる爲め、嚴肅淸廉の風、家庭生活を律し、其子弟をして不知不識の間に、勤儉力行の重んず可き所以を解せしめ、家庭の敎養と學校の敎育と相俟つて、彼等をして社會有用の人たらしむるを得ること多し。然も中流生活を營む者の財產は必ずしも大なりとする能はず、其所得は多く家長の勤勞に依て生じ、而して社會上の制度の整頓したる國に於ては、所得の增加する勢敢て大ならざるが故に、家長の老衰、疾病、死亡等は直に一家の生活に大波瀾を來し、家族を擧げて、下流社會に沈淪せしむるに至らざるを得ず。幸に斯る不幸に接せず、又不幸に陷るも、從來の家長に代りて、一家を經營するの任に堪ゆる者ありとするも、中流社會の有する財產寡少なる一方に、其勤勞に依る所得に限りあり、而して社會の進步と共に、物價騰貴し、所得の增加する勢にして、物價騰貴に伴ふ生活費の增進に及ばざるに於ては、中流階級の生活は大なる打擊を蒙り、一家の生計に不如意を訴ふるは勿論、子弟の敎養に缺陷を來し、次代の國民をして中流階級の人たるに適せざらしむるに至ることとなしとせず。一國に保險事業盛に行はれ、政府並に民間會社等に於て、恩給制度の設けらるゝが如き、或る程度まで斯る社會上の變動を緩和す

るの力あるが如しと雖も、尚ほ其効果の萬全を期するに難く、殊に現在の經濟組織不備にして、富の分配に公平を得ず、貨幣制度亦未だ其理想的境域に達せずして、物價の高低と所得の増減と相背馳するの勢を免かれざるに於ては、中流階級の人が事變に於ては勿論平時に於て、其生活に變動を蒙るは已むを得ざる所とす可し。

物價の騰貴と富の分配

我國の諸物價が最近兩三年間に於て、著しく騰貴したるは、日常の生活に於て吾人の親しく感ずる所なり。試に歐洲開戰前卽ち大正四年七月末と開戰後一年數箇月を經たる大正五年十二月末とに於ける東京諸物價を比較するに、其變動の一班左の如し。

品名	單位	大正四年七月末	同上指數	大正五年十二月末	同上指數
正米標準相場	一石	一二円六三	一〇〇	一六円六〇	一三一
大麥(上)	一圓に付き	二斗七〇	一〇〇	一斗五五	一七四
小麥(上)	同上	一、〇八	一〇〇	、八二	一三一
本邦器械製小麥粉	六貫目	二円三二	一〇〇	二円六二	一一二
米國製同上	英四九斤	三、〇五	一〇〇	三、六八	一二六
牛肉牡牛(本場並)	十貫目	一三、五〇	一〇〇	二二、五	一六六
鷄卵地玉子	同上	二〇、	一〇〇	二〇、一七	一〇八
土佐鰹節(中)	同上	三八、五〇	一〇〇	五〇、	一二九
醬油(最上)	一圓に付き	升三七	一〇〇	升三二	一一五
極上味噌	同	三貫四〇	一〇〇	三貫一〇	一〇九

日本精製糖	和百斤	二一円六二	一〇〇	二三円九〇	一一〇
清酒(上々)	十駄	三四五、	一〇〇	三九五、	一一四
米石油(チャスター上)	一函に付き	四、五〇	一〇〇	五、六五	一二五
夕張粉炭	一萬斤	六五、	一〇〇	八八、	一三五
綿絲(普通二十手)	一梱	一〇五、	一〇〇	一八九、	一八〇
延銅	毎百斤	五二、	一〇〇	八〇、	一五三
硝子並板	一箱に付き	一四、五〇	一〇〇	一八、	一二四
備中早島疊表(中)	十枚	三、四〇	一〇〇	五、七〇	一六八
洋紙ゴロス	一封度	、一三五	一〇〇	、二六	一九二
縞メルトン絨	一ヤード	一、七五	一〇〇	二、六〇	一四八
獨逸人造藍	百封度	一七[illegible]、	一〇〇	一一六〇、	六九一

我國民は其日常の生活に於て、內國に於て生產せられたる米雜穀を食ひ、味噌醬油を味ひ、內地產の綿布を被服とし、而して是等の貨物の多くは外國に於て需要せらるゝ所少なきが故に、或る程度まで國際經濟に對して、孤立する生活を營みつゝあるものなり。然も日本橋の下を流るゝ水がテームス河に通ずるが如く、日本國民が今日諸外國に對して絕對的孤立生活を行ふが如きは到底之を望む能はず。歐洲戰爭一度び破裂し容易に其終熄を見る能はずして曠日彌久今日に至るや、我國の物價は戰爭に伴ふ直接間接の影響を受けて、一般に騰貴したること著しきものあり。即ち戰爭と共に第一交戰諸國は國內の生產事業に衰微を來して、外國に對する物資供給の能力に減損を告げ、第二獨・墺兩國を始め同盟國側に居る諸國より我國が從來供給を仰

げる物資は聯合諸國の海軍に妨げられて、輸送の道を失ひ、第三聯合諸國は生產力の縮小したるに加ふるに、船舶不足に依る運賃の騰貴、海上に於ける危險に伴ふ保險料の騰貴に依て、輸入價格の昂騰を促し、第四聯合諸國の軍需品として我國の物資を需要する勢の增進したる一方に、交戰諸國の供給の杜絕したる第三國市場より我國の物資に對する需要增加し、第五我國に於ける輸出超過の結果、內國通貨の膨脹著しきに至れるは、我國の物價に上記の騰貴を生ずるに至らしめたる重なる原因にして、歐洲戰爭の將來に繼續せらるゝ限り、斯る諸般の事情に依て、我國の物價の騰貴する勢も亦依然たるものなることを認めざる可からず。

固より短期間內に我國物價の騰貴したること斯の如く爲るに於ては、其經濟社會に及ぼしたる影響も亦重大ならざるを得ず。而して今日の物價騰貴たる、例へば不慮の天災又は凶作等の爲めに、我國の物質が減失し、其供給に不足を告げて、爲めに生じたるに非ず、寧ろ戰爭に伴ふ需要の增加に基くものゝ大なる以上は、物價の騰貴と共に、商工業に繁昌を誘致して、或る階級の者に利益を與へたるの事實は之を掩ふ可からず。如何なる人々が斯る利益を占めたるやと云へば、代價の暴騰したる物資を所藏したる者、代價の騰貴に乘じて、益々物資を供給する能力を有したる者、交戰諸國に對して軍需品を供給し、又は軍需品を製造したる者の如き、卽ち此地位に居る最も顯著なるものにして、而して此種の事業が株式會社に依て、經營せられたりとせんか、利益は會社の株主に及び、個人事業として經營せらるゝ場合に於ても、事業主を通じて、利益の一部分は多數の被傭者に分配せられたりと認む可く、株式會社の利益增加は輸出超過に對する正貨の流入に基く金融の緩漫と相俟つて、株式投機熱を促し、投機業者にも亦多數の暴富者を出したるが如く、一時低落の絕頂に達したる米價も徐々騰貴して、今日の程度に至れるに於ては、地方の農民の如き時局に伴ふ利益の一部を頒つを得たりとすべし。

斯の如くして今や我國の社會は殆ど其全體を擧げて

好景氣の利益に浴したるの觀なきに非ず。固より彼の資産家の如き、直接に商工業を經營する者に非ずと雖も、尙ほ會社の株式を所有し、而して其會社の營む事業が時局に關係あるの故を以て、法外の利益を收めたりとせんか、會社を通じて、巨額の利益配當を得ると共に、市價の騰貴に乘じて、株式を處分し、遽に財產を增殖するを得たるの道理にして、世間一般に戰爭の久しきに亙つて、戰時利益の永續することを望み、講和成立の風說が人心に容易ならざる打擊を與ふるもの蓋し偶然ならずとせず。然れども玆に戰爭に依て何等の利益を收むる能はず、否却て其齎せる不良の影響のみに甘んずる階級の存することを知らざる可からず。即ち中等階級殊に定額の收入に依て衣食の計を爲す階級は是れにして、此階級に屬する者の內、時局に關係ある會社の被傭者の如き或は賞與金の增加に、俸給の增加に夫れ〳〵利益を收めたる可しと雖も、斯る事業に關係の薄き者又は官吏の如き全然關係を有せざる者に至つては、獨り物價騰貴に基く生活難に苦しめられ、殆ど確定したる所得の一部分を奪はれたるの嘆なきを得ざる可し。或は彼等の內には積年の所得を蓄積し、財產として所有する者ある可しと雖も、其財產にして公債社債券と爲り、銀行預金と爲れりとせんか、何等時局に伴ふ利益に浴せざるは勿論銀行預金に至つては金融緩漫の結果、預金利子の低落せる爲め、此點に於ても亦損失を蒙る可く、偶々事局に關係ある會社の株式を所有するも、平生資力の大ならざる爲めに、株式數の少なき以上は、配當金の增加に依て、物價騰貴に伴ふ生活費の膨脹に當る能はざる可し。

一方に是等中流階級の人が時局に依て暴利を占めつつある上流階級の人を見て如何なる觀を懷くや。後者の戰爭に依て得る利益は必ずしも自己の能力知識鍛錬に依るに非ず、多く偶然の機會に基き、好運に出づるものなることを知るときは、彼等に對して階級的反感を催ほさゞるを得ず。更に下流社會として、平生中流階級の人の蔑如しつゝある人を見れば、彼等は時局に基く商工業の繁昌に依て、或は賃銀に增進を來し、或

は職業の繁忙を加へ來りたるとに依て、意外の利益を收めつゝあるの實狀なるに反し、中流階級の人は其中流階級に居るの故を以て、平生下流階級の如く容易なる生活を營む能はず、社會上の束縛に服從して、生活を煩瑣ならしめざるべからざる一方に、時局に於て何等の利益を收むる能はずとすれば、其自ら中流階級に居るとを不幸とするの念を催ほさゝるを得ざる可し。

中流階級存續の必要

階級的闘爭は歐米諸國に於ける社會上の大問題にして、勞働者階級が資本家階級を憎惡すること蛇蝎の如く、一度び資本家の家に生れたる者は終生資本を擁して、安樂なる生活を營むを得るに反し、勞働者を父祖としたる者は生涯を通じて勞働に從ひ、自己の社會的地位を上進せしむる能はざるが故に、社會階級は截然たる區別を爲し、踰越す可からざる境界を存し、勞働者階級の資本家階級に對する反感は益々劇烈ならざれば已まざらんとす。然るに我國に於ては社會階級の區別は未だ人の身分を決するに就て、大なる勢力を有するに至らず。維新の革命は總て封建時代に下流の階級に居れる武家の子弟をして一躍社會の上流に列するに至らしめたるのみならず、明治時代に入りても、幼時下流の社會に沈淪したる人をして上流の社會に進ましめたるの事例敢て少なからず。大浦兼武、後藤新平、田健次郎の諸氏が或は邏卒より、或は地方役場の給仕より、或は巡査より立身して、今日に至れるが如き、大倉喜八郎、安田善次郎、淺野總一郎氏等が卑賤の商賈より次第に大を爲して、今日金權者階級の代表者と爲れるが如き、何れも諸氏の立志成功を語ると共に、又現に下流階級に居る者をして自己の將來に望を繫がしむるを得るもの少なからず。近代の英國に於て、ロイド・ヂョージ氏が靴工を業とする伯父の厄介小僧より身を起して、大宰相と爲り、アーサー・ヘンダーソン氏や、ジョン・バーンス氏が純然たる勞働者より志を立てゝ亭閣の人と爲れるは一箇の異聞とせざる可からずと雖も、我國に於て同樣の立身出世を遂げたる人を求めんか、固より人物の優劣は別として、之を數ふるに苦

しまざるなり。然れども上記の諸氏が下流社會より一轉して、容易に上流階級の人と爲るを得たるは、要するに明治時代社會の秩序未だ確立せず、一技一能に達せる者は手に唾して、風雲に乘ずるを得たるが故にして、今日の如く、社會の秩序整頓し、又國民の一定の型式を尊重するの念其度を超へ、官吏を任用するにも、銀行會社員を採用するにも、一に其學歴を糺し、教育を云爲するの狀態を以てしては、社會に於ける階級の區別は從來の如く、自由に之を變更するに難く、一度び下流階級に生れたる者は終身其階級に居らざる可からざる一方に、資本の威力の漸く大ならんとする場合に、上流階級に居る者は子々孫々に其地位を保持するを得て、以て社會階級の鬪爭を大ならしむるの傾向を馴致するに至る可し。

社會上の狀勢の斯の如き場合には、中流階級の生活が安全に維持せらるゝは、自ら上下兩階級の衝突に對して、一箇の緩衝物を備ふる所以なるのみならず、此階級より相當の教育あり、常識あり、又恒產ある人士の社會に輩出するは、社會生活をして健全ならしむるの効果ありとせざる可からず。中流階級の社會に存續す可き必要斯の如く大なる以上は、之に對する保護法の國家に依て行はるゝと共に自强の道も亦社會自身に依て行はる可きは勿論なり。昨今の如く物價獨り騰貴して、中流階級の所得殆ど增加せず、其所得に固定的性質を有するは、今日の貨幣制度又は分配組織に於て已むを得ざる所なりとするも、國家に經濟上の經綸の確乎たるものあらんか、物價の如き、今日の程度に至らずして、調節せられたるの道理にして、物價をして其奔騰するに任せたるが如き財政策の方針を誤まれるに座するもの少なからず。又中流社會其ものゝ生活に就ても、中流階級に居る者が求めて上流階級の生活を摸倣し、爲めに生活上の苦痛を加ふるが如き、最も多く中流階級に依て利用せらる可き保險制度や消費組合の組織が却て此階級に依て閑却せらるゝが如き、中流階級の人が自ら此階級に居ることを覺らずして、其存續を危うするものと云はざるを得ず。生存競爭の劇烈なる

歐米諸國に於ける中流階級の生活を見るに、必ずしも我國中流階級に於けるが如く輕佻なるものに非ず。一家の主婦が家計を營むや、必ず嚴重なる豫算を以て出費を律し、生活をして豫算の圏外に逸せしむるを許さず、生活の様式、被服の體裁の如きは、之を質實にし、一日中の一二時間を割きて、主婦自ら買物の爲めに外出する一方に、其家長たるものも亦無益の交際を省き、家庭の和樂に依て至上の快樂を求め、只管家族生活の安全を念として已まず。我國中流階級の生活上に於ける用意未だ斯の如く爲らざるは、或は生存競爭の未だ劇烈ならざるの致す所なるか、或は封建時代君主に依て生活を保障せられたる當時の惰勢の然らしむるものなるか、之を知らずと雖も、吾輩を以て見れば我國の中流階級は現に生活に壓迫を蒙りながら、之に對して自家の地位を保護するの努力に於て缺く所あることを認めざるを得ざるなり。

首相內相の訓示を讀む

法學博士　吉野作造

（一）

先月央ば開かれたる地方長官會議に於ける首相及び內相の訓示は、其の著しく挑戰的なる事に於て大に世人を驚かした。或者は所思を赤裸々に吐露し、從來の型式を破つたことを褒める。又或者は其極度にあらはれたる反憲政會的氣分より推して、來るべき總選擧に猛烈なる干渉を試むるにあらずやと疑ふ。褒むるものにも一理あり、疑ふ者にも亦相應の根據ないではない。

寺內首相は「本大臣は君國に忠實なる同胞七千萬の公衆が、現內閣の赤誠以て國事に盡瘁するの微衷を諒

とし、猥りに虚構の説に惑はず、讒誣の言に動かず、一意國家の爲めに適當なる選良を簡出して、以て鴻基を千載に固くし、國光を中外に宣揚せん事」を疑はずと言ひ、又「言論は決して絶對無限に自由たるべきものにあらず、要は法律の範圍内に於てすべく、固より放肆妄慢を許すべきに非ず。苟くも言議にして虚構讒誣に渉り、或は輕佻危激に流」るゝに於ては、秋毫も假借する所なしと云ふて居る。全文の調子が專ら憲政會を以て虚構讒誣の言議を弄するものとなすものゝ如きを以て、秋毫假借する所なきの鐵腕が、自ら主として憲政會の頭上に落下せざるべきやを懸念せしむるものがある。首相は果して「其監督を嚴正にして法規を勵行し、國民の自由意思を尊重して選良の目的を貫徹せしめ」て以て我々國民を滿足せしむるや否や。選擧取締の直接の責任者たる後藤内相は「本大臣はこゝに各位の努力に倚頼し、今回の選擧取締を以て永く後日の範たらしめん事を期す」と宣明し、又「固より取締の峻嚴なるを期するは尚爲し易し。然れども至公至正一點の私曲を挾む事なきを一般に認識せしむる事最も難し。各位は宜しく嚴に其部下を戒飭し、其態度を公明にし、苟も疑惑を挾むの餘地なからしめん事を期せられん事を望む」と念を押して居るから、其聲言の全體に於て極めて挑戰的なるに似ず其選擧取締の實行に於ては案外公平な所置をなすかも知れぬ。我々は刮目して現内閣の近き將來に於て執る所の措置如何を見よう。

　首相内相の訓示が、共に憲政會に對する不滿を赤裸裸に表白した事は、一部人士の云ふが如く褒むべき事なりや否やは暫く之を措き、政敵に痛激な批難を加へた事夫れ自身は必ずしも尤むべき事ではなからう。けれども其爲めに執つたところの議論の進め方並びに之を用ひた文字の使ひ方に至つては、決して宰相大臣の言論として堂々たる風格を備ふるものではないやうである。地方長官會議の訓示として彼が如き形式に於て彼の如き批難を爲すの適當なりや否やについても多少の異見を有するが、少くとも其内容について吾人は次

の三つの點に於て大なる不滿を感ずるものである。第一は多少事實を曲げて政敵攻擊の具に供した事である。例へば大隈侯が寺內伯を朝鮮より招致せる事件の顚末の如き、三黨首と寺內首相との會見に對する加藤子爵の揚言なるもの、次第の如き、又衆議院に於ける秘密會要求の顚末の如き、吾人公平なる第三者の立場より之を見るに、何れも皆多少事實を附會する所なきやの疑がある。意見の相違を以て堂々と爭ふは妨げない。事實を曲げて論爭に勝たんとするは到底卑劣なる行爲たるを免れない。第二は寺內首相後藤內相共に動ともすれば君主の大權を論爭の具に供する事である。

君主の大權を論ずるは之を憲法の形式論に於てすべく、政治論は專ら國務大臣補弼の責任の範圍內の問題たるべきである。若し『大權』を振り翳す事によつて敵を傷け得べしとすれば、同じく『大權』によつて現內閣も亦同樣の傷を負はねばならぬ事を知らねばならぬ。

去年七月大隈前首相が寺內伯を朝鮮より招き、後繼內閣の組織を慫慂せる時、寺內伯は『元來國務大臣の任免は一に至尊の大權に屬し、叨りに私議すべきものにあらざる事を思ひ』、其提議を拒絕したといふけれども、傳ふるところによれば、寺內伯として後繼內閣を組織せしむべきの議は、已に山縣公と大隈侯との間に意見の交換を見、寺內伯亦先づ山縣公と大體の意見を交換して後轉じて大隈侯と折衝せるの事實ありといふ。果して然らば伯亦至尊の大權に屬する事を私議せるの責を免れない。固より予輩は之を以て何等大權を干犯する事柄とは認めないけれども、只寺內首相にして餘りに大權論を振り廻せば、結局自繩自縛の窮地に陷らねばならぬ事を指摘せなければならぬ。第三は憲政會を難ずるが爲めに餘りに大人氣ない批難を加ふる點である。此事は特に內相の訓示に著しい。例へば『元來憲政會の行動は、議院の內外を問はず、單に多數を恃んで現內閣を排擠せんとするの外、復た一片國家の前途を憂ふるの誠意なきが如し』と言ひ、甚だしきは憲政會は斯くの如くにして故桂公爵の創設に係れる同志會の宣言綱領を無視するの奇觀を呈し、(中略)政友

會は今尙故伊藤公爵の創設當初に於ける精神を恪守して、一に節制を重んじ…是を是とし非を非とし、寧ろ着實公平なる態度に出で、以て其主張を一貫す」といふ。言も玆に至つては寧ろ滑稽を極むる。「前内閣成立以來、言論機關が其穩健中正を失ふに至れる事甚だしく、」有識の君士中大隈内閣の新聞操縱策を目し、「我國憲政史上に於て拭ふべからざるの汚點を加へしめたると指摘」するもの少からずといふに至つては、最も其大人氣なき態度を暴露して居る。「今や内外多事の秋に當り、徒らに黨爭を事とし、蝸牛角上の鬪をなすの非なる事は、一般識者の同じく認むるところ也」といふのは、何人を責むるのか分らなくなる。

議會解散の原因は首相内相共に之を不信任案の提出に歸して居るのに、他面「而かも憲政會を除くの外は概して之(解散)を希望するが如き情勢を示せ」るは、「不自然に成立したる多數黨と不自然に減少せる少數黨との存在する爲め」なりといふに至つては、確かに反對黨の陣笠に供するに、揚足を取るの好箇の材料を供給するものである。

然し以上の點は、要するに些末の事項である。深く吾人の論辯に値しない。けれども兩訓示の中には、其外に於て尙幾多の重大なる政治上の根本問題に觸れて居るものがある。此等の點に就ては、予輩學究の立場としても亦之を輕々に看過する事は出來ない。

(二)

首相内相の訓示の中に含まるゝ根本問題の第一は、現内閣に對する不信任案提出の是非に關する問題である。之を非とする議論の中にも、今日内外多事の際、徒らに内國政爭に齷齪たるは非なりとするの立場より、極力之を難ぜんとするものがある。が、更に進んで、時期の如何に拘らず、現内閣に對する不信任案の提出は絕對的に其理由なしといふものもある。現内閣の主張は即ち此後者であることは明白である。寺内首相は不信任案提出の理由を解して「國民輿論の府たる帝國議會に基礎を有せざるを理由とし、併せて大政補翼の經綸を有せざるものと臆斷し、之を辭柄となした

るにあり』とし、之を理由として内閣に處決を迫るは、即ち『啻に至尊の大權を干犯するのみならず、併せて兩院制度を無視するものといはざるべからず』として居る。然しながら余輩の觀る處に據れば、國民黨憲政會の現内閣不信任の理由として揭ぐる所それ自身は、何等大權を干犯するものでもなければ、又必ずしも兩院制度を無視するものでもない。此點について首相の辯駁は全然當らないと思ふ。故に問題は憲政會國民黨の揭ぐる所の不信任の理由が、果して現内閣に之を適用して誤なきや否やといふ事に歸する。假りに之を適用するに誤なしとして、之を今日の場合に政界の實際問題とするのが果して適當なりや否やといふことに歸する。

今日の場合内閣の不信任案を提出するは時機其宜しきを得ずとする說には、三種の論據がある。一つは『緊急重要なる議事を抛擲し驀然内閣不信任の決議案を提起』する事が宜しくない。何故なれば『爲めに國務の澁滯を來たす』からであると云ふ。二は今日國家多難の際、徒らに内爭を激成して國家を煩はすが惡いと云ふ。三は前内閣の庶政壞廢の後を受けて内外の秕政を矯正するが爲めには、超然内閣の出現も一時の窮策としては已むを得ぬ。暫く假すに時日を以てし、其施措する所を觀なければならないと云ふのである。何れも夫れ〲相應の理窟はあるが、然し實際問題としては、此等の點は、事政界の機微に捗り、豫め器械的に一定の原則を立つるを許すべき性質のものではない。予輩が第三者として局外より觀察する所に據れば、大隈内閣秕政の後を受けて超然内閣の出現を餘儀なくせし事情には、矢張夫れ相應の理由ありての事なるが故に、暫く之に其存在の繼續を許し、徐ろに政界混亂の安定を待つべしとする議論も確かに一說であると思ふが、又他の一方に於て、寺内内閣に一日でも在績を許せば、其丈け我國憲政の根本的進步が阻止せらるゝ。爲めに一日も早く寺内内閣は之を殪さなければならぬといふ說にも爭ふべからざる理由あると思ふものである。何れを可とするやは容易に之を斷定する事は出來ない

が、國民黨や憲政會が現內閣の不信任案を議會開會の劈頭に提出したといふ事は、憲政發展の進步の上に決して無意義のもので非ることと丈けは疑がないと思ふ。何故に斯く斷ずるや。曰く寺內內閣は、其根本的政治思想に於て、非政黨主義を採つて居ると認めらるゝからである。

寺內首相は自ら議院を重んじ政黨を重んずると云ふて居るけれども、從來の經歷に徵して、伯を非政黨主義者と認むる事は、國民の間に定論がある。獨り伯ばかりではない。現內閣の殆んど全員が皆非政黨主義者である事も疑を容れない。寺內首相は自ら「現內閣を以て國民に立脚せずといふものあるを聞く……之れ事實を誣ゆる中傷の言のみ」といひ、「現內閣は夙に政策を圓滿に遂行するが爲めには議院に多數の黨員を有する政黨の援助に恃む事の甚だ切實なるを知悉す」といひ、「本大臣は內閣組織の初めに當り、親しく各政黨の首領を歷訪して禮讓を厚うし誠悃を効し……現內閣は其進捗に伴ひ逐次各黨の首領に諮る事を懈らざるの決心を抱けり」といふも、其所謂國民とは何をいふか、又國民に立脚するといふは如何なる方法によるを意味するものか。其邊の事は一向明瞭でない。唯疑のない點は、貴族院に於ける多數の後援があれば、假令衆議院に於て我を後援するものが少數でも、尙以て國民の輿望を負ふと爲すに足ると考へてをる事、並に各黨の首領に一片の形式的訪問を遣れば、それで國民に立脚するの意義が立つたと考へて居る事である。然しながら之を以て果して國民を基礎とするの主意が完了せられたりと見るべきや否やは大に疑がある。それ等の點は姑くどうでも可いとして、從來寺內伯の代表する一派の思想が、明白に非政黨主義を以て始終一貫して居ることと丈けは十分之を明白にして置くの必要がある。

最近日本政治史の研究の結果として余輩の堅く信じて疑はざる事は、我國政界の先輩が、常に官僚政治の永續をはかり、何れの政黨をしても斷じて議會に絕對過半數を占めざらしむるを以て、彼等の間の不文の憲法とせる點である。先輩政治家の此點に於ける苦心の跡

は、殊に議會に關する諸種の法制に明白である。更に最近の例を取つて之を云ふならば、政友會の絶對多數を打破せんとして大隈內閣の成立を助けた者は彼等である。而して大隈侯の一味の者が存外に成功して、遂に政友會に代つて議會に於ける絶對的多數を制するを見るに及んで、再び之が切り崩しを計畫した者も亦彼等に外ならない。相手方の政友會たると憲政會たるとは問題ではない。唯絶對的過半數を制するの政黨を成立せしめざらんとするが、彼等の主たる要求である。蓋し絶對多數の政黨の存在はやがて政黨內閣の勢を導き、遂に全然官僚政治家の前途を閉塞するに至るからである。斯くて現內閣は始めから盛んに非政黨主義を以て起つたものである。而して非政黨主義の結果は、言ふまでもなく第一には政黨其物にとつての大打撃であるが、其上政界一般の進歩も亦之が爲めに永遠に阻止せられ、更に甚しきは政界の腐敗をも誘致するの傾向を有するものである。政界の腐敗は非政黨主義の跋扈に伴ふものなることは歴史の證する所である。只非政黨主義の餘毒は一時的に明らさまに顯れないので、爲めに世人は動もすれば之を看過し、却て政黨其物の一時的弊害を擧ぐるに熱心するものもあるが、心ある者は寧ろ非政黨主義の見えざる禍毒の恐るべきを知つて居る。國民黨憲政會の諸子が、果して此認識に基いて急遽不信任案を提出したりや否やは、固より之を疑ふの餘地あるも、我々第三者は、其動機の如何は暫く之を措き、不信任案の提出を以て全然無意義のものとは思はない。

（三）

政黨內閣は果して至尊大權の干犯なるか。寺內首相は「純然たる政黨內閣は、曾て英國に其實例を觀たるが如く、衆議院多數政黨の代表者たらざるべからず……然るに單に衆議院に於ける多數黨の代表者を以て內閣を組織せざるべからずとなす」は、至尊の大權を干犯するものであるといつて居る。國務大臣の任免の全然大權に依つて定まり、決して外間の容喙干渉を許すべからざるは、憲法の形式論として固より一點の疑

を容れない。從つて至尊の御意に反して下院多數黨の代表者に內閣組織を任ずるの法條を樹てよと主張するものあらば、之れ明白に大權の干犯である。然しながら憲法に依りて定まれる大權の行動を實地に運用するの問題としては、或は元老が會議を開いて內閣の首班たるべき人を推薦する事日本在來の例の如くするも、或は上下兩院議長を會して其協定に待つて之を定むる事佛蘭西の例の如くするも、又は下院多數黨の首領を以て內閣組織の任に當らしむる事英國の例の如くするも、何等憲法上の大權と牴觸する事なきのみならず、寧ろ之と相待つて憲法の運用を完成するものである。

何人をして內閣を組織せしむべきやは、大權の發動を待つに先つて、事實上何等かの形式に於て先づ定まる所なければならない。一旦定つて大權の發動を見たる以上は、政黨內閣も超然內閣も皆大權の任命に基く內閣たるに於て敢て異る所はない。後藤內相が『至尊の御信任を辱うして組織せられたり』と誇稱せる現內閣も、又現內閣があらゆる惡聲を放つ所の前內閣も、一旦成立せる以上は等しく皆陛下の簡拔し玉ふたる政府である。其間憲法上何等の區別がない。現內閣は至尊の御信任を辱うして組織せられたるが故に、之に向つて不信任を呼ばはるは放肆濫妄の行動なりとせば、其理論上の當然の結論として、前內閣の失政を指摘するも亦放肆濫妄の行動なりといはざるを得まい。要するに首相內相の訓示は、憲政の形式論と運用の實質論とを混同してゐる。法律論と政治論との混同は思想の幼稚なる人々の間には免れずとするも、之を宰相大臣の言說に聞くは予輩の意外とする所である。少しく發達せる國に於ては、流石に憲法の形式論などは最早全然問題に上らない。獨り日本政界の先輩今尙ほ憲法の形式論に拘泥し、而かも法律の形式によつて政治の實際的運用を律せんとするは、其思想の淺薄なる實に驚くの外はない。

日本に政黨內閣の行はれ得るか否かは、今日我國の學界に於て最早問題ではない。余輩は曾て政黨內閣の純粹理論上の是非並びに實際上の可能不可能、之と帝

國憲法との關係、日本の現狀に於ける政黨內閣實行の利害得失等の問題を詳論した事がある。(拙著「現代の政治」一八三―二一六參照)。政黨內閣が帝國憲法の規定の何れの部分にも牴觸せざる事、並びに政黨內閣制が憲政運用上の歸趨たる事は、今日學界の定論である。廢殘の頹壘を苦守して今尙一二「少數政治」の僻見を主張するものなきにあらずと雖も、如斯は固より學界の大勢の顧みる所ではない。後藤內相が「如何に煽動を試むるとも、政黨內閣にあらざれば非立憲なりと云ふが如き」は「單純にして舊式なる陳套の偏見」なりとなし、「學者其他の識者も亦、其所論を發表するに際して特に此點に留意し、今や健全なる立憲思想の根柢堅實にして輕々しく動搖するが如き事なきに至れり」と云ふが如きは、全然我々學者社會の實情に反對するの說明である。

政黨內閣の主張を以て至尊大權の干犯なりとするの說に對しては、江本法學博士も亦痛快の辨駁を試みて居る。曰く「凡そ內閣組織の權限が天皇の大權に屬する事は獨り日本ばかりではない。寺內首相が反對の例證の如く援用せる英國に於ても、內閣員は總て國王の任命する所であり、內閣組織は大權の發動であつて、憲法上の形式に於ては我國と一點の相違する所もない……此大權の降下が人民の代表者に下つたからと云つて、何の大權侵害であるか……又かゝる慣例が永續したからとて、之を至尊の大權の干犯なりといふ事が出來るか……彼等の主張する所は、要するに淺薄なる形式論である。かゝる紙上の空論を以て、いかにして天下を治むる事が出來やうか……形式論の一面に眩惑せられて恐るべき誤解をなし、爲めに日本の立憲政治を害する事少からざるは、慨嘆の至りである。」(二月十二日東京朝日新聞による)。新聞の筆記なれば、或は博士の言を完全に傳へ得ざりしの憾はあるとしても、略ぼ博士の意のある所は十分之を汲み取ることは出來る。要するに國務大臣の任免が大權の作用なりといふは、憲法上の形式論である。而して其實際の運用として、別に何人をして如何なる條件の下に內閣組織の任

に當らしむべきやの政治的原則の成立するは、何等之を妨げざるのみならず、又實際に必要である。而して形式的原則は容易に之を枉ぐる能はざるものなる丈け、實際政治上の問題としては殆んど之を顧慮するの必要がないが、運用上の政治的原則に至つては、形式的に明白でないのみならず又之に對して幾多異議を挾む餘地ある丈け、夫れ丈け實際問題としては重大である。又此方が國家の利害休戚といふ實質的の問題に直接關係する所甚大なるものがある。憲法條章の直接揭ぐる所にあらざるの故を以て、運用上の實際的問題を輕視するのは非常な誤りである。政黨內閣が憲法上の大權に牴觸するといふ議論の誤りなるは極めて明白であるが、政黨內閣制が直接憲法條文の要求する所でないからといつて、必ずしも之に據らざるも可なりとする態度も亦決して國家に忠なる所以ではない。

大權を楯として政黨內閣を批議するならば、元老の推薦によつて內閣の組織を實現せしむるの慣例も、亦之を大權の干犯といはざるを得ない。而かも後者を是とし前者を非とするは、是れ偶々大權に口實を籍りて少數閥族の政論を辨護せんとするものに外ならない。彼等が眞に大權の擁護を名として政黨內閣に反對せんとするならば、所謂元老推薦の慣例をも絕對に之を否認して、純粹なる絕對的君主親政を主張せねばならない筈である。我國に於ても、論理を徹底せしめて遂に此說を說かざるを得ざるハメに陷れるものなきにあらざるも、然し絕對的君主親政と云ふが如きは過去に於て完全に行はれたるの實蹟に乏しきのみならず、今日に於て亦到底之が實現を見得べきものではない。否獨り事實に於て斯くの如き現象のあり得ざるのみならず、又理に於て斯くの如きは決して國家の利益ではない。一私人の生活に於てすら、例へば三井、岩崎と云が如き富豪は夫れ〳〵八釜しい家憲を制定して、主人自ら全然其所有に屬する財產の自由處分に干涉しないやうに定めて居る。是れ皆主人が直接に其全財產の處分に干與せざるの制度を設くる事が、岩崎家三井家の繁榮の爲めに必要缺くべからざる爲めではあるまい

か。一私人の經濟に於て尙且つ然り。況んや複雜なる一國の經營に於てをや。絕對的君主親政の事實上不可能にして、又理に於て得策にあらざるは火を睹るよりも明瞭である。親政の美名に眩惑して此理を看誤ることなきを希望する。故に今日實際の政治社會に於ては、憲法上に在つては大臣任免の權は之を君主に收め、唯如何にして內閣組織の適任者を求むべきかの實際的問題については、其間自ら一定の政治的慣例の發生するに任かして居る。而して元老推薦も政黨內閣も、等しく皆この大權運用の方法に關する回答に外ならぬのである。一方が大權と牴觸し、他方は毫も牴觸しないと云ふのは明白に誤りである。

されば政黨內閣論者と之に反對する論者とは、實は大權を干犯すると之を擁護するとの差別にあらずして、結局は少數政治を謳歌すると多數政治を主張するとの差に外ならない。而して昨今多數政治主義たる政黨內閣を難ずる論者の中に、更に別個の根據より出發して、最良の政治は哲人政治なり、多數政治は卽ち之に反すと說いて、政黨內閣を排斥し得べしと考ふるものがある。若し哲人と云ふ二字を解して、此場合政治上特別の知識と手腕とを有する少數の先覺といふ意味に解するならば、之は何等多數政治乃至政黨內閣と相容れざるものではない。何故なれば政黨內閣に於ても實際政權運用の衝に當るものは、所謂常に哲人であるからである。哲人といふ句が可笑しいといふならば、少數識者の階級に屬する者といつても差支はない。多數政治は常に凡庸なる下級の人民其物が直接に政治の衝に當るものだと思ふならば大なる誤である。多數政治も少數政治も、直接政治の衝に當るものゝ哲人たる事は何等異なる所はないのである。唯此兩者の間に重大の差別ありとせば、そは現に政權運用の衝に當る哲人が、此に在つては近代國家に於ける一大勢「力」たる民衆を基礎として立つに反し、彼に在つては全然民衆より孤立して立つ點である。

抑々近代國家の政治に於て、「多數民衆」は確かに一個の奪ふべからざる大勢力である。之れ個人の自覺に

甚く當然の結果にして、今更ら到底之を古の狀態に引戻す事は出來ない。從つて此勢力を無視しては如何なる政治家と雖も其抱負を十分に實行する事が出來ない。而して斯く多數民衆が政界に於て奪ふべからざる大勢力を有するといふ事は、必ずしも國家の爲めに憂ふべき事ではない。國民の忠誠なる心情を言ひ表はす言葉としては、成る程天下は一人の天下である。けれども國家の堅實なる發達を圖り、此激烈なる競爭場裏に於て優に内外に國光を宣揚せんとする所謂國家經營の見地からすれば、天下は即ち天下の天下であると云はなければならない。國家の進步發達は各員の自覺的協同努力に俟たざるを得ない。此點に於て、各員が國家の運命の開拓に於て自己の使命と責任とを自覺する事は、寧ろ喜ぶべき現象である。而して此自覺が即ち多數民衆の力の根據である。而して健全なる國家の發達は、多數民衆の勢力の健全なる發達と相伴はねばならぬ。此點に於て少數の哲人が多數民衆を基礎として爲すの政治は二重の意味に於て國家の慶福である。一つには哲人が民衆と接觸する事によつて其卓越優秀の思想を彼等に傳へ、不知不識の内に其賢明なる思想を以て民衆輿論の內容たらしむる事が出來る。之れ所謂健全なる輿論の發生する殆んど唯一の途である。二つには哲人は民衆と接觸する事によつて、其政治的經綸の上に多數の力を利用する事が出來る。如何なる善き思想も力の助を得ずしては到底實現する事が出來ないのである。民衆の力を無視しては、少くとも今日の世の中に於ては、何事も出來ない。近代の所謂多數政治は、斯くの如き兩面の特色を有するものである。然るに世人動もすれば、多數政治は即ち多數民衆が直ちに其儘政界の實權を握るものとなし、從つて平凡淺薄なる思想が天下を支配するものと早合點をする。奚ぞ知らん、他に强ひて其圓滿なる進行を妨ぐるものなき限り、近代的多數政治は其形式に於て多數民衆の力の支配たるも、其實質に於ては少數賢明なる思想の確實なる支配である。若し此理を誤り、單に哲人政治の空名に眩惑し、多數を基礎とする事なくして、少數者の孤

立的政治を認めんか、一見政治的活動の敏活を期するの利益あるが如く見えるも、爲めに動もすれば民衆輿論の指導を誤り、甚しきは其不平反撥を招いで、遂に恐るべき結果を誘致せずと限らない。然らざるも爲政者は結局に於て政界の一大勢力なる多數の力との折衝に苦しむの結果、所謂政界の腐敗を來たし、以て大に社會風敎を紊すに至るであらう。歴史上所謂政界の腐敗は常に多數を基礎とせざる少數が、多數を籠絡して政界の窮通を計らんとする事から起つた事は、昭乎として明かである。

立憲政治の要諦は、面倒を厭はず十分自家の所見の徹底的納得を求めるといふ事にある。政府は即ち之を議員に求め、議員は轉じて之を選擧民に求むる。淳々として説いて倦まず、其間に決して面倒を厭ふてはならぬ。面倒を厭はざるものが即ち多數民衆を基礎とする政治主義を取るに至り、此面倒を厭ふものが即ち多數を基礎とせざる政治主義になり易い。面倒を厭へば、政府は即ち議員を買收し、議員は即ち選擧民を買收する等、種々の腐敗手段を以て目的の到達に急ぐ事になる。而して政黨政治は即ち此面倒を厭はざる政治主義に立脚するものである。なぜなれば、政黨は即ち少數の哲人と多數の民衆とを有機的に聯鎖する殆んど唯一の機關であるからである。固より我國現在の政黨はかかる實質的使命を十分に全うして居るとは思はない。然し之は、いふまでもなく一つには政黨並びに政黨員其物の罪であるけれども、更に其根本的の原因を數ふるならば、廣き意味に於ける制度の罪であると云はなければならない。なぜなれば、我國の制度は政黨の發達を厭くまで阻害するやうに極めて周到に組立てられて居るからである。此等は是非共速かに改善を加へなければならぬ點であると思ふ。而して之が改善を急ぐ爲めにも、早く政黨をしてモット有力なものとなさしめたい。何れにしても、現在は如何に多くの缺點を有するとはいへ、少數哲人の思想によつて輿論の進歩訓練を計り、而して多數民衆の力をして有效に且つ健全に政界に貢獻せしむるの機關としては、理論上今日の

ところ政黨を措いて其外にない。政黨の現狀に不滿足なるの餘り、政黨其物の本來の效用を無視し、之が進步發達を計るを怠るは、決して國家の爲めに忠なる所以ではない。若し夫れ自家階級の利害の打算の上より――意識的にしも無意識的にしも――濫りに政黨の發達を阻止せんとするが如きは、言語道斷の至りと謂はざるを得ない。

（四）

憲政運用上に於ける貴族院の地位如何。貴衆兩院は、衆議院に豫算先議權ある事の外、總ての點に於て法律上全く同等である。併しながら、法律上同等であるといふ事は、必ずしも政治上に於ても亦同等ならざるべからずといふ結論を生ずるものではない。總ての臣民は法律の前に平等なりといふの原則があつても、例へば貴賤貧富の別による社會的地位の優劣は固より之を免れる事が出來ないといふのが普通の現象である。寺内首相は曰ふ。『憲政會國民黨は「現内閣が國民輿論の府たる帝國議會に基礎を有せざるを理由とし」て、不信任案を提出せるも、「帝國議會は貴衆兩院に依て成立し、獨り一院のみを認めて直ちに國民輿論の府となすべきものにあらず…衆議院の決議は其一院の意思を表示するに止り、貴族院を包括するの理なきは固より當然の事に屬す…我帝國立憲の制度にありては、貴衆兩院を以て帝國議會を組織し、其間毫も輕重の差あることなし。然るに單に衆議院に於ける多數黨の代表を以て内閣を組織せざるべからずとなすに至つては、啻に至尊の大權を干犯するのみならず、併せて兩院制度を無視するものと云はざるべからず」と』。之も亦憲法の形式論として一點批難の打ち處もない。併しながら貴衆兩院が法律上其間に、何等輕重の別なしと云ふて、互に其對等の地位を主張して讓らざるに於ては、憲政の運用は如何にして圓滑に行はれ得るか。一體獨り兩院關係に止らず、立憲政治に於ては、各機關が文字通りに其法律上の權限を固執するに於ては、全然其運用が出來ないやうになつて居る。例へば諸國の立憲制度に在ては、所謂三權分立といふ原則に依つて各種

の機關が法律上全然獨立して彼此相牽制して居るが、若し實際の運用に於ても飽くまで相牽制するの態度を續けては、政府の局に當るものは殆んど何の仕事も出來ない。專制の弊に苦しみ拔いた近代の國家は其弊を免れんが爲めに、機關の分立並びに其相互の牽制といふ原則を立てゝ一切の制度を改造した。之れ立憲政治の表面上の特色である。然し文字通りに、卽ち憲法法條の示す通りに、互に相讓らずしては、立憲政治の運用は忽ちにして其進行を停止せざるを得ない。之れ一部の世人動もすれば立憲的制度を以て國際的競爭激甚にして最も政治的活動の敏活を要求する當今の時勢に合せずと爲し、甚だしきは少數政治を迎へて立憲政治を呪はんとするに至るものある所以である。然しながら、近代の立憲政治は、制度としては動きの取れぬ、頑くなる各機關對抗の組織を取つて居るけれども、之れ丈けで終るのではない、更に他の一面に於て、其間に然るべき活路を見出す事を要求して居る方面がある。然らば如何にして此活路を見出さんとするか。

此問題に關して第一に答辯を求めらるゝものは云ふまでもなく政治道德である。卽ち立憲政治は、政治家の德義に訴へ、爭ふべきは大いに之を爭ふも、結局に於て互讓妥協の精神に基き、國家の爲めに一致協力の道を見出さん事を求むるものである。併しながら此種の問題は、只一片の政治道德のみに訴へて、常に必ず解決を得るに決まつたものではない。故に更に一歩を進めて、政治上の理義を楯とし、一定の解決案に服從を迫るといふ事にならざるを得ない。只何を以て政治上の理義に適合する解決案とするかについては、時と場合とによつて必ずしも同一でないが、併し此點に關する多數識者の見解が大體に於て同一の方向を取り、從つて類似の場合に類似の解決案が繰返さるゝといふことになれば、こゝに自然政治的慣例が發生する。只之は時と共に自然と固まるものであるが故に、何の時を以て據るべきの慣例が確定せりと見るべきやは、固より多少曖昧であるけれども、繰り返さるゝ度數の重なるに從ひ、茲に所謂政治的慣例も亦、憲政の進行を

滑かにする一要件と見做さるゝに至るものである。而して事實多くの立憲國に於ては、各種機關の法律的權限の獨立對峙は、實に之と併存する各種の政治的慣例と相照應して、始めて完全なる憲政の運用を行はしめて居るのである。我々は立憲的諸制度の法律上の權限を過重して、憲政の運用には寧ろ政治的諸慣例の確立が、より以上に重大なる關係ある事を忘れてはならない。然るに政治的慣例も亦憲政の進行の障礙を有効に排除し得る最終の武器ではない。慣例は何處までも慣例で、何も法律上に定められて居る事でないから、極端な場合に之が承認を拒まるゝ事があり得る。例へば英國に於ては、久しく貴族院は結局に於て衆議院の意思に讓るべきの慣例があつたのであるが、此二三十年以來、貴族院議員の六分の五以上が保守黨の勢力に歸した結果、自由黨が天下を取つた場合に限り、貴族院は從來の慣例を破つて嚴しく衆議院に反對するといふ態度を取るに至つた。斯くては尋常の手段で政界の疏通を計る事が出來ない。さればと云つて之を放任して置く譯にも行かないから、そこで英國では上下兩院の關係は政治的慣例の解決にのみ任かして置く譯には行かないと云ふので、遂に法律上に此問題を解決せんとするに至つた。之れ先年英國が幾多の困難を排して、所謂議會法（パーリアメント・アクト）を制定した所以である。理由は多少違ふけれども、濠洲聯邦でも此問題を慣例に任せず、明白に法律の上に規定した。之は上下兩院の關係についての話であるが、政治的慣例の確立若しくば其作用に不十分の點があれば、遂に法規を以て一本調子の決定を見るのは又止むを得ない。

之を要するに、立憲制度は其の法律的方面に於ては各種の機關が厭くまで獨立し、厭くまで彼此牽制するを可とするも、其政治的方面に在つては厭くまで妥協し、厭くまで交綏するものでなければならぬ。而して政治道德の命ずるまゝに平穩着實の進行を見るは、最も理想的の方法であるけれども、少くとも其間に一定の政治的慣例が發生して、各種の機關が皆此慣例を重んずるやうになるのが望ましい。一歩進めて遂に法律

の規定に之が解決を托するのは餘り好ましい遣方ではない。

以上の見地よりすれば、寺内首相の言明の如く、貴衆兩院の絶對的平等を說くのは、初學の法律學生に憲法論を說くの類にして、實際政治家の口より之を聞くは、我々の甚だ意外とするところである。我々に取つては、最早貴族院と衆議院とは法律上同等の權限を有するといふやうな事は問題ではない。兩者兩々其所見を固執して爭ふ時、如何にして其間に疏通の路を發見すべきかゞ肝要なる問題である。此點に關して我國に於ては未だ明白なる慣例は確立してゐないやうである。尤も多くの識者は、暗默の間に歐洲諸國の大勢に同じて、下院の優越權を認めんとするものゝ如きも、從來上院の方では、何處までも下院と同等の地位を主張して下らなかつた。形式上下院に多數の根據を有する政府にして上院の手にかゝつて打破られた事もある。併し全體としての趨勢をいへば、我國に於ても矢張り西洋諸國に於けると同じく、段々に下院の優勝的地位を認むる方向に進むに相違ない。之れ一般の世界の進步に伴ふ當然の結果であらう。而して斯くの如き趨勢を以て進むのは、一面に於てまた理の當然に合するともいへる。なぜなれば、國民中のホンの僅かの一部分を代表するに過ぎざる貴族院が、概して國民全般の代表者と見るべき衆議院の決定に讓るのは、政治道德の要求にも叶ひ、立憲政治の根本思想にも合して居るからである。尤も貴族院は、總ての場合に於て衆議院に盲從せねばならぬ義務はない。若し總ての場合に於て無條件に盲從せよといふなれば、貴族院は最早全然無用の長物となる。國家は決して斯くの如き屈辱的地位を貴族院に附するものではない。普通の場合に於て下院の決定に從へといふのは、謂はゞ上院に自重を求むるのである。下院議員は、一人を以て幾萬を代表するに、上院の議員は概して僅かに數人を代表するに過ぎずして而かも下院議員と同等の權利を賦與せられて居る。故に彼等はそれ丈け國家に對して重き責任を負ふて居るといふ事が出來る。それ丈け又彼等は決し

て輕々しく動くべきものではない。故に普通の問題に於ては、暫らく下院多數の決定に讓步して强ひて自說を固執せざるは、彼等の地位に最も相應はしき態度である。只一旦國家重大の問題について下院と意見の杆格を見、而して到底自說を枉ぐべからざるの深き確信を有するあらんか、玆に初めて彼等は猛然として厭くまで下院の決定に反對すべきである。斯くしてこそ彼等は眞に其所信を國民に徹底せしめて彼等の反省を有效に促す事が出來る。濫多に固有の權利を主張して下院と爭はない者が、偶〻大に爭ふといふのであれば、一般人民もよく〳〵の事であらうといふので、上院の說に謹んで耳を傾けるであらう。些末な問題についてまで絕えず下院に反抗して獨立の權限を振り廻すのでは、國民は初めから上院の意見に特別の重みを置かなくなる。斯くの如きは國家が特に上院を設けたる本旨ではない。此點に於て予輩は、我國の上院が最近餘りに輕擧盲動し、爲めに國民の上院を見る事甚だ輕きに至れるを遺憾とするものである。(同じやうな事は樞密院についても言へる)。

之れを西洋諸國の慣例に見るも、上院は原則として下院に讓るといふ事になつて居るのが普通である。殊に英國・佛蘭西等の國に於ては、下院の民衆的特徵を重視するの點よりして、初めから著しく下院を重しとする傾向がある。されば一般の俗稱に於ても、下院を第一院と呼び、上院を第二院と呼ぶ。之に反して獨逸の如き國柄に於ては、上院が社會に於ける優等階級を網羅するといふ點に特別の重きを置き、量に於て劣るも質に於て優るといふ理屈からして、兎もすれば下院よりも上院を重んぜんとする傾向がある。從つて英佛とは反對に、上院を第一院と呼び、下院を第二院と呼ぶ。獨逸に於ては、政治的制度が政黨の發達を阻害するやうになつて居り、從つて政界の高足逸材は多く官僚階級に集り、議會殊に下院には二流三流の人物を多く見るの有樣なるを以て、上院が下院に比して特に優等の階級を代表すといふ見方は全然當らないではない。けれども英佛は全く之に反する。質について云ふならば、

上下兩院議員の間に殆んど何等の差を見ないと言つもよい。佛蘭西に於ては、政界の元老は漸次上院に引込むの傾向あるけれども、現に政界に活動する第一流の名士は決して下院に少なくない。英吉利の如きは寧ろ下院の知識が上院に優つて居るといふても差支ない。故に上院が優等階級の代表者なるが故に、上院が常に優等の意見の行はるゝ處であるとなし、暗に上院の勢力を立てゝ下院を抑へんとするが如き説は少くとも英佛諸國には適用がない。況んや我國の如き貴族階級が決して精神的に優等階級と見做すべからざる國に於てをや。但だ我國衆議院議員の間に輕佻浮薄の言動をなすもの多きは、我々の大に遺憾とするところである。けれども、之を以て直に下院の智識は大に上院のそれに劣れりと斷ずるの理由を見ない。故に我國に於ても、政治道徳及理論の要求と先進諸國の慣例とに從つて、貴族院はふだん大に自重するの態度を採り、普通の場合に於ては、概して衆議院の決定に從ふを原則とするのが適當であると思ふ。從つて何が國民の輿論なりやの決定も亦之を下院多數の意見に求むるを合理的解釋となすべきである。貴族院が、此政治的必要の要求する適當の分限を越え、一にも二にも漫然として下院對等の權限を主張するは、決して憲政を進歩せしむる所以ではない。若し夫れ貴族院が、官僚閥族の爪牙となり、下院多數黨の攻勢に對抗する非政黨主義の武器として利用せらるゝが如き事あらば、是れ貴族院の本領を沒却し、憲政の發達を阻害するの甚しきものである。予輩は我國の貴族院に斷じて此事なきを信ずるものである。

之を要するに、貴族院の政治的地位は、我國政界の實際的慣行の上に猶未だ決まつて居ない。政論の啓發と政治家の努力とは其中之を實際に解決するであらう。而して結局如何なる解決を見るべきやは、大勢の歸趨に稽へて略ぼ之を察するに難くない。只寺內首相の言明の如く、法律上の權限を根據として、貴衆兩院の政治上に於ける絶對的平等を論結せんとするが如きは、明白なる思想の混亂である。（二月十七日）

本稿を草し了りて後、圖らず學友法學博士佐々木惣一君の同じ問題に關する意見の、大阪朝日新聞に載つて居るのを見た。議論精密啓發せらるゝ所少くない。心ある讀者は之をも參照せられんことを希望する。憲政會も亦同じく辨駁書を出して居るが、之は辯難些末に亙り而かも根本問題の論究に聊か徹底を缺いて居るものがある。吾人より之を觀るに餘り大したものではない。



全國の有權者に向つて 優秀善良なる代議士を選擧する標準を說く

▽余が選擧有權者ならば

早大教授　大山郁夫

余は現行法制に定むる所の衆議院議員選擧資格に必要とする最低額以上の所得稅を納めて居るが、市部より郡部に引越して來てから、まだ滿二個年にならぬから、今次の總選擧に際しても、所謂『淸き一票』を投ずることが出來ないものである。故に自分の問題としては、差し當り誰れに投票すべきやの疑惑は起つて來ない。けれども若し自分が今度選擧有資格者であつたならば、如何なる標準に據つて誰れに一票を捧げるであらうかとは、時々考へて見た事である。固より現在一身に迫つて來て居る問題でないから、現實味が極めて稀薄で、解決が着かぬうちに考へが消散して仕舞ふのを常としたが、此たび『中央公論』より善良なる代議士を選ぶ標準に就いて思ふ所を述べよとの注文を受けたから、之を機として平素の所懷に從つて之に關する意見を纏めて見やう。

□

選擧權が貴重なる國家的公民としての權利であることや、その正當なる行使が國家に對する公義務であることや、それが各自の自由獨立の意思に依つて爲されねばならぬことは、多少敎養ある人々の明瞭に體得して居る所であるが、それにも拘らず每選擧期に投票買收とか、脅喝誘惑とか、選擧運動の腐敗行爲とかで、多數の選擧法違反者を出だし、或は地方官の選擧干涉の問題を惹起したりなどするのは、我國民間の政治道德の一般に低劣なる事實を反映するもので、容易ならざる國家生活上の汚點である。元來遠大なるべき國家

の目的を成就する使命を有する政治が、其出發點に於て既に斯の如き弊風を伴ふことは、心ある國民の不快の念を禁ずる能はざる所である。愛國心は戰場に於てのみ發揮すべきもの丶様に考へて居るのは、劇的挑發力を有する刺戟を憧憬する輕躁なる諸民族の通弊であるが、我國民中にも斯の如き傾向が甚だ顯著に認められる。愛國心は畢竟祖國に對する宗敎的崇敬愛着の至情である以上は、その發現の機會は戰時平時を問ふものでない。國家は一日も間斷なく、國民より愛國心の寄與を要求して居る。殊に選擧場に赴く者は、この嚴肅なる宗敎的情操を以て投票の事に臨まねばならぬ。さらば地方官、乃至市町村吏員の干渉も、被選擧人に對する情實も、その人の自由意思の決定の上に、何等の影響を及ぼし得る力を有しない筈である。況んや、虛勢を張る脅喝をや。況んや、錙銖の利を以てする誘惑をや。

選擧季節には政見發表演説が盛に行はれる。政黨若くは名流の推薦狀が頻に散布せられる。候補者の自己推薦狀が回送せられる。戸別訪問者が叩頭に來る。情實的懇請者が日參に來る。選擧取締の下を潜ぐる誘惑者が忍んで來る。地方官若くは市町村吏員の選擧干渉が行はれる。斯くて我國民は各選擧期毎に、道德的大試練に際會するのである。選擧有權者たるものは、善良なる代議士を推擧する前に、先づ適當なる政治上の理解と、宗敎的情操に均しき愛祖國心とに訴へ、各自の最良の判斷に從つて此間に處することを怠らぬ様にせねばならぬ。

□

次に如何なる標準に依つて投票すべきかの問題が起つて來る。

候補者の人格、智識、判斷力、材幹、政見が共に揃つて、選擧人の推擧に値する場合は、問題は極めて簡單である。即ち選擧人は斯の如き資格を完全に具備して居る人を選べばそれで可いのである。

けれども候補者の人格、智識、判斷力、材幹（是等の精神上の諸要素を總括して、廣い意味で以下假りに

單に之を『人格』と呼ぶ）は、選擧人の推服するに足る所であるが、獨り其政見は彼が同意し難き所であつたならば如何。之と反對に候補者の政見に異存はないが、其人格に缺陷ありと認むる場合はどうであるか。

斯の如き場合は實際上屢ば起り來る機會のあるものであつて、表面上は極めて簡單に見えるが、實は左程簡單ではないのである。

一七七四年にエドモンド・バークがブリストールより選出せられた時、彼は選擧區民に對して有名なる一場の演說をしたが、其中に彼は、代議士たるものは、選擧區民に對して單に勤勉である義務を帶ぶるのみならず、自由に判斷力を働かせる義務を帶ぶるものであることを切言した。彼の所說の要領は、代議士たる者は、一旦選ばれたる上は、最早一選擧區の代表者でなくして、全國民の代表者である。故に彼は選擧區民の意向に從つて行動を左右すべきものに非ずして、其最良の判斷に依つて全國民の利益と信ずる方向に進むべきものである、と謂ふのであつた。彼は尙ほ『代議士は國家の柱石であつて、夫の輕飄なるがため屋上に揚げられ、その時々の風向きを知らせる外の能なき風見（かざみ）の樣なものでない』と切言した。此見解の反面は、選擧人たる者は、當該候補者の判斷力に信賴して之を選ぶべきものであつて、豫め一の特定利益、若くは特定意見を議會に於て代表せしめんがために之を選ぶべきものでないと言ふことである。此旨意を更に布衍する時は、選擧人は候補者の政見よりも、寧ろ其人格を標準として投票を行ふべきものであると言ふに歸する。此見解は慥に一面の眞理を包含して居る。殊に代議士は一個人、一地方、若くは一階級の代表者ではなく、全國民の代表者であると言ふことは、理想論としては間然する所なき至言である。

併し乍ら實際問題として之を考察する時は、之に多少の制限を加へねばならぬ。凡そ社會にはそれ〴〵方向を異にせる幾多の人生觀、文明觀、乃至、世界觀があつて、各人は其性癖、境遇、經歷、修養等の異るに從つて、各々そのいづれかを自己のものとするもので

ある。夫の保守的とか、漸進的とか、進歩的とか、急進的とか、反動的とか言ふは、その各個の傾向に就いてそれ〳〵與へられたる形容詞である。而して法律となつて現はるゝ國家意思なるものは、渾然陶冶せられたる全的單一體であるが、それが最後の形式に於て構成せらるゝまでには、あらゆる人生觀、文明觀、世界觀の調節作用を經過したものであらねばならぬのである。若し然らずして、只一派の思想觀念の傾向のみが國家意思の中に攝取せられ、他がすべて閑却せられたる時は、斯の如き國家意思は極めて偏頗のものたるを免れずして、從つて社會上の或る一部分、若くは一階級、若くは一地方の人のみに不當の利益を與へ、他の部分若くは階級、若くは地方の人々の利益を犧牲にすることがないとは限らない。故に各人に自己の把持する思想觀念の傾向に從つて、その意中の代議士を選定する自由を有して居る。されば保守思想の人は保守的傾向の人に投票し、進歩思想を有する人は進歩的の人を選擧すると言ふ風に、自己の思想觀念の傾向を主として各々その好む人を推擧することは、公民道德上一點の批議する所のない立派なる行爲である。而して斯くの如く自己の選擇せんとする人々の範圍を限つて、その限界内で被選者の人格を測つて、最も優秀なる人に一票を捧げるのが、最も憲政の精神に合したものであると謂ふことが出來る。自己が或る問題に關して進歩的思想の國家意思の上に現るゝことを以て最も緊要なる事と確信して居るに拘らず、單に人格の故を以て、その問題に關して保守的思想を把持して居る人を選擧するが如きは、斷じて國家に忠なる所以でない。

バークが上に引用した說を發表した時は、主として地方的利害を念頭に置いて居たのであるから、之を讀む者は此點を考慮の內に加へなければならぬ。

果して然らば代議士を選擧せんとする者は、候補者の人格を見ると同樣に、其政見を驗することを忘れてはならぬ。而して兩者の中、何れを先にすべきかの問題は、時と場合とに就いて一々之を決定すべきもので、豫め總ての場合に通ずる一般原則を設定することは出

來ないのである。

□

候補者の政見は普通多くの部分より成立つて居るものである。而して選擧人より見れば、その一部分は贊成すべきものであるが、他の部分は反對すべきものであると言ふが如き場合は、決して絕無と謂ふことが出來ぬ。斯の如き場合にはどうすれば可いであらうか。

斯の如き場合に於て選擧人が第一に取るべき策は、其贊成する部分と、反對する部分との間に橫はれる問題の大小輕重を比較することである。而して苟くも根本問題に於て意見の合致があるならば、枝葉問題に於ける意見の相異は姑く之を無視して然るべきである。若し合致點と相異點との大小輕重の度に軒輊する所がなく、而も他に適當なる候補者を物色することが出來なかつたならば、其時こそは斷然棄權すべきである。選擧上の棄權が、政治道德上是認し得べき境地は、唯斯の如き場合に限るべきものとすべきである。

□

候補者の政見及び議會に於ける態度は、當該候補者自身の宣言の外に、その所屬の黨籍に依つて之を卜することが出來るのみならず、時としては其黨籍を見る方が却て大切であることがある一點は、選擧人の心得て置かねばならぬことである。

無黨籍候補者を選擧せんとする場合に於ては、殊更精密にその政見を吟味し、その人格を檢査しなければならぬ。黨籍を有する者は、議會に於て決議に加はる際に黨議に引摺られて進退を決するを普通とするけれども、無黨籍者は斯かる羈束を受くることなく、單獨の意思で行動する自由があるものであるから、之を選擧せんと欲する者は、其平生の進退去就の如何を硏究し、殊にその主義に忠なる人である乎、强固なる意思を有する人である乎、將又信誼を守る人である乎、等の諸要點を嚴密に見究めて置かなければならぬ。

□

將に來らんとする四月の總選擧程、各種の政治思想の傾向を有する選擧人に取つて、候補者の黨籍に目を

附ける必要の存する場合は少いであらう。

現内閣の擁護者より見れば、何等の黨派的色彩もなく、陰に陽に閥族官僚に迎合し、超然内閣主義の命脈をして一日も永からしめんことを聲言する、若くは諷言する候補者（現在は無黨籍者ながら、新聞紙は此一團の人々を御用黨と稱して居る）に投票するを上策とし、超然内閣主義に反對し乍ら、之に對する不信任案提出に加はらざりし政友會候補者に投票することを次策とする。

若し夫れ元老、閥族、官僚が現在所有する超憲法的勢力及び其示威的尺度たる超然内閣主義を以て、我國憲政の發達を阻害する大毒物と看做し、徒らに憲法上の爭議を多端ならしめて、我國の國策を國家の内部的及び外部的環境の推移に順應せしむる途を塞ぐ大障害物と思惟する人々に取つては、各候補者の黨籍を顧慮する必要が更に多きを見るのである。

□

總選擧の結果各政黨、殊に議會内に於ける最有力の憲政會及び政友會が略ぼ均衡を得、いづれも絶對多數を制することがなければ、之に國民黨を配し、且つ無所屬議員及び豫期せられて居る御用黨を加へて、多黨群立の形勢が現出せられることになり、現内閣に取つては最も好都合の狀態となり、その超然主義の壽命を少しでも永くする結果を見るに至るであらう。

左れば現内閣の永續を冀はざる者に取つては、孰れかの政黨をして絶對多數黨たらしむる必要がある。而して國民黨がそれにならうとは、人間の常識ではどうしても考へ得られぬことであるから、先づ政友會を助けるか、憲政會を助けるかより外に策はないであらう。

所が政友會と現内閣との間には、既にアンタントがある樣に噂されて居る。少くとも國民は爾か信ずる方が寧ろ安心であると言ひ得べき理由がある。而して若し此噂が眞であるとすれば、政友會が絶對多數黨とならば、同會が現内閣に突撃して之を倒壊する可能性よりも、寧ろ之と公然提携して其與黨となる危險の方が

多いことは、爭ふべからざることである。固より斯うなつた暁には、超然內閣主義は崩落することになるが、元老、閥族、官僚の超憲法的勢力が根本的打擊を受ける譯でないから、それがいつ捲土重來するかも知れぬ。故に政友會の多數を招來することは、少くとも上策ではない。

然らば憲政會の多數は果して希求すべきものであるか。我等は決して然りと言ふことが出來ない。憲政會の主要部の前身たる同志會の大隈內閣の與黨としての態度の醜陋は、今尙ほ國民の記憶に新なる所であつて、我等は一々之を數へ立てすることの寧ろ無用なるを思ふのである。併し乍ら一歩退いて考ふれば、現內閣に對して有力なる敵國を形づくつて居るものは憲政會の外にない。寺內加藤の聯立內閣は、一度大隈內閣に依つて畫策せられ、又憲政會を寺內々閣の與黨とする計企は一寸平田子に依つて目論見られたさうであるが、どちらも不成立に終つたものが、今更双方の體面に掛けて、死灰再燃を期し得べきものでない。此點より見れば、我等は理想としては思ひも寄らぬことであるが目前の方便として憲政會を助けることは、超然內閣主義と戰ふ上に於て最も策の宜しきを得たるものと思ふ。要するにこれも、國民が憲政會を道具に使つて、國民の國家共同經營の邪魔物を除くと言ふ意味に於て說き得らるゝのみである。

國民は政黨を利用すべきものであつて、政黨に利用せらるべきものでない。國民は政黨を公僕とすべきものであつて、政黨の私僕となるべきものではない。是事は國民と官僚との關係に就ても言ひ得らるゝことである。政黨若くは官僚が國民に對して主人顏をすることが出來るのは、それだけ國民の政治思想の幼稚なることを證明するものである。斯の如き狀態は一日も早く之を除去らなければならぬ。我等が「政黨政治」を說くは、「政黨を通じてなす國民の政治」と言ふ意味に於てゞある。我等は如何なる事があつても、政黨のために「政黨政治」を說くことはしない。我等が我國の憲政の精神とする所は、君民同治、及び國民の國家共同經

營の理想である。故に我等は、その元老、閥族、官僚たると、將又政黨たることを問はず、苟くも天皇と國民との中間に介在する一大勢力となつて暴君的實權を揮ふものあるを見れば、決して之を寬假することが出來ないのである。只我等は元老、閥族、官僚に對しては、之を牽制するに足る何等の有效手段を有しないが、政黨に對しては選擧權と言ふ大なる武器を以て臨み、以て之を有効に掣肘することが出來る。故に一般國民は政治的意識に目覺むるに從つて前者に對して反感を持つ樣になり、同時に後者に對して一種の親みを感じる樣になるのである。國民間に政黨政治に對する要求が次第に增進するのは、畢竟斯かる國民心理より來るのである。

如上の意味に於て余は、若し自分が今次の總選擧に於て選擧有權者であつたならば、理想としてゞはなく寧ろ只一時的方便として、憲政會を名乘る候補者中より然るべき人物を求め、之に向つて聖なる一票を捧げて其行を壯んにするであらう、と公言することが出來るのである。(六―二―一八)

▽選擧民に對する希望

慶大教授 田中萃一郎

政治道德の根柢を爲すものあるに非れば、立憲政治は決して美果を結ぶことは出來ないのである。而して政治道德の要件を數へ擧げて見れば(一)知識(二)品性(三)自由(四)愛國心の四點に歸着する。第一に知識を擧るのは無智と自由とが枘鑿相容れ難きが爲である。若し夫れ人民に政治上の見識乏しくて、大隈侯の食堂常に千客萬來の光景を呈するを見て、その豪奢なるに驚き、直ちに侯を以て宰相の適才なりとなすが如き低能兒多からしめば、如何に大浦事件の罪惡を說き石川縣に於ける選擧干涉を非難するも、馬耳東風、之に耳を傾け無かつたであらう。選擧民の政治上の知識に望ましきこと多きやうでは、選擧權の行使は却て危險至極と云はねばならぬ。故に先進國では何れも普通教育

の擴充に滿足せずして更に政治敎育の上に百方努力して居るのである。青年をして成る可く政治運動に遠からしめんとするが如きは、蓋し立憲政治の發達を妨碍するものであると云はねばならぬ。一般人民の政治上の見識向上するに至らば、官僚も將た又政黨も決して選擧民を瞞著することは出來ぬのである。次に立憲治下の人民に必要なものは品性である。品性は必ずしも知識と相俟て向上するものでは無いが、余輩は寧ろ英國文明史の著者バックルに反して文明進歩の眞の標準は智力の發展にあらずして品性の向上にありと云はんとするものである。彼の選擧權を一片の銀貨に換へて恬として顧みざるもの丶如きは法律の制裁を之に加へて終身その選擧權を剝奪しても可いと思ふ。品性は國家の基礎である。品性あればこそ國民は主動的に献身の精神を發揮し、戰時に犧牲を念とせず戰場に勇氣を顯はし、隨て國民を指導するの任に膺るものは洞察力と勇猛心とを兼ね備へ、毅然として大丈夫の本領を發揮して奸計誘惑に抵抗し得るのである。而も甚だ遺憾なことには今日の政界に於ては知識あるの徒は或は之を庶幾し得可し、而も品性あるの人物は極めて乏しと云はねばならぬのである。第三に自由を擧げたのは畢竟するに選擧民に向て獨立自尊の態度を失はざらんことを要むるのである。選擧民が巡査の詰問に遭て候補者の取捨を決するやうでは眞の自由は存せぬのである。又地方有志家に左右せられて自己の意志を飜へすやうでは眞の自由は得られぬのである。又地主が小作人に壓逼を加へ重役が使用人に威壓を試み、債權者が債務者に要望を强ひ私利私益を餌として投票を左右するやうでは眞の自由は認められぬのである。是には言論の自由、集會の自由、請願の自由、投票の自由が必要である。皮肉な批評を試みる人は憲政會百九十有餘の議員が寺内々閣不信任決議案に結束して賛成するに至つたのは、加藤子を總裁に戴く限り三菱財閥の後援恃む可しと誤解した爲だと云ふてる。現に解散後になつて有力な同會の準機關新聞は總選擧に際して三菱から巨額の運動費を支出す可し云々と書き立て丶この誤

解を益々強めやうと努めて居る。かく財閥が跋扈するに於ては政治家は之が走狗と目す可きである、自由を奪はれた財閥の飼犬である。天下の不祥是より甚しきは無しで余輩は勿論某新聞を以て無根の事實を登載したものと見做すものである。第四に擧げたのは愛國心であるが、國民たるものは須らく公共心に富みて、活動的に政治に參與せねばならぬのである。愛國心の要件は第一國家の利益焉くに存するやを十分に會得することゝ、第二政黨階級地方個人の利益を忘れて國利を重んずること、第三國家安危の爲に身を挺して努力すること、この三點に存するのである。扨この政治道德の四要件、即ち知識と品性と自由と愛國心とは政治家――代議士に取つては殊に不可缺資格であるので、隨て自分の姓名さへ記すことの出來ぬ人物とか、收賄事件で檢擧された人物等の如きは議會から排斥せねばならぬ。要するに政治道德の四要件は即ち優秀なる代議士を選擧するの標準と爲すことが出來る。

但し是は政治學上の概論として云ふので日本の政治界では更に他に簡易な標準を要めることが出來る。それは何であるかと云ふと一言にして云へば政黨的良心の有無如何と云ふ問題に歸着するのである。先帝陛下が維新匆々の際五條の御誓文を發布され、更に明治二十三年に國會を開設せられたのは、畏れ多くも赤子の忠誠に信賴せられて之に參政權を與へられたのである。而して赤子たるもの苟くもこの聖意を奉體して憲政の濟美を圖らんとせば、勢ひ小異を棄てゝ大同を取り訓練あり統一ある政黨を組織し之が基礎を鞏固にして以て政治の中心勢力とならねばならぬのである。政黨の實利的價値の一は實に一國政治の中心勢力たるが故である。皇室中心主義論者は或は何と强辯するか知らぬが、二千六百年に近き國史變遷の跡を見ても皇室中心主義とは國體の上の議論であつて政治の實際の上では上に蘇我氏藤原氏あり降て北條足利德川の諸氏あり事實政治の中心に立て以て國體の崇嚴を加へ來つたのである。維新以來薩長藩閥なるものは多年我國の政治の中心であつたが次第に强弩の末魯縞をも穿ち難き

に至つたのである。今後の政治の中心を政黨に要めねばならぬとは政治上の見識なくとも政治上の本能を具へたものは何人も之を首肯して怪しまぬのである。事實日本人の政治上の本能は我國の二大政黨をして明治十年代の地方議會開設以來一世代以上の發達を遂げて大體順當の進歩を爲さしめたのである。即ち今日の政友會と憲政會とがこの兩大政黨である。或は憲政會は庶子であつて政友會反對系の嫡流は國民黨であるとの見解もあり、今後の政變如何に由てこの見解が正しいことになるかも知れぬが、余輩は過去現在を說くもので未來を豫言し得ぬから、先づ原氏と加藤子とを以て日本の相反目せる二大政黨の首領と見做すのである。そこで余輩は今回の總選擧に方つて候補者を取捨せんとするものは自己の立場に隨てこの兩大政黨何れかの候補者に投票す可しと勸告するものである。而して同一政黨の候補者二人以上ある場合に於ては政黨的良心の有無を以て取捨の標準と爲さんことを望むものである。余輩の所謂政黨的良心とは志操の堅實にして終始一貫所屬政黨と共に進退する毅然たる人物を指すのである。況や今日は向の岸に咲く、泛々たる輕薄才子の如く徒に世論の是非に動されて朝に甲黨を去りて夕に丙黨に入るが如きは男兒の態度でない。勿論主義の爲に離合集散を來すは立憲政治の祖國たる英國にも是ありと雖も、彼のグラッドストーンが保守黨を去て自由黨の首領に推され、チスレーリが自由黨を去つて遂に保守黨を統率するに至れるが如く一流の大政治家にありては或は可なり、二流三流の政治家に至つては須らく幹部に盲從す可しである。殊にその論爭の問題が區區たる政略上の爭に過ぎぬが如き場合に於て然りと云はねばならぬ。政黨的良心の上より論ずれば憲政會よりは寧ろ國民黨を取る可きで、憲政會が土崩瓦解して舊進歩黨系が昨非を悟りて再び犬養氏の制令の下に立つに至らば實に結構であるが未だかゝる徴候は見えて居らぬ。故に余輩は選擧人たるものは現内閣に反對するか贊成するかその立場如何に隨て憲政會の候補者なり政友會の候補者なりに投票す可しと勸告するのであ

る。政黨の候補者を好まざる人、否政黨を好まざる人は願くは棄權され度い。一人一黨杯と稱して政黨の發達を妨碍するが如き人物の議會に出るのは實に迷惑である。殊にかゝる人物が少數相團結して兩大政黨の間に介在して殺活の權を握らん杯との野心を起すに至ては憲政上の罪惡である。一體近數年來日本の政界で唱道された警句のうちで尾崎行雄氏のキャスチング・ヴォート說の如く有害なものは無い。議會政治は多數政治で少數者は實力を回復する迄兎に角忍耐して多數者に服從して往かねばならぬ。この少數者の德義を初めて無視したものはパーネルの愛蘭黨で同黨が僅々一割强の實力を以て英國議會の議事を妨害してから遂に議會政治の一大長所たり一大美點たる自由討議が著るしく制限さるゝに至つたことは著名の事實である。然るに尾崎氏はキャスチング・ヴォート說を唱へて少數黨を以て多數黨を掣肘す可しと主張したのであつた。少數者にして多數者を掣肘することと不可なしとせば、敢て議會を開くの必要は無いのである。尤も一月の議會で少數黨たる國民黨に制せられて兩大黨を擁しつゝ議會の解散を受けてから尾崎氏も定めしキャスチング・ヴォート說の祟を痛切に感じられたであらう。かゝる理由を以て余輩は中立無所屬の候補者はすべて之を排斥せんことを選擧民に希望するのである。蓋し政黨をしてその基礎を鞏固ならしめぬときは政治の中心は官僚軍閥の手に歸す可く、余輩の理想たる政黨內閣は遂に實現し難いからである。

▽斯くの如き標準によつて選擧せよ

帝大教授 法學博士　吉野作造

◎予は前回の總選擧の時友人の問に答へて、選擧道德の三大綱領を說いた事がある。試みに之を擧ぐれば、第一は投票の神聖なる事である。我々の投ずる一票は一見甚だ無力のやうなれども、而かも之は實に國家の

運命を動かし、我々六千萬同胞の利害禍福を左右する所の深い意味を有するものなれば、我々は此偉大なる力の幾分を分擔するものであるといふ高尚なる責任を感じて、極めて謹直敬虔なる態度を以て投票を實行せねばならない。第二は投票は國家の爲めにすると云ふ事である。地方的利害などゝいふ事を除り眼中に置いてはならない。地方の利害を計るのなら郡會議員か縣會議員で澤山である。國會議員は國全體の利益を計るものであるから、從つて餘り地方には通用しなくても、國家全體に通用する優秀なる人物を擧げなければならない。第三は投票は一票にても之を忽諸に附すべからざる事である。我一票が直ちに選擧の結果に影響しないからとて之を棄權するのは甚だしき誤りである。

◎次に如何なる人物を擧ぐべきかと云ふ標準に關して又三大目標があると云ふ事を説いた。第一は候補者選擇の標準としては、其人の人格に重きを置くべしと云ふ事である。人によつては人格よりも政治的經綸並びに其抱負を第一に見よと云ふ人がある。西洋諸國の通例に見るが如く、政治は最も高尚なる仕事なるが故に、最も高尚なる人物が之に當らざるべからずとしてをる國に於ては、下等な人格なものはテンデ候補者として飛び出して來ない。人格の高下は初めから問題とならないのである。けれども我國に於てはさうは行かぬ。從つて政治的經綸の外に其人格を論ずるの必要がある。然らば二者の中何れを第一に重んずるかと云へば、予は政見よりも人格を見よと云ふ。蓋し政見は時によつて異り得る。全然政見を度外視せよとは云はぬが、併しながら變遷極りなき事のあり得る政見に標準を置くより、其渝らざる人格を賴んだ方が間違がない。人格に於て第一着に陶汰した上で、次に來る第二の標準は即ちいふまでもなく其政治的經綸である。同じくは卓拔な政治的經綸を有するもの、若くは自己と政見を等しうするものを擧ぐべきはいふまでもない。第三には以上の二條件に合格したものが二人以上ある場合には、出來る丈け既成大政黨に關係ある人を擧げよと云

ふ事である。予輩は政黨政治を理想とするものであるから、小黨の分立は憲政の健全なる發達を阻害するものとして之を避けたいと思ふ。此點よりして同じ事ならば大政黨に屬する方の人を選擧したいと云ふのである。

◎以上の見解は大體に於て今日と雖も變らない。けれども現下の時局は二年前の時局と大いに其趣を異にする丈け、特に今度の總選擧に對する吾人の選擧意見を求めらるゝと云ふ事であれば、又自ら前記の根本意見に對して多少の條件を附加するの必要を見る。此點に於て予輩が特に今日の選擧民に對して述べたい點は、第一に予輩は現内閣の存續を希望せずといふ根本的立脚地から選擧に對する態度を定めたい。何故なれば現内閣は明白に非政黨主義を標榜して起つたものであるからである。從つて予輩は中立を標榜して動もすれば後日御用黨となるが如き卑屈なる人物を選擧する事を恥とする。さらでも無色無味の中立議員の多數輩出するは、憲政發達の上に斷じて宜しくない。第二に予輩は現内閣の存續を願はないからといふて其當面の敵たる憲政會に無條件に投票せよと云ふのでもない。予は主義として超然内閣の存續に反對なると共に、政黨内部の狀態にも多大の不滿を感ずるものである。政黨自身も今や革命を要するの時であらう。而して政黨廓清の前提は人物の選擇である。斯くして予輩は第二に前に述べたる條件と同じく、再び玆に人格的標準といふ事を說きたい。斯くの如くにして中立の御用候補を擯し人格の下劣なるものを排した上に、扨て第三に何を標準としていよ／＼淸き一票を捧ぐべきかと云ふ時に至つて、予輩は其人の政治的經綸を尋ね、出來る丈け旣成大政黨に屬する人物を擧げたい。

▽今次の總選擧に對して

法學博士　高田早苗

凡そ世の中に代議士ほど同情すべきものはないと、自分は常に思ふのである。頭を下げ金を遣ひ、而かも

少くとも一萬圓以上の選擧費を投じて、當選して得る處は僅かに二千圓の歲費に過ぎない。夫れも一旦解散の厄に逢へば又元の木阿彌となつて、再び選擧を爭はねばならぬと云ふのであるから、割にも何にも合つたワケのものでない。故に憲政の基礎を確立し、眞に選良と稱すべきものを得るに至る前には、全國の有權者が頼むと頼まれるの區別を知つて、代議士なるものは頼んで出すものであつて、頼まれて出すべきものでないと云ふ事を明かに意識するやうにならなければ、到底駄目な話である。されば議員選擧の標準を論ずるも大切の事であるには相違ないが、夫れに先立つて此選擧のいろは＝選擧の原則が廣く一般選擧有權者に理解せられ、今日選擧の度毎に目擊する、冠履顚倒の事實が先づ以つて無くなる事を希望せざるを得ない。

更に進んで議員に擧ぐべきものゝ標準に就て云つてみようならば、第一人格、第二學識、第三辯舌と數へるのが、極めて平凡ではあるが至當な順序であらうと思ふ。人格と云ふ中には勿論主義に忠實であると云ふ事が含まるゝ次第である。人格の人は必ず自身の抱懷する政治主義に忠實であつて、妄りに變說改論し又は誘惑の爲めに左右せらるゝが如きことは無かるべき筈である。之が議員として、代議士として何より大切の事であるのは、今更ら云ふ迄もない。然しながら如何に人格が高く、主義に忠實であつても、學識に於て欠くる處があると、其政見の上に誤謬が生じ、信ずまじき事を信じ、左袒すべからざる事に左袒すると云ふ危險が起るのである。多くの代議士中には其人格に於ては申し分がないに拘はらず、見識の乏しき爲めに常に誤つたる徑路を踏みつゝあるものを、往々にして見受くるのである。辯舌は代議士として最も必要なる武器ではあるが、然し乍ら四百の議員が殘らず演說をしなければならぬと云ふ次第でもなく、且つ議會に辯者の多過ぎるのも、却つて議事の紛騷を來たして、實際に無益有害の結果を生ずる惧がある。我輩が親しく其席に列つてゐた第一議會當時の有樣の如くであつては、議場は演說の競爭場になつて、何等立法上の効果を擧

げる事が出來ないのであるから、此點については餘り重を置く必要はなからうと思ふ。

最後に一言して置きたい事は、解散後の議會に於ては選擧人たるものが解散の主要原因となつた問題に注意し、之に對する向背に依つて選擧の標準を定めなければならぬといふ一事である。例へば今度の總選擧に於ては、超然內閣に對する反對贊成と云ふ事が解散の理由となつてゐるのであるから、選擧は一つに此問題に對する向背に依つて決定されなければならぬ。元來解散後の選擧に於ては、其意見に不贊成ならざる限り前代議士を再選すると云ふ事が當然ではあるけれども、多くの代議士中には再び逐鹿場裡に立たぬ人もあるから、必ずしも其通りにはならないのであるが、然しながら解散後の選擧に於て、所謂中立を標榜する候補者を選擧すると云ふ事は頗る無意味である。其所謂中立と云ふ事が既成政黨から中立するといふ事なら必ずしも無意味とは云はれないが、政府と反對黨との間に中立するといふ意味であつては、解散の理由となつた主要問題を解決する上に於て全く沒交渉であるから、斯かる意味に於て中立を標榜する候補者を選ぶことは無意味で、且つ非立憲であると云はなければならぬ。

▽選擧人論

京大教授法學博士　佐藤丑次郎

第一

衆議院既に解散せられて議員總選擧將に行はれんとす。其の際一百四十餘萬の選擧人は果して如何に投票を行ふべきや、是れ最も重要なる問題なり。若し理想上より之を謂はゞ、選擧人は一般に自由の地位に立ち良心の命ずる所に從ひ理智の示す所に依りて議員の適材と確認する者に投票すべし。然れども斯くの如きは選擧人の全部に對して常に必ずしも之を期待し得るものに非ず。選擧人の政黨に對する關係相同からざるが故に、選擧場裡に於ける態度も亦自ら相異ならざるを

得ざればなり。今選擧人の政黨に對する關係を見るに之を大別して三種となすことを得。其の一は選擧人が一政黨の黨員たる場合にして、其の二は一政黨の準黨員たる場合なり。而して其の三は卽ち全く政黨と關係を有せざる場合なりとす。

選擧人が一政黨の黨員たるときは必ず黨員として所屬政黨の統制に服することを要す。從て其の公認候補者に對して投票せざるを得ず。而して公認候補者二名若くは二名以上立ちたる場合には其の間に人物選擇の餘地存すべきが如しと雖も、其の政見に於て總て一致する者なるが故に其の選擇は政治上の意義を有すること少なく、且候補者全員の當選を得ることを以て第一義となすが故に往々にして投票分配の黨略に從はざるべからざるなり。若し當該選擧區に於ける黨勢微弱にして候補者を立つるに至らざるときは、與黨の候補者に投票するに非ずんば則ち失効投票又は棄權を敢てするの外なし。斯くの如くにして黨員たる選擧人は所屬政黨の拘束を受けて全く投票の自由を失ふと雖も、是れ黨員たるより生ずべき當然の結果なるを以て之を避けんと欲せば須らく黨外に脫退すべきのみ。議員の選擧は卽ち政黨の決戰にして黨勢の消長は殆ど此の一擧に依りて定まる。故に選擧人にして苟も籍を政黨に置く者は絕對に黨議に服從し、啻に自ら其の公認候補者に投票するのみならず、反對候補者の得べき投票を奪ひて其の落選を圖ると同時に、之を自黨候補者に收めて其の當選を期せざるべからず。是れ所謂政黨倫理(パーチーエシツク)の命ずる所なり。

黨員たる選擧人は議員の選擧に際して全く投票の自由を有せず、一に所屬政黨の黨議に從ふが故に、理想上より之を謂はば其の數極めて少なきを可とすべし。元來政黨は政治上に特定の抱負を有し特殊の趣味を感ずる者之を組織すべく普通公民の妄に加入すべき所に非ず。普通公民は專ら各自の業務に精勵し其の餘力を以て政治上の情形を察知し、監視者の地位に立ちて政黨政派の行動を批判すべきなり。而して公式に批判を下すべき國法上の手段は卽ち議員の選擧に於ける投票に

して選擧人の有する所なるが故に、選擧人の多數は政黨に分屬するときは批判の效力自ら減退して遂に多數專制の弊害を生ずる虞あり。若し選擧人たる黨員が各自の業務に忙しくして黨務に冷淡ならんか、必ず少數の野心家黨の集會を左右して恣に黨議を決し、以て政治界に跳梁するに至る。現に北米合衆國に於て所謂頭目幷に其の部下の跋扈に苦む所以實に茲に存す。幸に我が國に於ては選擧人にして政黨に屬する者未だ多からざるが如しと雖も、猶豫め一應の警告をなすは決して無用の業に非ざるを信ず。

第二

黨員に似て非なる者あり。謂ふ所の準黨員卽ち是なり。準黨員は固より政黨に屬せず。而かも特定の關係に於て黨員と殆ど同一の行動をなすが故に、政黨は黨員に準じて之を取扱ふものとす。而して選擧人が一政黨の準黨員たるときは議員の選擧に際して多くは黨員たる選擧人と同一の地位に立ち、通常其の公認候補者に投票するを以て當然なりと看做さる。抑も準黨員たる關係は共益團體と政黨と互に提携し援助するに依りて生ず。詳言すれば共通の利益を有する者相集まりて團體を組織し其の利益を增進せんと圖るに當り、一政黨が其の利益增進を以て重要なる政綱となすときは、其の主張を貫徹せんが爲に互に提携し援助するに至るものにして、從て團體の各員は其の範圍內に於て殆と黨員と同一の行動をなすが故に自ら準黨員の關係を生ずるなり。獨逸に於て農民團が農業上の保護を目的として保守派と相提携し、ハンザ團が商工業の保護を目的として自由派と互助の關係に立つが如き最も顯著なる實例となすべし。蓋國家の政務は社會の全般に亙り一切の人事は法令を以て之を規定せんとする現代に於て、例へば農業者の增福商工業の發達中產者の保護若くは勞働者の生活向上の如き廣大なる目的を遂せんか爲には法令の制定改廢を要するが故に、自ら政府幷に議會の力に賴らざるを得ず。是を以て共益團體を組織して常時に於ては政府を監視し政治期に在りては議員を督勵し、更に總選擧に際しては乃ち關係政黨を援

助し議員候補者を公認して其の當選を期するなり。斯くの如くにして準黨員たる選擧人が投票の自由を失ふときは選擧の理想を距ること遠きが如しと雖も、黨員たる選擧人が政黨の統制上其の黨議に從ふと異なり全く共通利益の擁護增進に努むるの結果なるが故に、大に恕すべき點あるのみならず、一面より之を觀れば生存競爭の激烈なる今日に於て或は已むを得ざる所ならん乎。若し夫れ共通利益の擁護增進と國家の公益と相一致するに於ては敢て之を非難するの要なかるべし。

我が國に於ては租稅の增減存廢の問題喧しかりし當時共益團體の組織せらるるを見たり。而かも問題一度び解決を告ぐれば直に解散して永く存續するものなし。曾て男爵後藤新平氏は獨逸のハンザ團を紹介して共益團體の組織を推擧したりと雖も反響を生ぜざりしなり。然らば所謂準黨員存せざるか、曰く否大に之あり、地方政團の各員即ち是れなり。元來地方政團と中央政團たる政黨とは固より特殊の關係を有するものに非ず。蓋國家の政務と地方自治體の任務とは其の範圍に於て大に異なり。例へば外交軍事警察司法司獄の如きは全く國家の處理する所にして地方自治體の干與する限りにあらず。例へば產業交通敎育衞生土木財政の如きは地方自治體の等しく處理する所なりと雖も、其の規模に於て到底國家の政務に比することを得ず。從て地方自治體を經營するの方針を以て國家の政務に當ると能はざると同時に、國家に對する經綸を以て直ちに地方自治體に臨むこと難し。而して政黨は國務に對する政見の實行を以て其の目的となすに反し、地方政團の目的は地方自治體に於ては其の方針の貫徹を期するに在るが故に、兩者の間に必然何等の關係を生ずること無きなり。然れども勢力伸張の術策より之を見れば、地方政團か政黨に關聯を有するは其の威力を强むる所以なるが故に直接又は間接に特定の政黨に聯結せんことを圖り、政黨か地方政團より後援を受くるは黨勢を伸ぶるの捷徑なるを以て直接又は間接に之を牽引せんことを努め、互に相倚り相應じて其の間に特殊の關係を生じ、自ら地方政團の各員をして準黨員の地位

に立たしむるに至る。是れに依りて政黨は地方に强固なる地盤を形成し黨勢の伸張上多大の便宜を得べく、地方政團は政黨の聲援を受けて其の權威を高むることを得べしと雖も、此れが爲に府縣郡は勿論市町村より水利組合の如きに至るまで悉く黨爭の舞臺と化し、甚しきに至りては政黨の色彩に依りて私人間の關係を律せんとする者あり。政黨鬪爭の弊害地方の全面に蔓延して殆ど拾收すべからざるは吾人の屢々實視したる所とす。而して選擧人にして地方政團に屬するときは議員の選擧に際し多くは政團の決議に拘束せられて投票の自由を失ふこと寧ろ當然の結果たり。固より政黨は鬪爭を以て其の生命となすが故に、地方に其の地盤を形成せんと努むるは敢て咎むべきに非ずとするも、地方の有志が徒らに蝸牛角上の鬪爭に耽り互に勢威を競はんが爲に地方の平和と幸福とを犧牲に供するのみならず、貴重なる公權を行使するに當り無意義に其の自由を制限せらるるが如きは、其の對價に比して失ふ所餘りに過大ならずや。單に議員の選擧に就き之を謂ふも斯くの如きは到底認容し得る所に非ざるなり。吾人は切に各地方有志の反省を促さざるを得ざるなり。

第三

然らば選擧人にして全く政黨に關係を有せざる者は果して理想の如く自由に且公正に投票を行ふべきや。吾人は直ちに之を肯定することを得ず。何んとならば投票の自由を奪ひ判斷を誤らしめんとするもの選擧人の周圍に存するを以てなり。而して選擧人より投票の自由を奪はんとするものは官憲の干渉と優力者の壓迫にして、選擧人をして判斷を誤らしめんとするものは卽ち利得幷に言論に依る誘惑なりとす。抑も官憲が議員の選擧に干渉して選擧人の投票を左右せんとするは啻に權力を濫用して權利を蹂躙するのみならず、實に國法の精神を無視して代議組織の基礎を破壞するものたり。然れども政爭の激烈を極むるに當りては內閣は往々にして之に熱中し、勝利を占むるに急にして手段の是非を問ふに遑あらず、各種の機關を利用し各種の方法に依りて選擧に干渉を行ひ以て議院に多數を制し

て內閣の存立を保持し政策の遂行を圖るに至る。優力者が選擧人の弱者たる關係を有するに乘じ、之に壓迫を加へて特定の候補者に投票せしめんとするは啻に相互の關係を惡用して投票の自由を侵害すること甚しきのみならず、之に依りて議員に當選したる者は優力者の意を迎へて其の使者と化し去るが故に等しく代議政治の本義を紊るものとす。然れども國家の施設につきて經濟上の利害を感ずること多きときは優力者は必ず其の勢力を議院に及ぼさんと努むべく、從て經濟に關する國家の施設益々增加し、經濟界に於ては鬪爭彌々激烈となるに伴ひ、優力者は選擧人に對して一層の壓迫を加ふるに至るべし。固より國法は秘密選擧主義に依り無記名投票制度を採用するのみならず、何人と雖も選擧人の投票したる被選擧人の氏名を陳述するの義務なく、若し被選擧人の氏名を認知するの方法を行ひたる者あるときは之に一定の制裁を加ふるものと定むるが故に、官憲の干涉若くは優力者の壓迫を受くるに拘らず選擧人は猶ほ任意に投票をなすことあるべしと雖も、斯くの如きは唯選擧の眞義を理解し投票の眞價を確認し官憲若くは優力者の橫暴を憎みて之に反抗するの意氣を有する者初めて之を能くすべく、一般選擧人に期待し得る所に非ず。而かも一般選擧人が此の境地に進まんことは吾人の切望して已まざる所なり。

選擧人を誘惑して其の判斷を誤らしむるは罪惡なるに於て投票の自由を奪ふに劣らず。而して選擧人を誘惑する方便に二種あり。一は利得にして他は即ち言論是れなり。蓋直接と間接とに論なく現在に於けると將來に於けるとを問はず苟も利得を以て選擧人を誘惑して特定の候補者に投票せしむるは好餌を以て欲情を挑撥して其の判斷を誤らしめ、小なる私益を先にして大なる公事を後にし貴重なる投票を營利の料となすに至らしむものにして、啻に選擧の公正を害するのみならず、人心を腐敗せしめて風敎の廢頽を助長すること最も甚だし。是れを以て國法は制裁を設けて之を嚴禁すと雖も選擧人猶少數にして候補者は利得分配の資に窮するに至らず國法の規定猶ほ嚴密ならずして法網を脫

し得べき餘地存し且互に庇護し隱蔽して檢擧を免るゝこと難からざるが故に容易に此の罪跡を絶つこと能はず。若し選擧權を擴張して選擧人を夥多ならしむると同時に英國の選擧取締條例の如く頗る周密なる規定を設け且其の制裁を一層嚴酷ならしむるときは略ぼ之を防止することを得べしと雖も、斯くの如き選擧法の改正は近く其の實行を見ること難きに似たり。寺內內閣は既に現行法を勵行して微細の非違と雖も悉く之を糺彈せんと聲明す。吾人は趣旨に於て大に贊同する者なりと雖も其の結果につきては直ちに心を安んじ難きを覺ゆ。而して言論に依る誘惑に至りては曲論謬說を立て又は虛僞の事實を傳へて專ら選擧人の心理に影響を與へ以て其の判斷を誤らしむるものにして、其の目的は文筆若くは辯舌の力に依りて選擧人を牽引するに存するが故に、利得を以てする誘惑に比すれば遙に優る所ありと雖も、議論の曲直事實の眞僞の如きは敢て之を問はざるを以て固より無責任の譏を免れざるのみならず、他人の名譽と信用とを毀損して憚る所なきが故に廉直達識の士は多く候補者たるを躊躇して職業政治家獨り選擧場裡を馳驅するに至るべく、正議高論を非難して聽する所なきを以て民心益々惑亂せられて遂に輿論の針路を誤り政局の紛糾を來すに終らん。而かも高遠の論議は俚耳に入り易からず。凡人は寧ろ卑俗の言論を歡ぶが故に却て實效を擧ぐるに適し、且之を取締ること決して容易ならず。從て近時我が國に於ても亦益々盛んに行はれんとす。是れ實に吾人の寒心に堪へざる所なり。而して之を防止するの途は唯政治敎育に依りて選擧人の政治的智能を啓發するに在るのみ。

第四

選擧人が外部よりの拘束を免れて全く自由の地位に立ち、毫も誘惑を受けずして理智の命ずる所に從ひ投票を行ふときは、能く選擧人たるの責務を完ふしたるものと謂ふべし。固より客觀的に之を謂はゞ選擧人が投票をなすに當り候補者の選擇を誤ることあるべしと雖も、是れ全く理智の劣弱若くは錯誤の爲に人物の鑑識政見の批判其當を失したる結果なるが故に、主觀的

に之を謂はば猶至善の途を蹈みたるもなり。然りと雖も衆議院は議員を以て組織し其の議決は議員の政見に依りて定まるが故に、國家は優良なる議員の選出を望みて已まず、從て選擧人は議員の選擧に際して人物鑑識政見批判の標準を考慮し、以て優良の候補者に投票せんと努むるは寧ろ當然なりとす。今其の標準につき要項を摘出して少しく之を說かん。

第一、選擧人は全國民に代れるの態度を以て候補者の選擇を行ふべし。蓋各議員を以て悉く全國民の代表者と看るに非ざれば衆議院の決議を指して民意を表明するものと謂ふこと能はず、各選擧人が選擧權の社會的權利なることを了知して大に之を尊重し全國民に代れるの態度を以て候補者を選擧するに非ざれば國民の一部たる選擧人の選出に懸る議員を以て全國民の代表者と見ること能はざればなり。選擧人が既に全國民に代れるの態度を採り社會的權利として大に選擧權を尊重するときは選擧人自身の爲に恣に之を行使すべきに非ず、從て候補者を選擇するに當りて選擧人との情實緣由利害關係の如きは一切之を眼中に置くべからざること固より言ふを俟たず。

第二、選擧人は候補者が當選の後全國民の代表者たる責任を果すべきや否やを鑑識すべし。蓋衆議院の議事は過半數を以て決するが故に其の決議は必竟一部議員の一致したる意見に外ならず、而かも之を以て議員全部の合致したる意見と見んが爲には各議員が總て全國民の代表者たる責任を自覺し、專ら私情を去り公明なる態度を採り確固たる自信に依りて其の政見を決定することを要すればなり。

第三、選擧人は候補者が一に國家民衆全般の利福を慮りて其の政見を決定したるや否やを批判すべし。蓋議員は單獨に且自由に其の意見を決定すべく何等の委任又は指令に依りて拘束せらるることなきが故に、其の意見は常に民意に適合するを必すべからず。而かも議員の表示したる意見を以て國民の總意と見る所以のものは具眼有識の士選ばれて議員となり、一に國家民衆全部の利福を慮りて其の政見を定むるに依り終局に

於て必ず民意に適合するの結果を生すればなり。既に全國民の代表者たる責任を自覺し一に國家民衆全部の利福を慮りて其の政見を定むる以上は、常に國家全般の利益を先きにして一私人一部階級又は一地方民の利益を後にすべく、縱令其の後援者投票人又は選擧區の利益に反するが如き場合と雖も國民全般の利益の爲に斷乎として主張の貫徹に努むべく、各議員が此の態度を持し此の意氣を有して初めて天下の公議に參し盛に經綸を行ふことを得べきなり。

選擧人は以上三項の標準に依り選擧區内の候補者中最も優良と認むる者を選擇すべく、妄に候補者以外に投票すべからず投票の失效は努めて之を避くることを要すればなり。其の他個人本位となすべきや將た又政黨本位となすべきやに就きても聊か卑見を有すと雖も稍枝葉に亙るの虞あるが故に暫く省略に從ふ。顧れば憲法發布以來總選擧を行ふこと既に十有二回、而かも殆ど進歩の跡を認むること難し。選擧人は多く自己本位の態度を以て選擧に臨み、情實に纒はれ緣故に驅られ利害關係に拘束せられて選擧權の行使を誤り、甚だしきに至りては黄白の爲に投票を左右せられて自ら恥づる所を知らず。偶々人物を鑑識し政見を批判せんとする者あれば則ち選擧人の爲に犬馬の勞を取り同業者の爲に諸般の便宜を圖り同地方の爲に繁榮を策するが如きを擇び、恰も天下國家に何等の交渉を有せざるに似たり。是れを以て候補者も亦之に應じて個人關係を辿り地方問題を提げ叩頭阿諛甘言を以て競爭の手段となし、甚だしきに至りては數萬金を散じて議員の榮職に當らんとす、其の陋情醜態眞に憐むべし、選擧の理想と相距ること夫れ幾許ぞや。昔者英國の政治家エドムンド・バークはブリストルなる選擧人に告げて曰く、余輩は自己の信ずる所に依り諸子の意見に反して而して諸子の利益を代表したり、余輩は諸子が余輩を選出したるは國家の柱石たるべくして屋上の風見たるべきが爲に非ざるを知れりと。我が一百四十有餘萬の選擧人は來らん四月二十日を以て新に議員の選擧を行はんとす、吾人は國家の柱石を以て自ら任じたるバークの如き候補者の續出せんことを望むと同時に、各選擧人はバークの行動を容認して之を再選したるブリストル市民の如き態度に出でんことを希ひ、以て本論を結ぶ。（六、二、一八）

高島米峰先生新著 ▲ 老人と青年とのために萬丈の氣を吐く

廿歳前後主義

四六版奇裝
定價金壹圓
郵稅八錢

頭が禿げた髭が白くなつたそれで老人は心細からずや活力禿げず元氣白からずむば百歳と雖も以て青年と稱すべきなり明治維新以來正に五十年社會の各階級悉く老化し去らむとす今にして青年の元氣を振ひ起さずむば我が大日本帝國の將來を如何せむ著者一片憂國の至情は遂に凝つてこの『廿歳前後主義』の高唱となり宗教教育社會風俗等諸般の問題一々捕へて此の主義によりて批判し去る壯烈無比痛快淋漓老人讀まば衰殘の身を忘れて躍進し青年讀まば邁往の勇を生じて突撃せむ。

高島米峰著 六名著

- 一休和尚傳 定價九十錢 郵稅八錢（好評八版）
- 廣長舌 定價七十錢 郵稅八錢（好評四版）
- 惡戰 定價八十錢 郵稅八錢（好評四版）
- 噴火口 定價八十錢 郵稅八錢（好評二版）
- 店頭禪 定價八十錢 郵稅八錢（好評三版）
- 理想的商業 定價廿五錢 郵稅四錢（好評五版）

中付一の一

東京市小石川區原町 振替東京一五六八六 丙午出版社
東京小石川區原町 振替東京一三五三 鷄聲堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

東京高等師範學校教授 文學博士佐々醒雪先生編

三句索引 俳句大觀

（好評三版）

和歌には古今類句あり、五句類句あれど、俳諧には未だ索引の書なく、其の出典及び類句を求むる容易ならず。醒雪博士茲に見る所あり、古來の名句一萬二千餘を選び、一句、二句、三句、何れの句よりも容易に檢出すべきやう之を五十音順に配列し、一々作者と出典とを示したれば、古句の檢索に至便なるのみならず、一切の類句は一目の下に集る可し。俳人は勿論一般讀書家の座右缺く可からず。

四六判クロース製
箱入美本全一冊
定價金壹圓六拾錢
小包料金拾貳錢

東京帝國大學文科大學講師 文學博士佐々木信綱先生著

萬葉集選釋

（好評再版）

本書は現代萬葉學の泰斗佐々木博士が、多年研究の結果、萬葉集中の精華たる代表作約五百餘首の長短歌を抄出し最も平易懇切に之が釋義をなし、以て其の詩美の精髓を闡明せられたるもの。加ふるに緒論に一般的の解題を試み結論に總括的の評論をなし、更に萬葉學上の諸名著を解說せられたれば本書は啻に、初學者が歌學入門の好資料たるのみならず、萬葉研究者の好羅針盤たるべし。

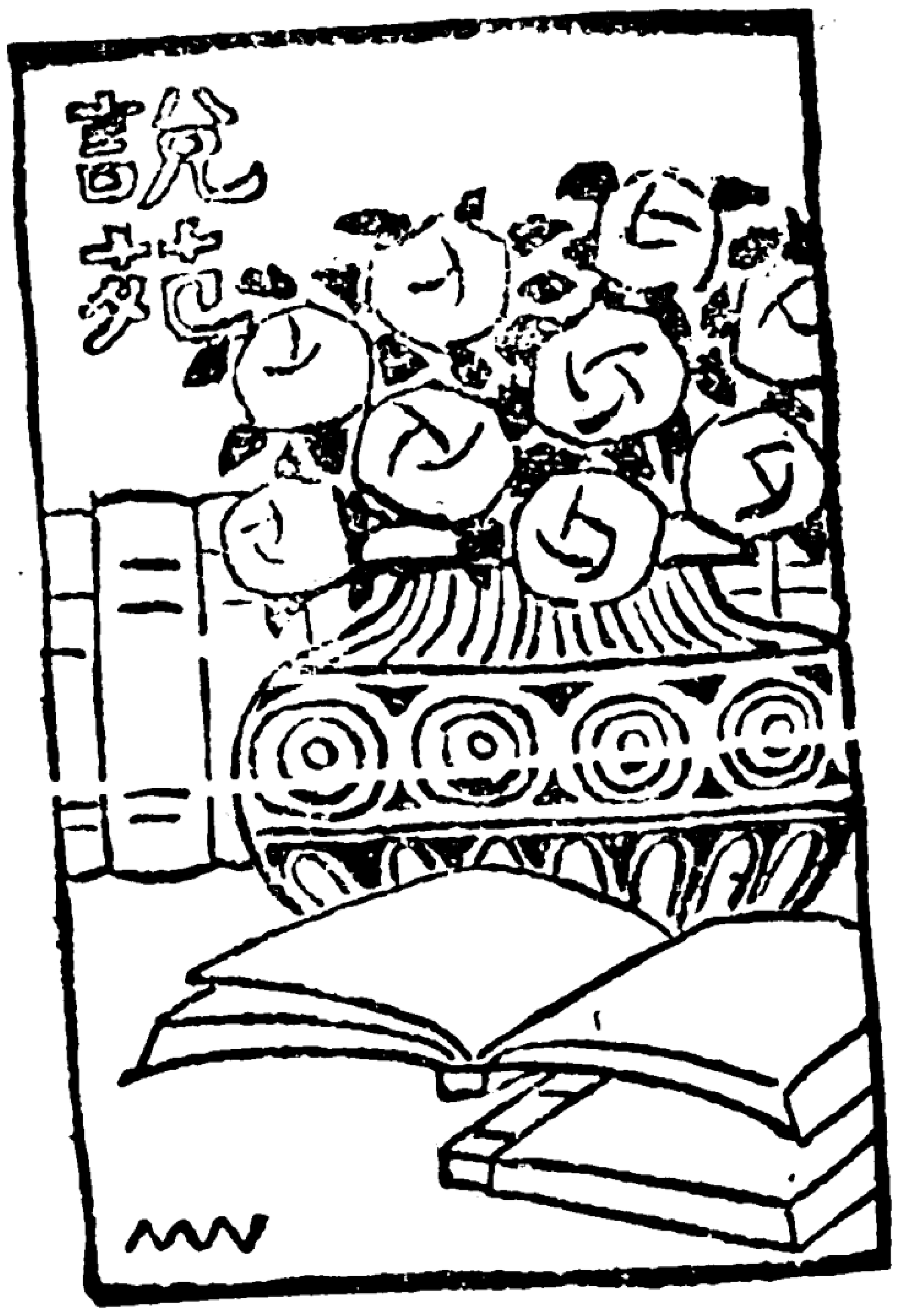
四六判クロース製
箱入美本全一冊
定價金壹圓參拾錢
小包料金八錢

（中付一の四）

東京神田錦町一丁目十番地 株式會社 **明治書院** 振替東京四九九一番 電話本局二四三八番

大杉と別れるまで

堀保子



一、結婚前後

私は去年の末、いよ〳〵大杉榮と別れて了ひました。私と大杉とは結婚以來足かけ十一年、隨分永い間の關係で、過去つた昔をたどれば、春を傷み秋を感ずる思ひ出も隨分とありますが、昨春以來、殊に葉山の刄傷事件から大分世間の取沙汰もあり、又御懇意の方々から淺からぬ御同情にも預かり、御世話にもなつてゐることですから、私は此際、私の占めてゐた立場から、私を中心とした事實の推移を記述して私の態度を明かにして置きたいと思ひます。

話が大分以前に遡ぼりますが、私共兩人の關係の最初から申しますと、明治三十九年私の緣兄になる堺利彥さんが麴町元園町に住んでゐた頃、私は都合上同家に厄介になつて居りました。其頃大杉は社會主義の關係からしば〳〵其家に遊びに來て居りましたが、追々と懇意になる中、或時大杉から結婚の申込を受けました。大杉は其時から、同志達の間に有爲な靑年として隨分望みを囑されて居ましたし、殊に電車事件の被告として保釋中の身の上でもありましたので、私も深い同情を以て迎へては居りましたが、何分にも私より年

下でもあり、直ぐに其の申込を承諾する氣にもなれませんでしたが、大杉が餘りに迫つて來ますので、遂に其まゝ結婚した樣な次第です。

それから二人で市ヶ谷田町に新宅を構へましたが、經濟上のことを申せば、其頃の大杉はまだ二十二歲の靑年で定まつた收入はありませんでしたが、私は其以前から堺さんの世話を受けながら『家庭雜誌』を發行して、可なりの收入を持つてゐたものですから、差しあたりそれを生活の根據として、傍ら大杉が佛語とエスペラント語の敎授を初めました。そんなことで半年ばかり過して居る中、雜誌の賣行も追々少くなり、語學の敎授もサッパリ振はず、毎月の月末には必ず二人が鞄を提げて質置に出かけるので、近處の人達から『又どちらへか御旅行ですか』などゝ云はれて、內々大笑ひをした事もあります。そしてとうとう四十年の二月に其家も持ちきれなくなり、それまで私共の家には不似合な一つ道具として大切にしてゐたオルガンをも賣拂つて、柏木に引越しました。

二、入獄頻々

所が其翌月には、大杉が平民新聞（社會黨の日刊新聞）に書いた二つの論文の爲、二ヶ月と四ヶ月との禁錮を申渡されて入獄し、其年の秋になつて漸く出獄して來ました。

それで先づ少し安心したと思つてゐると、翌四十一年の一月には、又、本鄕で屋上演說事件と云ふのが起つて、堺さん初め大杉等同志七八人が（支那の張繼さんなぞも加つてゐた）、一二ヶ月宛の入獄となつたのです。此間私共の身邊は迫害やら負債やらで非常な生活難に苦しめられ、私が虎の子のやうにしてゐた『家庭雜誌』も、とうとう他手に渡さねばならぬ仕儀になりました。そして今度出獄と三月たゝぬ內に又々例の錦輝館の赤旗事件と云ふのが起つて、此時も堺さん、山川さん、荒畑さん、其外同志數人と一所に、一ヶ年から二ヶ年半までの入牢を申付けられ、而も大杉一人が最長の二ヶ年半でした。（電車事件の刑は之と通算になりました。）

斯くて昔の歷史なぞによくある、夫は獄に投ぜられ、

妻子は體に泣くといふやうな悲慘の境遇はヒシ〳〵と私共の身に迫つて來ました。堺爲子さんが幼兒を抱へて女髮結になつたのも此時です。體の弱い私には爲子さんのやうな働きが出來ないので、大杉がエスペラントの教授で師弟の間柄とでもいふやうな關係のあつた支那革命黨の谷、馬、榮などいふ人々が大杉君の恩に酬ゆるといふので、革命黨の寄宿舍といふやうなものを作り、其監督の役を私に宛がつてくれました。赤旗事件で無罪になつた例の女逆徒の菅野須賀子も、其時私の所へ同居することになりました。然かし此所も長くはありませんでした。半年程經つと、支那革命黨に毒茶事件の騷動が起るやら、日淸兩國政府の壓迫やらで馬、榮などの支那人は皆歸國する事になり、私はまた女浪人の憂目を見ることになつたのです。

私は無事と寂寞とに堪へられませんでした。何時も思ひ出すのは『家庭雜誌』です。そこで一つは大杉が出獄して歸つて來た時の爲めにもならうと信じ、手の屆く限り借金して以前の『家庭雜誌』を再び自分の手へ引取り、守田有秋さんなどのお世話をうけて發行を續け、印刷所の交涉、廣告取、雜誌の發送まで自分の手一つで行つて居りましたが、其筋の迫害は依然として私と雜誌とに附まとつて、禁止又禁止、仕舞には二ヶ年間の長期停止を命ぜられました。此の困苦の中から大杉へは間斷なく外國から取寄せた書物の差入をしたり、又及ばずながら同志の家族のお世話などもして餘所ながら大杉の志を扶けて居りましたのです。

菅野と別れたのは其頃の事で、其後幸德さんとの關係を聞いた私は非常に驚きました。菅野に向つて散々其不心得を責め、元の心になつて荒畑さんの出獄を迎へるやうにと淚を以ていさめましたが遂にだめでした。其から私は菅野は勿論、幸德さんとも往復をせず、爲子さんに逢ふぐらゐを樂しみにして淋しい月日を送りましたが、生活の方は若宮さんの經營してゐた或る雜誌の廣告取を手傳つて、辛うじて其日の糧を得て居りました。私は其頃大久保百人町に住んでゐたのです。

三、父の死

突如として大杉家に大變動が起りました。それは豫備陸軍少佐であつた大杉の父が駿河の三保の自宅で病にかゝり、東京へ來て丸の内の胃腸病院へ入院したが、とう／＼歿なつたといふ事件です。

父は軍人育ちの頑固一點張で、或る時私が獄中の大杉から頼まれて、書籍代の無心の爲、三保へ父を尋ねた時、伜が軍人になるのを嫌つて社會主義者になつたのを立腹し、そんな金なんぞ鐚一文も出す事は相成らぬ、獄中で本を讀まうなどゝ云ふのが既に心得違ひであると云ひながら、私に一口の刀を渡し、「此刀は人を斬る爲めばかりの物でない、自ら覺悟して此刀の使ひ途を誤るなといつて、伜に渡してくれ。子供等には皆一本づゝ刀を分けてやつたが、榮は惣領だから一番長いのをやるのだ」と、目色を變へて言はれた程の人物です。それで私も仕方がなく、其の長い刀をブラさげて歸つて來たのですが、そんな譯で父は生前にも家の財産がどうなつてゐるのか、私共には一向知らせてくれませんし、死んだ後は尚更わからないのです。然かし死後の整理をするのは長男たる大杉の役ですから、私は千葉監獄へお百度詣りをして、大杉の委任狀を取るやら種々の手續きを經たりして、辯護士の渡邊澄也さんと共に三保へ行つて漸く跡の始末をつけました。家には繼母のお萱といふ隨分意地の惡い人がゐて、なかなか容易でなかつたのをやつと整理したのですが、在金と云つては一厘もなく、只あるものは普請中の家屋が一棟と、金鵄勳章の一年分と、遺族扶助料とだけでした。

四、繼母お萱

此父と繼母のお萱とについて面白い話があります。序でだから少しばかり書いて見ませう。父は大杉が十八九歳の頃、大杉等九人の子供を生んだ其妻を失つたのですが、根が名古屋生れの人だけ中々吝嗇家で、軍人氣質の外に、一寸金儲けでもしたいといふ野心があつて、子供の教育などといふ面倒くさい事よりも、會社か何かに關係して成金にでもなつてみたい心が先立つてゐたのです。尤も九人も子供があるのですから無理も

ないでせうが、子供を育てるにも成るたけ學資のかゝらないやうにと苦心し、中には商家へ奉公に出した子などもあるのです。大杉の母が死んでから三四年經つた時、或る日父が旅行をした。汽車中で一人の女と懇意になり、其身元を聞くと、島貫兵太夫さんのお世話で是から亞米利加へでも行かうか、それとも孤兒院の世話人にでもならうかと思つてゐるのだとの話に、父も同情したのか、或は自分の爲に謀つたのか、『そんなら俺の家へ來て子供の世話をしてくれんか』と其女に云つたのが初まりで、とう〳〵後妻として大杉家へ乘込んでしまひました。其後父が或人に向つて話してゐるのを聞くと、私も今度兼々望んでゐた理想通りの婦人が見つかつたので、再婚しましたと云ふので、年寄らしくもない新らしさうな言分だと、私共は毎度笑話にしたものでした。所が其の理想の婦人が即ち前にかいた意地の餘り善くないお萱さんなのです。お萱といふ名前に浦里時次郎の芝居に出る意地惡るの鴇母が思ひ出されます。

此のお萱さんが大杉家へ來てから得意の辣腕を揮つて家中を掻廻し、幼ない子供達を隨分虐め散らしたものです。尤も父は死ぬまでお萱さんを信じてゐたかも知れませんが、兎に角父の死後、大杉家は慘めなもので、お萱さんが父の遺言だといつて私達に傳へた言葉の中には、『子供達には靴一足分けてやらなくても宜ろしい。俺の葬式は耶蘇教でやり、遺骸だけは三保の鐵舟寺に埋めてくれ』といふ一節がありました。天へ昇つたり地に這入つたり隨分妙な信仰を持つてゐたものだと私は可笑しく思ひました。が遺言とあれば仕方がないので其通りにしました。聞く處に依りますと、此お萱といふ人はそれまでに結婚した事が十八度ばかり、其中戸籍上の手續を濟ませたのが八度、內縁の妻となつたのが十何度といふ恐ろしい女で、大杉家を出てからも、まだ半年經つたか經たぬうちに、又加藤といふ豫備陸軍少將の後妻となり、そこでも散々一家を荒らし拔いた末、一昨年の春頃めでたく往生したさうです。

五、澤山な弟と妹

金の無い代りに大杉の弟と妹は澤山ありました。女が三人、男が三人、都合六人を私は世話しなければならん事になりました。其中には小學校へやるべき幼さないのが三人もある上に、或はあちこちの親戚に預けられ、或は繼母の手で育てられた結果として、妙な氣風になつてゐた子供達ですから、私は此れにも相應の苦勞をして、餘り人樣に笑はれぬやうに育て上げる事を心掛けたのです。尤も其の敎育は、四十三年の秋、大杉が出獄してからの事ですが、三人の弟は皆專門の學校を出てそれ〴〵職業に就き、二人の妹も相應な身分の家へ緣付き、殘つた一人の妹の秋子といふのも最近に良緣があつて結納まで取交せた時、あの葉山の事件が起つたのを苦にして、十九の春をムザ〴〵と刄の錆に觸つてしまつたのは、何とも云ひやうのない氣の毒な事で、高い〴〵大杉家の犧牲といはねばなりません。

六、『近代思想』

家庭の中の細い私の苦心は書くことを省きます。大杉が出獄の翌年、即ち四十四年になつて、大杉は荒畑寒村さんと二人で『近代思想』といふ雜誌を發行しましたが、其保證金を作るのにも私は相應の働きをして大杉の事業を助けた積りです。『近代思想』は大正三年になつて平民新聞に變りましたが、平民新聞は發行毎に禁止になつて了ふので、大杉は更に宮嶋資夫さんなどと協力して『近代思想』を再興しました。其間にもお金の事や運動上の事で色々無理な工夫や才覺をして來ましたが、其頃から同志達の間に大杉の處置に對する不平不滿が起つて、折角再興の企ても水の泡になつてしまひました。

それから大正四年の夏、大杉は小石川へ佛蘭西文學研究會を開きました。神近市子が宮島さんの紹介で初めて私の家に來たのは其年の一月頃の事で、其後折々遊びに來て、研究會が始まつてからは續いてそこに來る樣になりました。

七、逗子の別莊住居

此以前から私は大に健康を損じ、大杉も獄中からひどく身體を傷めて、遂に兩人とも病を抱くやうになりました。前に述べた經過の間にも、私共は靜養のために東京から鎌倉へ、鎌倉から東京へ、其から又逗子へと、しば〳〵居を移してゐたのです。『近代思想時代』から大杉は原稿生活が忙がしくなつたため、家を東京へ置く間にも、よく一人で逗子や葉山へ行くことがありました。

四年の暮になつて大杉は又雜誌發行の都合から逗子へ轉宅の事を言出しましたので、私もそれに賛成しました。殊に其頃の大杉は擧動頗る尋常と異なり、何だかソワ〳〵して落ちつかぬ樣でもあり、或る時は些細の事から他人と爭論をするなど隨分目にあまる事もあるので、此れは何か同志に對する不平があり、又自分の書いた雜誌が頻りに發賣禁止になるなどの欝憤から、自然に心が荒んで來たのであらう、其れには姑らく田舍へ引込むのも結句體の靜養にも心の慰藉にもなるだらうと思つて、逗子へ家をさがしに行きました。丁度櫻山といふ景色のいゝ所に貸別莊がありまして、少し廣過ぎるやうだが狹いよりは結構だとすぐ借りる約束をして、小石川から其處へ移つたのは十二月も大分押詰つた十五日で、同時に佛蘭西文學研究會は牛込の藝術座へ移す事になりました。そして大杉は研究會へ出席する爲め、毎週土曜から日曜へかけて上京し、平生は此の景色の美しい廣々とした別莊の庭をながめ、暖かい日のさしこんで來る書齋の中で原稿をかくといふ段取であつたのです。

八、神近との關係（一）

大正五年のお雜煮は此の逗子の別莊で頂いたのです。けれど其のお正月は少しも長閑ではなかつたのです。

元日の朝『近代思想』が又禁止を命ぜられたので、大杉は二日の朝、大急ぎで東京に行き、四日の夜歸つて來ましたが、何時もと違つて何だか妙に悄れて居るのです。私も新年早々の留守番に少しふくれても居たのでせうし、何やかやの行きがゝりから言ひ爭ひとな

り、翌日翌々日とお互ひに半分無言の行をつゞけて居ましたが、大杉は何と思つたか、曾て神近が京都に行つた時、土産に持つて來てくれた御大禮の春日燈籠を取つて放りつけたり、古い目ざまし時計を川の中に投げこむだりするので、ハテ變な事をするわいと思つて、一體あなたは何でそんなに不機嫌なのかと改めて聞き糺すと、『ナニ僕が惡いのだ、僕が惡いのだ』と云つて又悄れて了ふのです。それで私も少し疑念が起り、『あなたは岩野さんの様な事をしてゐるんでせう』と突込みますと、大杉は何時もの癖の樂書をしながら、只ウンと云つて頷くのです。『相手は誰です』と云ふと、『それは聞かんでくれ』と云ふのです。其時私はフト胸に浮かんだまゝ『神近でせう』と云ふと、大杉は又ウンと云つて頷くのです。私は眞逆と思つた事が本人に承認されて、一度に冷水を浴せられた様な氣持がしました。そしてアァ聞かねばよかつたといふ心地もしました。

今になつて見ると、其時の混亂した心持など到底一一に思ひだせもしませんが、實を云ひますと其の以前、私は毎夜、大杉が他の女と結婚したり、或は他の女にじやれつかれたりする夢を見て、うなされて眼をさまし、大杉に其事を話した事などもありますので、知らず／＼私の胸に嫉妬の情も起りかけて居たのでせうし、大杉もほゞ感づかれて居るものと考へて居たのでせう。

九、神近との關係（二）

是が六日の夜の事で、あんまり細かい事は書けもしませんし、大概にして略して置きますが、私は只驚きもし、呆れもして、其の結末をどうする積りだといふと、大杉は又一層悄れた様子で『此んな事になるとは自分ながら判らない。所謂魔がさしたとでもいふのだらう。然し此事件を餘り重く見てくれては困る。彼女には屈辱的條件をつけてあるのだから安心してくれ』と泣いて詫びるのです。私の不安は其れ位ゐで取まることは出來ません。此から後どうする積りかと更に詰問すると、『堺君にでも相談に行つてみたらどうか』といふのです。

まだ書けば色々の事もありますが、其れから一日置いて八日に上京して此事件を堺さんに話しますと、『僕も此間から怪訝(おかしい)と思つてゐたが、事實を聞いて困つた事になつたものだといろ／＼心配して居つた處だ。然しもう斯うなつた以上、いつそ此際綺麗に別れて仕舞つてはどうか。其が一番賢こい仕方だ』と言はれました。私はそれから荒畑さんと高畠さんとにも御相談しましたが、お二人にも別に名案のあらう筈もありません。要するに、それほど眞面目の關係とも認められないから、マア姑らく見てゐてはどうだと云ふ位の意味に私は聞取りました。私は此場合たゞちに堺さんの意見に從ふ勇氣が無かつたと同時に、他のお二人のお説に甘んじてゐる事も出來なかつたのです。然かし今遽(にはか)かに騷ぎ立てゝは神近の新聞に於ける地位にもかゝはるだらうと思ひ返し、尚一應大杉の意中を確める事にして逗子へ歸りました。私は平生大杉の自由戀愛論や男女關係説を聞いて知つてゐる。素より其れを全部承認したのではありませんが、此際成るべく穩便(をんびん)にして早く解決をつけて仕舞ひたいといふ考へは起らぬ譯けに行きませんでした。そこで逗子へ歸つてから大杉に向ひ、種々談判した結果、差しあたり左の三條件を取極めました。此中、前の二項は私から提出したもので、後の一項は大杉が自ら言ひだしたものでありました。

一、神近は今後同志の會合へは顏を出さぬ事
一、自分(私)の事には一切神近が口を出さぬ事
一、大杉は今後神近との往復を遠慮する事

然し私の氣持はすこしも良くならない。不快の思ひは絶えず胸中に往來して、遂に私と大杉との別居問題が起りました。男女別居は大杉の持論ですが、私との別居問題は別の意味から餘儀なくされて起つたのです。

十、野枝との關係

逗子の一月は漸く過ぎて二月の初めになつた頃、或日大杉は私に向つて斯んな事を言ひだしました。『僕はマダ／＼ひどい事をしてゐる。何れ問題になつて三月

か四月の新聞や雜誌に書かれるかも知れない」といふのです。此時はもう別居問題が成立してゐた頃ですから、私は別に驚きもしなかつたのでした。すると二三日經つて、大杉に宛てゝ無名の郵便が來ました。大杉は其を讀了つてから「今から一寸東京へやつて頂けますまいか、明日は必らず午前中に歸る」と紙切に書いて私に見せ、「事情は歸つてから話す」と云つたなり、そこ〱に出かけました。(今考へると、此時は丁度、神近が大杉と野枝との關係を知つて、刺すとか斃つとかいつて騷いでゐた時です。そして無名の手紙は神近のだつたと私は思ひます。)次の日、大杉は約束どほり歸つて來ました。そして又其翌日、私が大杉と一緒に葉山へ散歩に行つた時、伊藤といふ尾行巡査が「先生一昨晩はあの雨で、其上電車はなし、やう〱本郷の親類まで行きましたが、田舍者で道は分らずヒドイ目に逢ひました」といふのです。本郷!それでは神近の居る方角ではない。私は變な事をいふなと思つてゐる中、大杉が青海苔を取りながら大分先の方へ歩いて行つたので、私はそれとなく伊藤巡査に、大杉はどこへ行つたのですと聞きますと、小石川の辻さんの家へ行きました、といふのです。辻は野枝の家です。よもやとは思つたが私の胸は急に躍りました。

歸宅してから大杉に、何故昨日辻を訪ねたかと聞くと、大杉は初め曖昧な返事をして居ましたが、私がすぐそれに續いて、「先日あなたはまだ〱酷い事があると云つたが、それぢや今度は野枝ですね」追究したので、大杉も初めて野枝との關係を白狀しました。私は神近の時の驚きよりも幾層倍の强き驚きを感じましたが、驚きが過ぎて只呆れたと云つた方がもつと適切かも知れません。

「野枝さんは良人のある女です。二人の子さへある人の妻です。未婚の伊藤野枝でなく既婚の辻野枝です。あなたは姦通をしてゐるのです。法律の罪は別としてあなたは自分の心に恥ぢないか」と、私は頭から捲し立てゝましやりた。すると、神近の時には涙を流して罪を謝した大杉が、今度はどうでせう、少しも恥ぢた色

がないのみならず、『ウム急轉直下自分で自分の心が判らぬ』といつたきり、例の癖の樂書に『厚顏無恥』『厚顏無恥』と續けさまに書いたりして、サモ平氣でゐるのでした。

十一、離別の決心と別居

それから間もなく、野枝と神近とが大杉に對する戀愛關係を銘々に書いて雜誌『青鞜』で發表するといふ事を大杉から聞いた時、私は其無恥不道德に呆れました。彼の人々は何んといふ大膽不敵だらう。自分の如きは、到底此の人々の渦きの中に捲込まれるに忍びない。一日も早く別居するのを得策と考へました。そして別居の斷行を大杉に迫り、二月廿七日上京して別居すべき家を捜し歩るき、四谷南伊賀町の山田嘉吉さん御夫婦に事情を明かすと、非常に同情して下すつて、そんなら自宅の裏に以前平塚雷鳥さんが住んでゐた家が明いてゐるからとのお話でしたので直ぐ借受けの約束をしました。

それから堺家を訪ねて右の次第を話し、其晩は上京の度毎に泊る實兄の堀紫山の芝の宅へ行くと、兄は堺さんと同じ意見で、姑息の別居は却つて誤解を招き易い、潔ぎよく離別する事にせよとの忠告でした。既によほど堺さんの意見に傾いてゐた私は、此夜いよ〳〵離別の決心を定めたのです。

翌日、前日より上京中の大杉に逢ひ、別居よりも寧ろハッキリと分離した方が双方の爲めになるだらうとの意見を提出しますと、大杉は『路傍の人となる事はいやだ』と申すのです。然し私はもう決心した事であるからと云つて、其又翌日、即ち三月一日逗子へ歸り、三日逗子の家を引拂つて四谷の家に移りました。

そして私達の關係を初めから能く知つて、此事に就てはいろ〳〵と心配をして下さつた、辯護士の山崎今朝彌さんと堺さんとにお願ひして、五日の日、正式に大杉と離別の交渉をする爲め、其日の午後一時に、山崎さんの宅で四人が會見する約束であつたのに、大杉は朝早く外出したきりとう〳〵姿を見せなかつたので、お流れになりました。すると夜の九時頃、大杉は馬場孤

蝶さんと一所に歸つて來たのです。そして馬場さんの被仰るには『今日の約束が遲れたのは僕にも多少責任があるのです。僕はあなた方の此度のお話をくわしく聞いたのは今日が初めてゞす。大杉君は今日僕の留守中に來られて僕の歸りを待つてゐた爲めこんなに遲くなつたのです。其れから今別れ話しをせずとも、まだ此問題には充分な餘地があるやうに思ふから別れ話は一先づ取消してくれまいか』との事でした。私はよく考へた上で御返事をすると申ました。

其中、馬場さんと大杉との間に色々の話が始まり、馬場さんが『大杉君、一體今度の關係は眞面目なんですか』とお聞きゝになると、大杉は笑ひながら『眞面目半分、不眞面目半分ですな』などゝ云つて居ましたが、馬場さんの歸られに後で、大杉は結局私に向つて、『別居は好いが別れ話は好まぬ。自分も元々別れたい考へはないのだから別居だけ承知してくれ』といふのです。けれど私は既に山崎堺兩君に委せてゐる事ですから、一存に決定する事も出來ず、そこで翌日馬場さんをお訪ねして大杉の言分を通じますと、馬場さんは『それが大杉君の眞意でせう。まあ別居として置くが宜い。其れから野枝との關係の深淺は知らぬが、此間野枝に逢つた時に野枝は一度あなたに逢ひたいと言つてゐたから、僕はあの奥さん(私)の事だからあなた(野枝)に逢つても赤い顔はさせまいが、逢ふか逢はぬかそれは判らぬ。あなたのお話だけなら奥さんに通じてもいゝと答へて置いた。『青鞜』に意見を發表すると云ふ事も、辻君の反對もあり旁々で中止になつた。此後大杉君の事に付ても、目に餘るやうな事があれば及ばずながら僕から能く注意もします』と親切にいつて下さいました。さうなつて見ると私の決心もにぶり、それでは山崎さんと堺さんとの方に、馬場さんから宜しく取消の旨を通じて頂きたい、自分の口からは此際ちよつと言ひにくいからとお頼みすると、馬場さんはそれを御承諾なされたのです。それから大杉は九日に麹町三番町の福四萬館へ引移りました。

十二、野枝の辯解と家出

問題は未解決のまゝになりました。そして其月の上旬、大杉と野枝との關係が新聞に出て大分世間が喧ましくなりました。然るに野枝は頻りに此風說を打消して、そんな關係はすこしもないと辯解しだしました。

それで青山菊榮さん(今の山川菊榮さん)でさへ野枝の辯解を信じ、野枝の爲めにわざ〳〵私をお訪ねになつて、『世間の風說は全く無根です、どうぞ誤解のないやうに願ひたい』と仰いました。そして『野枝さんも貴女に御目にかゝりたいと申してゐた』といふやうな事までお附け加へになつたやうに記憶して居ます。尙菊榮さんは其時居合せた他の來客に向つても、しきりに野枝の爲めに辯解をおつとめになつてゐました。菊榮さんは又山田わか子さんに斯んな事を言はれたさうです。

『なんて窮屈な考へを人は持つて居るのでせう。大杉さんと野枝さんが一所に步いて居つたつて、そりや自由な人間が外を步いて居るんで、一つ道で落合ふこともあるでせう、又途中で出つくわして話をする事もあるでせう。そんな事を一々意味あるやうに思つたらそりや大變ですよ。當人が關係がないと云へばないと極まつてるぢやありませんか。當人の云ふ事を信じて居たらいゝぢやないですか。あゝは云ふけれど併しなんて餘計な推測なんぞするから世の中が面倒になつて仕方がない。本當に何んでもないんですよ、あの二人は。當人達がそう云つて居るぢやありませんか。それが一番確かな證據ですわ。』(若子さんのお話のまゝ)

サアかうなつて見ると、大杉の自白がうそか、野枝の辯解が眞實か、私も少し其判斷に苦みましたが、マサカ大杉が跡形もない事を自白する譯けもあるまいし、野枝の辯解は唯世間體を繕ふ一時の言逃れとしか見ることが出來ませんでした。其頃又野枝は山田わか子さんをお訪ねして次ぎのやうな談話を交換したさうです。

わか子さん『この頃妙な噂が大分盛んですがあれは

どうなんですか』

野枝『アラうそですよ。世間て本當に隨分ね。此間・も外でそんな事を聞いて私はビックリしましたわ。本當に私は呑氣ですね。世間でそんなに云つてゐるのに御當人の私はちつとも知らずに居たんですもの』

わか子さん『ほんとに私もそうなくてはならないと思つて居ました。けれどもあなたが大杉さんにあげた手紙の意味は、確かにお二人の關係を明かにして居ると保子さんは云つてお出でしたよ、』

野枝『私大杉さんに手紙なぞあげた事はありませんわ。尤も、大杉さんが私とさも深い關係でもあるやうに云ひふらしてあるくやうですから、私はそれに對して隨分腹が立つて、それでそれを怒つて此の春大杉さんに端書を一度上げた事はありますわ』

わか子さん『でも保子さんの仰るのは、そんな意味のものではないやうでした』

野枝『それはね、一度大杉さんに手紙を上げた事はあります。けれどもうずつと以前の事で、あの谷中村の事件の時に、あの事件に對する私の意見を大杉さんにお話したゞけなんですよ。なんで私が大杉さんに手紙など上げるものですか。それは皆保子さんの邪推ですよ』

わか子さん『もしそうならまあとんでもない誤解を保子さんはしてゐらしやるのね』

野枝『えゝ、だから私保子さんに親しくお目にかゝつてゆつくりお話をしたいと思つてゐますが、併しさう誤解されては却つて私が何をお話しても分つて下さらないかも知れない。もしお宅でゞも落合ふたらお目にかゝるとして、わざ／＼お尋ねする事はよしませう。本當にお目にかゝつてすつかりお話をしやうと思つて居たのですが……』(同じく若子さんがお話のまゝ)

野枝の辯解は實に巧みなものです。先には青山菊榮さんを信じさせ、今又山田わか子さんをも說伏して了つたのです。それからわか子さんは私に『野枝さんが

二度までも來て事實無根だといふのですから、其にちがひないでせう。あなたが大杉さんにかつがれてゐらしやるのではありませんか」と被仰つたくらゐです。所が、それから幾日も經たぬ二十九日(四月)の夜に大杉が來て、「野枝もいよ〳〵辻と分れて家出をした。多分千葉の海岸へでも行つて姑らく勉强でもするのだらう」と、さも餘所事のやうに言ひました。私は此先きが案じられて堪りませんでした。私の苦るしみは更に更にふかくなつたのです。そして其の苦るしみを逃れるのには、私自身が自身を亡きものにするか、それとも大杉を亡きものにするか、二つの道の一つをとらなければ到底出來ないとまで思ひつめたこともあります。

十三、一進一退

野枝は果して良人の辻潤さんと一人の子供を殘して家出をして、千葉縣の御宿といふ海岸の旅館に逃げて往つたのでした。大杉も無論其跡を追ふて御宿へ屢々往復を續けました。そして或る日大杉が來て、「女の世界」の安成二郎君が尋ねて來るかも知れぬ。六月號に自分等三人(大杉、神近、野枝)の關係を書き、序に(ついで)あなたの意見も聞きたいといつてゐた。があなたは此際何も云はぬ方が好いと思ふ。其れから此を機會として、あなたが野枝神近の二人を認めてくれる事を希望するといふのです。私は直ぐ反對しました。「一人の男を三人の女、そんな關係がどうして長く續くだらう。理窟はなんとでも附けられるが、私は只自分の心に從つて自分の面目を保ちつゝ行くべき所に行くだけの事だ」と申しますと、大杉は「それでは仕方がない。外の二人はソコまで進んで來てゐるのだが、あなたにソコまで進んでくれといふのは無理な事だ。そんなら四人の關係は止して、あなたと僕との關係として置かう」といつて歸りました。

それから安成二郎さんが入らしつて、「女の世界」に載せる私の意見をきゝたいといふ事でした。私は「何れお話をする時があると思ひますが、今は意見を發表する時でないから何事も申されません」とお答へしまし

た。安成さんは又『野枝さんがあなたに逢ひたいと云つてゐた』と被仰いますから『あの人はよくそんな事を言ひますが、私に逢つてどうするといふ考へでせう』といふと、『多分御本家に御挨拶を申上げるのでせう』と安成さんは笑ひました。

二三日經つと、又大杉が來て『下宿住ひも不便で堪らんから家を一軒借りやうと思ふ。こゝへ來る道ですぐそこにいゝ家が見つかつた。それへ引越して來やうと思ふ。それでどうだらう、食事はあなたの所で世話をしてくれないか』といひますから『其んな事はいけません。あなたは私を侮辱して置きながら、又こゝまで來て更に侮辱を重ねるのですか』と言ひ放ちましたが、大杉は重ねて『そんなに思ふならやめてもいゝが、僕はあなたの爲にも僕のためにも近所へ來た方がよからうと思つての事だ』と申しますので、私も止むなく讓歩して遂に其家を借りる約束をしました。そして其事を御近所の山崎さんの奥さんや山田わか子さんにお話しすると、『大杉さんも少しは考へていらしやつたのでせう。さうなれば結構な事だ』といふのでした。が私は信ずる事が出來ませんでした。大杉は家を借りる約束だけして又御宿へ出掛けてしまひました。其跡で家主から山田さんに保證人になつて呉れと申して來ましたが、山田さんがそれを御承知なさらなかつた爲め、此話はとう／＼オジヤンになつてしまひました。

十四、大杉と野枝との窮乏

大杉も野枝も其後久しい間何んの收入もないので、野枝は御宿にも居られなくなつて、大杉の下宿の福四萬館へ轉げ込むことになりました。私は大杉に對して野枝と同居の不都合を責めますと、イヤ二三日で外へ行く筈になつてゐると答へました。が其頃の二人の窮乏は殆んど其極に達して身動きも出來なかつたのです。

私は大杉が福四萬館へ下宿した後も、着物や洗濯物の始末は言ふまでもなく、其下宿料さへ種々なる苦心をして大杉の爲めに支拂つてやつた事もあります。これを外から見たら餘り未練があり過ぎるやうに思はれ

たでせうが、私の心では未練とか心殘りとかいふやうな其んな單純な考へではなかつたのです。今まで一所に同棲してゐたものが他人に笑はれるやうな汚ない着物を着てゐたり、下宿代も拂へぬといふやうな不始末をされるのは、何んだか自分の責任をつくしてゐないやうに思はれてなりませんでしたから、出來るだけの事をして大杉を庇つてやつてゐたのです。或る人の如きは『今日になつてもあなたがそんな世話までしてやるから大杉の所行が直らぬのだ。もう何も構つてやらず、困るだけ困らしてやる方がよい』とまで云はれた程です。然し私も何時まで大杉の世話の出來る筈がない。大杉の方からこそ私の生活費を仕送るべき筈であるのに、それどころの話ではなく、野枝と二人で只下宿屋にごろ〳〵して居たのですから、私もモウ其後は一切構ひつけぬ事に極めました。

十五、福四萬館に於ける大杉と野枝

九月の初め、大杉は雜誌『文明評論』を發行する計畫を立て、野枝が其保證金を作るといつて九州へ行きました。大杉が言ふには『極く秘密の話だが、十一月になれば頭山滿が金を出してくれる筈になつてゐるので、野枝は其れまでの間、九州の親戚から時借をしてくるといつて出掛けたのだ。野枝のお爺さんと頭山とは非常に懇意の間柄で、金に困つたら頭山の處へ行つて相談しろと云つてゐたさうだ。其緣故で頭山から金を出して貰ふ事になつてるのだ』との事でした。

然し、私は平生から野枝の性行を聞いてゐますから、又先日來の白々しい辯解をも聞かされてゐたのですから、此話を聞くと可笑くつて堪りませんでした。野枝は其前にも一度(大杉の話に依れば)、大阪の叔父さんに金を貰ひに行つたけれど、尾行に妨げられて目的を果さずに歸つたと云ふ事ですが、其の叔父さんをよく知つてゐる或人の話に依れば、其人は迚も野枝に金を與へ得るやうな身分の人ではないと云ふ事です。旁々私は野枝の福岡行を心中で笑つて居りました。間もなく野枝は歸京したが、果して金は少しも持つて來ない。大杉もさすがに極まりが惡かつたと見えて、しば

らく姿を見せませんでした。

是までほとんど一滴の酒も口にしなかつた大杉は、此頃になつて酒をのむ、喧嘩をする、亂暴を働らくといふやうな風で、人間が全く一變してしまひました。福四萬館でも神近や外の客と隨分酒をのむといふやうな荒み切つた生活が續けられたやうです。

其後大杉に逢つた時「野枝を一體どうするつもりです」とたづねますと、「今は行く處がないから仕方がない。金でも出來れば何處へか行くだらう」と例の餘所事にして了ふので、私も追窮の勇氣が失せて仕舞ふのです。「雜誌の方はどうなつた」と問へば、頭山の交渉が進行中だと答へるのです。其頃私は頭山家へ親しく出入する人から薄々頭山家の樣子を聞いてゐましたから「あなたは野枝に欺されてゐるのではありませんか。頭山さんでは伊藤野枝なぞといふ女はちつとも知らんと言つてゐるさうぢやありませんか」と釘を刺しますと、大杉は非常にイヤな顏をして「知らぬ女にまさか紹介狀もかくまいぢやないか。頭山の事をあなたに話したのは僕の一生の不覺であつた」といひました。其癖頭山さんの事は大杉が既に外の人にも話して、皆んな知つて居るのでした。これは十月の末の頃で、大杉と野枝とが福四萬館を追出されるばかりになつて、本郷の菊富士ホテルへ轉宿した後の事です。(餘計の事の樣ですが、福四萬館では野枝の叔母さんが今に金を持つて來る來ると云ふのに釣られて、此時まで待つてゐたのだとは番頭の直話でした。)

十六、大杉と野枝の上景氣

十一月五日、私は大久保の荒畑さんをお尋ねすると、きのふ村木源次郎さんの來ての話だといつて、大杉は野枝と分れて暫らく葉山へ行く事になつたといふ事です。そして昨日まで肩や尻の拔けた袷をきて下宿屋の二階にころがつてゐた野枝が、遽かにキレイな着物を着てニコ〳〵してゐるとか。それから一昨日の立太子式の夜は大杉が七八人の同志と自働車で市中をかけ廻る處であつたのが、どこにも貸自働車がなかつて、夜どほし歩き廻つたとか。又日本橋の鴻の巣で晩餐會を

開いたとかいふやうな話を聞きました。私は其金の出處は知りませんが、果して先月來話しのあつた頭山さんの手から出たものかどうか。是については猶ほ委しく書けば書く事もあるのですが、餘り深く私に關係の無い事ですから此位にして置きます。

　次ぎの日六日、大杉が私の宅へ來て本箱からかきかけの原稿なぞを探がしだし、何だがソワ〳〵してゐました。『これから葉山へ行つて原稿を書くつもりだ、廿日頃には歸る』と云ひますから、私は『あなた一人か』と申しますと、『無論一人だ。野枝は菊富士に殘つてゐるが、何れ何處かへ行くだらう』との事でした。私は大杉の態度を怪まずにはゐられませんでした。自分が一所に居る女の行先きさへ知らぬとは餘りに無責任だと思つて『あなたはいつでも無責任な返事ばかりしてゐる。それでいゝのですか。あなたは野枝とどういふ約束をしてゐるのです』といひますと、『僕は何んにも約束などしてゐない。彼女は彼女でどうにかするだらう。僕はそんな事まで關係しない』といふのです。そして匆々に出て行きました。私は例つになく何んだか淋しいやうな氣がしました。

十七、葉山の刄傷事件（一）

此から葉山の刄傷事件です。九日の朝差出人は判らないが、逗子から私の處に電報が來ました。讀んでみると、『オホスギビヨウキ、オイデマツ、ヤトクノオソレナシ』といふのです。私は不思議で堪りませんでした。六日に逢つた時、病氣らしい樣子は少しもなかつたのに、假令危篤のおそれなしとはあるものゝ、電報で來てくれといふのは餘程大病に相違ない。此れからすぐ葉山へ行くにしても、それだけの用意をしなければならぬと考へ、兎に角堺さんに相談しやうと思つて、急使を堺家へやりますと、『餘り心配するな、これには何か什細があると思ふ、今直ぐ行く』との返事でした。

　私も少しは安心しながら支度をしてゐる處へ堺さんが來ました。堺さんの言ふには『聞けば葉山へは神近も行つてゐるさうだ。野枝も無論一所と思ふ。此際四人顔を合せて何か相談でもしようといふのぢやあるま

いか。しつかりして事に當つてくれ、まあさう急ぐこともなからう。此れから賣文社へ行つて電話で聞き合せてみよう」と、それから堺さんと同道して京橋の賣文社（堺さんの事務所）へ行きますと、丁度山川さんが電話に掛つて、――大杉が殺られた？――病院で？――生命には？――など丶何處かの人と話してゐらつしやる所でした。事件は豫想よりも重大であつたのです。其れから大杉の泊つてゐる筈の日蔭の茶屋へ電話をかけて事の次第を確め、大杉は逗子の千葉病院へ入院してゐる事が判りました。電話で話をしてゐる中にも、モウ新聞記者が押かけて來て混雜してゐる間で、私は堺さんと相談の上、大杉からの電報で來合せた宮島さんと一所に逗子へ急行しました。

千葉病院へいつてみると、重態と思つたのに引代へ、咽喉の所へ繃帶をした大杉は平生の如く口をきいて、そして煙草をふかしてゐるのです。稍安心はしましたが、そばに野枝がゐるのを見て不快でたまりませんでした。宮島さんは此際野枝が此處にゐるのは不都合だといつて野枝に退去を迫つたのですが、野枝は看護をしたいといつて去りませんでした。私も看護をしたいとは思ひましたが、野枝と一所にゐることは好みませんから、其事を宮崎さんに話して大杉の意見を聞いて貰ふ事にしてゐる處へ、又東京から馬場さんと荒畑さんとが來ました。馬場さんも、此の看護は奥さん（私）がすべき筈だといつて、野枝に一時引取つてはどうかとお勸めになつたやうですが、野枝は泣いてゐて返事をしない。そこで馬場さんは私に、「奥さん仕方がない、充分お察しするが、場合が場合だから我慢なさつて、まあ本妻と妾といつた位の積りで四五日一所に看護をしてはどうです」とお勸めになりました。そして、荒畑さんとお歸になりました。

其前、宮島さんは紙に書いたものを私に見せました。其れは大杉が『當分あなたと野枝と二人にゐて貰ひたい』といふのです。私はもどかしく思ひましたから、大杉の枕元へ行つて『自分一人が看護しよう』と申しますと、『そんな事をいはんで野枝を置いてもいゝぢやな

いか。當分は見舞客も多い事だらうから二人で居てくれ」といふのです。私は最前から野枝が不遜の態度を極めてゐるのを見て不快に思つてゐましたから、大杉に『二人にゐて貰ひたいと言ふなら、私に對して野枝に何とか挨拶をさせたら好からう』と申しました。そこで大杉が野枝をよんで注意すると、『私は御挨拶をしやうと思つてゐたのですけれど、もう隨分皆さんから侮辱されました。何んと御挨拶をしたら可いのでせう』と野枝は云ひました。大杉は『ソレだからあたは人に誤解されるのだ……二人がそんな事なら二人共歸つてくれ』といひました。私はもう〳〵こゝに居るのに堪へられませんので、次ぎの室に居られた宮島さんと林おますさんとに『私はこゝを引上げる』といひました。こんな事をしてゐる間に、宮島さんは大いに激昂して頻りに野枝を罵り、『保子さんが來てゐるのに貴様がづう〳〵しくこゝに居るのはどういふ譯だ』など叫んだやうでした。おますさんからも『こんな騷ぎの起つたのも皆貴樣のせいだ。首でもくゝつて詫びるのが本當だ』なんといふ聲が聞えた樣でした。

十八、葉山の刄傷事件(二)

病人に此うへ氣を揉ませるのは良くないと思つて、私は宮島さんやおますさんと日蔭の茶屋へ一時引上げました。馴染女中のお源さんに案内されて大杉のゐた二階の八疊座敷へ通されました。この部屋は元から大杉も私も大好きなので、こゝの家へ來ると必ずこゝときまつてゐるのでした。廊下の血潮はキレイニ拭き取つてはありましたが、まだ生々しい血が疊の間や壁に附着して、新らしい名殘を留めてゐるのです。前夜大杉と神近が茶受けにした煎餅のかけなど散ばつてゐる。私はそれを一目見ると胸が躍つて、堪へられぬ一種の悲哀と物凄さとを感じました。お源さんから事件の樣子など聞いてゐる處へ三四人の見舞客が病院から引上げて、其夜は其部屋で朝の五時ごろまで語り明しました。

夜が明けてから、宮島さんと男の方達は神近を見舞ふため葉山の警察へ行くと、既に護送した後で面會す

る事が出來なかつたさうです。そこで其方達はその足ですぐ病院へ行くと、入口の處で野枝に逢つたので、又癇癪を起して野枝を泥濘へ突倒し、散々打擲を加へたといふ事を後で聞きました。間もなく宮島さんから電話で『大杉君には言ふべき事をいひ、野枝には制裁を加へたから、僕はもう用がない、すぐ東京へ歸る。今東京から電話で山川君が來ると云ふ知らせがあつた』と申されました。

山川さんは其日の夕方、日蔭へお出でになりましたから、私は昨日から今日へかけての事をお話した上、『大杉も野枝も餘りに不謹愼だ。あれではどの位ゐ人の感情を害すか知れぬ。此際看護の事を全然私一人に任かせるか、それとも野枝が一切の責任を負うてやるか、其點についてハッキリした大杉の返事を聞いて頂きたい』と山川さんにお頼みしました。

其處へ大杉の弟で横濱にゐる勇といふのが來て、『病院の方へ行つたのですけれど、お姉さんはこちらだときゝましたから兄さんに逢はんで來ました』といひました。私が勇と話してゐる間に、山川さんは又病院へ行きました。勇もすぐ跡から往きました。

二三時間經つと、山川さんが村木さん、勇などゝ一所に歸つてきました。山川さんの云ふには『大杉君は成る程自分達も不謹愼だつたらう。があんな暴動を起した以上、野枝は歸されぬ。野枝も又全責任を負ふて今後看護するといつてゐる、といふ返事をした』との事でした。私は、さういふ譯けなら私は東京へ歸る、そして彼等に最後の返事をしてやらうかと山川さんに相談しますと、山川さんは『それは今しなくつてもいいと思ふ、馬場君といふ人も中に入つてゐる事ですし、ともかくあなたがお歸りになるなら御一所に歸りませう』と仰るので、其夜山川さん初め皆さん達と一同逗子を引上げて歸京したのです。

十九、卑怯な大杉の態度

勇も同じ汽車に乘りました。横濱で下りるべき勇が東京までついて來たので私は不思議に思ひ、山川さんに『弟は何か私に話でもあると見えます』と申しますと

山川さんは『さうですか、勇さんは先程も、病院での兄とのお話は、あれは姉さんの將來の事ですか、現在の事ですかとおたづねだから、現在の事だといひました』と被仰る。私には何の事だか分りかねたまゝ、變な氣持で勇を連れて歸りました。

歸つてから勇は斯ういひました。『病院で、兄さんは山川さんに、保子をつれて歸つてくれ。そして一人で置くのは危險だから、堺の家へでも置くことにして貰ひたいといひました。其れから山川さんとの筆談に依ると、どうもお姉さんの爲めに不利益の事ばかりの樣でした。不利益といふ意味は此の際姉さんと別れたいといふやうに取れたのです。そしてこれは當分だまつてゐてくれ、いづれ時期を見て發表するといつてゐた。こんなお話は姉さんにすまないのですが、だまつてゐる事はどうしても出來ませんから、こゝまで御一所に來たのです』

私は葉山に滯在中、山川さんの口氣で大てい其んな話があつたらうと推察してゐました。元々分離話は私から提出してゐた位ゐですから、此場合、勇の話を聞いても敢て意外といふ感は起らなかつたのです。寧ろさうなるのが當然と思ひました。同時に大杉の行動が終始男らしくなかつたといふ感じが起りました。其れは私が最初別居問題から進んで離別問題を提出した時、大杉は是非別居だけにして貰ひたいといつたではありませんか。然るに此刄傷騷ぎが起つて大杉の理想が根柢から崩れた今日になつて、『保子を一人で置くと危險だ』といつて、恰も私が積極的にか消極的にか神近の二の舞でもするかのやうに恐れて、急に山川さんに離別話しをするなどは、變節か、卑怯か、男らしくないにも程があると思ひます。有體に申せば、こんな醜い騷ぎを仕出かした上は、私の方から更に離別問題の解決を迫るべきなのです。然し私は大杉の此不幸に同情して、もし私が專ら其看護や善後の處置に當るならば、治療靜養にはこれ〳〵の道を取り、必要の金錢は斯ういふ風にして調達したいとまで、チヤンと胸中に成算を立てゝゐたのでした。初めに離別問題を提出

して、今又こんな事をいふといかにも意氣地のないやうに聞えませうが、新らしくない、又餘り古くもない、中古の女の意氣は此にあるのだと信じて居ります。然し一夫多妻の犧牲になつて自己を沒して了ふ事は、どうしても心が許してくれません。

二十、離別の決定

十一月十五日、堺さんのお宅に山崎さん、馬場さん、荒畑さん、山川さんなどが集まつて、私の爲に善後策を講じて下さいました。私は斯樣に同情をして下さる皆樣方の御親切を深く感謝いたして居ります。其れから引續き二三回の御相談を煩はした上、私は兎にかく離別の決心をしてゐるので、其の方法や條件については私から何等の要求もせぬ、只一切の事を山崎さんと堺さんとにお任せするといふ事に決定しました。

それから大杉が東京に歸て後、山崎さんが交渉をして下すつて、連帶の債務や其他金錢上の事等について多少の條件を約定して下さいまして、十二月十九日、愈よ大杉と私との從來の關係が全く斷絕せられました。

私も是でセイ〳〵しました。然し若し是が去年の三月の別れ話しの時に決定してゐたら、存外心持よく別れる事が出來、夫婦關係を離れて只の友人交際も出來たであらうし、實際其頃大杉にそんな話をした事もあつたのですが、時機を失して遷延に遷延を重ね、其中種々な事情がからみあつて、とう〳〵今日の樣な惡感情を持つて別れねばならぬ事に立到つたのは、私自身も、大杉の爲にも、誠に殘念に堪へませんが、それもの爲に今更致し方がありません。私は只これだけの事を書きしるして、報告とも、告白とも、且は自分の不幸の紀念とも、致したいと考へるので御座います。

最後に、お引合に出しました皆樣方に對し、特に一言お詫びを申上げて置きます。私としては勿論信ずる儘の事を有體に書いたのですが、それでも何處か聞き違ひ、云ひ違ひの點が無いとも限らず、從つて自然御迷惑を掛けた樣な場合があるかも知れません。其邊はどうか無智な一婦人の繰言として幾重にも御ゆるしを願ひあげます。

政治家の新聞記者操縦

洸足老人

△今度は政黨の新聞記者操縦振りを話せと云ふか、君は色々な注文を持つて來る男だナ、此次は何を持つて來るんだイ。ナニ、政黨の新聞記者買收内幕話をしろッテ、全體世間で云ふ政黨の新聞記者買收なるものが、果して實際夫れ程大袈裟に行はれて居ること、思つて居るのか、夫れだから少なからず滑稽だと云ふのだヨ。現在の我輩の位置職業としては、成る程時々買收もするかも知らんが、政黨方面では全く事情を異にして居るのだ。同じ新聞記者でも、政治記者と實業記者＝新聞社會では、確か經濟記者とか云つて居るやうだが＝是れは全然其心懸けが違つて居るんだヨ。少し惡口か知らんが、政治記者の多くは、別けて政黨係りの記者と來ては、皆虛榮心の强い誇大妄想狂許りだ。之れに反して經濟記者は、大概慾の皮の突ッ張つた利己的我利々々主義の亡者共だ。自然經濟記者に對しては、買收が最も近道だが、政治記者に對しては、此近道に出かけると飛だ大失敗を招ぐから駄目だ。

△此外に同じ硬派の政治記者でも、官廳係りの記者、又硬派の中で最も軟派に近い府市政記者、學術方面擔當の記者抔あるが、同じく硬派と云つても、上は内勤の主筆、編輯長より、下は府市政記者に至る迄、平素擔當する方面に依りて、全然其態度、行動、果ては性格迄も違つて居ることを記憶せねば駄目だヨ。一概に新聞記者と云つても、軟派もあれば硬派もある。又相場記者も居れば速記者、繪畫家、寫眞屋もある。社會組織が複雜となるに伴れ、新聞社の内部も却々複雜となつて居るからネ。そんな餘談はどうでも好いとして、然らば本論の記者と政黨との關係を話さう。我輩をし

て一言に此關係を云はせると、醜關係三分の美關係七分といふが至當であらう。

△或る者は相撲、役者に對する樣な、全く利害打算を離れた贔屓關係で、賴まれもせぬに大提灯を持つて步るく。又或る者は他日政界に飛び込む準備行爲として、先輩諸君に恩を賣つて置くのもあるし、單に一種の鄉土關係から、一黨一派に偏倚する樣になるものもある。中にも其多くの連中は、何時の間にか勢力圈內に引き入れられ、自ら知らずに大得意となつて了ふのだ。從つて全くの利害關係、打算上の關係から、終ひに離れ難い醜關係を結んで居るものは、其率から割り出せば、洵に少數と云つて差支ないのだ。此般の心理作用になると、同じ政治記者でも、新聞記者と雜誌記者とは、殆んど沒交涉、否全く別の峯に立つと云つて間違はあるまい。夫れで我輩は政黨と官廳、議員と官吏の斯聞記者に對する、平素の待遇振りを先づ以て話す必要が起るのだ。

政黨記者と官廳記者

（一）

△能く新聞社の幹部連中から聞かされる苦情だが、どうも永く一政黨を受け持たして置くと、其間に種々の情實や弊害が起つて困る。さればとて甲の政黨から乙の政黨へ、其受持を變更して見ると、今度は肝腎の時に成績甚だ不良である。止むなく官廳係りの記者を政黨方面に廻すと、最初の內は別に何等の弊害も認めないが、一二年の間には又々先任者同樣、何々黨は我黨であるといふ風に、確かり其黨員然となつて了ふから驚く。其癖官廳の方に轉ぜしめた、先の政黨熱心家は、何時の間にか冷靜な新聞記者となり澄まし、前に熱狂的態度と冷笑した同僚を、アベコベに少し熱を冷やしてはどうか抔と揶揄する樣になる。何とか此弊害を除くに足る、然るべき妙方法良手段はなからうかと、政黨に居る頃には時々相談を受けたこともあつたが、其度每に夫れは迚も出來ない相談だと、我輩は明らかに斷言したものだヨ。

△少し考へたら判る話だが、元來政黨なるものは絕對

的不生産の團體ぢやないか、利害を度外に置く丈けならまだしも、常に金錢を浪費するが主なる事業の團體である。此の生活難、就職難を訴へて居る世の中に、算盤持つては到底存在を許さぬ、どう考へて見ても一種不可解の怪物ぢやないか。然るに何處をどうして集めて來るものか=と云はぬと政黨の最も極秘にして居る所謂黨費の出處が判るからネ、ハッハ、、=少なからぬ經費を兎も角支辨して、あれ丈け多數の大勢力を擁して居るからには、何か其處に餘程大した甘味がなければならぬのだ。然らば即ち其甘味は何かと云ふと、只一の『熱』である。文字で書き口で云へば『熱』の一字は極めて單純な詰らぬものであるが、此『熱』の作用が人心を機微の間に支配する力は、金力よりも權力よりも、又其他のあらゆる力よりも、確かに熾烈にして且つ永久的であるのだ。

△政治記者の大部分は、所謂血氣に逸り又野心を抱く誠に意勢の好い連中である。第一に年少氣鋭、而して猪突猛進は其通有的性格を爲して居るのだ。何時の間にか此政黨が唯一の大資本とする『熱』に浮かされ、知らず識らずの間に政治家氣取りになるのは、人間として血の氣のある間は、當然踏むべき順序ぢやないか。加ふるに多年人心收攬術にのみ腐心し拔いた、所謂海千山千の老巧なる政治家連が、巧みに其名譽心を煽り、俠氣を搖るに於ては、若い記者先生達の有頂天になるのも、何等の不思議がないぢやないか。若し苟くも政治家を以て任ずる連中にして、若い新聞記者位の者を煽動する魔力がなかつたなら、夫れは根本的に政治家としての無資格者である。第一選擧には落第する、又日々の政治家的生活が出來ない。況して所謂我黨內閣の時代が來ても、大臣、參政官は愚か、秘書官にさへなれぬ男である。精々仕事が出來ても、田舍廻りの應援辯士か、又は懇親會席上の五分間演說に、偶々溜飲を下げる位が關の山の處であるのだ。

（二）

△斯樣な結果からして、政黨記者は何時の間にか、其受持政黨の御用記者になつて了ふのだが、官廳係りの

記者になると、第一に其「熱」がない場所に置かれるのだ。夫れに官界の通弊として、兎角新聞記者を輕蔑する傾きがある。五月蠅い、面倒だ、仕事の邪魔になる、兎もすると秘密を素ッパ抜く。要するに油斷のならぬ邪魔者として扱ふことは確かだ。夫れで一方は飽迄も知らぬ眞似をする、さうされると意地になつても聞き出さねば止まずと努力する、結局感情の疎隔を來たす。斯くて官廳に對し又其官吏に向つて、一種の反感を抱き反抗心を起す樣になるのだが、元を質せば「熱」のないのと、其待遇振りが如何にも厄介者扱ひをするのから始まつて來るのだ。自然に官廳係りの記者連中は、何時も其受持官廳に對しては、一種の反抗的態度を持つ樣になつて了ふのだ。

△一方政黨係りの記者連中は、日一日に先輩後輩又は友人關係を結び、職業を離れた個人交際迄も親密となり行くに引き代へ、官廳係りの記者連中は、益々其關係が隔離して行く。偶々一二官吏の親密なる關係を結ぶものあると、同僚からは野心家と陰口を叩かれ、又官吏服務規律に觸るゝかの如く、上官に密告さるゝといふ有樣、實は其關係を圓滿にせんが爲め、折角努力して見て却つて自分の位置迄も危くなるといふのだから、終ひには他々しく待遇することになる。又新聞記者の方でも、某々局長に誰れが特別懇意だとか、又大臣次官は誰れに限つて、特に能く面會するとか、宛然たる御殿女中式に同業者の行動を注目監視し、果ては何等か醜關係でもあるかの如く吹聽されるので、之れも自己の嫌疑を免るゝ必要上、餘り近づかぬ方針を採ることになる。斯くて官廳係り記者と其官吏とは、結局圓滿に其關係をつけることが出來ぬ樣になる。之れが所謂官僚氣質と政黨員氣質の違ふ處で、自然官僚の言論界に於ける氣受け、一般に不良なる所以であるのだ。

△政黨記者の組織する倶樂部と、官廳係り記者の形造れる倶樂部とが、何か其會議を開く場合に於ても、亦格段の相違がある。政黨記者の方面では、大概の問題は能く歩調を一にして行くことに纏まるが、官廳記者の倶樂部では、屁の樣なことでも議論に花が咲く。さ

うして必ず二派にも三派に意見が分れる。結局統一せる決定を見ずに、有耶無耶の裡に葬られる場合が多い。是れが畢竟するにお互に意志の疏通を缺き、氣を許すとか、意相合するとか、友人關係としても、亦同業者關係としても、其間に少しも親密なる交際のない何よりの證據であるのだ。居は氣を移すとか古人は云つて居るが、同じ若い新聞記者でも、受持方面の異るに依つて、其態度關係に斯程迄非常の相違があるのだから驚くぢやないか。

△之れは同じ政治記者でも、政黨と官廳、其受持方面が違ふので、斯くも非常に相異るに至ることを概論したのだが、扨政黨記者と云つても、其受持政黨に依りては、又色々態度關係が違ふことになる。貴族院方面は暫らく別問題として、單に衆議院丈けでも、憲政會政友會、國民黨、公正會、此四派を受持つ記者が夫々あるのだが、政黨其物の素質が異るが如く、其出入記者團の氣風、行動も從て異つて居るから面白い。勿論此四派の新聞記者待遇振り、世間の所謂操縱方法も、全然其遣方を異にして居るのだが、夫れよりか其黨の氣風が及ぼして居る、一種の感化力の方が、確かに能率に於て多分を占めて居る様に思はれるネ。是れから四派各別の記者系統、而して其操縱振りを概略云つて見やうが、又別に大隈流の操縱振り、官僚系の操縱振り抔も、夫々特色ある事題だヨ。殊に後藤流の操縱振りと來ては、流石に變化式で、寧ろ奇抜無類と云ふ方が相當かも知れぬ。何にせ云へば云ふ程澤山の材料はあるのだが、餘りに微に入り細に渉らずに、單に分類觀丈けをザッと云はうヨ。

憲政會の記者團

(一)

△各政黨政派には、夫々出入記者の倶樂部がある。憲政會には櫻田會、政友會には十日會、國民黨には國民倶樂部、公正會には公正記者會で、表面上の組織は悉く社交倶樂部となつて居る。が併し名實共に社交倶樂部として認むべきものは、櫻田會と公正記者會丈けで、其他の十日會も亦國民倶樂部も、實際は出入記者の倶

樂部といふよりも、其黨派の隷屬記者團と稱するのが相當だらうヨ。其證據には國民倶樂部でも亦十日會でも、其政黨の幹部の意志に背馳した運動には、絶對に參加せぬ習慣になつて居るのだ。加之櫻田會を許して、訓練なき記者團、不統一なる記者團と冷評する處を見ると、彼等は明かに統一あり、節制ある行動を是認して居るのである。要するに政友會と國民黨では、明白なる御用記者團を備つて居るも同樣なのだ。

△此點になると、憲政會には未だ純然たる御家來の記者團がないのだ。世に成金黨の稱ある丈けに、まだ舊家たる政友會、國民黨の樣な＝例令微祿落魄しても、國民黨の看板は確かに古るい暖簾であるのだ＝御家代代の御家來のないのも無理がないのサ。こんな餘分な冷評はどうでも好いとして、憲政會記者團の成立から話すと、彼の憲政擁護運動で慘々な憂き目に會はされた同志會である爲め、無暗矢鱈に出入記者團の御機嫌を取つたものである。或る時は御馳走、又或る時は小使錢、殊に其材料を提供し、新聞記者の便宜を計つたことは、實に至れり盡せりであつた。併し之れは決して誠心誠意を以ての待遇ではなかつた。言はゞ機嫌を取つて彼等を懷柔し、輿論の傾向に一大轉換を計るべく、徹頭徹尾操縱の意味であつた。

△斯樣な遣方であつた爲め、新聞記者團の增長益々甚しく、全體政治の何物たるかさへ解せざるべい〱記者迄、同志會の幹部彼等何者ぞ、我々の助力を得ずんば、天下に政黨として立ち能はざる日陰者共ぢやないかと、陰で空威張りするならまだしも、公然其面前で傲語する樣な狀態であつたのだ。併し幹部は飽迄其機嫌を損ぜざるに力め、其口吻を其儘借りて云へば、徹頭徹尾隱忍を續けたのであつた。何時迄過ぎても効果は少しも見へない。殊に國民黨の分裂當時、眞面目に其分裂を可として、一緒に附いて來た記者連中は、幹部の此腑甲斐なき態度に愛憎をつかし、段々に寄りつかぬ樣になつて了つた。斯くして同志會の記者團は、宛然官廳記者團の如く變化し、是れ政黨記者團としては、實に新記錄なりと評される樣になつた。

（二）

△兎角する間に、櫻田會に屬せざる眞實同志會贔屓の記者團は、實業家連と共に起つて營業税全廢運動を開始し、巧みに國民倶樂部を誘致して協同行動に出で、次いで彼の有名なるシーメンス事件、即ち海軍收賄問題勃發した爲め、從來全くの日蔭者扱ひを受け、東京の中央では、迚も演説會さへ開けなかつた不人氣至極の同志會、俄かに茲に蘇生復活したので、幹部連も夫程出入記者團の御機嫌のみ取らずに濟む身分となつた。其内に幹部の顔觸も代り、組織も次第に出來て來たので、出入記者團の方も、幾分か政黨記者然たる風が見へる樣になつたのだ。今では櫻田會も立派な政黨記者團になつたが、如何せん成立ちが斯樣な順序を經て居るので、急に政友會や國民黨の樣な、純然たる御家來組織とすること出來ず、依然として實質は不統一の狀態を免れぬのだ。

△記者團の要求は、今以て幹部に對する相當の權威を有するので、他の政黨記者團の夫れよりは、確かに上の地位を保持して居ると、櫻田會の連中は威張つて居るらしいが、明かに此一部の事實丈けは認めてやつて好いのサ。併し俗に怖持てといふ事もあるから、彼等が夫れ程信用され信頼されて居ると思へば、夫れは餘りに自惚れ過ぎると笑つてやつて好い。但し幹部としても、其中で是々の人は信用して好い、是々の新聞社員は相當に待遇せねばならぬと、自ら區別を立てゝあるから、其信用を受け又は相當の待遇を與へられて居る連中丈けは、多少自惚れても、萬更ら滑稽な事許りでもあるまいヨ。

△憲政會の記者操縦振りは、今以て材料の提供が其根本方針であるらしい。自然に秘密は時々漏れるが、出入記者團としては、各自の社に對する都合上甚だ結果は良好なのだ。夫れに總務、幹事長以下幹事連は、勉强して新聞記者に面會する、時としては總務室に一團で押しかけて、不作法不遠慮な態度質問を連發する。果ては其答辯に批評を試みる抔、時々我儘勝手な眞似をするが、所謂隱忍主義の幹部は、平氣で之れに應對

して居る。處が是れが又彼等記者團には、一種の御馳走になるのだから面白いぢやないか。僕は今日總務にから云つてやつた、俺は幹事長を捉へてから冷笑してやつた抔、頗る上機嫌で歸つて行くから罪はないのサ。

△此外に無論小使錢を貰ひに行くものもある。夫れとなしに御馳走を要求するものもある。又盆と暮には謎をかける連中もあるが、夫れで操縦の出來る方は、餘り多分でない以上、大概應じて居ること云ふ迄もないのぢや。併し是等の連中は團體を組んで行つても、亦個人として要求しても、極めて微々たる額であるから、總體合して見ても、無論大した金高にはなるまいヨ。此點になると、實業界方面では、一口でも却々大きな奴が來るからネ。但し政黨方面でも、政黨自身が必要で運動させる時は、隨分と思ひ切つた運動費を出すもんだが、夫れは多く記者團の手には入らぬ。大部分は飲食費、車馬賃、印刷物、演説會等に消費され、殘りは壯士や傭人夫共の日當になつて了ふのだ。總じて運動が大規模になれば、記者團は却つて其恩惠に浴する程度が輕減されることになる。此邊の消息は細かく云ふと、色々面白い實際話もあるが、兎に角大運動の起つた時に限つて、記者團は身入りのないものだから不思議だらうぢやないか。

（三）

△以上は殆んど櫻田會を主眼としての話だが、憲政會には外に別格記者團なるものがある。夫れは國民黨時代からの記者團で、幹部から客分扱ひを受け、加藤總裁も特に相當の待遇を與へて居るとか云ふが、皆相當の年輩者で、聊か稽滑だが、自分共では國士氣取りの連中許りだ。從つて秘密な事でも、或る程度迄は必ず打ち明けて聞かせる。又或る時は却つて幹部で諮問することもある。同時に此記者團は幹部に堂々と進言に出かけることもある。幹部として新聞紙を利用する必要があると、先づ此記者團に相談して其手段方法を諮る。又此記者團が聞き込んだ事實は、豫め幹部に諮つて發表方法を協定する。櫻田會記者の樣に、我先きにと拔けがけの功名を焦る樣なことは斷じてしない。幹

部で發表が困るといへば、是等の連中は、社に歸つても何も知らぬ眞似して過ごして居る。社からは時に無能と云はれることがあつても、其處が國士の本領と許り、苦しい處を隱忍して居る場合が多いとの事だヨ。

△憲政會は目下言論界に於て比較的强味あるのは、此連中が一團となり居るのも、確かに大なる理由の一つであるのだ。是等の連中は元々犬養手飼ひの記者と呼ばれ、彼の改革派、非改革派爭ひの當時、皆辨當車代持參で犬養の爲め奮鬪した連中だヨ。記者としては時代遲れの人間も中に弗々見えるが、兎に角主義主張の爲めに忠實な味方で、洵に賴母しい一團だヨ。流石に犬養といふ男は偉らい男だ、一文も呉れずに、貧乏な記者生活をして居る連中から、斯程迄確實な人間を育て上げたかと思ふと、寺内首相でなくとも、確かに政黨界の第一人者と云つて差支ないヨ。夫れが憲政擁護運動の爲め、大半同志會側に加擔する樣になつたことを思ふと、一時は憲政の神と呼ばれても、今では非常の損失と思つて居るに相違なからうヨ。

△只氣の毒なのは是等の別格記者團の待遇である。元元犬養手飼ひの連中であつた丈けに、小使錢の要求も出來ず、又幹部としても、今更ら物質上の待遇を云爲する譯にも行かず、飽迄同志扱ひの淸潔な關係であるから、内實は甚だ窮々で居る癖に、獨り自ら高しと何處迄も瘠我慢を續けて居る。當世記者氣質から云へば、如何にも馬鹿正直な時代遲れの鈍物揃と云はるゝのも當然で、聊か骨董氣質の嫌ひもあるが、一方から見ると、昔の記者氣質を當代に保存する、一種尊重すべき團體と云ふべきである。實は出來る事なら、セメては政治記者丈けでも、此氣風を存續せしめて、新聞社會の刷新復舊を熱望するのであるが、恐らく是等の希望は全くの空想で、此記者團が最後の團體であらうヨ。

政友會の記者團

（一）

△前にも云ふ通り、十日會は純然たる政友會の御家來である。一言一行悉く幹部の意志に依りて動くと云つても差支ひないのだ。其代り「熱」は却々に高い。丁度

出羽ノ海に對する常陸山會、太刀山に對する太刀山會の如きもので、某々新聞が政友會の惡口を書いたとか、又誰某があの記事に惡意の筆を振つたとか、一々八釜敷其會員の行動を非難攻擊する。果ては他人の記事迄、其新聞にあるといふので、會員たる同社員を罵る程、政友會に對しては忠實な團體であるのだ。一言にして云へば、新聞記者團でなく、純然たる院外團である。例へば報知新聞記者は、反對新聞社員であるが爲め、其會員名簿を削除するとか、又某々新聞は近頃政友會を攻擊すると痛烈なるが故に、改悛の狀現はるる迄は、當分の間其出入を禁止するとか、實に驚くべき制裁力、拘束力を持つた出入記者團であるのだ。

△元來政友會といふ政黨は、甚しく『熱度』の高い處で、下手に幹部を罵り黨を批評すると、忽ち三多摩壯士の鐵拳に見舞はるゝ處だが、自然に此氣風を受けた十日會も、矢張り同樣に『熱』が何時も九十度以上であるから怖いヨ。併し之れには又相當の歷史あり理由あるのだから、一概に野蠻的不法漢揃とのみ侮辱することも實は酷だヨ。元來政友會の成立ちから考へて見るが好い、理窟知らずの血氣盛りな壯者が集つて出來た自由黨の嫡流ぢやないか。改進黨の樣にハイカラ理窟を知つたり、橫文字の讀める者は、先づ絕無と云つて差支なかつた自由黨の子孫だもの、大正の御代になつても、偶には暴行の一度位やつたとて、夫れ程咎める譯にも行くまいぢやないか。是れ位の事は先づ大目に見て置く方が良からうヨ。

△元來が新聞社會に極めて微力な自由黨、次いで政界の墮落史を、一手專賣で編しつゝ今日に及んだ憲政黨——政友會、新聞社會の攻擊の標的にされるのも當然の事だ。從つて政友會としても、新聞は我黨の大敵なりと、憎惡の感情一層嵩まるのは自然の結果ぢやないか。斯くて新聞其物を大體に於て『敵なり』と斷定してかゝつた。是れは故星亨以來、特に顯著に決定された政友會の大方針であるのだ。此大方針に於て一般新聞社會に臨むのであるから、益々新聞の同情から遠ざかるのも亦自然の成行だヨ。是に於て政友會は、一種

獨特の新聞記者操縱法を案出せねばならぬ窮地に陷つたのである。止むなく星一流の買收と結束、之れを出入新聞記者團に施すべく準備したのであつた。が併し當時は今日の如く、各社必ず各政黨政派に受持記者を派出する程、新聞社の組織は完全して居なかつたのだ、黨派に偏した新聞社は、大概反對黨に記者をやらない、多くは通信社から廻はして來る材料を、特に惡意を持つて取り扱ふ位の事で、夫れは又其社是に叶つたものであつた。只資本の豐富なる、又社員の多數を擁する、稍も中立標榜の新聞社のみ、各政黨政派に受持記者を出したものである。

(二)

△斯樣の狀態であるから、星の大方針も大した功果はなかつた。どうせ毎日出入する記者の多數は、皆自黨の諂諛者許りで、何も買收や懷柔する必要のない連中のみ。偶まに來るか又毎日顏出す中立新聞の記者でも、當時の連中は、夫程直ちに買收に應ずる樣な、人格皆無の記者ではなかつた。何時の間にか各社より夫々受持記者が來る樣になり、茲に漸く星時代の大方針を貫行する必要が生じて來たが、夫れでも不人氣な政黨丈けに、却々懷柔買收が面倒であつたとの話だ。兎角する間に四五目星しい連中に手がついた、是れを基礎として盛んに黄金力を振り舞はし、終ひには幾何人かの除外例者を除く大多數の記者連を擒にし得たので、結局十日會なる記者團が組織されることゝなつた。其永年の苦心慘憺たる有樣は、迚も憲政會の同志會時代に苦しんだ經驗の樣に、稍く短日月で且つ簡單なものではないヨ。

△此醜關係が基礎を爲して出來た十日會であるから、幹部對記者の關係も、亦自然に御家來然たる狀態に陷るのは止むなき話で、何も意氣相投合したとか、又先輩として尊敬して居るとか、何等そんな美しき間柄ではないのだ。が併し元來が『熱』の最も高い政黨である、夫れに個人關係として一旦結べば、如何に其最初の關係が臭くとも、末には眞底から親和し懇意になれる性格の政治家が割合に多い。一言にして云へば、個

人として交際するのに、最も氣持ちの好い政治家を多く包容して居るのだ、是れが自由黨系の美點長所で、流石に意氣を以て相許し、氣慨を以て相結んだ、所謂自由黨魂が今以て殘存して居るのだから嬉しいのサ。

△此點になると改進黨系の政治家は全く駄目だヨ、元元理窟で集つた、獨り天狗の寄合だから、他人の脚を折つても、自分が先に進みたい利己的の人物許りで、個人としての交際に些の温情滋味もないのだヨ。夫れだから見玉へ、改進黨系の名士は皆悧巧で、相當産を爲して居るものもあるが、自由黨系の連中の様に、お互に相助けて、死なば諸共と眞に赤誠を披攊して、救助し合ふ様な美談がないぢやないか。或ひは政治家としての智能人格乃至手腕力量に於て、政友會の多數は低級であるかも知れぬ、が併し相互間に眞實一點の温情相許し相通ずるの、人間としての最も美しき或る物に至つては、迚も政友會政治家の多數が持つて居る様なものは、他の各派政治家に於て、決して比較し得べき多數の分量を發見する譯には行かぬのだ。

△から云ふ個人として好感を與へる素質がある上に、更らに金力の勢ひを利用するのであるから、一度結んだ個人的の關係は容易に離れない。元來が意見や主義の一致から來た關係でなく、其力は全然盲從を覺悟しての上の事であるから、如何に變說改論しやうが夫れ相當に理由をつけて追從して行くのは豫定の方針なのだ。斯くて根蒂に培つた十日會である爲め、其事實强固な程度に至つては、他の何黨派の記者團よりも遙かに强いのだ。夫れに其關係が一方幹部として、記者團其物に對する總括的關係でなく、政治家個人と記者個人の直接關係となつて居るので、殆んど膠着的の密接關係を爲して居る、全くの親分乾兒關係なのだ。そして之れが集つて記者團を形成して居るのだから、却々離れッこはないぢやないか。丁度政友會は地方團體を基礎として、宛も聯邦組織になつて居る様に、記者團も一種の聯邦組織をなして居るのだ。此點は他の政黨の様に中央集權でない處が、即ち政友會の根强い點で、十日會の結束固いのも、要するに此根本組織が

出來て居るからだョ。

（三）

△政友會は十七年間、政府與黨たり又自黨内閣の順境に許り居たので、金錢に不自由する樣な苦痛は知らなかつた。從つて記者操縱にも多分の經費を支出し得たのだが。一方記者團の方でも、身分不相應の贅澤をやつたものである。毎晩茶屋酒を飮む、果ては待合に沈沒する、月に四五度は行衞不明の遠出と洒落れ込む。斯くて全く其身を持ち崩す樣になつて了つた。其内に新聞社の方の首尾は惡るくなる、他の記者團からは種種の惡評を立てられる、終ひには毒皿主義を發揮して政友會一流の利權運動に奔走沒頭する樣になつたから最後なのサ。次第々々に社の方は放逐されるし、記者社會からは札附者として指彈される、かう惡評喧傳しては、他社に入らうとしても却々に入れて呉れず、結局は沒落の境涯に沈んで了つたものも少なくはないんだョ。

△丁度其頃は政友會の久し振りで政權から離れた時代で、宛も盲龜は縋るべき浮木さへ見當らぬ慘狀、政友會も亦俄かに貧乏世帶となつたので、急に世間を悲觀するが如き態度心情、實に慘めとも何とも云へぬのは二三年前に於ける十日會の重立つ連中の境遇であつたヨ。併し翻つて考へれば、悉く之れ身から出た錆で、誰れを怨まう術もないのだが、元を質せば皆幹部から仕向けての出來事、之れが癖になつた記者團も勿論惡るいには相違ないが、抑々誘惑した責任の存在になると、確かに政友會幹部にあるのだから、我輩に云はせると、記者の自墮落は三分の原因で、殘る七分は全く政友會幹部の負擔せねば相濟まぬ事だ。

△斯くて時代は遷つた、即ち現在の十日會となつたのだが、大部分の新陳代謝に依りて、會風は以前と餘程變つて來たやうに見えるヨ。まだ舊時代の遺物が相當に殘つて居て、隱然として其首領顏して居る爲め、全然此醜關係は絶滅したとは云へぬが、確かに新らしい若い記者連に依りて、一種の新傾向が生れて來て居るのは明かだ、一つには前車の覆轍を踏まぬ警戒的態度

もあらうが、他面には相當の覺醒的氣分を帶びつゝあること、元より疑ふべき餘地がない。現に舊時代の遺物連中が、今でも待合や料理屋の勘定書を幹部に持つて行くので、我々記者團の顔に泥塗るものだ抔、時々憤慨する聲を聞くとの事だが。斯くの如き聲の出るのは、十日會としては、内部に大々的刷新の行はれた何よりの證據で、若し二三年前こんな事でも云ふものがあると、忽ち仲間から除物扱ひを受けるは勿論、果ては新聞の材料さへも、完全に聽き取ることが出來なかつたもんだヨ。能く世間では人間にするには苦勞させなければ駄目だ抔と云ふが、我輩は十日會の此傾向を聞いて、政黨も矢張り逆境黨の辛苦を嘗めぬと、眞の刷新肅淸は出來んものだと思ふたヨ、政友會としては實に好い藥だ、若し出來ることならモウ二三年此儘にして置いて、眞底からの覺醒に導かなければ嘘だ。

國民黨記者團

(一)

△手兵僅かに二十餘騎、夫れも精鋭ではない全くの雜兵許り率ゐて居る癖に、縱横の機略、隱顯出沒端倪すべからざる兵法の奥義を心得、巧みに敵の大軍を惱ます政黨界の達人、之れを古人に譬ふれば源九郎義經は、今の政治界に於て犬養木堂君だヨ。其犬養君だから新聞記者の操縱抔は、全く朝飯前の仕事サ。犬養君の遣方はモウ操縱を通り越して、事實上忠僕として了ふのだ。さらば幾何か手當雜用でも呉れるかといふに、そんなことは先づ絶對にないネ。恐らく御馳走も碌々したことはなからうヨ。ソウソ、何でも議會の初めと終りに松本樓か偕樂園位の處を御馳走するとか聞いたヨ、夫れにモウ一度櫻咲く頃、馬場下の邸内で一日の淸遊を振舞ふとか云ふが、マア年に三度は御馳走する譯だネ。此以外には全く晝飯も食はせることはあるまいヨ。

△然るに見玉へ、犬養君の旅行する時には、二三所謂お手飼記者の見送り出迎へは乾度ある。加藤子はイクラ大政黨の黨首でも、亦原君が如何に大きな顔して居ても、此點になると全く及ばざる遠しで、誰れ一人新

開記者の見送り出迎へ杯あつた例がない。何でも憲政會の特別記者團が、犬養君に許り此人氣を負はせるのは癪だと云ふので、近頃加藤子の旅行する時には、誰れか停車場迄行かうぢやないかと話し合つて居るとか云ふが、實行したのかどうか、まだ事實に現はれたことは聞かんヨ。原君に對しては第一から憤りを發するものさへなからう。此點になると誰れが何と云つても、犬養君は新聞記者操縦術の達人名人サ。

△其秘訣は何だと云ふのか、君も隨分判りの惡るい男だネ。新聞記者を同志扱ひにする事だヨ。ソウして彼等血の氣のある壯者の心を奪つて了ふ丈けの事サ。天下の名士木堂とも云はるゝ人から、一介無名の書生たる新聞記者が、忽ち政友扱ひを受けることになると、彼等名譽心の盛なる連中は、何時の間にか有頂天になつて了ふのは當然だらうぢやないか。其處が犬養君の秘訣で、國民黨本部に二三ヶ月行つて居る間に、何時とはなしにチャンと其記者を忠僕に感化して了ふ魔力は、確かに持つて居るヨ。其處になると加藤子の如き理屈ぽい男は、先づ出來ん相談だネ。況して原君の樣な大俗主義の人は、迚も足場から違つて居るから駄目だヨ。詮ずる處是れは犬養君の天禀で、他の黨首共は到底眞似の出來ん藝當サ。

(二)

△曾て憲政本黨時代に、改革派非改革派と分れ、火花を散らして大喧嘩をやつたことがあらう。あの時の喧嘩は實は兩派共に五分々々の云分であつたヨ、處が新聞では犬養君のみ清節を守る高き政治家である如く書き立て、大石君以下改革派の連中は、丸で官僚に降參せんとする變節漢揃の樣に貶なして了つたもんだ。詰まり犬養君の方の非改革派が勝つたのは、此新聞記者操縦術に巧妙を極めた爲めで、外に何の優つた主義主張の勝を制したのでも何でもなかつたのサ。あの時の非改革派記者團と來たら、全く水火尙ほ辭せざる勢ひで、若し新聞社の幹部が苦情がましいことでも云ふと、何時でも退社を命じて呉れ、我々は主義の爲めに奮闘して居るんだと許りに、迚も手がつけられぬ鼻息であつ

たョ。兎に角貧乏ピイ〱風車の記者連中が、手辨當で働きながら、其生活の根據たる新聞社に對して、此大決心を臆面もなく告白する丈けに、熱度を上げさせた犬養君の腕前は、全く他人の迚ゃ眞似が出來ぬ藝當だョ。

△憲政擁護運動の時も亦同樣で、隨分自腹を切つた記者連中もあつたが、一方政友會記者團が一緒に働いて居るので、時々は內部に面白くない暗鬪があつたョ。夫れも其筈サ、國民黨記者團は萬事此流義で奮鬪して居る、眞實御大將の爲め馬前に討死する覺悟で眞劍勝負をやつて居るのに、他の政友會記者團は皆幾何かのお手當を頂戴して居る始末だから、イクラ眞面目な連中でも、癪に障るのは全く人情だョ。併し此不平を少しも外間に漏らさず、一寸も運動を弛めさせなかつた犬養君の腕前は、流石に新聞記者操縱術にかけては手に入つたものサ。只惜しいことには、此憲政擁護運動の結果、非改革派騷ぎ以來、訓練に訓練を重ねた、所謂犬養手飼ひの記者の大半を失つたのは、何と云つても多大の損失だョ。粒選りの連中は多く同志會の方に走つて了つた、殘るは多く新附の兵卒で、將校格下士格の者は極めて少數になつて了つた。犬養君如何に負惜みが強くとも、此事丈けは確かに非常の打擊だョ。

（三）

△其後營業稅全廢運動で、殘つた目星しい記者連を取られ、引き續き大隈內閣成立で、又々有力者を浚はれて了つたから、今現に殘存するものはホンの二三人、其他は大概西も東も判らぬ連中のみで、其內容の貧弱なる程度は、丁度現在の國民黨同樣だが、併し氣風は以前と少しの變りもないョ。少し褒め過ぎる言葉か知らんが、清節自ら高しとする連中で、其熱烈單純、御大將の馬前に討死することを名譽と心得て居ることは、今も往時も何等變つた傾向を見出さぬから驚くョ。何と云つても金を吳れたり、御馳走したりして集めた手合ひは、集つて居る記者團本人の方で、イクラか疚しい氣のするのは當然だ。從つて時には人前で大きな口を叩くことの、聊か氣恥しい遠慮氣の出るのも無理

がないのサ。然るに國民黨の方には全く夫れがない、自然何時如何なる場所でも、自信を臆面もなく披瀝するに於て、少しも勇氣を挫かれる虞れがない。只傍で見聞きして居ると、其脱線振りが如何にも可笑しい位のもので、云ふ本人は一向無頓着、大の眞面目であるから實際力があるのだ。

△政友會では、國民黨を目して紙上の大政黨と蔭で冷笑して居るが、如何に口惜しくとも、政友會は紙上の大政黨となる譯に行かんのだから情けないぢやないか。現に憲政會記者團の一人はかう云つて居た。『犬養さんには隨分酷く使はれたもんだが、併し使はれ心地が確かに好かつた、全く痒い處に手が届く様な使ひ方であつた。憲政會の方は酷使しやうとはしないが、却つて氣持ちが餘り好くない。其癖御馳走にしろ、又幹部の待遇振りにしろ、我々に對し相當の敬意を拂つて居るのに、何だか意氣がチャンと合致した様な心持ちになれない。自分でも不思議だと思ふが、事實だから仕方がない。何と云つても新聞記者を使ふことは、犬養さんが第一です。』何よりの證據、此一言は確かに犬養君の操縦術凡ならざることを、明かに物語つて居るぢやないか。

△只玆に一ツの邪魔物が居るのだ。甚だ突然の云ひ草で一寸判り難いかも知らんが、此新聞記者操縦術にかけては、天下第一人と許さるゝ犬養君の膝下に、兎もすると記者團を憤慨させる一階級があるから困るのサ。是等の連中とて不利益位は知らぬでもないが、何を云ふにも國民黨、即ち犬養黨であるから、何かにつけ御大將のお覺え芽出度ならなければ、自己存立の立場がなくなるのだ。此意味からして『新聞記者は私の方で然るべくやつて居ますから……』と、一廉の手柄を御大將の目に入れたいのは無理もない事サ。處が記者團の方では却々承知しない、『何だと、幹事抔に使はれてたまるものか、我々は犬養先生の直屬である、代議士でも幹事でも、同志たり政友たる點に於て、我々と何處が違ふのだ』と許りに偉い見識、時々此問題が内部で八釜しくなり、果ては某々幹事排斥の決議を斷

らして、古島一雄邊に取次ぎを迫ることは珍らしくないのだ。其他にも院外團邊に、隨分と記者團から嫌はれ拔いて居る手合ひが居る、何でも是等の連中に對しては、例令本部で會つても、物を云はぬ申合せ抔したこともあつた樣だヨ。何にせよ俗に云ふ固まり法華で、只木堂宗といふ一種の宗教的觀念から、國民黨に歸依して居るのだから、他の政黨の記者團とは違つて、總ての行動が皆直情徑行的だヨ、否な全くの感情だヨ。好きな人に對しては、吐いた唾迄何とか理屈をつけて奇麗にしやうとするが、一旦厭な人と相場が極まると、例令好い事をしても、何か缺點を搜して貶なさうとする風がある。此點になると全く感情的發作で、寧ろ一種の宗教記者團と云ふのが相當に思はれるネ。

公正會記者團

△中正會時代には、幾分か出入記者團の氣風らしいものもあつたが、公正會となつてからは、全く雜駁なものとなつたらしいヨ。夫れに議會のある間の外は、別に人も集つて來ない團體、平生新聞の材料もあるでなし、事務所に行つても事務員が欠伸して居る位のものだから、新聞社の方でも大概は專任記者を置いて居ない、多く兼任者で間に合はして居るヨ。從つて眞面目な人も來れば、甚だ以て怪しからん奴も出入するといふ風で、一と纏めにして何のかのと評する譯には行かんのだ。只此記者團として、近頃政治的活動らしいことをやつたのは、彼の三派合同問題に對する贊成、反對兩派の對立であつた。頭數から云へば贊成派の方は確かに多かつたが、反對派の方には若い働き手が揃つて居たのだ。夫れに勢力ある大新聞を代表する連中が多く反對派であつたから、反對派如何にも優勢に見えたが、是れも事實は正反對で、到頭憲政會なるものは成立して了つた。大新聞が揃も揃つて大味噌をつけた抔は、新聞の信用問題を論議する上に於て、近頃以て好個の材料ぢやないか。

△何でも傳へ聞く處によると、反對派には軍資金が豐かであつたらしい。雜用の供給も饗應の連發も、果ては電報料、車代等、却々潤澤であつたらしいが、合同

派は文なし揃で、此戰になると最初から降參する外に道がない手合ひ許り、イクラ癪に障つてもない袖は振られず、只徒らに憤慨許りして居たとの事だヨ。當時合同派の記者連中が、反對派の記者連中を評して、何千圓で買收されたとか、又月々何程の手當小遣を貰つて居るとか、隨分思ひ切つて惡評を流布したものだが是れは少し酷評だらうヨ。夫れは中にそんな人もあつたに相違ない、が併し皆が皆揃つて夫れだとはどうしても思はれんネ。運動費として幾何か受取り、飲食を無制限にやつた位の事は、夫れはあつたらうサ。又時時不見轉を買つた程度の醜聞もあつたらうが、是れ位の事は新聞記者の政治運動に參加する時には、大概附物といつて差支へないのだ。こんな事の絶對にないのは、先づ國民黨記者團位のもので、他の政黨政派には總て附物と云つて良からう、只其程度が多いか少ないか、烈しいか愼むかゞ問題になる丈けで、事は絶對に有無の問題でないのだ。

▲又反對派の記者連中に對しては、こんな惡評も立つた様だが、要するに之れも亦大した問題ではないサ。即ち「合同されて了ふと自分共の受持場所がなくなる、社員としては勢力範圍を減ずることになるから、其防衛の意味で反對したのもある。丁度毎日集まる酒場が閉店されては、新らしく開拓する迄に却々時間と費用がかゝる、何とか閉店させまいぢやないかと、常連の奔走するも同樣だ」抔と、頗る皮肉つた積りで評したのであらうが、是れこそ當然の人情ぢやないか。若し此意味から反對したものとすると、我輩は寧ろ當然の行爲だと斷定するに吝かならずだネ。何にしても此問題は一時的の話で、其記者團氣質とか、又は氣質傾向とか云ふべき問題に迄はなり得んのだ。が但し公正會は富豪揃の倶樂部であるから、他の政黨政派に比して、御馳走の續くことは夥しいものだヨ。今日は誰明晩は某、其翌夜は又誰れと、丸持ちの代議士連、我れ劣らずと、競爭で記者連中の御機嫌をとる。夫れだから政治上無力に近い公正會でも、饗應にかけては最も有力な團體であるのサ。

大隈系記者の勢力

△大隈内閣時代には、新聞を買收したとか、又輿論の軟化に成功したとか、天下の耳目を蔽ふて居るとか、反對黨の政友會では無暗に騒ぎ立て、昔から氣の知れないで通つた、麻布邊にでも住んで居そうなへボ雜誌の記者共が、之れに附和雷同して頻りに非難攻撃したものだが。焉んぞ知らん大隈侯の政治家としての唯一の財産は、新聞であることを知らん盲目者流の言だから可笑しいのサ。大隈侯から新聞紙上の人氣勢力を奪つたら、何があの人に公人として存立する立場があるのだ。あの老人の出鱈目で無責任で猫の眼玉の様に意見の變ることは、世間具眼者ならずとも、大概の者は之を知了して居る處だヨ。然るに朝に在ると野に在るとに論なく、巧みに新聞雜誌を利用して、自己の意見を發表する處が、あの老人の政治界に得難き人氣爺さんとして、持て囃さるゝ最大原因たることを知らんのか。

△夫れに第一早稻田大學の卒業生は、東京専門學校時代から、何方面に最も多く供給されて居ると思ふか。如何なる新聞社でも、政友會の機關紙たる中央新聞でさへ、其幹部の内には早稻田出身の人が居るといふぢやないか。こんな風に都鄙を通じて、新聞社會に於ける早稻田系の大勢力は、丁度實業界に於ける三田系の大勢力と拮抗するに足るものがあるのだ。殊に反對黨は新聞社會に於て、殆んど共通の敵として不人氣此上なき政友會である。政友會を正面の敵とすれば、官僚系でさへ、新聞操縱には頗る便利であると云はるゝ程の嫌はれ者、即ち新聞社會の『總スカン』を向ふに廻しての立場であるから、新聞社會が擧げて大隈内閣を謳歌するのも當然の結果ぢやないか。大隈侯が出たといふ丈けでも、新聞社會では、何だか自分共の畑から總理大臣が出た樣な氣になるのだ。夫れが海軍收賄事件といふ、日本人には最も頭腦に入り易い醜問題で山本内閣が倒れ、搗て加へて政友會が、其政府黨として共倒れした後を受けた新内閣である。例令大隈侯の樣な人氣爺さんでなくとも、新聞社會の形勢一時穩和に

傾くのは當然の順序にあるのだ。

△斯樣な大體の空氣をも察せずに、やれ大隈内閣が新聞を買收したとか、言論社會を軟化したとか、如何にも大金でも擲つてやつた樣に吹聽するのは、實は片腹痛い事だヨ。爾も夫れが政友會側から出る吹聽流說だから、話は益々面白くなるのサ。成る程地位を代へて政友會の身になつて見れば、あれ程の人氣を買ふには如何程の大金を散じたのか、殆んど見當がつかんことになるのは至當だヨ。我輩も其推察見解は決して無理とは思はん、が事實は全く正反對であるから仕方ないのサ。大隈侯は平素から大風呂敷を以て有名な老人、年中御客を招いで御馳走許りして居る人だが、總理大臣の現職に就いて以來は一層頻繁になつた、否な寧ろ連日連夜の饗應と云つても差支ひない位に連續したのだ。自然と其間に新聞記者の多數を、爾も幾度も招待することになつたのは事實だヨ。此表面上の事實から見れば、御馳走政略は確かに御馳走政略に相違ないが、併し特に新聞記者にのみ御馳走政略を使つた譯ではないのだ。詰まり萬遍なく一律一體社會の各階級に向つて、大隈一流の御馳走政略を行つたのに過ぎんのサ。單に新聞記者や新聞社に使つた金になると、官僚内閣よりも、亦政友會内閣よりは殊に一層、其總額に於て少ないことを、我輩は保障して敢えて憚らんネ。

△大隈内閣の新聞買收一件は、我輩の知り得る範圍では、どうしても信ずることが出來んのだ。併し寡聞之を知らざるの高言かも知れぬから、些少なりとも信憑すべき事實又は材料あらば、敢て教えを乞ひ其蒙を啓きたいとは思つて居る。

官僚系の記者待遇振り

△一口に官僚と云つても、種々の人物があり、又其内閣に依つて、新聞記者に對する待遇振りを異にすること勿論だが、強ひて其共通點とも云ふべきものを求めると、内心では厄介至極、不埒千萬な手合だと嫌忌するのは、大體其一般的傾向らしいヨ。だがネ、之れは一般的新聞記者に對しての觀念で、他面には必ずお出入りの記者を一二人位宛持つて居るのサ。彼等の眼中

には高等幇間の積りで扱つて居るのだ、先づ體裁の好い男小間使格に待遇して居るのサ。無論出入する連中も其積りで伺候するし、周圍の人間も其心持で待遇して居るのヨ。其代り何かと落ち零れがあつて、大部人の知らぬ役得はあるんだ。要するにかう云ふ連中は、何か利用してやらうといふのが主眼で、丁度主人持の心得で隷屬して居るのだョ。從つて何があつても御無理御尤もと仰せを奉ずるのが役目で、先づ支那で云へば閑人、朝鮮で云へば雑輩見る様なものサ。風説謠言を捏造流布し、又御殿女中式に陷構排擠を始終巧んで居るが、之れが又新聞の面白い材料にもなり、世間の噂さの種ともなるので、全く無根の事實が往々にしてありし事實の如く信ぜられ、果ては既定の問題となり、飛んでもない誤解を招く基となることが隨分と澤山あるのだから驚くョ。

△元來官僚系の人々の頭は、新聞記者其物の人格職業を認めないのだ。併し之れを使ふと使はぬとに依つては、非常の利害が異なるといふ打算的觀念から、一旦緩急ある際は、隨分思ひ切つた使ひ方をしやうとする。だが通常緣故が極めて薄い爲め、却々急場の間に合はない、止むなく金力で買收をせなければならん羽目に陷るのだ。かう云ふ際には平素のお出入記者の手では、ものゝ五人と纒まらない。ナゼかと云ふにお出入記者は、新聞記者仲間では常々札附者として、全然別種の待遇を受けて居る。普通の政治記者の仲間では、是等の連中と齡することを肯んぜぬ手合が多數なのだ。其處で隱れたるボスを使ふことになるのだが、此ボス先生は常に友人關係や其他の緣故を利用して、或る程度迄自分の自由になる十人乃至七八人の秘密記者團を持つて居る。當局者になると警察といふ捜索機關があり、殊に官僚系の政治家は、自己存在の必要と、平素此秘密結社に特に注意を拂つて居るのだから、能くボスと其仲間を承知して居る。又ボスの方でも、何時か大儲けする資本であるから、平生は自腹を切つて其關係を繼續して置く、困つた時には補助をする、浪人すれば何とか口を見つけてやる、急に物入りがあれば異身に

なつて世話をする、夫れは〳〵實に至れり盡せりだものサ。

△處で愈々ボス先生、其筋からの依賴が來ると、最初の間は却々高く止まつて應じない、賴む方では早急の場合だから非常に焦る、結局非常に高い値段で請負事業となるのだが。ボスの方から云へば、其時になつても左程の費用をかける必要がない、平生培養してある畑を苅り取るのだから、只收穫する丈けの手數と、僅か許りの經費を要する丈けの事だ。ボス先生の常々切つてある自腹は茲で始めて銷却され、又利殖される譯だが、此點になると、官僚系の政治家は實に愚の骨頂だヨ。何でも其時限りで、一旦用事が濟むと、請負事業の引渡し濟みといふ態度で、其後の關係は絕えて繼續しない。夫れだからイクラ大金を抛つても、只の一遍限りで跡はお互に全くの他人行儀、丁度臨時雇を解いた積りで居るのサ。サウして後々迄關係をつけると、實は五月蠅くて困りものだと、餘程悧巧な遣方の樣に心得て居るから片腹痛いヨ。其點になると政黨員の方は、流石に苦勞人サ、常々から知人待遇でチャンと關係を繫いで居る。官僚系政治家の遣方は、何時でも臨時雇が出來るものと心得て居るから、使はれる方でも其積りでかゝる。第一金のかゝることが夥しい、第二に周章狼狽する丈けでも、何程心身を痛めるか、其損失の程度は大したもんだヨ。

△或る新聞記者はかう云つて憤慨したことがあるヨ。『賴む時は電報、電話、果ては懇夫迄よこして、丸で火のついた樣な焦り方をする、行くと下にも置かぬ待遇をして置きながら、一旦用濟みとなると、用事があつて面會を求めても却々會つても吳れない、今日は都合が惡るい、明日は官用で閑がないと云ふ。偶々會つて吳れても、何時か賴んだ事杯は全く忘れて了つた態度で、遺憾なく官僚式を發揮した揚句の果ては、何事を賴んでもフヽンと挨拶する許り、單に他人行儀ならまだしも、早く歸つて吳れと云はぬ許りの、丸で厄介人扱ひだヨ。餘り癪に障つたから、少々痰苛を切つて歸つたが、彼等は元來我々の人格を認めんのだから、

今後はイクラ鄭重に頼まれても、モウ金力では應じない決心を極めた……』官僚系政治家の遣方は、大概皆此流儀だヨ。夫れにお味方する場合にも、絶對の辯護援助でなければ承知しない、多少非貶した點でもあると、夫れは〱御機嫌の惡るいこと夥しいものだ、七分三分の兼合ひで、巧みに辯護援助することが、實際は一番世間に有功である呼吸を知らんのだ。絶對に褒めることが、却つて世間の反感を買ひ、贔屓の引き倒しになることを知らんのだから馬鹿だヨ。誰れが眞面目になつて、腋臭の臭氣迄香水の薫りと褒める奴があるものか。官僚系政治家の事務に通ぜざること、多くは此類だからお話にならんのサ。

後藤男の記者操縦振り

△表面一寸大隈侯に似て、其實全然反對なのは後藤男の記者操縦振りだヨ。誰れにでも好んで面會する、無責任、脫線、高談放言、相手を烟に捲くことは大隈流だが、下手なことには直ぐ金を呉れることを仄めかす。面白い話を聞いて、人間としても愉快な政治家で、十分と好感を抱いて居る矢先に、金迄呉れそうだから、こんな甘い事はない。行く者〱皆一樣に隨喜の涙を流して歸るのは當然サ。處が愈々といふ場合になると却々以て出さない。夫れも其筈だ、行く者〱皆に多少宛でも出さうものなら、三菱、三井の資産を持つてしても、迚も支出困難なのは云はずと明らかな事ぢやないか。元々本氣になつて貰ふと思ふ奴も馬鹿の骨頂だが、行く者〱に金を出す樣な顏付をするのは、後藤男自身も隨分と詰らん人だネ。出す樣な顏付して出さぬ、結果は人を馬鹿にしたと怒るのは當然で、何も此方から頼んだ譯でもないのに、先方から云ひ出して人を釣りにかゝつたと、惡意に解釋するのは、怒る方に十分理由があるヨ。夫れで若しも永く出入が續く者であると、あれは乾度貰つて居るんだらうと人の噂さに上る。甲云ひて乙傳へて丙になると、モウ貰つて居ると、誰れか現場を見屆けて來た事になつて了ふのだ。

△後藤男手飼ひの記者と云はるゝ連中は、多く札附者であり、又仲間では除け者にされて居る手合だから、て

んな惡評も或る程度迄は止むを得ないが、併し全然皆夫れだとは少々氣の毒な人がある、中には眞面目に男を後援して居る立派な人もあるヨ。只大多數は鷄鳴狗盜の輩で、記者か利權屋か判らん手合が頻繁に出入するのだから、如何にも不評判の中心點となるのも無理がないのサ。少し此種類を區別し、差別待遇を與へることにすると、心から男を信仰して居る若い記者連も實際はあるのだがネ。是等の連中は實は玉石同架の待遇を受け、世間から札附者にされるのが厭で行かんのだヨ、男には是れが判らんから情けないもんサ。

△併し何と云つても、玆處に出入する手合が一番利得になるのは爭はれんヨ。今は時めく内務大臣だから無論だが、浪人時代でも却々能く世話は行き屆いて居る樣だ、丁度國民黨記者團と正反對の境遇にあらうヨ。一方は多少に拘らず年中身入りがあるし、他方は年が年中收入皆無、只自負心を煽られて得意になつて居る丈けの事で、懷具合から行けば、最も割の惡るいのは國民黨記者團、一番に割得なのは後藤組であらうヨ。是れは衆評一致する處で、我輩も先づ同感を表するに吝かならんネ。

△終ひ〱調子に乘り過ぎて、餘り長く喋つたヨ。洵に御退屈樣だつたネ。ナニ大變面白かつたと、君も却却人を煽動することは甘いネ、老猾と云ひたいが、年はまだ若いから若猾とでも云はうか、ハハツハヽヽ。

夏目漱石氏の俳句

荻原井泉水

夏目漱石氏が小説に筆を染められたのは中年以後である。その以前に於ける氏の創作と云へば俳句が其で

あつた。而して俳句でも立派に一家を成してゐたのだが、後年小說の方で聲名が揚がると共に、世間では氏が俳句を作つてゐた頃の事などは顧みなかつた。此點は井原西鶴に似てゐる。西鶴は青年時代から壯年時代にかけてのエナージーを專ら俳句に注入した。當時の俳壇一方の驍將であつたのだが四十に近くなつて小說に手を付け、而して僅か十年程の間にあれだけの作品を殘して、五十の聲を聞くと病歿したのであつた。今日に到つても西鶴の小說には不朽の物があるけれども、西鶴の俳句は餘り感心出來ない。その俳句に彼が青春の製作慾を滿たしてゐたのかと思ふと、やゝ不思議の感じもする。夏目漱石氏の俳句も、氏が後年に發表した創作に比較すると、まことに太陽の昇る前の星のやうなものであらう。氏自身でも氏の俳句に矜恃を感じてゐられたのではあるまい。然し、其俳句にも矢張り氏の面目は現はれてゐる。尤も當時の俳句は今日の俳句の如く個性的に自由な表現を試みたものではないから、其の俳句を通して氏の生活が覗はれるといふほどには行かないけれども、兎も角、氏の性情の開發して行くべき素地の一面が間接ながら髣髴するやうに思はれる。近日、氏の俳句を通覽したまゝの感じを少しく書いて見る。

氏の創作が「我輩は猫である」「坊ちやん」などのユーモアに富んだ時期から、「虞美人草」「草枕」の如き技巧に富んだ時期に移り、更に「それから」「門」以來の平淡な廣い道に出られたやうに、氏の俳句もユーモリツクなものが多く、それから技巧の勝つたものにと移つてゐる有樣が觀察せられる。

叩かれて晝の蚊を吐く木魚かな

木魚の中に潜んでゐた蚊がポク〳〵と敲かれたのに驚いて飛出す。その事を木魚を主體にして蚊を吐出すと云つた所にをかしみを籠めたのである。

出代や花と答へて跛なり

花といふのは出代つて來た下女の名前である、つつましやかに「花」と答へた其の美しい名の持主は跛の醜い身を持つてゐたのである。

是等の句は、ほんのをかしみがあるといふだけで、どうも上品な趣味とは云へないと思ふ。

達磨忌や達磨に似たる顔は唯

明月や丸きは僧の影法師

浮世いかに坊主となりて昼寐する

などいふ滑稽味の句は氏の作に多くある。けれども、此の程度のものでは、未だ氏の特色が出てゐるとは云へない。

はらはらとせう事なしに萩の露

曼珠沙華あつけらかんと道の端

等を通過して、

南瓜と名にうたはれてゆがみけり

長けれど何の絲瓜とさがりけり

などに到つて、初めて、他の模倣を脱した氏の風格がほの見えてゐる。

秋の蟬死にたくもなき聲音かな

芭蕉の「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」から脱胎したので、芭蕉の句は無常迅速を諷したのであるが、氏の句は秋になつて一層喧ましく鳴立てる蟬をひやかしてやつたのである。

鳴立てゝつく〱ぼうし死ぬる日ぞ

といふ氏の句もある。

春の雨あるは順禮古手買

順禮が行くかと思へば古手買も行く、順禮と古手買とを一列一體に見て春の雨の情趣に托してしまつたのである。

卯の花や盆に奉捨をのせて出る

門に來た順禮、其順禮を寫さないで、それを思はした所に俳諧的の妙味がある。

打てや砧これは都の詩人なり

謠曲もどきで自分の事を「これは都の詩人なり」と云つたので「砧打て我にきかせよ坊が妻」（芭蕉）といふ句もあるが、それとは變つた面白みがある。

鷄頭や代官殿に御意得たし

願訴に出た小百姓であらうか、「代官殿に御意得たし」といふクォーテーションの一句に依つて、其のシーン

を髣髴せしむる所が面白い。

　明易き夜ぢやものお前時鳥

これも「明易き夜ぢやものお前」といふ會話の一節を其儘にとつて、後朝のシーンを暗示した所に、江戸式な才氣があふれてゐる。而して

　子は雀身は蛤のうき別れ
　蟬よ秋ぢや鳴こうが鳴くまいが
　寒山か拾得か蜂に螫されしは

又

　竿になれ鉤になれこゝへおろせ雁
　それがしは案山子にて候雀どの
　名月や拙者も無事で此の通り

などの域に進むと、他人の追蹤を許さない輕快な調子が自由自在に驅馳せられてゐること、かの「我輩は猫」時代の縱橫な着想をおもはせる。
氏の漢文趣味は俳句にも入り込んでゐる。

　累々と德孤ならずの蜜柑かな
　西函嶺を越えて海鼠に眼鼻なし

けれども、かういふ句は、やゝしなしたりといふ機智の味が附隨してゐる。それよりも

　わが宿の柿熟したり鳥來たり
　作らぬど菊咲きにけり折りにけり

といふやうな、自然なおつとりとした妙味、いはゞ好い意味での俳趣味といふものを捉へた方が一段上のやうに思はれる。一方には

　鵜飼名を勘作と申しあはれなり
　雪深し出家を宿しまゐらする

などの輕い中に情味の籠もつたものも眼につくし、更に

　乾鮭のからついてゐる柱かな
　べんべらを一枚着たる寒さかな
　朝顏や手拭かけに這ひのぼる

などの平易な中にユーモアの湛へてゐる作がやはり氏の句の特徴として味はれる。これが一變化して

　ふるひ寄せて白魚くづれんばかりなり
　菫ほどな小さな人にうまれたし

來る秋のことはりもなく蚊帳の中

になると、滑稽味は少しく離れるけれども、氏の特徴は益々明かに打出されてゐる。而して調子が熟して來るにつれて、句作的な技巧が整ふて來てゐる。

行春や剃りおとしたる眉青し

かういふ趣味は作者が會心の微笑を漏らしたものらしく想像される。

山高しやゝともすれば春曇る

湖を前に關所の秋早し

客に賦あり墨すり流す月の前

燭剪つて曉近し大三十日

朗々として誦すべき調子がある。渾然として叙法の整つてゐる妙味である。かういふ調子から壯大な感じが巧みに詠みこなされてゐる。

朝懸や霧の中より越後勢

輿を秘して軍を返へすや星月夜

夕立や犇めく市の十萬家

雲來り雲去る瀧の紅葉かな

一寸した些事にしても此の格でうたはれると

妓を拉す二重廻しや梅屋敷

盆梅の一尺にして假態す

調子の上から一種の趣味が響いて來る。かういふ句は當時中村不折氏の俳畫に於ける筆致を思はせるものであつたが、之を俳句にしては漱石氏が獨壇上たるを失はなかつた。

けれども、斯の如き調子や取材で人を魅する行き方は、讀者にしても飽き易いが作者自身にも飽き易いものと見える。氏の句は漸次、平淡に就いて來た。

草山に馬放ちけり秋の空

張りまぜの屏風に鳴くやきりぎりす

冬籠米つく音のかすかなり

据ゑ風呂や傘さしかけて春の雨

ひややかな鐘をつきけり圓覺寺

初冬や竹伐る山の鉈の音

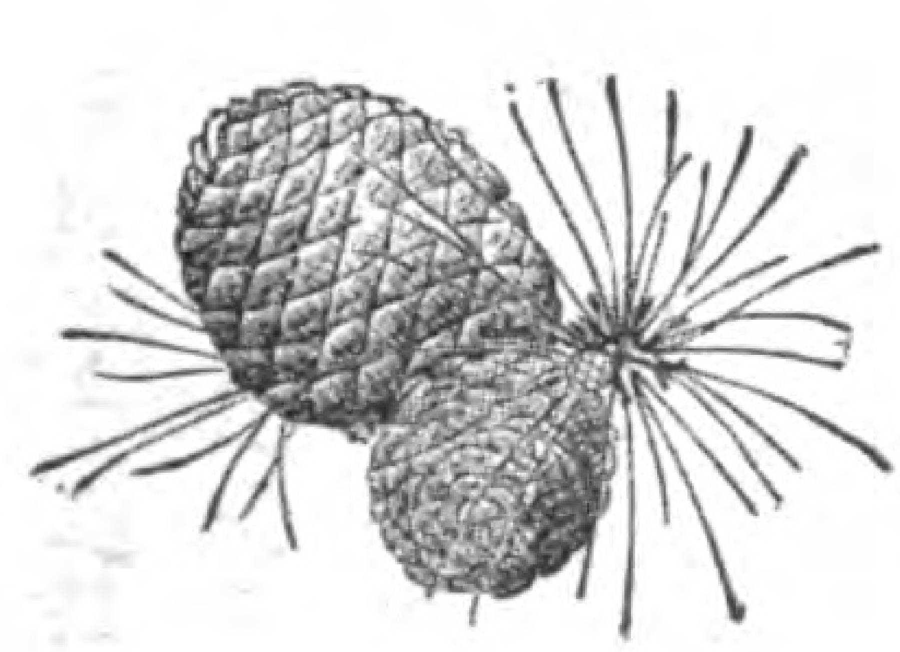
俳句としては大家の作らしいジミなおちつきを具へて來たけれども、其と共に俳句的な型にはまつてしまつ

た觀がある。漱石氏としての特色が一般的な俳句の趣味といふものゝ爲めに、すつかり包まれてしまつた風である。氏の俳句として見れば、全く行きつまつてしまつたとも云へる。この行き詰つた所で、氏の俳句は終つてゐる。而して英國へ行つて歸つて來られた時、私達は氏をやはり俳人として私達の俳句會の席上に迎へたけれども、氏はもう單に俳人としてゞはなかつた。その席上では雷といふ題が出てゐた。

雷を盥に伏せて鮓の石

雲の峯雷を封じてそびえけり

其が氏の席上吟であつたと覺えて居る。然し、それから後の氏の俳句はもう公にせられなかつた。而して間もなく、「倫敦塔」が世評を沸騰させたのであつた。



半生を顧みて 妾の一番樂しかつた事悲しかつた事

△私の樂しいと感じた事と悲しいと感じた事と

遠藤清

私には二つの相反した思想が流れて居ります。それは一面に於て、現代の泰西思想家の思想に多くの共鳴と同感とを持つ個人主義的人生觀を信ずるものでありながら、他の一面に於ては、西行や惟然坊のやうな無執着、沒我慾的生活に又一種の憧憬を感じてゐる事であります。

かうした私の冷熱積消二面をもつ性格が、日常非常の出來事に對していつもよくあらはれます。

私が私の生活にふれて來る悲喜得喪に當面する度に、感情に支配されて、憤怒の血を湧き立たせたり、喜悦の笑ひに浮き立つたりしながら、同時に或一隅から、怨恨窮通毀譽榮辱我に於て何かあらん、と云つたやうな冷笑が、その興奮をさましてしまひます。

それ故に、私は未だ嘗て、自己を失ふ迄悲哀に沈湎した事もなければ、醉ひくづれる程に歡喜の興奮を感じた經驗を持ちません。

從て生涯忘れられないと思はれる程樂しかつた思ひ出もなく、又生命のあらん限り記憶に殘る程の悲しみも持ちません。

けれども瞬間的に申せば、多少私の感情を動搖さした悲喜の經驗はない事もありません。で私はそれの中の比較的印象の明らかなものを擧げて見ませう。

それは明治四十四年四月二十六日であつた。當時大阪新報の社員として大阪に在住してゐた泡鳴氏と同棲するために、大久保の寓居を引はらふ二三日前であつ

た。其當時留守中無人のために大久保の宅に逗留してゐた私の父と、其日心ばかりの別離の宴をした。

私の父は其當時六十五歳の老人であつた。子と呼ぶものは、兄と私と二人ぎりである。父は年若くして愛妻と死別した。其後二度程妻を迎へたけれど何れも永續しなかつた。父もそれ以後妻帶を斷念して、妻の片身である兄と私の二人を老後の慰安者として、寂しい寡夫生活をしてゐた。私は父を私生活――此場合特に性愛の生活を指してゐるのです。――の不遇者として多大の同情を持つてゐた。私の父に對する愛情は、親を愛慕すると云ふよりは、老いて溫かい家庭もなく、慰安して與れる妻も持たない寡夫を痛む心からの愛情が、より多く支配してゐた。それで私が泡鳴氏と大久保に同棲する迄は、父は兄よりも私と多く同棲してゐた。泡鳴氏は私達の事情を知つて父の同居することを承認したけれど、父は徒に他家に寄寓する事を甘んじなかつた。

「人間は死ぬまで働くべきものだ。今の時代は子や親族に賴つて食はしてもらはふなどゝ考へるのは間違つてゐる。だからおれは死ぬまで働くつもりだ。お前達も其つもりでめい〳〵しつかりやつて與れ。」

父は常々から云つてゐた。けれども私は、父の老後の餘生を、私の愛情の中に包んで溫かい家庭の人として暮らさせたかつた。老いたる寡夫の寂しい氣分を、子の愛で賑はして上げたいと考へてゐた。けれども父を大阪まで同伴する事は、經濟上の都合でどうしても許せなかつた。それで父を殘して私だけ出立することに決定した。けれどもそれは私に執つてかなり苦しい事であつた。と云ふのは、父は兄よりもより多く私に親しみと信賴とを持つてゐたから、私を離れた父は眞に孤獨に等しい境遇である。誰が此老父を慰安するであらう。誰が父の身のまわりのお世話をして上げるだらう。さう云つた色々の感情が、私の大阪行きが決定すると同時に私の心を暗くした。けれども事情はそれをどうする事も出來なかつた。私は當分のお別れを告げて父と一緒に盃を上げた。父は世に云ふ五勺上戸であつ

た。けれども酒に對する趣好は中々發達してゐた。それだけ酒は父の唯一の樂しみであつた。父は快活に私と談笑しながら盃を重ねられたが、談話が私の大阪行きの事になつた時、

『おれもとる年だから、或はこれが永の別れになるかもしれん。』と常になく沈んだ調子で云ひ出した。

さうなくとも、別離の愛着に胸が硬ばつて、物の味も味はへない程になつてゐた私は、この父の言葉を切つかけに、今迄努めてやうやく押えてゐた悲哀が、涙と一緒に瞼から流れ出した。堰を切つた水流のやうに止め度もなく私の目から頰に流れ落ちた。平常磊落洒脫な父が、こんな感傷的な言葉を洩らすのはよく〳〵の事であらう。性來無口のために、胸の中には父に對する愛情も同情もありながら、永の年月娘らしい優しい言葉を父に與へた事もない私は、父に對して濟まぬ事だと常に自ら責めてゐた。この優しげのない娘に對してこれだけの愛着を持たれるとは、何と云ふ優しい親心だらう。私はさう考へて心から父に感謝した。さうしてそれと同時に此優しい老父を暫らくにしても、一人殘して行くことを悲しむ思ひに打たれた。私は父の言葉を再び味はつて見た。『或はこれが永の別れになるかもしれん。』この言葉は、總てに樂觀的な、思ひ切りの好い父としては、生別を同時に死別と觀念して、いさぎよく最後の訣別を告げたつもりであつたかもしれない。

けれども子として、愛の生活のためとは云へ、齡耳順を越えてゐる老父を一人殘して、遠く別れ去る事は餘りに主我的な行爲である。若し不幸にして父の豫言通り生別が死別になつたら、私は父の恩愛に對して報ゆる途がない。私の感情はこんな豫覺のために、次から次へと悲しい寂しい事ばかり思ひ浮んだ。

『人間ですもの、命はわかりませんけれど、電報で知らせて下されば、夜よなかでも歸つて參りますよ。高が百三十里、汽車で十七八時間で來られるのですもの。』

私はかう氣强く云つて父を慰め、又兼て自分の感情をまぎらした。けれども此時程娘らしい氣分になれた事もなかつた。と同時に父に對する愛着と別離の悲哀

とを強く感じた事もなかつた。

樂しかつた記憶。これは私にとつて最も求め難い事であります。どちらかと云へば厭世的人生觀を持つてゐる私は、つれ〴〵草で兼好法師が云つてゐるやうに、

『智惠と心こそ、世にすぐれたるほまれも、のこさまほしきを、つら〳〵思へば、ほまれを愛するは、人のきゝを欣ぶなり。ほむる人そしる人、共に世に止まらず、つたへきかん人、また〳〵すみやかにさるべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。ほまれは又そしりのもとなり。身の後の名のこりてさらに益なし。是を願ふも次に愚なり』。と云ふやうな氣分から、名利に滿足できない云はゞ惡悟りがあります。けれどもかう云ふ醒めた氣分と、生きてゐる以上は人間らしい欣びを味ひたいと云ふ二面を持つてゐます。この欲望のために私は嘗てそれを戀愛に求めました。さうして自けた私自身の氣分を暫らくでも忘れたいと思ひました。けれども私のもつた戀愛は二度とも苦痛と煩悶の方がより多くつきまとひました。私の『愛の爭鬪』を讀んだ友人が、あれ程でもなかつたら。たまには樂しい事もあつたに違ひない。と批評なすつたと聞きましたが、私は事實性交からは滿足も快感も得られなかつた。

『あなたのやうに滿足が得られない人間は、結局姦通でもしなくてはならなくなるだらう。』と嘗て泡鳴氏に云はれた事があつた。それだけ私は如何なる場合にも醉へない人間であります。肉の飽滿だけで滿足を感じ得られる人ならば、私の戀愛或生活は結婚生活中にも、樂しかつたと云へる程度のものがあつたかもしれません。けれども私は戀愛に對して、かなり氣六ヶ敷い要求を持つてをりますために、常に物足りなさを感じ通して、滿足の欣びを味はふ事が出來ませんでした。で私には戀愛生活を離れた事を苦痛とも、寂しさをましたとも思へません。却て優しい友情や、無言の自然の中から、淡いながら喜悅を感じさせられてをります。其中で私の樂しい思ひ出の一つとなつてゐるものは、

一昨年即大正四年の十一月初旬の事でした。これは云ふ迄もなく、私達の別居事件が新聞に傳えられた後の事です。東京府下の或郷先生から、突然手紙を受取りました。その人が故い私の知人であると思ひつかなかつた程、其人と私とはかけ離れてゐたのであります。手紙の文面によりますと、其人は、十餘年前私と同時に芝區の或小學校に教鞭を執つてゐた同僚であつた事がわかりました。十七八年前私の父が南葛飾の綾瀬川の岸に退隱してゐた事があります。其當時私は其村から一里半程川上の村の田舍教師として奉職しました。その村に其老人が此四五年前から奉職してゐたのであつた。その因緣から私と云ふものを思ひ起したのと、今一つは別居の噂とで、ふと消息を通じる氣分になつたらしい。

『私の名だけ御覽になつたのでは、恐らくお忘れかもしらんが、私は七八年前芝の〇〇校であなたと同職した三老人の一人であります。さうして今嘗てあなたが在職なすつたと云ふこの村に奉職してゐます。あなたのお噂も折々出る。たまには命の洗濯も必要でせうから郊外散策かたぐ〵お出かけになつては如何。序に此老人お尋ね下されば、澁茶の一ぷくもけんじ申すべく、綾瀬の堤上月を踏んで歸るなども趣味がありませう。』と云ふやうな意味のものであつた。私は此運命の奇遇に驚きもし、又此親しみある招待状に動かされもして、其翌日或知人を伴つて老人の閑居を訪ねました。かう早速訪問されやうとは豫期しなかつたゝめと、十年近く逢遭する機會なしに過ぎたゝめとで、お互に容貌が忘れられてゐた。頭髮の雪のやうに白い老人が訪なふ聲に應じて顯はれた時、私もそれが手紙の本人であると思へなかつたやうに、其老人もそれが私であるとは考へられなかつた。で私は直ぐ私の名を名のり上げた。老鄕先生は始めてそれと知つて自身も名のりを上げた後、

『かう早速お出下さるとは思ひがけなかつた。あなたの風采を見た時は、女優かしらと思つた。私は女優に知人は持たない筈だがと思つた。本當に好く來て下す

つた。」

『あんまり氣持の好いお手紙でしたので、御返事を差上る間ももどかしい氣がいたしましたので直ぐ思ひ立ちました。』

老先生は私の此訪問を心から歡迎して呉れた。私の相變らず直情的な性質を見出して、

『あなたは昔からさう云つた人だつた。年は經つても其性質は變りませんね。』

私はこんな二三の會話ですつかり昔の親しみに返らされた。さうして私の其村に在つた當時の逸話や、芝の學校時代の逸話が次から次へと語り出された。猜疑嫉妬、或は卑しい虛榮心と云つた感情から全く離れて、人間と人間とがゆつたりと語り合ひ親しみ合ふと云ふ事が私には最も嬉しかつた。私は叔父か、或は親友に對するやうな懷しみを持つた。私は私の同伴した人の退屈さを思ひやりながらも、老先生との追懷談に耽つてゐた。若き日の自分を此故い同僚から物語られてゐる中に、私は自分が十餘年の昔に引戻されてしまつたやうな氣分になつた。私は感興に乘じて或は唱歌したり、談笑したりした。此時の氣分は多年旅に暮らした者が、久しぶりで故鄉の親族友人に會つた時のやうな溫かみと平安とに包まれた。

『あなたは若い頃は隨分酒豪だつたと今でも噂に殘つてゐるから、今日はうんと御馳走するから遠慮なく飲んで下さい。』さう云つて老先生は一升德利をつきつけて見せた。

『そんなに戴けるものですか。昔だつてまさか一升は飲んだ事はございませんもの。』

『それぢやあ小使に一杯かつがれたかな。』兎に角今日は思ひがけなかつたので、一段うれしかつた。』

私は此老先生の打とけたもてなしに引こまれて日の傾くのさへ氣が付かなかつた。

生活の爭闘の中に朝暮身と心とを疲れさしてゐる自分の生活を顧りみた時、私は此老先生の靜かな生活の方が幸福なやうな氣がした。

『私も又此邊に引つ込んでしまひたくなりました。そ

の方が私の性質に合ふかもしれません。』
『いや、今からそんな意久地のない事を考へてはだめです。あなた方はまだこれからだ。』と老先生は私をはげまして與れた。

私はいつまでも此感興から醒めたくなかつた。けれども日は暮れ月も昇つたので思ひ切つて其處を辭した。丁度老先生の豫定通り七日の月が鏡のやうに澄んだ光をなげてゐた。其の光に照し出されてゐる田や畑や森が、十餘年前の儘に私の目に這入つた。綾瀬川は月の影をくだかない程度に靜かに音もなく流れてゐた。うたかたの流れは絶えずして然も舊の水に非ず。とは云へ私にはそれも親しいもの丶一つであつた。榎戸の大榎も私の若き日を思ひ出せよと語るやうな氣がした。私は目にふれる一々の自然に久濶を叙した。

此秋晴の午後の半日の會談と、其夜の月の花畑村は、今日でもそれを思ふたびに目前に見える程はつきりと印象に殘つてゐる。私の今後の全生涯の中にも、恐らくこれ程ゆつたりした、且又樂しい會合は數多く得られまいと思ひます。(大正六年一月十九日夜)

△樂しかつたこと丶悲しかつたこと

與謝野晶子

大正元年の十月廿八日の朝も私は五時頃に目を醒して遠近の物の音に耳を借して居た。近いのは窓の外の甲板で水夫達の立てる作業の音と話し聲で、やや遠い音には太平洋の波の音もあるのである。私は汽船平野丸の船室に居た。平野丸は歐洲から歸航して明日の午に神戸へ着く船である。寄港地に近づいた前日などには船客も船員も多く興奮狀態を現すものであるが、私には殆ど其れを經驗することが無かつた。食堂などのある一階下へ降りる廊下の棕梠竹の鉢の上に掲げられてある海圖の指針の進行が、港に船の錨が降されると同時に止まつてしまうことは、夢寐の間にも子供達を

見る日が忘れられない私に取つて迷惑であつたからである。然も自身のして居る病を重く思つて居る私は、錫倫島にはお上りになるでせうと小村夫人に云はれた頃、生命がありましたならなど丶云つたものであつた。西に良人を置き、東に子供を置いて居る私は時々激越する感情を抑へることが、船暈を避けやうとすること丶共に私の努力して已まなかつたことであつた。薩摩富士が必ず見えやうと云ふ今日の朝、二時三時にも目を醒さず、五時まで眠つて居たことは、落ちついて落ちついてと押へられた心がこの時にも働いて居たのであらう。少し前に私の開けて置いた戸口から女給仕の鈴木さんが茶を運んで來た。大抵朝毎に寢臺の上の私は目を大きくして鈴木さんを正視するのを挨拶にして居た。或時には其れも物憂くて目を閉いで居ると、鈴木さんが眠つて居ると思つて、足の邊りの毛布をそつと叩いて行つたりした。

『お早う。』

やはり私が云つたのぢやない。私の目へ鈴木さんが云つたのである。けれど私は直ちに身體を起して茶を飲まうとした。

『薩摩富士を御覽になりますか。』

『見えるかしら。』

『ようく見えます。』

私はひよろつく足を寢臺の上に踏みしめて圓形の窓から外を覗いた。薩摩富士は唯だ空より少し濃い青をしただけのものであつた。

この日の十時頃に、新嘉坡へ着く前日の大夜會以來昇つたことの無い大甲板へ私は出て行つた。羅を着たことを忘れたやうに袷の二枚着などを私はして居た。船は懷かしい日本の土と二町足らずの間を隔て丶前進して居るのであつた。其日本の土はもとより九州の西南の海岸の山を云ふのである。木は無いが、草山で、緑と水淺葱が何處までも繋がつて居るのであつた。私と小村夫人と大阪の小野さんとは上陸してからの話などをして居た。邊りには空いた椅子ばかりがあつて、外國人は誰も上陸の仕度に忙しいのか顔を見せなかつ

た。私は其處で明日の晝神戸から東京へ行く汽車の切符を事務長から渡された。主治醫とも賴み言葉敵とも思つて居る赤塚ドクトルと船のドクトルはまた例のやうにこの日の午後の時間も私の室へ來て費した。話して居ながらも一秒毎にあゝ嬉しいと云ひたい心を私は持つて居た。この特等室に居る貴婦人が土の上に歸つて一個の勞働者になることにも私は滿足をして居た。夕方にまた私は寢臺から出て船の甲板を殘らず歩いて見た。私は海の暮色を見て明日この船から離れる淡い悲みを覺えて居たのである。時々遊びに行つた小村夫人の室の窓の下は殊更幾度も往復して見た。この哀愁と、巴里を出て四十幾日間知らない家族の消息に何物があらうと言ふ不安を抱いて居ながら、猶且つ私の嘗て知らない樂しさをこの一夜に味つた。二十九日には前日よりも一層私を沈着かせる物があつて、檢疫船のために停船した時までも夜の姿のまゝで寢臺に居た。鈴木さんは其爲めに隨分氣を揉んださうである。この日は海に霧が多かつた。多くの人から書くことを依賴された絹や紙に私は埋まつて居て、赤塚ドクトルの船を下りたことも小村夫人の上陸したことも知らなかつた。

船に寢るいやはての夜の思ひなど哀れなりけり、
女ごころに。

この歌を書いた時には泣笑ひをしたいやうであつた。四日程前に繪を描いた跡の氣紛れに紅い繪の具で、

めでたかるわが百年の半ほどに四十日ありける白
き船室。

と書いた寢臺の横の壁を見返りながら、私は見ず知らずの新聞記者達と一所に平野丸を捨てゝ陸に上つた。後藤と云ふ宿に入つてからも樂しいことは續いて居る筈であるが、其處ではもはや不安が重苦しいものになつて私を多く微笑まさなかつた。東京から金尾氏が來て初めて子供等の無事なことは聞いたが、やはり私の心は重苦しかつた。大正元年の十月廿八日から廿九日の午前中のやうな心に私は逢ひたいとばかり思つて居る。

悲しいことは、船から私が東京の家に歸つた後に、良人の妹が烈しいヒステリイに罹つたことで、ヒステリイが私と子供を苦めたこの追憶だけは心から除いてしまひたいと願つて居る。

△一番樂しかつた事と悲しかつた事

日向きむ

樂しかつた事

一番と云つて取り上げやうとして見ると、いろ〳〵な事が心に浮んで來て、其一つ〳〵を、熟視して見ると、さてどれが一番と云つてよいか分らなくなつて、猶よく考へると一番樂しかつた事が無かつたやうになつて了ふのです。さうして空想の中にフト見た面影や、自然の風光や古今の風俗や、さうしたものから得た心のときめきに、無上の樂しさを感じたのと、現實の事にふれて味ひ得た樂しさとの差別さへよく分らなくなり、とても一つを、一番樂しかつた事と擧げる事は出來ませんが、今フト心に浮んだ忘れ難い樂しさの一つを云つて見ますと、それは自分の書いたものが、始めて公になる時でした。私が廿か廿一の年、「あしわけ舟」と云ふ小說を富山房から出しましたが、自分で表紙の意匠を考へたり、口繪を鏑木清方畫伯にお賴みしたりしたのから、始めて校正の紙に原稿紙のと同じ活字が確然(はつきり)と現はされて印刷所から、後から〳〵と送られるのを朱の筆で直したりするのが、何とも言はれぬ樂しみでした。それも總て濟んで奥付に印を押す時、それが彼方此方(あちこち)の書店に並べられてあるのを見た時もさうでしたが、鐵道馬車の中で、私の近くに乘つてゐた二三の若い婦人達が、其著者の乘つてゐるとも知らず、其の小說の中に出てくる三人の女の品定めをしたり、後編が出なくては譯らぬ、犯人の――それは一種の探偵小說でしたから――名を互ひに云ひ當てやうとしたり、果は全體の批評になつて、彼處(あそこ)は斯う言ふ心持ち

であらうがよく出來て居る、此邊はどうもうまくない、私なら斯うすると云ふやうな話を熱心に語り續けて居るのを聞いた時、後半は殆んど惡口の連續であつたが、それでも名乘を擧げて感謝したい程嬉しかつた。それは惡口もそれ丈細かく言はれる程讀まれ、考へられたと云ふ事が、小心な――なりたての――著者の身にとつて大きな喜びだつたのです。さうして是からはあの惡口が全部賞讃に變るやうなものを書くやうになりたい、書くやうにならうと思ふた時、非常に樂しうございました。

悲しかつた事

是もいくつかありますが、著しく心に刻まれたのは二つです。是はどちらがどちらとも云はれぬ程、今も鮮かな印象を留めてゐますから、矢張り二つを並べて申します。始めのは私が赤ン坊の時から育てられた、媬姆が病死した時です。この人は亡くなつた時六十五六で私は其時十六歳でした。歳が老つてゐた丈如何にも優しく、生みの親も及ばぬ程私を可愛がつてゐました。私が九歳の時まで、歸さずに引留めて置きましたが、養家へ來る事になつたので止むを得ず別れましたが、其後も私が尋ねて行く度に、少さな子にでもするやうに、柱に筋をつけて私の丈の延びるのを樂しみにしたり、字を書かせて見て手が上つたなどと云つて譽めたりしました。それで媬姆の望みは私、私の望みは媬姆と云つたやうな譯でした。其媬姆が私の身の行末もろくに定まらぬ内に亡くなつたのですから、私は世の中が眞暗になつたやうに感じました。手習をしてゐても誰に見せる爲めに上手になるのかと筆を投げて呆然としたり、大きな姿見に自分を影しても、誰の爲めに大きくなるのか、喜ぶ人もないのにと思ふと、殆んど生きてゐるのが、無意味のやうに思はれました。其頃愛讀してゐた「源氏物語」の中の歌に、

此の春はたれにか見せん　亡き人の
かたみに摘める　野邊のさわらび

とあるのをとつて私の雅號とし、懐しい媬姆の遺念

としました。

次は佛英和女學校の、やゝ年老いた尼僧に死別れた時です。此時は私はもう廿を越してゐました。一週に二三回其尼君の所へ佛語を敎はりに通つてゐました。非常に美くしい優しい人で、私を特に愛して下さいました。私も亡い娛姆の深い情が、形を變へて再び生き返つたやうな氣がして、國の違ふ人とか他人とか云ふ心持ちを離れ、慕はしく懷しく思ふてゐました。冬の寒い風が吹いて、雪がチラ〳〵してゐる時など、私の顏が靑いと云つて足あぶりを持つて來て、手づから私の靴を乘せ、冷たい手を自分の手と手の間に入れて暖ため乍ら、文法の變化など繰り返して敎へてくれたりしました。長い休みの前、

『もう暫らく會へませんねヱ、今度のお稽古始めには、貴女に先づ第一に會ふ事を、私はどんなに樂しみに思ふてゐるでせう、それまでにも來られたら遊びに來て下さい』

と、云ひ乍ら入口の階段の所まで私の脊中に手をかけて話しながら送つて來て、『ではそれまで』と繰り返し幾度も肯頭し乍ら別れましたが、其お稽古始めの時は其尼君はもう亡い人でした。ゴシック式の美しい殿堂で嚴かな葬式の行はれた時、私は生前の約束通り、一番早く行きました。香のかほりや祭司の姿が尊とく肅かに感じられる中へ、黑衣白帽亡き人の姿を其儘の尼君達が、屍骸を入れた長い柩を靜かに運んで來るのを見るや、其人の懷しい面影や溫い言葉が又今更に思ひ出されて、只もう涙にくれてどうする事も出來ませんでした。歸りには連の人に助けられて、辛うじて家に歸つたのも、殆んど夢心でした。

△樂しかつた事悲しかつた事

しぐれ

○

□半生をかへりみて一ばん嬉しかつたことゝ悲しかつ

たことゝを追懐せよとのお求めでございますが、私が思ふにはすべて世の悲しみは永遠なもので歡びの姿はごくはかないものゝやうに感じられます。勿論喜悲哀歡の感情はみんな刹那的のものですが、人の心には不思議にいつも悲哀の想ひのみが刻まれがちで、たとへどのやうな歡びの有頂天の一瞬間さへ、それを後になつてふりかへつて見ますと、その歡びが却つて無限のかなしみの根になつたりすらいたすのです。第一、かうして筆を取つて自分の私生活の一場景を人樣の前にお示ししようとする時にも、歡喜の追憶よりも悲哀の回想の方が、一層皆さまの御同感を惹きやすいと存じますが、かうした人心の機微に思合せて見ても、歡喜よりも悲哀の方が人間の魂にまで密接親和し易いものと信じられます。ですから以下私が記して見ようとすることが「歡び」「悲しみ」の双方の記憶を記せといふお求めにもかゝはらず、「悲哀の追懐」にのみ傾くのをゆるして頂かうと存じます。

○

□もう二昔足らずも以前のある冬の雪の日のことでございました。私は親しい知合のお家から招かれて遊びにまゐり、樂しく一日を遊びくらして夕ぐれになり、おすゝめのまゝに溫かい食物を頂だいて談笑にふけてをりますと、そこへ宅からの使が愁はしげな顏をして迎にまゐつたのです。何用かと訊いて見ますと、その頃政治界で或る仕事にたづさはつてゐた父が、何かの事件が六かしくなつたゝめに檢事局へ召喚されたと申すのです。此の事をきゝました時の私はどんなに驚きと哀しみとで眞暗にされましたことか‥‥第一その折の私は、此の寒い〳〵眞冬の深ゆきの夕ぐれ、老いに近い父親がそんな人のいやがる場所へまぬかれ難い力で引かれてまゐつてゐるといふのに、その娘の私が今の今まで愛父のその悲運にも氣注かず、溫かいものをいたゞいて暢氣に談笑してゐたといふことに對する言ひ難い自責に打たれると同時に、今度父が陷つた惡い運命に就いて——その事件の內容に就いてこれまでいくらか小耳にはさんでゐたこともあつて、あゝ此のまゝ默

つて見てゐたなら、あるひは此の事件のために父さんの身にどんな間違が起りはしまいかと心では案じてゐながら、遂にかうなるまでたゞ一ことの「諫言」めいた言葉さへ父に向つて述べ得なかつた「女のはかなさ」「力なさ」に對して限りない口惜しさを感じたのであります。そして、今なほ失落の晩年を寂しく送つてゐる父親の老いの後影を眺める時程何とも言へぬ物悲しさに囚はれることはないのでございます。

□私は一たいあまり物ごとに悔いをのこさないたちの女でございますが、「娘ごゝろ」の無自覺と弱さとからその昔、心にもない婚嫁をしてしまつて、幾年かの間をまるで生甲斐なく送つてゐたころのことを考へますと、只いまでも一種烈しい悔恨に打たれて、こしかたの自分の脆さを呪はずにはをられませぬ。その不運な時期のある初夏の日のことでございました。廿二歳の私は、さる事情のために氣も心も反對な良人に伴はれて、當分田舍住居をするために遠い北國の花巻と申すところに移るべく都をはなれなければならなくなりました。正しい「生」の力が――正當な反抗心が胸の内には燃えながら、舊い倫理觀念やら周圍の「事情」やらに自分の魂を包みかくされて、たゞいたづらに「弱さ」といふ舊女性の美徳を護つて涙をかくして遠旅に上らうとする私を、實家や姻家の人々、出入の角力役者などまでにぎ〳〵しく停車場に見送つてくれましたが、やがて汽車が新緑の曠野を、五月の山麓をいくたびか走り越えて、つぐる日の夕まぐれ、詫しい北國の孤驛について、さて此所で其の列車を下りねばならぬと知つたときの私の胸のやるせなさは、とてもかうしてかいて見たとてひとさまにはおわかりになられまいと思はれるほどでございました。うら若い身には鬼がしまとも思はれた「鑛山」に、心に染まぬ人をせめても話相手として、これからいくとせをすごすべく赴くとがどんなにかなしくとも、その境遇からどうしてものがれる術を見出すことの出來なかつたその折の私にとつては、――三界に心の家のなかつた私にとつては、その時身を乘せてをつた汽車だけが、むしろ興

實の故家のやうに、一ばん住みよい家のやうに感じられて、いつまでも〳〵、一生の間そのまゝその車に乘つて、どこへも降りずに走しつてゐたいやうな氣がされたのでございます。もう〳〵、あの花巻の、詫しく暗い驛に降りて、初夏の夕風のとほり拔けるプラットフォムに立ち澱んで、自分を置いてきぼりにして走り去る汽車の姿を見送りました折、あゝ、どんなに熱い涙がとめどなく私のまぶたをあふれ落ちましたことぞ……

○

□かうしてかなり長いこしかたを追想して見ますと、此の外にもずゐぶんたく山の憂さつらさの記憶が充ち滿ちてをりますが、さて、それでは只今の自分はどうかと考へて見ますに、現在の私は、不思議にも此れまではあまり覺えなかつた「物がなしい」よろこびにひたされてゐるのをおぼえるのでございます。私はたゞ今、人里遠い片田舍に老いた父の身の煩ひを見とりながら、いそがしい渡世の母や妹にもはなれて淋しく暮してをりますが、それでゐてその詫しい暮しがむしろ去年一昨年までのにぎやかで美しい都會の中の生活よりもうれしくもたのしくもおもはれます。此所には全く、あの都會での光の歡びも、宴げの樂しみも――名優が演ずる名曲のあでやかさも、快活な社交のおもしろさもございませぬ。しかしながら、かうしたはなれ小島のやうな鄙の片里の深い夜、ひとつの灯の下にじつと坐つて、自分の心のなかのちひさな世界をみつめてゐることも亦かなり自分だけにはうれしいことのやうにおもはれます。私はたつたひとり、ひく〳〵、胸の底で、いろ〳〵なまぼろしと話をします。美しい羽根の禽や、清い心の乙女や、さま〴〵の容が「心」の影となつて現はれて來て私を慰め、私をはげまします。とは言へ勿論とても「仙女」にはなれない風俗の女ですもの、濁世の愛憎はいつだつて胸一パイにうづをまいてはをりますが、その愛憎が刻々どんなよろこびやかなしみを見せようとも、すべてそれが自分の「まごころ」からの感動とすれば、甘んじてそれに身をまか

せたとて何の悔いがのこりませう。ほんに私もいつの間にかもうよそぢにあまりとほくない程としをとりましたゞせめてこれからは、すべての刹那々々を喜悲哀歡のいづれにまれ、みんな「まごゝろ」からのものでみたしてゆきたいと考へてをります。もとより十が一を貫行する力もないとは知つてをりますが……

□なんだが餘事にわたつたやうで恐れ入ります。よろしく御判讀を……

(正月十七日夜生麥にて)

△悲しいことゝ嬉しいこと

岡田八千代

まだ此先き何の位生きるのか、それとも、ついひよつと近くに死ぬのかもしれぬ身であつて見れば、まだまだ悲しいことも嬉しいこともたんとあるかも知れないし、また今までであつたことの中からどれかを撰まなくてはならないのかもしれないのですから、今のわたくしには、どうと言つてかつきり申すわけには參りませぬ。けれどもこれは理屈で、無論お尋ね下さります方のお考へは、今迄あつた事の中から、悲しかつたことゝ、嬉しかつたことゝを並べて書けば好いと言つて下さるのには違ひないのでせうけれど、なにしろわたくしの周圍の人と來たら、三面記事や六號記事を信じて、面白がつたり、憤慨したりする人が割合に多いのですから、わたくしがもし此處に眞面目くさつて、わたくしの現在悲しいと思つてゐることをでも書かうものなら、それが又どんなに、其人達の間の問題になつて、嘲けられ、罵しられるのかと思ふと、到底、眞面目になつて、そんな事を書く氣にもなれません。それに、どうも此世の中といふものは、どういふものか、眞面目にやればやるほど、不眞面目に取られるものらしくわたくしには思はれて仕方がないものですから、とかく、近頃は「どうでも好い」「仕方が無い」といふやうな氣ばかりしていけません。しかしあたり障り

の無いところで、まア悲しいことゝ言つたら、わたくしはやつぱり早く父を失なつたことだらうと思ひます。まアわたくしは一度父親といふものに甘へて見たうございます。それに母といふものにも、物心ついてからは、あまり甘へたおぼえがありませんから、芝居などを見ましても、人の親が我が子を命にかけていつくしむのをなど見ますと、どうしても泣かずにはゐられなくなりまして能く泣きます、どうかすると、その幕が濟んでからも涙がこぼれてならぬ時があります。わたくしは一人淋しくしてゐるのが好きなくせに、その淋しさを察して吳れる人の無いのが淋しいといふ厄介な人間なのです。ですから、やたらに直ぐもの悲しい心持になつて困ります、今此處で話してゐた人とでも、氣が合つてゐて見ると、明日逢はれると定つた人でも別れるのが厭でたまらなくなります。もしそんな場合その人が一生あなたと話しをしてゐませうねとでも言つてくれたらわたくしはどうなるか分りません。しかしまづそんな人は無いと腹で定めてゐますから、

その失望に逢はぬやうになるたけ人に近づかぬやうにするので、わたくしはだん／＼冷たい人間になつてゆくやうな氣がします。悲しいことに逢ひたくないために待ちのぞんでる事に遠ざかつてゐるといふやうな人間なのでせう、ですから自然わたくしにとつて嬉しいことは、この反對なのだらうと思ひます。とにかく能く自分の心持を知つて貰へたら、こんな嬉しいことはあるまいと思ひます、そして、わたくしも一生に一度、よその可愛がられてゐる娘さんのやうに、父親に甘へて見たいと思ひます。わたくしは死のことを考へても直ぐに父に逢ひたい、そして、思入甘へて見たい、寄りかゝつて見たいと思ひます。なんだかお話しが反れてしまひましたがこれでおゆるし下さい。

△妾の悲しかつたこと樂しかつたこと

中平文子

あなたは何が悲しかつたと聞かれたら、私はその材料があまり澤山あるので一寸選擇に迷ひます。幼い時母に死なれ、七八年前私を一番可愛がつて育てゝ呉れた祖母を亡くしたことなどは、いまも忘れられない悲しみの記憶です。それからその後いろんな事情で嫁いでゐた先きを去ることになつて、可愛い子供達と生き別れをした時の悲しさは、全く身も世もあられない程でした。その當時は自分ばかりでなく傍の者までが、こんなでゐては氣でも狂はなければ可いがと氣遣つたほど毎日々々泣き暮しました。時といふ不思議な力が、その後その悲しみを薄紙を剝がしてゆくやうに少しづつ薄れさせて、何うかすると忘れて暮す日のはうが多くなつたいまでも、過ぎ越しかたに何が悲しかつたと問はれたら、私は些つとも躊躇せずに、子供と別れた時のことが一番悲しかつたと言ひ切ります。

幼い時に悲しいと思つたことで忘れられないのは、やはり母の亡くなつた時のことです。僅か九つの子供に人の死といふことはとても頷かれませんでした。私は母の亡くなつた晩祖母に起されて夜中に眼を覺ましましたら、家中に晝のやうに明るく燈(ひ)が點いて、人が大勢集つてゐたので、子供心に何事が起つたのだらうと思ひました。寢衣(ねまき)を著かへさせて呉れた女中が眼を泣きはらして、「お孃樣、とう〳〵お母樣はお亡くなりになつたんですよ。」と告げた時、お母さんが亡くなつたつて何うなつたんだらう、死ぬといふのは一體どんなになることなのだらう、と不思議に思ひましたが、でも女中にそう聞かされた時はやつぱり悲しかつたのでした。それから祖母に手をひかれて母の枕許へ行つた時、母はゆふべ「おやすみなさい」と言つて別れた時のまゝに眠つてゐました。そしてその顔には白い布が掛けてありました。祖母はその布をそつて取つて私

に母の死顔を見せました。私はその顔を一目みて覺えず祖母にしがみ附いて泣きました。然しそれは悲しかつたといふよりはいつそ恐ろしかつたのでした。それから私は再び母のむくろのそばへ寄らうとしませんでした。

それからの二三日に起つたことは、子供の私に取つて悉く悲しい謎でした。私は私の知らない間に母の髮を剃り落してお坊さんにしたと云つては泣いたり、棺に納めていよ〳〵釘を打つといふ時に、そんなことをしては不可ないと言つてだゞをこねたりしました。そして私は何故こんなに皆して母を酷くするんだらうと悲しくてなりませんでした。葬式の翌日親戚の者に連れられて、火葬場へ骨上げに行つて、私も木と竹とかたかたの箸で母のだといふ骨を一つ拾はせられた時、私は思ひました、人を燒くなんてそんなことが出來るものか、母が死んだなぞといふのは乾度噓で、あゝして何處かへ連れて行つて了つたのに違ひない、そして私を欺すために、皆してこんな眞似をしてゐるのだらう、さう考へて私は自分の周圍の人を憎らしく思ひました、そして母はまたいつか歸つて來るものにひとり決めして、それで漸く悲しさをまぎらせました。

母の亡くなつた當座は、毎日父が役所へ出て行くと、あとは祖母と私と女中と三人限りなので、私は無暗に淋しくて、人戀しくて堪りませんでした、外へ遊びに出て歸つて來てみると、祖母はよく茶の間の火鉢のそばに座つて、眼を赤く泣き膨らしてゐるのでした。そんな時には私もつい涙を誘はれて、しく〳〵泣き出して了ひました。また母の死といふことに就いて祖母は能くこんな逸話を私に話して聞かせました。

母が亡くなる日の朝、祖母が思ひ切つて母に、お前の病氣はもしかすると今度はむづかしいかも知れないから、何か言つて置きたいことがあつたら私にお聞かせと言ひましたら、母は暫く眼を閉ぢてだまつてゐましたが、やがて「お母さん私が死んだらあれを繼母にかけるのが可愛想ですから、郷里から妹を呼んであれの母にして遣つて下さい、さうして下されば私は安心

です。」と言ひました。祖母は、「そのことなら安心してゐて、何んなにしてゞも乾度そうしてあげるから、」と請合ふやうに云ひましたら、母は嬉しそうに頷いて涙をほろ〳〵とこぼしました。そして、「お母さんおねがひですから私を一度起して下さい。」と言つたので、祖母は身體を動かせるのは宜くないと思ひましたけれど、醫者にも、もう何んでも病人の云ふまゝにさせて遣つたはうが可いと言はれてゐたので、女中と二人で母の身體を起して、高くした蒲團にもたれさせて遣りました。そうしたら母は蒼ざめた顔にさびしい笑を浮べて、懐しそうに祖母をしみ〴〵みながら、「お母さん。」と改めて呼んで、「ほんとうにあなたには長い間いろいろ御恩になりました、私は身體が弱かつたので御心配ばかし掛けてほんとに濟みませんでした。幼い時分から何もかもお世話をかけて、汚れ物の洗濯までみんなして戴いて、ほんとにもつたいないことだつたと思つてゐます。お母さん何卒堪忍して下さい。私は死んでも御恩は忘れません。」と言つて母は手を合せて祖母を拝みました。

私はこの話を亡くなつた祖母から幾度となく聞かされました。そしてその度に祖母と一緒に泣きました、これも忘られない私の悲しい記憶の一つです。

悲しかつたことの追憶に極めて豐富な私は、樂しかつたことの思出は甚だ貧弱です。自分の過去に何が樂しかつたかと考へてみても、取留めてこれと思ひ出されるほどのことは殆んど一つもありません。刹那々々に樂しいと思つたことは、些つとの間浮んだ水泡のやうに、次ぎ〳〵と消えて了つていまではもう何も殘つてはゐません、只だ一つ。

それは五年前子供等に別れた當座、丁度櫻の花のほろほろ散る頃でした。私は悲嘆の底に沈んで、再び浮上る勇氣も出ないので、いつそ尼になつて了はうと、家は、氣晴しに四五日鎌倉へ行つてくると言つて出て夜汽車で京都へ行きました。そしてその以前二三度遊びに行つたことのある洛西のある尼寺へ、その翌朝亡骸のやうな身體を運んで行つて、何んにも言はずに二

三日置いて下さいと頼みました。庵主さんはよく知つた人なので快よく承知して與れました。閑寂な寺へ來てから私の心は餘計淋しく悲しくなりましたが、それでも少しは落附いたので、若い尼僧さん達に東京の噂などを話して聞かせたりして、少しはまぎれて二三日を暮しました。その尼僧さんが茶話に、大阪のある木綿問屋の娘さんが、二度お嫁に行つて何故か二度とも離縁になつて歸されたのを、三度目に當人が不承知なのに親達が無理に縁談を取り決めたら、結納の日にその娘は自分の居室で束髪を根元からぶつつり切つて、私の心はこの通りですから何うか尼にさせて下さいと泣いて頼んだので、親達もとう／＼諦めて、この直ぐ近所の××院といふ尼寺へ弟子入りさせたと話して聞かせましたが、私はそれほど悲しみに沈みながらも何うしてもその娘ほどの決心は出來ませんでした。そして二三日してから母のところへ細々と書いた手紙を遣つて、是非私を尼にさせて欲しいと云つて遣りました。そして叔母とはいへ私に繼しい母が何んといつて寄こすかと、私は批判者のやうな心地で返事を待ちました。

手紙を出した翌々日の正午(ひる)私は庫裡(くり)で若い尼僧さん達と一緒に、忘れもしない暖かな里芋のお汁で晝飯の箸を取らうとした時、玄關に「御免下さいまし。」と女の訪れる聲がしました。優しい聲、聞きおぼえのある聲、と私はふと耳を傾けましたがすぐにはつとして、箸を置くと尼僧さんより先きに玄關へ走つて出てゆきました。と、そこには、撫子の紋の紺の羽織を著た母が思ひがけなく洋傘を突いてわびしそうに佇んでゐました、そして私の顔をみると、「まあお前！。」と言つたつきり、さめ／＼と泣き出して了ひました。私も無暗に悲しくなつておなかの底からせき上げるやうに泣きました。けれどもそれは決して悲しいばかりの涙ではありませんでした。私の手紙を見ると何もかも打つちやつて飛んで來て與れた母のなさけがしみ／＼嬉しくありがたかつたのでした。その晩ふたりは靜かな尼寺の座敷でさん／＼泣きばなしをしました。そして私は母からも庵主さんからも懇々と諭されて再び東京へ歸

ることになりました。その翌朝母の持つて來た信玄袋を何心なく開けましたら、なかには私のネルの肌襦袢と、袷羽織と、それから小さな化粧箱に、紅と白粉と四季の花と、使ひ馴れた眉刷毛までがちやんと揃へて入れてありました。

尼になる筈の私はまたもう一度その白粉を附けて紅を差して、母と一緒に京へ寄つて、清水さんへ詣つて、いそ〳〵と東京へ歸つて行きました。

その折のことは私の一生忘れられぬ清い樂しい思出です。

△顧みし半生の樂しさ悲しさ

林　千　歲

▽お伽噺のやうな最初の悲しみ

妾が只今、現在から過去に溯つて、熟々と過ぎて來た一年一年を憶つて見ますと、なつかしい思ひ出——遠い遠い他の世界のやうな、なつかしい思ひ出は、何と申してもお伽噺の女王のやうな氣持で暮した、あの少女時代でありました。

けれども其時代の樂しかつた事は、不思議に彼れ此れと追憶の上に瞭然とは浮び出ません。尤も、それは夢のやうに平和な暖かさに包まれて、冷たい辛さ、悲しさと云ふものを未だ見も識らない者の心には、如何して樂園を樂園と意識する事が出來ませう。何の苦もない無邪氣な樂しさの中に浸り乍ら、眞實の樂しさといふものを知らずに居た程、稚い生活には悅樂が只事でありました。併し、それ丈、ちひさな現實の出來事でも稚氣には沁み〴〵忘れられない印象となるのでありました。

其頃に一番悲しい氣の爲ましたのは、妾の生れた芝に現在なほ住つて居る菊ちやんといふ稚友達と別れねばならなくなつた時の事です。妾は父の職務上から大阪へ家族と緒に伴れられて行かねばならないのでした。生れた土地を離れる事と、親しい友達の菊ちやん

に別れる——永く別れるといふ事とか、子供らしいセンチメントを、無耶味に寂しく悲しいものにさせたのでした。こんな他愛のない、併し純な悲しみ、寂しみが、妾の生れてから最も感じの深い最初の心持でありました。

それから以後大阪での四五年も土地と氣風の異る處から、何となく寂しく年を送りましたが、飼ひ馴染んだ玉太郎といふ愛猫が失せた時の悲しみ位のもので、別して深い印象を殘した出來事もありませんでした。玉太郎と命名した猫は當時殆ど妾の親友であつたのでしたが、丁度ペストの流行した或年の秋でした。鼠取りのお藥を其猫が喰べたのではないかといふ心配が、猫の姿の見えないのに連れて一家の人々の胸に想像されて了つたので、止め度なく悲慘な想像に馳られた妾は、坐敷中の疊をあげるやら、床板を放すやらして、白ちやけた床の上にバラ〳〵涙を溢しながら、其姿を見付ける爲に、暗い暗い床下の地面を、彼方此方と覗き廻つた時には、引越しのやうな騷ぎに、眉をひそめる家人が悄くなりました。今だに其んな事は家人の笑話にされる事ですが、其頃は其んな程度の事々が一番悲しく情けない事であつたのでした。

△父にあらがふ妾の初戀

小學校から女子大學までの學生時代は謂はゞ幻のやうなまとまりのない悅樂時代でありましたけれども、妾の身にも、何時迄も然うした柔らかな風ばかりはそよいで居ては呉れませんでした。

それは或る慾求が妾の心の奧に燃え初めた故でした。漸次、藝術的本能とでも申す程に、藝術といふものが、強い慾求の的に明瞭としてからは、私の生活に藝術といふもの無しには、到底寂しくて生きて居られない事を知りました。其頃の妾に取つては、藝術はまるで初戀の對象のやうなものでありました。其初戀の對象とは新演劇であつたのです。

異狀な初戀の對象である新演劇の魅力に對して、妾は少しの抵抗力をも持ち得ませんでした。いゝえ、それよりも、もつと積極的に何物を無して迄も、其頃の若

さの鋭氣から只其一つに向つて突進まうとしたのでした。けれど、さうした妾の戀の瀬は、決して安らかに渉る事を許されませんでした。其初戀の奔流を堰くものには世間がありました。武士氣質の舊思想を心に盛り上げて、まのあたり生きて居る老いた父がありました。さうして世間の多くは、藝術などに向はうとする若い女の心を浮氣心と嘲りたがりました。武家時代の思想より知らぬ父は、藝術に愛着して行く妾の心情を、戀は戀でも、あるまじき戀、不義の戀の如くにしか思ひ知る事は出來ませんでした。併し、父に取つてそれはさもある事なのでした。不義は御家の御法度、あるまじく爲すまじき戀とも見える妾の——謂はゞ河原者の群れに我れから身も心も投じやうとする——心が、父の胸には、たゞもう醜く、憎く、解らない事であつたのです。

△異つた二つの心

　肉親の愛がやがて解いて呉れるだらうと豫想して居た妾のせめてもの期待であつた理解も、皆んな徒でありました。そよ吹く風さへ射し込まなかつた親と子の間に、藝術の影がさと射し初めてから、肉親の至情といふ濃やかな霧に包まれて居た父と妾との思想は、木と石のやうに別々なものであつた事が、まざ／＼として了ひました。

　まだ世間を少しく知らない不馴れな妾は、さうした樣々な意味での十字街に立止まつて、術も識らずに徒に苦しみました。父の心になるか、自分の心でやるか——といふ二途の迷ひは、執念深く妾の頭腦を責みました。けれど結局妾には前へ進むとも、後へ戻る事は出來なかつたのです。で、とう／＼世の善良な人の子の爲すべからざる反抗を、親に向つてまで敢て爲る事を、妾は決心したのでした。が、其決心は眞實にうら悲しいものでありました。悲しく、心に濟まない決心の裏に、妾の親に對する謝罪の誠心は、可成長い間妾を責め絞らずには置きませんでした。

　斯うして妾しは、妾の良心に泣かされ乍らも、既う文藝協會の門を潛つて居たのでした。けれど、妾の胸

には何時ともなしに良心の涙の底から、或希望が芽を吹いて來て居ました。それは妾に取つて一つの信念のやうなものでありました。相異と離反によつて一度失はれた親の心を愛の力が取り戻して吳れるに相違ないと堅く妾は信じたのでした。右手に藝術を求めて左手に親心を追つて居た一人ぼつちの私は其頃初めて人並らしい苦い悲しさの味を知つたのでした。

△不意打の樂しい幸福

それから後の二三年妾は一眼には涙を湛へ、一眼には希望を保ちながら、二つの心で暮しましたが、やがて時の力が、薄暗い穴の中の地蟲のやうな妾の心を月の輝くやうな明るい世界へ引摺り出して吳れました。妾は父から眞實の理解を得た幸福に逢ふ事が出來たのでした。それは妾の知らぬ間に、父が坪内先生に御目にかゝつてから、急激に得た不意打の幸福でありました。其時の私の悦びは、まあ何樣であつた事でしたらう。感激した妾の歡びは、過ぎて來たどの樂しさ、悦しさにも代へ難いものでありました。藝術に對して樂しい努力を爲て行くことの出來る、其當時の樂しい心が過去に取つて最も印象の深い悦樂でありました。

今思へば決して失ひ合ふ事の出來ない親と子の心情が、時代思想の相違から出た「可愛いゝ子には旅をさせろ」の俚言を、愛の上から實行させて貰つたのだといふ事が眞實に會得することが出來るのです。

妾の過去を顧みれば、激しい曲折の少ない割に、樂かつた事が瞭然あれこれと思ひ出す事の出來ない程寡いやうに思はれます。又樂しさの豐富な丈の――いろいろな意味での――得意時代もまだ有ち得ません。けれども、過去も將來も通じて妾の一番樂しい事と思ひ得るのは、田園の歌のやうな穩やかな心持の生活を片面に有つことの出來る――または有ち得たい――といふ一事であります。然し其事以外にも此れから先、出來得るならば、心に樂しい努力と、心に樂しい奮鬪とを以て荒まない生涯を生甲斐ある迄に充滿して行きたいものと思ひます。(二月九日稿)

△悲しみと樂しみ

田村俊子

私の過去には樂しみの影がなく、悲しみの影ばかりがある。

現在の自分にも樂しみがなく、悲しみばかりがある。

私の娘時代は、私の魂は低級な詩の中で育つてゐたから、樂しみたがらずに悲しみたがつてばかりゐた。年が經つて、人生の味を知つて來てからは、私の生活は又悲しみの内にばかりあつた。すべてに對する不足の悲しみ、生活の當途のない暗い悲しみ、自分の愚昧さに對する憫れな悲しみ――殊にこの頃においては、私のある一時期の間違つた思想の爲にその存在を虐げられたものが、苛虐の手の痕をとゞめながら私の眼前に纒つてゐるのを絶えず見續けてゐなければならない大きな悲しみ――斯う云ふ悲しみから私は瞬時もはなれる事が出來ないでゐる。そうして唯世の中を悲しんでゐる。私の人生には少しも日の歡びがない。唯悲しみの暗雲がいつぱいに漂つてゐるばかりである。私は近く、ある動機からすべての點において自分の過去を恐しく慚愧した。その慚愧から來る氣欝の爲に、人と人との交渉を避け、一人ぼつちの生活に閉ぢ籠り初めた。私は一層寂寥で陰欝になつた。そうして一層當途のない暗い寂しい日がつゞいてゐる。私の魂が私の過去――恥ぢと悔ゐに充ちた――を厭ふほど、私は猶更陰欝になつてゆく。私をまぎらし、私をごまかし、してゐた嘗ての遊びに、私の魂がふつゝりと面を向けまいとするほど私は猶更陰欝になつてゆく。

この陰欝と寂寥に閉ざされながら、私は時々、ある望みを持つ。其れはこの孤獨を樂しみたいと云ふ望みである。

しづかな心でこの孤獨を樂しめる日が私の魂の上にやつてくるまで、私は陰欝に、寂寥に、悲しみの内にぢつと待つてゐたいと云ふ事を愚な心で念じる。この孤獨が初めて樂しめる時は、私の人生に對してほんとうの愛が目覺めた時である。そうして、悔ゐと恥ぢで

眞つ黒に塗りこくられてゐるこの魂が、明るい自由と信仰と幸福を得られた時である。

だが、私はまだ無知の悲しみの中に閉ざゝれてゐる。恐らく、愚な私は生涯恥ぢと悔ゐに苦しみながら、ついに正しい信仰を得られずに悲しみの地獄の底に沈んでゐることだらう。

△妾の嬉しかつた事と悲しかつた事

松井須磨子

私の一番うれしかつた事といへば、さうですね。近頃では一昨年の冬に滿洲から露西亞を廻つて浦鹽から敦賀へ上陸し、車で波止場から停車場へ驅けつけた其車上の氣持でした。日本といふ郷土のなつかしみもあつたでせうが、三四ヶ月も大陸の風景になれた眼には、全く日本のおだやかな自然は、涙のこぼれるほどうれしい氣がしました。凍てた水田から片かは日のさしてゐる丘のやうな山から、田舍町の果物店に丼んでゐる蜜柑の色から、そして小春日和の柔かいそよ風から、まあ何といふやさしさでせう。あの時くらゐ風景に對して感激したことはありません。

それは私だつて戀を得た時はうれしうございました。けれどそれは言ふもつらし言はぬもつらしで、あまりに面倒な私の境遇ですから、何も申上げることは出來ません。

初めて私が『人形の家』のノラを演じました時、新聞で感激的に褒めて下さいました。あの時はたゞもうぼうつとして夢のやうで、新聞を持つ手が顫へて恐ろしいような涙のにじむような氣持でした。あれなども本當のうれしさなのでせうね。

次ぎに悲しかつた事をいへば、先づ此頃では人に誤解されない悲しみが一番强いやうです。新聞などで色々の事を書かれました時も、無論他人からの批評は批評でしかたがないとしても、同じ心持でこちらの言ふ事も聞いて貰ひ、同じ態度でそれを書いて貰つたらど

んなにうれしからうと思ひ、先方のいふことばかりが本當の事で、善い事で、こちらのは初めから嘘か惡い事のようにきめて書かれるのをつくづく悲しく思ひます。けれどそれももう近頃では慢性になつてあんまり氣にかゝらなくなりました。どうせたつて行く一生ですもの、こちらでするだけの事をして行けばそれでよいと考へて居ります。

　數年前文藝協會事件のあるすぐ前の頃、私ひとりが段々會の内で繼子のやうにされて、變な目で見られた末、やめて國へ歸れと言はれた時は何ともいへず寂しい悲しい思ひをしました。あの時の反抗的な一念今日までの私の仕事の力の一部になつてゐるのぢやないかと思ひます。



獨逸に國交斷絕を宣したる

米國大統領　ウイルソン論



▽大なる素人政治家

法學博士　某大學教授

●ウイルソンはウブナ政治家である。全然素人の政治家である。彼は一個の學究より突然身を轉じて合衆國の政權を握り美事なる成功を收めた。役者に譬ふれば更に舞臺の經驗を經ずして一躍大立物になつた格である。彼は胸に簡明直截なる政見を抱き、而して萬難を排しても之を斷行するの勇氣に充ちた人である。米國では非凡の識見と不拔の勇氣さへあれば立派な政治家になれる。素人のウイルソンが一躍

大政治家となつたのも、亞米利加の事としては決して不思議はない。

●政治に限らず兎角人は其取扱ふところの仕事を秘密にしたがる。昔の人は愚にもつかぬ事を人に隠して一子相傳の秘法などゝ稱して馬鹿に珍重がつたものである。之れ程の事はないけれども、最も公明正大なるべき筈の政治も動もすれば少數人の專門になりたがる。斯くて政權は少數者の間の壟斷するところとなつて情實纏綿、突然外部から飛込んだのでは何が何やらサツパリ分らない。直截な議論をするものを空論家と斥け所謂裏面の情僞に通ずるものにあらずんば以て政權を談ずるに足らずなどゝいふのは、彼の一子相傳の連中である。幸にして米國には概ね此弊風がない。之れデモクラシーの賜物にして、又米國人民の偉いところである。ウイルソンの如き素人政治家の突然横合から飛出し得る所以である。

●併し米國と雖も其政界に全く情實がないのではない。概して政界の大道は坦々砥の如しと雖も、偶には陷穽もあれば、伏兵の側面射撃を受くる事もある。然しウイルソンは一本道を驀らに走つて陷穽や伏兵を更に顧みなかつた。彼は恰かも敵は前面にのみあるものと確信して疑はなかつたらしい。之れ彼の素人政治家なる所以である。而してタフトやルーズヴエルトと異る所以である。從つて又民生の幸福の爲めに多くの事效を擧げし所以である。

●彼は素人政治家である。從つて彼が政務執行の原則として揭ぐるところは眞理の實現である。理想の實行である。斷じて節を情實に屈しなかつた。之れ彼が確信を以て斷々乎として多年研究の結果を實行して悔ゐなかつた所以である。關稅政策の改革の如きは此方面に於ける彼の特色を最も明白にあらはすものである。一時經濟界の變動を來たして破產するものも續々と出來、市場は不景氣を極め、大統領を難ずるの聲が獨り資本家側から許りでなく、彼の政策がよつて以て之を幸せんとしたる勞働者からまで批難された。假令一時的ではあるにせよ。之れ程激しき上下の攻擊に合つて平氣で居るのは何うしても確信の人でなければ出來ない藝當である。

●彼の確信の人なるはまた墨西哥の動亂に對して執つた處置にもあらはれて居る。大正二年二月の政變に於てウエルタはマデロを殺して政權を握つた。墨西哥の鎭定の一日も早からん事を希望せる關係の列國は彼れウエルタの敏腕に依賴するの外他に途なしとして擧つて、彼に承認を與へた。獨り米大統領ウイルソンは之によつて蒙る米國官民の多大の損害をも顧みず、唯ウエルタが道德上許すべからざる方法によつて位を簒奪したと云ふ理由の下に、斷乎として墨西哥の承認を拒んだのである。列國は彼の執拗を譏つた。專門の政治家は彼を以て政治を知らざる迂儒の好典型と罵つた。中には米國の國益を計らざる不屆な男と憤つたものもあつた。彼の政策の適不適なるやは、今玆に之を爭ふの必要はない。唯吾々は彼が正を持して動かざるを觀るべきである。

●若し夫れ彼が大正三年四月コロムビヤ政府と新たに條約を締結して、コロムビア政府の正當なる要求に全然從つた事に至つては、彼が一に正

義公道に從つて行動し、弱國の言分にも十分に耳を傾け、國家の面目などゝいふ瘦我慢を張らなかつた其心境の淡然たるに驚かざるを得ない。一體米國はルーズヴェルトの時に非常な惡辣な手段によつてコロムビアの恨を買つたのである。その譯はパナマ運河を開鑿せようとした時、運河地帶の割讓をコロビア政府に要求したけれども承諾を得なかつた爲めに、米國は政府反對黨のものを使嗾してパナマ地方に於て叛旗を飜さしめ、其結果獨立してパナマ國を創立し、亞米利加は直ちに之を承認して運河地帶を讓り受けた。之れ明治三十年の出來事である。而してウイルソンは新たにコロムビアに交渉して、第一にパナマの獨立に關聯する米國の態度の不法不當であつた事を自ら匿くす所なく承認し、第二にコロムビアの要求する丈けの賠償金を全部拂ふ事にした。實は此兩國の交渉は永い間の懸案であつたが、ウイルソンに至つて外交軟弱だの、弱國に諂をするのが大國の面目に關するだの、いろ／＼批難があつたに拘はらず、平氣でコロムビアの要求に承服したのである。而して之が爲めに結局ウイルソンの聲望は益々盛んになつた。彼もエライが彼を讃める米國民も亦エライ。

●彼が從來の慣例に拘泥せずして、其所信を赤裸々に實行するの最も明白なる例證は、彼が初めて大統領になつた時、新聞記者のページ博士を英國大使に任命した事に由つて顯はれて居る。駐歐大使は貧乏人の勤まる商賣ではない。殊に英國大使を以て最とする。公使大使は何處の國でも月給や交際費では足りない。殊に米國のは本國の金持が堪えず歐羅巴にやつて來て、貴族社會と接近する事を希望する。從つて米國大使は其接近の機會を作つてやる爲めに盛んな夜會をせねばならぬ。それ丈けでも費用は莫大なものだ。故に英國大使は每年百萬以上の私財を投じ得るものでなければ勤まらないとなつて居る。然るにウイルソンは就任の初め意外にも、基督敎青年會の監事たるモット博士に交渉し、其拒絕に逢ふや轉じて新聞記者ページ博士に英國大使にならぬかと相談をかけた。貧乏人の博士は驚いたといふよりは寧ろ之を眞面目に受取らず、御冗談を仰るなと答へた。之に對するウイルソンの返事が面白い。金持でなければ大使公使になれぬといふ慣例が間違つて居る。範圍を之に限つては適材を拔擢する事が出來ない。夜會をしたり高價な着物を着たりしなければ外交官が勤まらないと思ふのが間違である。粗末な背廣を着て行つても用が辨じる。是非共多くの人を集めて御馳走をせねばならぬといふのなら、茶漬に澤庵丈けにするのが寧ろ米國的だ。一つ君の見識を以て從來のレコードを破つてはどうかと。●流石はページ博士、成程と合點して直ちに其交渉に應じたと云ふ事である。此逸話は最も明白にウイルソンの人格を語るものであると思ふ。

▽學生時代のウイルソン

農學博士 法學博士　新渡戸稲造

我輩が初めて亞米利加に行つたのは明治十六年であつた。行先きの學校はボルチモーア市のジョンス・ホプキンス大學であつた。それは此大學の創立になつてまだ程ない頃で、亞米利加の高等教育の歴史には一の新紀元をなした大學である。ギルマンといふ教育界の雄物が、所謂大學院組織を骨髄した高等な學府を開いて、已に學士になつたものゝ爲めに更に高等な專門的教育と言はんより寧ろ研究の方法を授けるのを目的としたのである。故に我輩の行つた頃には米國では最高の大學と稱せられて學生の數こそ自然少かつたけれども、ハーバートやコロムビヤの遙かに及ぶものではなかつた。僕が行く前に日本人で此大學に入學したものは故箕作博士、京都大學の久原博士であつた。我輩が行つた時には札幌の佐藤博士が居つたのみで、其後元良、渡瀬、長瀬、家永等の人々が入學された。右の如き性質の大學であつたから、學生も普通の大學生よりも遙かに年齢が上てあつた。中には白髪の老人まで居つた。又或は已に一定の職に數年間從事して一年乃至は二三年の暇を得て研究に入學するも少くなかつた。我輩は他の分科の事は知らんが、我輩の入つたのは歴史政治經濟の科であつたが學級といふものはなく、三十人足らずの學生に對して教師は一通りの講義をするが、其時間は僅かに一週十時間内外である。學生の重な仕事は各自の選んだ問題を研究して、教授は之を指導し、常に相談に與つたり或は材料を蒐集する爲めに十分便利を計つて呉れた。現に佐藤氏の如きは北海道廳の囑託を受けて在學されて居つたから、其選ぶ問題も米國公有地の處分なる問題（詰り米國の田制）で（序に云ふが其時調べた小册は卅年後の今日も尙亞米利加の二三の大學に於ては教科書になつて居る）我輩は農政或は農業經濟を調べる積りであつたのだが今玆にクダ〳〵しく述べる必要はないが、其便利は甚だ備つて居なかつた。世人も知る通り英米では卅年前は政府が直接に農業に關係する事はなかつた。從つて農政に當る文字さへもなかつた。故に指導教師の切なる勸告によつて日米關係史なるものを調べた。

斯くの如き遣方であつたから、學生悉く特定の問題を捉へて其研究に日も尙足らぬといふ有樣であつて、互に交際する事も少く、亞米利加名物のベースボールに一所に行つて見るとか、芝居見物をすると云ふやうな事は無かつた。然るに教室——僕等の政治歴史經濟等の教室——は圖書室であつて、卅人許り座れる大きな長い机があつて其上には新版の書籍と月刊の各國の新聞雜誌がずつと並べてあつて、メイ〳〵の定めてある椅子にかけると直ぐに新聞なり雜誌なりが眼の前にあるやうに——見まいと思つても自然何かの思想に觸れるやうの仕組であつた。又互に話す事も地味な學究的の事が多くて、一口に云へば全體の周圍が學究的であつた。故に當時米國の新聞や雜誌では、ジョーンス・ホプキンスの大學には交際が無いといふ事を批難した位であつた。されば此頃席を同じうし

た人々の中大抵今日米國に於ては有數な位置を占めて居る人が多い。中にもウイルソン氏の如きは最も著名なるものである。

我輩が初めて入學した頃には已にウイルソン氏は二年目であつたけれども、先にいふ通り學級がなかつたから始終一所に同席して同じ講義を聞き、そして一週に一度づゝは學生の研究の演說があつた。其頃已に同氏は年輩も我々よりは四五歲も上であつたし、殊に氏は已に法學士であつて辯護士の職について居つて、それを捨てゝ歷史政治を研究するに入つて來たのであつたから、何んとなく世慣れた風采で、殊に氏はバーヂニア州の生れであれば、所謂南方の紳士と亞米利加人は呼ぶが――此事を今玆で說明するの必要あるか何うか知らんが、合衆國の南部には六十年前まで奴隷の制度が行はれて居つたが爲めに白人は勞働に從事しない所謂旦那株であつて、喰はねど高楊枝風の氣前を養つて居つた。故に今に此氣慨が殘つて居つて、南方の紳士と云へば日本の士族見たやうな樣子がある。ウイルソン氏も其一例である。普通にアメリカ人に見る活潑で、無遠慮で、出しや張るやうな所のない、餘裕のある、ゆつたりした圓滿な君子的の態度を當時既に備へて居つた。又學問を云へば恰度コングレッショナル・ガヴアメントなる標題の下に、數章に亘る論文を書いた。其後それを學位の論文として學校に提出し、且つ之を公刊して今尙ほ世に行はれて居る。此論文を度々我々の演習科で讀んだ。氏は其時分から（今も或は然らんが）英吉利のベージョー氏に私淑して居つて、啻に思想のみならず文體もベージョーに倣つて居つたらしい。コングレッショナル・カヴアメントなる標題もベージョーが英吉利の政體をパーリアメンタリー・ガヴアメントと稱したのに範つたかと思はれる。此論文を演習科に讀む頃已にウイルソン氏は餘程有名であつて、ウイルソンの番だと云ふと我々は一種の尊敬を高めたものである。のみならず教師達も時別の尊敬を現はして居つた。議論が旺んになれば、教授が、ウイルソン？君はどう思ふと云ふ調子であつたし、又此書物を公にするに方つて其批評が當時學界の泰斗ともいふべき人々から好評を得たが爲めに、小さな書物であるけれども一時にウイルソンの名が廣がつたものである。それから彼はプロンスの大學教授に選ばれて就任された。僕は學生時代の事をいふのだから其後の事をこゝには云ふまい。

ウイルソンは一時學生時代に神經衰弱にかゝつて二三ヶ月學校を休んで居つた事を今記憶する。恰度佐藤君と我輩の下宿して居つた同じ町に十軒許り先きにウイルソンが下宿して居つたから、學校の歸り或は散步する每に屢々一所になつた事がある。病氣で休んで居る時などは、我輩は貧乏書生でヒドイ服裝をして居つたからでもあらうが、事更ら紳士染みた立派な方だなと思つた事が度々ある。其頃でも人に向つて誠に愛想の好い、決して人を外らしたりするやうな樣子がなく、圓熟な紳士的の人で、一口に云ふ大人染みた人であつた。故に後日相當な人にはなるだらうとは思つたが、大統領にまでなるとは其時分には想像もしなかつた。況んや今回の獨逸に對する政策の如何によつては、萬世歷史に殘る人になりかけて居るが、左程の人とは當時夢にも思はなかつた。

▽學者的政治家としてのウッドロー・ウィルソン

目白里人

歐洲戰亂開始以來、將來の平和仲介者を以て目せられて居た米國大統領ウッドロー・ウィルソン氏は、昨年十一月の選擧に於てその再任が確定してより、俄に以前に倍する國際政治的飛躍を始め、昨年十二月下旬に於ては、交戰諸國に通牒を發して講和條件の提示を求めて國內國外の批評の前に立ち、去る一月の二十二日には上院（セネート）に於て、米國が世界の平和計畫に參加すべき權利と義務とを有することを說き、又歐洲の戰場に於て勝利なき平和を結ぶことの必要を論じたる大獅子吼をなし、二月に入つて獨逸が聯合國沿岸に對する一般的潜航艇戰を宣言するや、直に米獨國交斷絕の手段を取つて世界を驚倒した。此間の矢繼ぎ早やの大活動は天下の耳目をして一齊に此民立國の元首に向はしめた。此今方に油の乘つて來て居る世界政治上の大立物は、今より七年前、即ち一九一〇年に於て彼がニユー・ジャーシーの知事として、始めて實際政治の渦中に投じた迄は、單に識見高邁なる一學究、及び學德高き一大學總長として其名を知られたに止つたのである。

而も學者として盛名を馳げた人が、一朝選ばれて一國の元首となり、年來蓄積した政治的智識を傾倒して、縱橫無盡に大經綸を行ふ所に、舊世界の諸國では見られぬ米國社會の一面が反映せられて居るではないか。ジエームス・ブライスは、その名著『米國平民政治（アメリカン・コンモンウエルス）』に於て、米國の諸大學が社會の諸方面、殊に政治生活に多くの人材を供給して居ることを述べて居るが、事實上米國の諸大學程社會と接近して居る學府は外にないであらう。諸大學の總長及び教授の時事問題に關する意見は、社會から多大の尊敬を以て傾聽せられ、又是等の諸大學の門戶を出づる多くの若き卒業生は、公私各方面の事業に携はり、その未だ失はれざる理想主義を實生活に注入し、時としては大學教授自らが世間に打つて出でゝ、諸般の實務に執掌することすら少からざるは、人の周知する所である。わがウイルソンの如きは、その中に在つて鐵中の錚々たるものである。

ウッドロー・ウイルソンは一八五六年十二月二十八日を以てヴアージニア州のストーントンなる宗教家の家庭に生れ、一八七五年にプリンストン大學に遊び、四年の後ヴアージニア大學の法科に轉じ、一八八二年よりジョージア州のアトランタに於て辯護士を始めたが、政治法律の學術的研究が單なる法律の應用よりも更に其性癖に適するものあるを曉り其翌年よりジョーンス・ホプキンス大學に入り、史學及び政治學を研究し一八八六年を以てそこでドクター・オヴ・フイロソフイーの稱號を得た。

それより彼はそこここの大學に於て敎鞭を取つたが、一八九〇年に最初の母校たるプリンストン大學の敎授となつて法理學の講座を擔當し、

夙に一八八七年以來毎歳第二の母校たるジョーンス・ホプキンス大學で行政學を講じ、其博學達識を以て、名聲を遠近に馳せた。

此頃より彼は頻りに教育上の諸問題に關する意見を公表して其見識の非凡なることを認められ、一九〇二年選ばれてプリンストン大學總長となり、學德手腕兼備の好大學經營者として、同僚、學生、及び公衆の推服する所となつた。

併し乍ら大隈侯でないが、政治は彼の生命であつた。されば彼は大學總長の劇職（米國の有名なる私立諸大學の總長の地位は、文字通りの意義に於て劇職である）に在る時も、決して政治の學術的研究を棄つることなく、依然として時々其研究の結果を書齋より讀書社會に向つて投げ與ふることを怠らなかつたが、一九一〇年遂に民主黨より推されてニュージャーシーの知事に選擧せられ、更に一九一二年同じく民主黨より推されて大統領の候補者として逐鹿場裏に馳驅して成功し、翌一九一三年大統領の職に就いて、玆に米國男子の最高理想とする晴れの舞臺に立ち三十餘年來の蘊蓄を傾けて、之を實際政治の上に披攊することを得るに至つた。

彼は就學の初頭より政治舞臺の上に活躍することを以て、其理想とした。彼が性來演說に臆病であつたにも拘らず、學生時代より既に此先天的不利益に打勝ち修養と工夫とに依つて立派な雄辯家となつたのは、一は政治家としての素質を作るためであつた。而して彼は學者として盛名を馳せて居た間に、學術的演說家としても非常なる成功を收めて居た。而も同時に彼は精力絶倫なる著作家として、大に世を益した。一八七九年、彼が尙ほプリンストン大學に在りし時、彼は二十三歲の一靑衿として『合衆國に於ける內閣政治』(キャビネット・ガヴァンメント・イン・ザ・ユーナイテッド・ステーツ)と題する一論文を『雜誌、インターナショナル・レヴュー』に寄せ、其歲に似つかはしからぬ智見と創意とに依つて、後世畏るべき才華の閃きを見せた。又彼がジョーンス・ホプキンス大學在學中、彼の最初の著書たる『米國々會政治』(コングレッショナル・ガヴァンメント)（一八八五年出版）を出したが、此書はバジョットの名著『英國憲法』(イングリッシュ・コンスチチューション)と比肩すべきものとして、今でも米國の政治的古典の一として讀まれて居る。それ以來の彼の政治、歷史、及び文學上の述作を一々玆に列擧するのは、煩に堪へぬから之を省略する。之に彼の時々諸雜誌にて發表した論文を加へる時は、彼の著作家としての勞作の如何に多かつたかを想見することが出來るのである。

一九一〇年彼が學窓より出でゝニュージャーシー知事となつた時には腐儒何するものぞと嘲笑した者は少くはなかつた。併しそれは誤れる臆測であつた。大學總長の劇職は彼の行政的手腕を訓練するには十分であつた。之に加ふるに、彼には學生時代より陰忍蓄積し來れる政治的智識と云ふ武器があつた。故に彼は就任早々、非凡なる技倆を州政の上に揮ふことを得た。彼は彼の選擧せられたのは、毫末も自ら求めたゝめでなかつたことを宣言し、黨派の首領としてよりは寧ろ人民の代表者とし

て政務を視るべきを誓ひ、行政刷新、税制改革、及び企業會社の監督の三綱領を標榜し、鋭意之が貫徹を謀るべきことを聲明し、而して其聲明した所を誠實に實行した。彼は不言實行の蔭に隠るゝ狡猾なる某國の官僚政治家や、多辯不實行の無責任的宰相とは自ら其選を異にし、克く公言し克く公行する立憲的政治家に外ならなかつた。殊に彼が掛け出しの政治家として、黨弊蟠屈せる州政を整理し、以て大に治績を擧ぐることを得たのは、彼をして直に世間の讃歎の標的とならしめた。彼が該州知事として在任中州立法部を通過したる選擧法改正法案、工場主賠償責法案、公益事業取締委員會法案及び選擧腐敗行爲取締法案の如きは皆、各個關係題目に就て立法例の典型と見做されて居る。

聯邦大統領としての彼の政治上の功績も亦、極めて顯著なるものであつた。彼は此地位に於ても依然として、間接には彼が三十餘年來の研究に依つて得たる政治上の智識の應用と理想の實現とに向つて猛進し、直接には彼が就任の際に發表した政見の腹藏なき實行に努力した。

彼の就任演說は其主張の堂々たることゝ、其措辭の莊重瑰麗なることとの外に、之に含まるゝ提案の極めて實際的にして、時代の要求に適合して居たゝめに、內外人の注意を惹いた。彼は先づ關税改革并に通貨及び銀行制度の整理の已むべからざる所以を論じ、企業會社取締の必要を說き、農業の保護及び獎勵、并に各種の富源の保存及び開發の急務を唱へ、一轉して社會關係に於て公正を實現するの件に言及し、小兒、婦人及び勞働者の保護に關する手段を採ることを約し、衛生純良食品、及び勞働者雇傭條件に關する法規を制定せざるべからざることを主張し、最後に民衆の代表者民意の解釋者としての政治家の社會公衆に對する責任を高調し、一語また一語、事實と崇高との調和し、理想と現實との抱合する所に至つて、舌端火を吐くが如き熱辯を結んだ。

四個年間に於ける任期中に於て、彼が如何に忠實に當初の聲言を實行するに務めたかは、人の驚異に値する所である。殊に關税改革、企業取締、聯邦準備銀行の設定、鐵道勞働者從業時間の制限の如き內治上に於ける彼の治績に就いては、彼の政敵と雖も之を認めざるを得ざる所である。唯萬全を人に求むるは無理なことである。されば彼がメキシコ政策の如きは寧ろ之を失敗と見るを妨げざるべく、少くとも之を成功と認むることは出來ないのである。又彼の歐洲戰亂に處する外交政策は、今尙ほ毀譽紛々の間に在つて、ブライアン一派の空想的平和論者よりは强硬に過ぐると謗られ、ローズヴェルト一派のジンゴイスツよりは軟弱に過ぐると罵られて居た。併し乍ら今回彼が米獨國交斷絕を宣してよりは、ロ氏及び其追從者は、極力ウイルソン大統領を後援することに決意したことは、近頃の海外電報に依つて之を知ることが出來る。

ウイルソンは一面より見れば理想家であるが、純然たる理想家であるには、彼の常識が餘りに圓滿であり、彼の硏究が餘りに實際的である。彼は又一面より見れば實際家であるが、純然たる實際家であるには、彼の教養が餘りに深遠であり、彼の趣味が餘りに高尙である。彼より見

れば、理想は現實の連續であり、現實は理想への階段である。彼の政治學は歴史的發達を根據として居るが、彼の哲學は個々の歴史的發達の終極目的に向ふ道程を發見せずには置かない。彼は人類の理想として平和人道を說くが、現實の問題として陸海軍の擴張充實を畫策することを怠らない。彼は世界平和のために國民的祈禱日を設けて歐洲大戰亂の終結を祈願することを命じたが、同時に軍備擴張（プリペアードネス）の示威運動の先頭に立つて街衢を練り歩くことも辭さなかつた。之を矛盾とするは、彼を解せざるものである。彼に取つては、不完全なる現實は、完全なる理想に向ふ道程であるが、同時に彼は兩者を同一に取扱ふ程の盲目漢ではないのである。

彼は徒に平和人道を高聲に說くのみならず、之が實現に向つて絕大の努力をした。歐洲戰亂が勃發した時は、彼の前夫人の病が方に革つて居た時であつて、彼は傷める心を以て彼女の生死を氣遣つて居た。けれども彼の人道的義務心は、彼をして調停者として交戰諸國間に立つ機會を逸せしめなかつた。當時彼が八月五日附を以て各交戰國の元首に送致して和解調停を申込んだ通牒は、彼女の死亡の前日、彼がその枕頭に看護しつゝ筆を採つたものであると言ふ、悲痛慘憺たる因緣の附隨して居るものである。

けれども彼は未來の平和に貢獻して居る間に、國家當面の必要を忘れる樣な夢想家ではない。彼は一方に於て歐洲戰亂の終結に意を勞し、少くとも極力合衆國をして戰禍に捲き込まれしめない樣に計つたと同時に、他方に於ては交戰國の雙方に對して、必要に應じて侃々諤々として中立國の正當の權利を主張し、合衆國民の生命財產を保護することに努力したのは人の知る所である。

彼が去る一月二十二日に上院に於てなしたる平和演說中に、勝利なき平和の必要を論じたのは、一面に於て米國の實際的必要に觸れて居るものである。米國の安危は歐洲諸國の國力の均衡に負うて居るものが少くはない。殊に英獨兩國間の勢力の平均が狂うて、孰れかの一方が他方に優越する樣にならば、米國は直に大なる危險に瀕するのであるから、米國から見れば、雙方が常に五分々々の勢力で互に睨み合つて居ることは極めて望ましい事であるのみならず、絕對的に必要なことである。是れ兩交戰國から合衆國への通牒には、互に敵對國を討滅する意志なきことを常に表明する所以である。ウイルソンが歐洲將來の平和の保障の條件として交戰相互間に勝敗なき平和を結ぶことの必要を唱へたのは、必ずしも米國の眼前の實際的必要を無視し、只平和人道のみの立場より立言したものではない。米獨國交斷絕後に米國が何ほども獨逸に對して開戰するか否かの問題は、此點よりも餘程深く考察して見る必要がある。

（六―二―一九）

▽ウイルソン論

鶴見祐輔

一、米國政界の新紀元

「今回の市俄古の大統領預選會に於て、共和黨はすんでのことで、リンカーンを選出する所であつた」とサタデー、イヴニング、ポーストのサミュエル・ブライスは揶揄した。實際、過去四年間の赫々たるウイルソン氏の治蹟を向に廻した共和黨は、大統領候補者選定に關しては、一方ならず手古摺つたのである。オールド、ガートの連中が、何とかして、黨内の急進派を鎭壓しやうと焦るだけ、候補者の選定が困難になつた。そこで大會席上では、又しても又しても、リンカーン賞讃演説を試みて、反對黨のウイルソンはリンカーンの政策と是々の點が違ふと、誹難したのであつた。それなら、いつそのこと、リンカーンを選出したらよからふ、と扨てこそ皮肉なブライスが揶揄したのであつた。然し積水の如き各洲の大勢は、とう／＼進歩派の頭目たるヒューズを選出してしまつた。若し反對黨にウイルソン氏が居なかつたならば、共和黨はヒューズの如き人格者を推し立てなかつたに違ひない。孰れ共處らのスタンド、パツターを引摺り出したに相違ない。即ち知る千九百十二年七月、ウッドロウ、ウイルソンが初めて選定せられて民主黨の大統領候補者となつたと言ふことは、米國政界に於ける一新紀元である。

二、世界的同情

「米國の憲法は、名を平民政治に藉つて、實は平民の勢力を最も阻止することに苦心せる憲法である」とのことは米國の政治を研究する者の必ず首肯する名言である。二重三重の選擧法に依つて、最も巧妙に民意を制限したのが憲法制定者ハミルトンの苦心であつた。爾來一百年米國政界は常に老人と保守派の跳梁に委して居た。其の大勢を最痛快に、最激烈に裏切つたものは、實に千九百十二年の總選擧である。其の急進主義の大潮に乘じて、最も勇ましく奮闘したのが、我がウッドロウ、ウイルソン博士である。プリンストン村裡の村夫子が、壯烈なる新自由主義の大旆を掲げて、米國全土を風靡したのである。換言すれば、ウイルソンと言ふ名は、現代に於ける新理想新空氣の代名詞である。百年鬱屈したる米國の健全分子の政界に喚び起した麗はしき凱歌である。此意味に於て、ウイルソン博士の成功は、正義を尊び自由を愛する全世界の人々の共同の喜であらねばならぬ。

三、人格

ウイルソン博士が日本人の中に於て餘りに好評なのを訝る米國人もある。民主黨の平和主義がそんなに日本人の氣に入つたのかと屢々訊く。然し夫は大なる誤解である。ウイルソン氏が日本で人氣のあるのは、氏の政策の故では無い。氏の人格の故である。氏の人格は殊に我々日本人に對し獨特の牽引力がある。馬上に天下を取る者を賤しんで、德操を以て四方を風靡する者を尊ぶのは、東洋傳來の思想である。哲人賢者を推

して政柄の全局を執らしめるのは東洋人の理想である。此意味に於て、人格高朗なるウイルソン博士は、先天的に日本人に氣に入る政治家である。粗野なローズヴエルト氏や、因循なタフト氏の後を受けて、此淸貧な一哲人が大統領になつたと言ふ一事丈でも、日本國民の血を湧き立たしめるに足りるのである。即ち氏の政治的生命の中核を爲すものは、氏が理想の人であり、信仰の人であると言ふことである。此點に關しては詳論するの必要がない位である。

四、性格

餘裕のある人 との一句に或は氏の全性格は言ひ盡されて居るかも知れない。彼は學生時代にも極端なる勉強家でなく。大食會（アリゲーター、クラブ）の會員と蹴球會の幹事とを兼ねて平氣であつた。大學總長時代にも、古典的な顔をした教授連の間に伍して冗談ばかり云つて居た。大統領となつて後も世界的大問題を前にして、綽々として閑日月がある。家庭の食卓に於ては、聽者が恍惚とする樣な面白可笑しい話ばかりして居る。公會の席上に於ける演說が如何に諧謔に富んで居るかは其の演說筆記を見ても窺ひ知られる。四時春風駘蕩たる所に斯人の偉大があるのである。

闘志旺溢 と言ふことが又同時に氏の半面である。氏は自分の信ずる事柄に關しては、百萬人と雖我れ之かんの慨がある。否寧ろ態々挑發的態度に出るのかと思はれる程、猛烈に突進する。大學總長時代も金持の怠け息子退治に掛つて金權の反抗を買つたり、洲知事時代にも、大統領直接選擧法案で自黨他黨双方の反對を受け乍ら、之を壓倒したり抔して居る。近頃では、一昨年一月八日、インヂイヤナポリスで試みた、ヂヤクソン晩餐會演說の如きは、最も手厳しい一例である「過去三十年間共和黨には一新思想も一新事業も無し」と喝破して、甚しく共和黨員の反感憤激を買つた。然し之と同時に、全國の民主黨員の士氣を鼓舞したことは非常である。最近には交戰國に送つた仲裁通牒に於て、「兩交戰國は同一の目的の爲めに戰つて居るのである。」と喝破して英佛の憤怒を意としなかつた大膽不敵の態度は、氏でなくては出來ない藝當である。世上往々にして、氏の出身の學者である爲めに、果斷決行の勇に乏しいと考へる者もあるけれど、夫は氏の眞性格を解せざる說である。然し氏の這個の勇氣が何處から來るかと言ふと、固より其の正義を踏んで挠れざる信念より來るのではあるが、又同時に

明晰なる頭腦 にから來ると思ふ。氏の理解力の透徹して居ることは著明の事實であつて、ヘール氏は彼を評してウイルソン博士の腦髓は、何時も今取出して掃除をして油を引いたばかりの樣に見へると言つた。如何なる場合にも氏の理性は剃刀の樣に切れる。氏が大統領就任早早の大事業であつた、關稅改革問題に際しても、あの複雜な品目、稅率手續等に付て水際立つた決裁を下した。そして其の原因は彼が何人よりも關稅の事が善く解つて居た爲めであつたと言ふ。又ニージャーシー洲知事時代に例の直接選擧法案を提出した時の如きは、反對黨たる共和黨の大會に出席して、四時間半に亘る舌戰を試み、其の中三時間は氏が辯じて居たと言ふ。其の結果反對黨員全部の贊成を博したと言ふ程の絶倫

な才幹を示して居る。又今回の大統領選擧に際しても、避暑地の露臺から聽衆に演說して、ヒューズ氏の最大事蹟と稱せられた、八十仙瓦斯問題を完膚無き迄に痛擊して居る。歐洲開戰當時、ローズヴルト氏が大統領の緩和政策を攻擊した時、或知名の記者は、ウイルソン氏が白堊館の露臺に立ち現れて、儼然として一時間辯じたならば、ローズヴエルト氏は之に應へる爲めに一週間位怒鳴つて步なければなるまいと笑つた。思ふに方今の米國に於て、理知の徹底したる點に於て、氏の矢面に立ち得る者は、ルート氏位の者であらう。氏が往々人言を容れないとの非難のあるのは、自分の方が何人よりも明瞭に理解して居るからであると言はれる。

健全なる判斷力　然し氏の强味は單に事實を理解し記憶すると言ふ丈ではない。當世の問題に對し常に正鵠なる判斷力を有すると謂ふ點である。氏は常に楯の兩面を見て、公平なる判斷を下す人である。

一時の衝動性を以て疾風迅雷的に決行するローズヴエルト氏とも異り、

一方に偏したる主觀論を以て事物を判斷するブライアン氏の猛𨼆奔逸とも異り、徒に左顧右眄して法理空文に拘泥するタフト氏とも異り、されぱとて透徹明晰に過ぎて、平民の要求と沒交涉となり易いルート氏とも亦撰を異にして居る。氏は理論の正鵠を期するけれども、眼は常に當世の實生活を離れて居ない。氏が先年立候補當時、紐育タイムスは、當世の活問題に對する氏の見解を叩いて之を掲載して、其の判斷力の健全であることを極力推賞した。判斷力の正確とは平たく謂へば、常識と言ふ

事である。此意味に於て氏は典型的な米國人である。之が爲めに氏の所論が往々にして微温的であるとの觀を呈するのは已むを得ない。白耳義侵入當時、ロ氏が大統領であつたら、倏忽として獨逸に開戰したかも知れない。然し氏は、獨逸にも五分の理屈あることを察して輕擧しなかつた。墨西哥に對しても同樣である。氏は平民國の大統領は民論の歸嚮を察して之を導くものと信ずるが故に、一方の理論のみで盲動しないのである。米國が氏を再選して、振古未曾有の大局に當らしめたのは、氏の健全なる判斷力を信賴して、安心して國政を托するに足ると考へたからであらう。今回の米獨國交斷絶に際しても、一部少數者を除いては、闔國翕然として氏の行議に追隨したのも、亦其の決斷に對する反響であらう。

氣品　米國に移住して來た英國人に大凡そ二種類あつたことは、今も尙ほ南部諸洲と北方新英洲との氣風好尙の差異に其の痕跡を留めて居る。**貴族の流を享けたヴオジーニア洲に於ては殊に其の傾向が著しい。此點に於て、**同洲スターントンの町に生れ、ジオージア洲で育つたウイルソン氏は、其の典雅なる氣品を以て、爭ひ難い環境の影響を示して居る。或傳記々者が彼の學生時代を評して、彼には高尙なる**貴族の風格が**あると、言つたのは此謂であらう。乍併之は**持つて生れた彼の氣品で**あつて、彼の思想に至つては徹頭徹尾平民的であつた。**此點に於て彼は甚**しく第三世大統領ジエフアーソン氏に酷似して居る。彼が往々にして、四圍に超然（アルーフチス）として居るとか、時には人を壓する樣な自矜の態度がある

ると言はれるのは、流俗に卓立する其の風格氣品の厭き遊ひであらふ。然し彼が如何に虚飾を悪むかは、彼の到來以來の白堊館は、最も夜會舞踏會が少い時代であると言はれるのでも知れる。之が爲めに社交界の貴婦人の逆鱗に觸れることも彼は意に介しなかつた。又裝飾品店料理店等の商人等の連合的非難をも氣に掛けなかつた。

五、理想

氏の理想は氏の著述や演説に常に明瞭に顯れて居る。故更に所説を談昧にして、將來の行動に不便少からしめやうとする、卑怯な從來の米國政治家と全く撰を異にして居る。氏の思想の根柢は、プリンストンの學窓に於て英國議會史を繙いで、慨然として志を立てた時と、全く異つて居ない。即ち民權の伸張個人自由の發達である。其の所論の大體は、第一次の選擧運動の時の演説集たる、新自由主義に明である。氏はプリンストン大學に於て政治學を講じたるの日、常に米國の大統領は摂理に依つて定まる者であつて、國歩艱難の際は必ず偉人を惠まれると唱導したと言ふことである。氏が今回奇蹟的勝利を博して、再び白堊館裏の人となつたに付ては、世界の變局を前にして感慨無量なるものがあらふ。彼が如何なる治蹟を殘して、世界人文史上に一大鴻爪を留むべきやは最も興味ある問題である。革命戰爭に於て華聖頓を惠まれ、南北戰爭に於てリンカーンを惠まれたる北米合衆國は、玆に再び世界大亂に際してウイルソンを惠まれたりと言ふべきである。

▽ウイルソンの人格と理想

文學博士 姉崎正治

日本の或る政治家が、社會心理の研究會で盛んに自分の抱負を述べて、要するに政治は手品であるといふ事を斷言し、且つ其意味での政治を説明された事がある。而して其政治家は其後實際の政局に當つて、隨分手品も遣つたやうである。倂自らは其手品の説明を聞いた時考へた。日本の政治家が悉く斯くの如き考を抱いて、斯くの如き政治を行ふなれば、日本の社會は遂に手品の使合ひで取返しの付かない狀態になりはしないか。此憂ひは現在に於て段々事實になつて居るやうである。獨り政治家のみならず、社會一般の人も、政治を一種の手品若しくは單に一政略問題の如く考へ、政治と策略との區別をし得ないやうになつて居る。

大統領ウイルソン氏に對する日本人の考には、日本の狀態を以て彼を評し、日本の政治家も手品を使ふからウイルソン氏も手品を使ふだらう。日本の政治界は要するに閥族と政黨との爭ひになつて、國民の大多數は與り知らない樣な狀態である。それから類推してウイルソン氏並にウイルソン政府の仕事を黨派的の見方で觀察する人が多いやうである。此等は要するにアメリカの國狀に通ぜず、殊にはウイルソン氏の人物を知らない爲めから出る誤解である。ウイルソン氏を理解するには、日本風の色眼鏡で見ないで、直ちに其人物と政策とに就いて觀察しなければならぬ。

手短かに言へば、ウイルソン氏は徹頭徹尾非策略の人である。主義理想の人である。其主義が場合によれば餘り强い自信の爲めに狹められることもあれば、又理想が時としては空淡であるが如く見える場合もある。然しながら策略を排斥して主義理想を建てるといふ上に於ては、大學總長としても、州の知事としても、大統領としても一貫して居る。一例を擧げて見よう。ウイルソン氏がプリストン大學の總長をして居る時頑固總長(The obstinate)といふ名があつた。言ひ出した事は必ず貫徹する。或る時、大學の中で學藝大學部の建物を改築する場合に、職員全體の希望として大規模な設計を提出した。總長ウイルソン氏は、獨り財政問題のみならず、左樣な贅澤な建物は、學生の爲めによくないといふ理由で、其設計を否認した。然るに其後間もなく富有の人が其建物の爲めに大金を寄附したので、大學全體の希望としては、どうしても其建物が欲しいといふ事になつた。さうなつても、總長は自分の一旦決定した意志を曲げない。そこで大學としては其寄附金を受けるか、若しくは總長の意志に從ふかといふ羽目に陷つた。其結果ウイルソン氏は自ら進んで辭職して了つた。所謂頑固總長の面目は此一事にも表れて居るが、又人の運命は奇妙なもので、總長を辭職した後、友人達の同情ある推選によつて、ニユージヤーシー州の知事になり、それから直ちに轉じて大統領に選擧されるやうになつた。

大統領になつてからの遣口を觀ると、自分の信ずるところは何處までも之を主張し、主張するところは必ず實行して今日に至つて居る。勿論突飛的に主張するのではなく、一事を主張する前に、如何に熟考するかといふことは、各々其事件に關する宣言、教書、或は演説を見れば分る。何事かを宣言するには、非常に字句を洗練し、簡潔に而かも强く言ひ表はしてある。彼の有名な中立宣言にしても、ルレタニヤ號撃沈の抗議にしても、或はメキシコ武器輸入問題の宣言にしても、又大統領再選候補の宣言にしても、今度の講和問題通牒にしても、總てウイルソン氏の宣言或は演説は一言一句皆千金の重さのあるやうな文章で出來て居る。決して場當り的の演説は遣らない人である。卽ち宣言を發表するまでに十分考へて之を貫く覺悟があつて、初めて言明の人である事が明白に見える。

僕自らばウイルソン氏が大統領になつて、一年餘後にアメリカに行つたが、それまでに考へ及ばなかつた事を其後段々と發見して來た。卽ち第一に大統領の人物、又その自信が、如何にウイルソン時代行政の中軸となつて居るかといふ事。第二はウイルソン行政の下には段々民主・共和兩黨の分界線が無くなつて居るといふ事。此二つが主要なる點であるが、今日まで四年近くの間深い興味を以て觀察して見るに、ウイルソン治下の米國政治に於て此二點が益々重大なる現象となりつゝある。從來と雖も、合衆國の政治で、其時の大統領の人物、性格、又其人の指導(leadership)が重要であつた事は勿論であるが、然し恐らくリンコルン以來ウイルソン氏程其人物の力で—言葉を換て言へば黨派政策でなしに人物の力で政治を指導した人はなからう。勿論ウイルソン氏は關稅問題勞働問題などに就いては、民主黨元來の主義政策を奉じて居る人である。然し

ながら其他の點に於て、例へば軍備問題、船舶問題、外交問題等に就ては決して黨派の拘束を受けないで、どし〳〵自分で信ずるところに向つて進んで來た。一昨年五月のルシタニヤ擊沈事件に關連して、國務卿ブライアン氏が辭職したのは、單に其一事件に關する外交問題の爲めでなく、それまでに段々生じて來た二人の間の距離が遂に絕緣となつた次第である。即ちウイルソン氏が最初大統領に當選する場合には、勿論民主黨の候補者として、ブライアン氏の後援なくば當選は出來なかつたであらう。然るにブライアン氏は黨派政策と自分の狹隘な宗教信仰以外に何等の見識もない人である。それ故にウイルソン氏就任以來、ブライアン氏の黨派的思想とウイルソン氏の黨派以上の政策と段々衝突して、遂にブライアン氏の去らざるを得ざるに至つた譯である。然しこれとても、ウイルソン氏がブライアン氏を踏臺として、不必要になつてから投げ出したといふ譯では決してない。それまでの成行を見ても、ブライアン氏に對して大統領の表はした好意は頗る厚いものがあつた。（それに就いての一々の事實は之を略する）即ち謂はゞ公情の爲めに私情を堪へ得ざるやうになつたのである。

斯くの如く人物と理想との力で政治を導いて來た結果、議會に於ける黨派の分界線が段々不明瞭になつて來て、議會の去就は黨派の投票でなく、大統領の熱心と議員各自の意見とで定まるといふ狀態になつて來た。例へばメキシコ問題に就いては、共和黨の主なる人々は初めには大統領に反對を表して居つたが、遂には之を贊成とするやうになつた。船舶法案に就いては、大統領の政策には共和黨の中にも反對する者多く、一度は議會で破れたが、第二次には遂に黨派の分ちなしに通過するに至つた。國防問題に關しては勿論黨派の分ちなしに通過した。中央銀行法案に就いては、民主黨の一部分は大統領に反對し、共和黨の一部分が却つて之に贊成した。勿論大體に於て、黨派の分ちは傾向政策の分ちになつて居るが、一々の問題に就いて必ずしも黨派として去就を決しないといふ風習が、合衆國の議會には多少あるところへ以て來て、ウイルソンの人物の力で自黨の申分でも之を退け、反對黨の人々にもよく協議を遂げ、或は熱心に演說し勸說して、政府に贊成せしむるといふ事が段々多くなつて來て居る。要するにウイルソンの人物嚮導の力(Personal leadership)が米國の政治に重要なる力となつて、黨派の分界を打破したのである。而して其結果は今度の選擧に表はれ、ヒユース氏とウイルソン氏との選擧爭ひは、形式は共和・民主兩黨の候補者として爭つたやうであるが、實際に於ては人物政策の問題で結果が定まつたやうになつて居る。勿論ヒユース氏も堅固なる人物であり、見識のある人物である事は、社會一般の認めたところであるが、現在の危機に處して、ウイルソン氏第一期の政策を續ける事が必要だといふ事と、又第一期に博したるウイルソン氏の信用とが遂にウイルソン氏の再選を見るに至つた原因の主なるものである。今まで議會の問題が黨派問題なる性質を失つて來たのが、今度の選擧に明白に表はれたのであるから、今後は猶一層ウイルソン氏の人物が大切な力になるであらう。

政治家としてウイルソン氏の人物並に位置が、右に述べた如く、日本と事情を異にする爲めに、日本では十分の理解が缺いで居り、同じく其政策に就いても誤解があるやうに思へる他の點は暫らく略して、ウイルソン氏の獨逸に對する政策に就いて、日本では單に左顧右眄の柔弱政略であるといふ批評を多く聞く。外交政策といふ事の當否は僕の與り知らない處ではあるが、日本ではアメリカに居る獨逸人の勢力を過大に見て居る人が多い。其爲め大統領が獨逸に對して斷乎なる政策を取り得ないといふやうに解釋して居る。斯くの如き批評は第一ウイルソン氏の人物性格を見誤つたものであり、第二はアメリカに於ける獨逸人の勢力なるものを過大に見て居る爲めである。假りに獨逸系アメリカ人の勢力が甚だ大であるとしても、ウイルソン氏は其爲めに自分の理想は勿論政策を支配されるやうな人ではない。勿論一國の元首として國民全體の輿論希望を容れ、又これを代表するといふ點に於ては、ウイルソン氏が獨逸系の事を念頭に置き、彼等の感情希望を無視する人でない事は明かで、其點は中立の宣言にも明白に宣明して居る。然しながら獨逸系の希望があるからと言つて、合衆國の信用、名譽、品位、利益に背いて、獨逸に阿ねるといふやうな事はウイルソン氏の性格にあり得ない。ルシタニヤ事件の後の抗議次いでサセックス號撃沈の後の抗議、又其結果として得た獨逸の證言、此等はウイルソン氏が平和と正義とを重んずる主義を貫いた一端である。其間にアメリカ有識者の間にも大統領の抗議を間取ろかしかつて、外交斷絶を主張した人も少なからずあつた。けれども大統領は忍耐した。柔弱の爲め或は獨逸人の勢力を恐れて躊躇したのではなく、忍耐出來る丈け忍耐し、平和手段によつて獨逸を反省せしめ得る丈け反省せしめようと、あらゆる手段を講じた譯である。それ故に又同樣の抗議を聯合側に對してもして居る。そこで今度の獨逸の宣言が、サセックス號撃沈の結果獨逸がアメリカに與へた保證を無視するといふ結果に至つて、初めて勘忍の緒を切り、斷然國交斷絶に及んだ譯である。ウイルソン氏の主義は勿論平和主義であるが、無條件平和主義ではない。出來る丈けの手段を盡くして其目的を達しなければ、茲に斷然たる所置に出るといふのが、ウイルソン其人の性格信仰の結果である。

日本では國際の葛藤を所置するに、外交手段で間取ろしい場合には、直ちに開戰するといふやうな氣風が一般に行はれ、戰爭を以て國際葛藤の解決の最捷徑であるといふやうな感情が行はれてゐる。斯くの如き標準から觀れば、ウイルソン氏の政策は不可解に相違ない。然るにウイルソン氏の主義はあらゆる手段を盡くしても解決が出來なければ、絶交をする丈けでも足りる。殊に今度の場合の如き、ウイルソン氏の考では世界の輿論に依つて獨逸を道德上、人道上の追放人として Ostracism を行ひ、人間の仲間から除外するといふ事を重大な意味に見て居ると考へられる。但し其上にも敵對行爲が生ずれば、即ち戰爭にはなるが、國交斷絶の論理的結果としては戰爭よりも Ostracism の方が、ウイルソン氏の思想では重大な勢力となつて居るのである。斯くの如き思想の是非得失を言ふのではない。是非得失を今玆に判斷しようと言ふのではない。

ウイルソン氏の人物性格から見て、斯くの如きものが其人の考であると推測して、其推測を述べるのみである。而して此點を理解すれば、ウイルソン氏の政策は柔弱躊躇といふ意味でなく、其思想から出て居る結果であると知り得ると思ふ。今後獨逸の敵對行爲が明かになれば、ウイルソン氏は勿論其挑戰を辭しないであらう。又今日の情勢から見れば、議會も國民も悉くウイルソン氏を助けるに相違ない。然しウイルソン氏の主義思想に於ては、國交斷絶といふ中に人道道德上の意味を以て居り、それと戰爭といふ事の間には、いくばくの距離があるといふ事を承認しなければならない。

そこで第二の獨逸人問題であるが、日本では獨逸が何かアメリカで陰謀をしたといふ報道に接し、又獨逸系統の人間が二千萬人居るといふ事を聞いて、其勢力を過大に見て居る。此點に就いて詳しい事は曾て『歐洲戰爭實記』に述べて置いたが、二千萬の獨逸系統の中で、獨逸語を忘れて居る者が中分以上、獨逸語を知つて居る者でも、母親の言葉として習つた者は極めて僅少である。即ち血統は獨逸から出ても、感情に於てはアメリカ人になつて居る者が大多數である。彼等が一致して獨逸の爲めに計り、或は開戰の場合に謀叛を起すなどゝといふ事は斷じてない。勿論過去十年ばかりの間に移住した者の中には、眞に移住の心を有つて來たのでなく、半ばは間諜の目的を有つて來た者が幾分はある。ニューヨークの計算ではさういふ者が五千人位あるといふ事である。之に對して十年若しくは二十年以前特に獨逸國内の狀態に不平を抱いて移住した者、或は其子孫は、今日では殆どアメリカ人になつて居る。其上開戰以來の獨逸の蠻行といふものが社會の問題になり、獨逸系アメリカ人中には、獨逸を辯護する者もあるが、又其反對に獨逸に愛相をつかす者も段々出來て居る。中部諸州は有名な獨逸地方であるが、其地方ですら獨逸反對の感情は存外強い。現に獨逸人町と稱せられるミルウオーキーにある唯一の獨逸劇場（獨逸語の芝居をする處）は開戰後段々と維持困難となつて、一昨年閉じて了つた。又中學校や女學校で獨逸語を學習する者が段々に減じて、獨逸語教師の需要は殆どなくなつて居る。之は最も反獨逸感情の強い東部諸州許りでなしに、中部にまで及んで居る。而してウイルソン氏に對する今度の投票の結果で見ても、獨逸系統の多い地方すら、ウイルソン氏に對する投票は頗る多かつた。要するに、ウイルソン氏は獨逸系統の勢力を恐れて、其爲めに主義を曲げる人でなく、又恐れるにしても實質其爲めに躊躇する程獨逸の勢力は多くないのである。此等の點を考へずに、アメリカに於ける獨逸人の勢力を漠然と過大に見、それから想像してウイルソン氏の政策を誤解するのは、實に盲目の甚だしいものである。斯くの如く誤つた想像に依つて、ウイルソン氏の政策を觀察するといふ事は、日本のアメリカに對する態度を定める上に於ても頗る危險の次第である。最後に一言すべき事は、ウイルソン氏の勞働問題に對する態度であつて、今後四年の任期の間には勞働保護に關する政策が稍々行はれるに違ひない。勞働問題は何れの國に取つても大問題であり、イギリスの如きも戰後經營の一つとして此點に關する講究が盛んに

出て居るが、(殊に勞働者の敎育を進める事に就いて)兎に角今度の戰爭によつて、一般人民の力は必ず增進し、而してイギリスやアメリカの如き工業國に於ては勞働者が其大部分を占めて居る。然らば今後世界文明の進步に就いて、此問題をよく所覺する國は、健全なる基礎の上に國運を發展するに違ひない。我々はウイルソン氏が今後四年の行政に對して、殊に括目して、勞働問題に對する氏の理想と手腕とを見得る事を望む。

時勢本書を熱求せる乎？本書時勢を導きしか？

東大教授 文學博士 服部宇之吉
學習院教授 小柳司氣太
兩先生著

詳解漢和大字典

内容見本進呈 往復葉書申込

十萬部普及版特價貳圓

正價金貳圓五拾錢〜〜特製（脊革インデクション附）特價貳圓五拾錢 郵稅 內地十六錢、臺樺卅五錢、鮮支四十五錢

著者兩先生は十年の苦心いかにして在來の漢和字典に纒綿する一切の不便不利なる形式を破り、進歩せる泰西辭典の體裁に則れる萬人實用の漢和字典を作るべきかに努力せられたり◎語彙の採擇に注意し漢字、熟語無慮七萬、全然無用の死語廢語を捨て、出來得る丈多く現代實用の新字新語を網羅せる其一也◎其他舊慣に拘泥せず、慣用の俗字をも俗音をも正字正音と共に併載せ、凡て學究の理窟に流れず、現代の慣用に從ひ、深切に融通自在ならんとに努めたる其二也◎漢字漢語を國字國語として取扱ひ、和訓を明白に擧げ、文法上の註解を加へ、國語としての應用變化に注意したる其三也◎古くは四書五經より近くは日新の學術語、飜譯語、新聞用語に及ぶ迄、新舊六萬の熟語成句は自然人事、百科の知識に亘り、本書に依つて解釋し得ざる譯語なき其四也◎若夫れ體裁の整頓索引の簡便、本書が全然舊型を破りて、極限まで漢和字典の能率を昻めたるは本書の自ら語るに任すべし。たゞ玆に一言すべきは

本書の萬人に滿足を與ふべき標準的漢和大字典たるの眞價は忽ち天下に認められ、特に中等學校程度學生の唯一參考書として既に全國三百餘校より指定せられ、尚續々其の範圍を擴大しつつあるは最も確なる本書の裏書なりと信ず。

四六判形、二千百餘頁厚さ二寸四分、秤量四百匁、泰西辭典の新形式に則り簡便にして最實用に佳也

本書に對する白熱的歡迎は斯界未曾有也

■ 東京神田 冨山房（振替五〇一）

（中付二の三）

評論

内外時論

法學博士 古川學人

米獨國交斷絶

（一）

二月三日、米國大統領ウィルソンは獨逸に對し國交斷絶を宣言し、自國派遣の大使ゼラードには歸國を命じ、相手方の駐米大使ベルンストルフには旅券を交附し、更に之を上下兩院に聲明して民主共和兩黨の贊成を得た。

此宣言の原因が一月末の獨逸政府の通牒に在る事は云ふを俟たない。該通牒の細かい内容は二月三四日頃の本邦諸新聞に表はれて居つたから、玆に之を繰返すを必要としないが、只その要點を摘んで云へば次の三點に歸する。（一）敵方は我が講和提議を省みず戰爭の繼續を我に迫る。自國存立の必要上今や我はあらゆる武器を以て强ひられたる戰爭を繼續しなければならない。（二）其結果として我は協商國沿岸及び封鎖海上に於ける船舶に對しては、二月一日より無制限に潜航艇襲撃を行ふの決心を表明する。因に言ふ。之と同時に獨逸は英・佛・伊の海上に莫大なる範圍の封鎖宣言を發表した。（三）但し中立國の船舶に對しては一週間の猶豫期間を與ふる。猶此の點に關して獨逸は、米國と大陸との旅客の往復の爲めに、或る一定の港を限り、一週一回特定の航路によるとか、間違ひ易からざる徽章を帶ぶるとか、斷じて戰時禁制品を乘せざるべきの保障を米國政府が爲すとかの條件の下に、除外例を認めては居る。けれども根本の原則としては、船舶の國籍

如何を問はず無制限に潜航艇襲擊を敢てするといふのである。之は原則上中立國の權利の重大なる侵犯である。のみならず米國としては從來の行掛上到底之を默視してやむ事は出來ない。之れウィルソンが斷然國交斷絕を宣言した所以である。

公海に於て交戰國が中立國の船舶に對して無警告の攻擊を加ふべからざるは、國際公法上明白の原則である。然るに獨逸は戰爭開始以來此不法を屢々した。中に就き最も之が爲に害を蒙つたものは米國である。從つて米國と獨逸の間には、從來此點に關して屢々交涉を重ねたのである。殊に昨年の四月八日獨逸潜航艇がサセックス號を擊沈したる際、米國政府は國交斷絕の威嚇を以て潜航艇戰の徹廢宣言を獨逸に迫つたのであつた。五月初め獨逸が此要求を容れたる旨を聲言するに及んで、緊張したる米獨の關係は一旦收まつたのであつたが、今や獨逸は强ひられたる戰爭といふ新たなる口實の下に、前言を喰んで公然從來の國際法の許さざる行爲を敢てしようとする。獨逸に如何なる必要あるにせよ、米國政府としては行掛上前約を無視せる此獨逸の態度を其儘に默過する事は出來ない。兩交戰團體の調停者を以て任ぜる米國の、今や將に、自ら進んで戰亂の渦中に投ぜんとするに到れるは、甚だ意想外の出來事ではあるけれども、獨逸にして彼の如き態度を改めざる以上、米國の此の如き態度に出ずるはまた當然なる論理的結論と言はなければならない。

（二）

米獨關係の緊張は今日に始まつたのではない。開戰當初以來兩者關係の屢々危きに瀕した事は讀者の已に知るところである。けれども米國は本來、戰亂の渦外に超然たる唯一の强大國として、機運の熟するを待ち平和克復の爲めに盡力するの道德的責任を感じ、從つて一時の出來事に激して他日仲裁者たり得るの地位を拋擲するが如きは、其の欲する所ではない。又獨逸とても、米國の嚮背が戰時に於ては勿論、平和克復の際に於ても非常に自國の利害に關係する事を知つて居るから、無用に其感情を激發すべからざる事はよく〱

知つて居る。故に此兩國は、如何に關係が切迫しても、容易に國交斷絕を見るが如き狀態には立ち至るまいと云ふのが、從來多くの人の觀察であつた。(吉野作造著「歐洲戰局の現在及び將來」中「米獨關係の危機」一四七頁參照）然るに今や此豫測に反して米獨の國交は斷絕した。吾人は豫想の外れた事を意外に感ずると共に、此兩國の間に國交の斷絕を見たについては、玆によくよくの事情があるといふ事を察することが出來るのである。

獨逸が米國を斯程まで怒らしても潜航艇戰を止めないのは、畢竟此方法に出づるにあらずんば、敵を屈服するの勝算が立たないからであらう。獨逸は陸上に於ては成程戰爭に勝つて居る。然し海上に於ては未だ一回も勝利を得て居ない。而かも英國海軍の封鎖は益々嚴重である。假令食糧軍需品に於て持久の策に相當の成効を收めて居つても、此儘戰爭が永びけば、永びく程自國の困難が增す許りである。而して此窮境を突破して敵國殊に英國を苦しめ、以て自國の急を救ふ方法として殘つて居るものは、只一潜航艇戰のみである。獨逸が初めて潜航艇を使用した當初の目的は、いふまでもなく敵艦の攻擊であつた。英吉利が周到なる方法を攻究して之に對抗するに及んで、敵艦攻擊としての潜航艇の効用は夫れ程恐るべきものでない事が證明された。けれども獨逸が更らに一轉して之を通商破壞に用ふるに及んで、玆に初めて多大の奏功を示した。去る二月中旬英國上院に於けるベレスフォード卿の演說に依れば、開戰以來獨逸潜航艇の犧牲となれる聯合國及中立國の商船は二百三十艘の多きに上り、噸數を通計すれば四百萬噸を超ゆるとの事である。同日カーゾン卿の說明に依れば一九一四年七月現在の英國商船千六百噸以上の者は三千八百九十般千六百八十五萬噸であつたが、一九一七年一月の現在は三千五百四十艘千六百萬噸に減じたとの事である。此中には潜航艇の禍に歸すべからざる者を含むこと勿論ではあるが、兎に角潜航艇の打擊の容易ならざるものあることは明である。斯くして此戰法は一つには現實に諸國の貨物船を

攻撃して英國を食料攻めにする事が出來、又一つには之が一つの威嚇となつて一般の通商交通を妨害する事が出來る。一般通商交通の妨害によつて最も損害を受くるものは云ふまでもなく英國である。人も知る如く英國は全然食料を外國の供給に仰ぐ國で、一旦外部との交通が遮斷されるとすると、英國全體の平時の貯は僅かに二ヶ月間國民を養ふに足り、中にも倫敦のみを取れば二日以上を支ふる事が出來ないと云はれて居つた。以て如何に英國が外部の供給に頼むの切なるかを察すべきである。從つて食料輸送船の航行の途中に於ける故障は、他國に於けるよりも英國に於て最も苦痛の種とならざるを得ない。こゝが獨逸の眼をつけたところで、即ち敵艦攻撃に左程の効用をなさなかつた潜航艇を、通商破壞に轉用するに至つて獨逸は大に英國を苦むる事を得たのである。斯くして去年初め以來、獨逸は更らに大に潜航艇の作製に意を注ぎ、昨今特に大西洋方面に之を活躍せしめて居る。是に於て從來夢想しなかつた食料危機といふ聲が、去年の冬以來英國にまた盛に起つて居る。昨今頻りに諸新聞に傳へらるゝ英國政府の食料制限とか、又は英國人民の食料に對する危惧といふが如きは、一に此獨逸潜航艇政策の結果である。此成功に味を占めて、獨逸は此儘此戰法を繼續すれば自分よりも先きに英國を食料攻めにする事が出來るといふ希望を抱くに至つた。斯くなれば、獨逸としては誰が何と云つても此戰法をやめる譯には行かない。なぜなれば之を外にして有効に敵を屈するの途は他に殆んどないからである。對米通牒後獨逸は一層狂暴に潜航艇を活躍せしめて居る事は、二月一日より十日間に亙る中立國船舶の犧牲が或は四十五艘と稱し、或は五十三艘と稱し、又或は五十六艘と稱するによつても分る。十一、十二の兩日間だけで英船の犧牲となつたものは八艘に達すると新聞は傳へて居る。米國の國交斷絶に辟易せず、獨の益々此戰法を固執するの決心なる事は、略ぼ之を想像するに難くない。況んや英國が昨今段々食料に困り初めて居るのを見た以上は、到底中途にして之を止めるやうな事はなから

う。

獨逸に取つて潜航艇政策の意義右の如しとすれば、米國が其徹廢を迫るのは、いはゞ獨逸より唯一の武器を奪はんとするものに外ならない。此事情は米國の當局者に於て恐らく明白に意識して居る事であらう。故に若し米國の利害が此事件に何等の關係がなかつたならば、假令之が重大なる中立國權利の侵犯であるにしても、或は其儘沈默して了つたかも知れない。然るに幸か不幸か此獨逸の犧牲になつたものは中立國中では米國船舶に最も多い。是に於て如何に獨逸の態度に之を諒とすべきものあるにせよ、米は所謂交戰國によつて傷けられざる中立國の權利を楯として、米國の利益を保護するの態度に出でざるを得ない。之れ米國が復起つて厭くまで獨逸と其主張を爭はんとする所以である。故に此米獨の爭は、戸口に立つて居る第三者の米國が、自分を突き飛ばして九死に一生を救はんとする獨逸の態度に故障を言ふが如きもので、獨逸としては其外に死中生を得るの途がないのである。去ればとて米國としても亦獨逸に突き飛ばされて默つて引込む義理もない。又獨逸の爲めに途を明けて遣つて、自國の商業上の利益を犧牲に供する程の情誼もない。謂はゞ此爭は權利と必要との爭である。人或は云ふ。獨逸は須らく米國の要求を容れて、中立國の船舶に限り、無警告の攻撃を差控へたらよいではないかと。然しながら、今日自分が先に飢るか英國が先に飢えるかといふ必死の場合に、船籍の如何によつて取扱を異にするといふやうな生ぬるい方法では、十分に英國を苦むるの目的を達する事が出來ない。無條件無制限の攻撃を宣言して居ればこそ、一般の中立國船舶を威嚇して、英國を孤立せしむる事が出來るのである。獨逸が英國の如く海洋の支配權を持つて居ない以上、此方法に出でるの外に適當の途はない。中立國の權利を尊重しつゝ此目的を達せんとするが如きは、英國の如き廣大なる海軍を有するもの丶獨り能くするところである。加之海上に於て遭遇せる船の果して中立船なりや否やは、距離、天候、時刻等の關係上常に必ずしも明白なるも

のではない。而して潜航艇自身極めて防禦力の薄弱なるものなる以上、ウッカリ警告の爲めに手間取つて逆まに敵の攻撃を受けては何にもならない。且つ敵國の船舶の中には、潜航艇の眼を晦まさんが爲めに、米國の國旗を掲げたり、或は少くとも故らに米國船と見紛ふやうにして居るものも少からずあるだらうと察せらる。然らば苟くも潜航艇を利用する以上、無警告攻撃を遣るでなければ、結局左程の効果を奏するものではない。獨逸としては今日の場合容易に米國の要求を容れる事が出來ないのである。去年五月米國の嚴重なる抗議に對して一旦諸意を表しても、事實行ふべからざる事は果して約の通り實行されなかつた。今度の獨逸の宣言は、事實上實行しなかつた事を形式上實行しないと宣したまでの事で、事實に於ては去年以來獨逸の態度は始終一貫して居るのである。

（三）

獨逸の到底潜航艇政策をやめざるべきは前述の通りである。否、露骨に宣言したる以上、更に規模を擴張して此戰術を盛に應用するの念は、最近英國を苦むるに稍々成功したるよりして更に一段と深くなつたらうと思ふ。最近獨逸が國境に大兵を集めて和蘭を威嚇し、和蘭の人心亦戰々兢々たるを報ずるのは、一つには同國の海岸を此政策の根據となさんとする趣意に出づるものではあるまいか。要するに獨逸が其政策を今となつて容易に改めさるべきは明白疑を容れない。然らば米獨國交斷絕の今後の發展如何といふ問題は、一に繫つて米國其物の態度如何によつて極まると見るべきは又論を俟たない。

米國人民の對獨政策に關する輿論は略ぼ一定して居る。米國民は、退いて冷靜に獨逸の必要に同情するといふよりも、從來の傍若無人なる態度に激せられて著しく精神を昂奮さして居る。昨今始つた事ではない丈けに、今となつては容易に之を翻し難いものゝやうだ。大統領ウイルソンをして遂に國交斷絕の處置を取らざるを得ざらしめたのも、一には輿論激昂の結果であつたらしい。故に彼が此聲明を發表するや、先づ議會

に於ける兩黨は熱誠なる贊成の意を表した。其後の報道によれば、共和黨はまた進んで政府の政策を支持するの決議をなし、ルーズヴェルトの如きは自ら義勇軍を組織して萬一の場合に一身を國家に捧げんと宣言した。民主黨の全然大統領の政策を支持すべきは固より言ふを俟たない。强ひて心配の種となるものを求むれば獨系米人であるが、之も大した事はない。此中已に米國に歸化せるもの丶多くは、已に一旦歸化した以上は、米國に忠誠を竭すを以て自分達の義務とする旨を宣言して居り、未だ歸化せざるものは今日爭ふて歸化の手續をして居るといふ事である。彼等は第三國と獨逸との戰爭については、自ら多數の米國市民の意に反するを厭はずして明らさまに獨逸に同情を寄するを隱さゞるべく、更に米と獨との間に事あらんとするに至つては心中密かに破裂を見るに至らざらん事を切望するであらう。之れ寧ろ當然の事である。けれども已に米と獨との公然抗爭の關係に立つを見んか、彼等は生命財産の安全を犧牲にしてまで獨逸の爲めに計りて米國に反對するものではない。多くの移民中最も同化され易きの稱ある獨逸人の心理は、我々日本人の考を以て之を付度する事を許さない。無論少數の獨探はあるだらう。數は少くとも、何をするか分らぬから、之に對する警戒の手は決して緩める事は出來ないだらう。けれども、多數の獨逸人が塊まつて米國に內亂を起すだらうといふが如きは全然杞人の憂に過ぎない。して見れば米國の人心は今日大體に於て立派に纏つて居ると見てもいゝ。故に米國政府の對獨政策は今や實に擧國致一の後援を循とし得るものたることは、一點の疑を容れない。只本來出來る丈け平和に眷々たりし彼等が、此上更に一歩を進むるの決心を爲すまでは、まだ〱多少の距離ある事も亦想像するに難くない。一日も早く平和の克復を見んとするのがウイルソン本來の理想であらう。ウイルソンが先きに講和の提議を交戰國双方に發したるも、畢竟は獨逸潛航艇政策の結果、米國が遂に今日執れるが如き態度に出でざるべからざるを憂へたからであるとさへ言はれて居る。然し

なかつ彼れは已に勢已むを得ずして手を劍にかけた。緩漫ながら着々歩を進めて行くべき處に行くの固き決心を持て居る事は疑ない。只何處までも平和的交涉をなすの餘地を殘しつゝ、ジリ／＼と進むであらうと思はるゝ。彼は已に國交斷絕宣言後の第一着歩として、中立國を誘ふて其聲容を張らんとした。二月十日支那が唐突として對獨抗議を提出したのも之が爲めである。瑞・諾・丁の三國も亦之に應じて抗議を獨逸に發せんとするの報道がある。

空言亂世に用なしと云ふをやめよ。精神的壓迫は今日に於て又一つの恐るべき武器である。只之れ丈けでは米國の趣意の徹底しないことは勿論である。更に進んで彼が如何なる態度を執るかは、支那其他の中立國の態度と共に我々の今日より刮目して見んと欲する所である。獨逸の厭くまで從來の態度を改めざる以上、結局の落ち着く途は宣戰布告の外にはあるまい。

（四）

米獨抗爭の結果はどうなるか。米國が宣戰するとしても聯合國に加入するや又は獨立して獨逸と爭ふや、此等の問題は總て今後の發展に徵する。只米獨抗爭の結果には別に一つの思想上の問題が附着して居る事を見逃してはならない。そは生くるか死ぬるかの場合に、自己生存の爲め他人の正當なる權利を侵害するは、之を恕すべきや否やの問題である。聞くところによれば、將に溺死せんとして居る二人の中、甲が辛うじて板片を發見して縋り附いて居る時、乙が之を奪つて遂に甲を死に抵らしめた場合ありとせんに、刑法上の問題としては、乙の處分を無罪とするといふが學界の通說であるさうだ。之れ急難の場合に於ける必要に正義の適用を免除せんとするの思想である。然しながら同じやうな事は國際間の戰爭にも之を許すべきであらうか。若し之を許すべしとすれば、必ずしも急難窮迫の場合にあらざるに、漫りに之に藉口して手段を選ばざるに至るの恐あり、且つ又戰爭其物は總て生くるか死ぬるかの場合と觀るを妨げざるの理より推して、初めより戰爭法規を無視せんとするの弊を見るの恐もある。獨逸

は從來「戰數」を名として國際法規の尊重を蔑ろにして居るを以て有名な國である。斯の如きは獨り政府の法制に表はれて居るのみならず學者の說明に於ても亦此傾向を見る。今日の文明は明白に此傾向の跋扈を承認しない。而して今や米國と獨逸は、計らずも潜航艇問題について、各々其利害を異にし、計らずも亦此重大問題に對して結局の解決を與へんとして居る。此點に於て我々は、更に特別の意味を以て、此事件の將來の解決を注意せんとするものである。（二月十五日）

來るべき講和と膠洲灣及び南洋諸島の處分

（一）

二月十二日の東京朝日新聞に、國民黨岡山支部總會に於ける、犬養氏の演說の一節として「彼の聯合國が米國に向つて答へた文書の中に、白耳義、巴爾幹、ダーダネルス等のことは書いて居るが、南洋・膠州灣の問題に就いては一言もない。是が問題である。若し今日講和が成立すれば、青島、膠州灣、南洋も還さなければならぬ。尚ほ驚くべきは、土耳其は歐羅巴の領土を永久に有つことを許さないと云ふことで、之を換言すれば、白人は亞細亞や歐羅巴に領土を有つことは出來るが、黃色人種は是等の方面に領土を有つことを許さないと云ふのである。」といふやうな事を掲げてあつた。後段土耳其に關する議論の極端なる見當違ひなる事は固より一顧の値もないが、前段膠州灣及び南洋に關する點については、我々日本國民として實に潜心考察するの値打はある。況んや世間此問題に對して昨今疑惧の念を抱くもの少からずといふに於てをや。

（二）

膠州灣南洋の占領權は果して確實なるものと觀るべきや否や。此問題の終局の決定は、固より歐洲戰亂の講和會議を俟たなければならない。否、此會議の決定のみならず、少くとも膠洲灣については、更に支那の承

諾を求めなければならない。支那に於ける獨逸の權利の承繼は、支那國政府の承諾を待つて初めて確實となるからである。日露戰爭の時も、明治三十八年九月五日のポーツマス條約に次いで、十二月廿二日北京條約の締結を見たのは即ち此爲めである。然るに今回は、幸にして事後に得べき支那政府の承認は、一昨年の所謂日支交涉の結果として事前に之を收め得たから、結局我國の占領權の運命は、一に繫つて講和會議の結果に依るものと言はなければならない。

然らば問ふ。講和會議に於ける我國權利の運命は果して如何なるものと豫想するを得べきや。此點はまた繫つて戰爭終局の狀況如何によるものである。

獨逸が負けて聯合國側が十分戰爭の目的を達したとすれば、帝國の權利についても格別の問題は起るまい。膠州灣の占領の其儘講和會議に於て承認せらるべきは云ふを俟たない。南洋も亦英國が已に其一半を占領して居る以上、他の一半の占領を日本に認むる事は、英國に於て固より異議あるべくもない。此事について一月末倫敦に於ける殖民大臣の聲明、並びに滯在中のニュージランド藏相の聲明なるものは、尙更に英本國及び濠州方面の此點に關する輿論の一端を語るものである。殖相ウォルター・ロングは言ふ。『聯合軍は其占領せる何れの獨逸殖民地も決して再び之を還附せず、』と。藏相ワルトは曰く『舊獨領南洋諸島の日本領有は濠洲の異議なきところなり』と。已に英國人が如斯き聲明をなす以上、米國の之に對して同じく異議を挾まざるべきはまた當然である。米國は一般に東洋に於ける門戶解放、機會均等の主義を要求するに熱心なるの餘り、何國に對しても動もすれば商業上の事實的門戶閉鎖を伴ふべき「占領」を喜ばない。故に米國が日本の南洋領有を喜ばないといふ事實はあらう。併し之は何も日本のみを眼中に置く軍事的見地よりするものに非ずして、寧ろ純然たる商業上の立場に出づるものであるから、直接關係者たる英國の承認ある以上、米國は强て英日の合意的決定に異議を挾まぬであらう。假りに挾んだとしても我々は深く之を顧慮するの必要もな

いのである。

獨逸が十分に屈服せずして中途戰爭の終決を見たりとせば、問題は餘程趣を改める。第一に南洋の我が占領地に就ては英國のそれと全然運命を共にするものと見ねばならぬ。英國が還すとすれば、日本獨り永遠の領有を主張する事は餘程困難であらう。第二に膠州灣の占領についても、必ずしも戰敗國にあらざる獨逸に向つて之が占領の繼續を主張するには、少くとも同盟列國の有力なる後援を必要とする。日本一個の單獨の意志を以て獨逸の承服を求むる事は決して容易の事業ではないと思ふ。此點に關して我々は今日より同盟列國が元來我日本の要求希望をどれ程尊重して居るかを顧みて置かねばならぬ。帝國政府は此點につき同盟諸國の輿論を啓發するために、從來果して如何なる手段を取つたであらうか。

(三)

膠州灣、南洋に於ける帝國占領權の運命が昨今俄に問題となつたのは、去る一月十日聯合諸國の名を以て米國に與へたる共同回答中に掲げたる所謂八ヶ條の要求(前號本誌參照)の中に、此點が更に言及されてなかつたといふ事に起る。尤も此八ヶ條は、通牒自身の中にも明言されて居る通り、聯合諸國が他日獨逸に向つてなすべき要求の全部ではない。けれども玆に問題となるのは、此八ヶ條は、聯合國側の要求の例示的列擧と見るべきや、又は其最小限度の範圍を示すものと見るべきやといふ事である。若し後者なりとすれば、此列擧の中に加はらざる諸點については他日互讓妥協の餘地ある部分とせらるゝ恐ありと言はなければならない。假りに前者なりとしても、例として現に列擧せられたるものと否らざるものとの間には、自ら重要の度に於て多少の差別ありと見られても仕方がないから、兎に角右の列擧に洩れたものは、どの道幾分輕い意味の要求であると見らるゝを免れ難い。是れ我國の議會に於ても、過般此點の説明を當局者に求むるものありし所以であらう。

本野外務大臣は、議會に於ける其説明演説の中に於

て偶々此事に言及し『(前略)尙誤解を避くる爲めに回答案に承諾を與ふるに際しまして、帝國の權利を保護するに必要なる手段を執り、此點に關し、聯合國と滿足なる了解が附いて居ると云ふことを、玆に諸君に向て明言するを得るは、本大臣の最も幸とする所でありまず。』と言つて居る。果して然らば占領權を確實にせんが爲めに、帝國政府の相當の注意を怠らなかつた事丈けは明白である。けれども此帝國政府の努力の結果、どれ丈け帝國の權利の確實にせられたかは、彼我の間に交換せられたる所謂『滿足なる了解』なるものゝ內容如何又直接交涉の衝に當れる佛蘭西は、聯合諸國の代表といふ明白なる資格に於て應答せるものなりや否やによつて定まるものと言はなければならない。

又或は云ふ。聯合國の名に於て佛蘭西政府の米國に與へたる通牒に關し、帝國政府は積極的に其作製に與らず、僅に作製せられたる文書の提供を受けて受動的に同意を求められたに過ぎない。是れ我國が、同じく交戰國の一員として英佛等と對等の地位を認められざるを自認せるものであると。然し戰爭の本舞臺が歐洲に在る以上、彼等が東洋方面の問題を第二に置くのは公平にいへば已むを得ない。只之が爲めに彼等が歐洲戰爭に對する日本の貢献をも輕んじ、從つて講和の際に日本の權利を重視せざるが如き態度に出づるが如きことあらば、我等は到底之を默視することは出來ない。我々は當事者の手腕に賴んで、同盟諸國をして十分に我々の要求を重んぜしむるやうにしなければならない。此點に於て我々國民は又大いに政府を鞭撻し嚴重に之を監視するの必要がある(二月十五日)

小言三則

●臨時調査局の設置　二月十日政府は勅令を以て外務、大藏、農商務、遞信の四省に亙り、臨時調査局を設置するの官制を發表した。政府側の同時に公表せる說明によれば、其設置の目的は『各般の行政に亙

り、戰時中時局に對應して適當なる計畫を立』て、『更らに進んで豫め戰後に處するの道を講』じ、專ら『實行上の調査』に當らしむるにありと云ふのである。

我々國民は從來各種の調査機關に厭きた。政府はそれ教育調査會だの、それ經濟調査會だのと、これまで此種の機關を設けたこと幾十なるを知らない。而して其多くが殆んど何等の實効を擧げずして無用の長物に終つた事は周知の事實である。之れ從來當局者が調査の必要を唱へて其實行に熱心ならず、調査の委員には多く政府以外の極めて多忙なる人か、又は何等の定見なき老朽を擧げて一定の責任を負はしめなかつた爲めである。此點に於て今度の調査會は全然從來の機關と其面目を同じうしない。眼前の實行を目的として調査を進め、精密なる研究に基かざる無用の討論を避けんとする事、專ら少壯の専門事務官を擧げて其任に置き、情實による老朽の網羅を避けた事は其最も特色とするところである。

調査機關の必要なるは何人も之を知る。政府は從來此爲めに相當の金を使つた。けれども從來の調査委員選定の標準は眞に調査の事業を之に托せんとするにあらずして、政府の提案を外部で兎や角云ふ連中を集めて、陰に彼等を利用せんとするのが多かつた。從つて特別の見識もなき老朽や又は空名徒らに高くして實力の伴はない連中の集まりであるから、實際の調査は何も出來ない。又已に斯かる無用の機關に多額の金を使つて居るから、此外に本當の調査をなさしむる爲めの機關を設くる事も出來ない。從つて調査會の數は頗る多いに拘らず、從來碌な調査會が政府部内に行屆いてゐなかつた。現に青島陷落の際、山東鐵道の處分が問題となつた時、山東鐵道條令は政府の何處を探してもなく、ヤット滿鐵の書庫から之を借りて用を辨じたといふではないか。之れ強ち外務省の役人の無能に原因するのではない。有効なる調査機關の缺如に基くものである。有効なる調査機關を缺けば、現に政府に供へて居るものまでが無整理の爲めに用をなさない事になる。現に外務省などでは特別なる整理の機關がない爲

めに、自分の違つた外交事件の經過すら二三年立ては分らなくなると云ふではないか。

此點に於て予輩は今度の調査會の設置を大いに歡迎するものである。一部の人の云ふが如く、經濟調査會あるのに所謂屋上屋を架するの餘計の設備とは思はない。寧ろ予は斯くの如き調査機關は臨時でなく、永久のものとしたい。事務官も兼任でなく少くとも其一部を専任のものとしたかつたと思ふ。そは何れにもあれ予は政府に向つて之を何處までも有効なる機關たらしめ、從來の如き有名無實のものたらざらしめん事を希望してやまない。

●朝鮮語科の廢止　外國語學校に於ては先月朝鮮語科を廢した。之は朝鮮人は現時多く日本語を話し、日本人が朝鮮に行つても朝鮮語を話す必要が殆んど無くなつた事と、又朝鮮語科には實際志願者が殆んど無くなつたといふのが其理由である。

實際の志願者なしといふ事は、此廢止に對する最も强き實際的理由である。朝鮮人をして皆日本語を話さしむるのが日本の理想なれば、日本人は最早や朝鮮語を話す必要がなくなつたといふ事も尊ぶべき現象である。併し之は直ちに朝鮮語の研究を全然日本人の間に廢してもいゝといふ理由になるだらうか。實際志願者が殆んどない程の科目である丈けそれ丈け政府の保護なくんば、將來全く之を研究する者がなくなるだらう。

昔獨逸のビスマルクは或時計らず支那に關する問題を調査するの必要に會し、官界並びに學界に急に支那語に通ずるものを探したが不幸にして一人もなかつた。是に於て彼は大いに驚き、一人も支那語を知つて居るものがないといふ事は甚だしき不用意な話なりとして、彼は俄かに多額の金をかけて東洋語研究の設備をした。之れ伯林大學に屬する今日の東洋語學校の濫觴である。當初殆ど一人も志願者がなかつたさうだけれども、彼は高祿を惜まず専門の學者をして研究に從事せしめて居つた。先づ軍人などに志願者が出來、段段に昨今の如き發展を見た。而して之れ實に亦獨逸の東洋に於ける發展の基礎をなしたものである。我々は

流石にビスマルクの達見に敬服せざるを得ない。泥棒を見て繩を綯ふの愚を學ばざらんとせば、朝鮮語科を其儘に維持して之に若干の金を使ふのは惜むべきでない。學生の有無の如きは之を問ふ必要がない。予輩は日韓兩地の密接なる關係に鑑み、朝鮮語の廢止を耳にして其輕卒なる斷行を快しとせざる者である。

●**淸朝復辟問題**　頃日陸宗輿君の來朝を期として、我國操觚界に日支兩國の最高政客の間に、淸朝回復說の再發あるを說くものがある。或者は曰く。支那の現政府は官僚軍閥と結托して淸朝を回復し、之によつて靑年革命派に再び起ち能はざるの打擊を與へんとし、日本は又滿蒙に於ける帝國地位の增進を認めしむるを報酬として、右の運動に直接間接の援助を與へんとして居る。斯くして復辟論は最近支那の新聞界に於ける君主主義の勃興と、淸朝舊王族の最近連續して我國に來朝するとは、寺內內閣の保守的反動政治と相呼應して、淸朝回復運動なるものを如何にも眞實らしく思はしめて居る。支那に於て官僚軍閥の一派が、其地位を保つの最も安全なる策は帝政の實行にある事は疑ない。而して今日に帝制を回復する事と、之を將來に維持する事とは到底日本の好意によらざれば出來ない事も亦事實である。併し日本は果して支那に於ける此擧に好意を表するや否や。又は進んで之に積極的援助を與ふべきや否や。少くとも帝國政府は帝政回復の運動を默認するや否や。

日本政界の一部に、日本は滿蒙に於て特別の地位を有せざるべからずとするの說ある事は公知の事實である。寺內首相は夙に此說の代表者を以て目せられ、本野外相も亦此點については寺內首相と全然其見解を同じうすると聞く。然らば現內閣の色彩は大體に於て滿蒙論者であるといつて差支へない。併し日本には全般の對支政策といふ見地より此說を非とするものも少くない。單純に日本の國防的見地よりすれば、此說或は正しからう。然し我國の經濟的發展といふ立場から見れば、滿蒙を特別のものとし、斯くして殊に此地方の事については神經過敏ならしめて居る支那人一般の感

情を激發する事は決して得策ではない。故に滿蒙に於ける帝國の地位は之を自然の發達に待つのが一番穩當である。帝國の地位を確保せんとして玆に無理な解決を促すのは非常な誤である。況んや之が報酬として支那に於ける官僚軍閥の私意を遂げしむる事は最も我々の反對するところである。吾人は素より我國現内閣の斯くの如き暴擧に出でざるべきを信じて疑はない。

且つ又清朝回復は今日支那國民多數の希望ではない。支那が到底共和主義たらざるべからざるは最近十五ヶ年の革命史が之を證明して居る。無論昨今一部の操觚界に帝政論の行はれて居る事は事實である。併し之を以て國民の輿論となすものあらば、之れ大いなる誤りである。なぜならば昨今帝政論の盛んなるは舊國民黨の政敵が現在の政爭に於て保守的階級の味方を得るが爲めに一時の權變として唱ふるに過ぎないからである。策士梁啓超を戴く進歩黨系の政策には兎角此種の魂膽が多いやうだ。尤も急進的たるべき舊國民黨系の意に反し、比較的保守的なる舊進歩黨もよく考へて見れば、之れ皆其確信に出づるものにあらずして政爭に之を利用したものである。

進歩黨系は來年の總選擧に優に國民黨系を驅逐して議會に絕對多數を占むるを得べきも、獨り上院は一部づゝ議員を改造するといふ制度であるから、上院までを進歩黨系の勢力範圍中のものとするには尙一段と長い時間を要する。玆に於て上院議員[illegible]間には一院制度の下に上院を廢し、斯くて一擧に國民黨を覆さんとして居るのである。斯くして國民黨を十分に壓迫し得れば滿足するので、寧に一院制を可とするや否の點は初めより問題とするところではない。今日清朝復辟論の唱へられたるが如きも、畢竟之を提げて官僚閥を味方とし、以て國民黨系を十分に壓迫せんと欲するものであらう。心から之を信じて居るのではあるまい。帝政が回復し復辟思想家が朝に立つても、彼等進歩黨員は何時までも之に服從し提携するであらうか。

之を要するに帝政回復は最早や過去の夢に過ぎない。共和民國の維持發達は支那國民現在の堅き信條である。一時の權變に惑はされて本氣に帝制回復の運動に乘るのは、啻に大勢に逆行するものたるのみならず、再び支那を紛亂に導き、東洋の平和を攪り他を傷け且つ自ら傷くるものである。不幸にして帝政の回復を見ば、遠からず第四革命の勃發を誘致する事は蓋し當然の結論であらう。

美を慾まゝにする

定價六十錢
郵税四錢

断食・少食・大食・大食……醫學博士 佐々廉平

心中の唄……田中貢太郎

支那大陸より……小山田劍南

法廷悲劇「罪の女」……澤田撫松

政黨の金穴・政黨の財政……退隱政客

人物評論 久原房之助論……諸名家

五百頁の大册子皆當代名流の最も自信ある雄篇大作より成り一篇一文と雖も決して駄作を掲げざるは是れ本誌の自ら誇とする所也

▽

中央公論 春期大附錄號豫告

△

中央大學豫科

學生募集

本大學法科（英語、獨逸語）經濟科、商科各豫科第一期生を募集す○豫科は大學本科に入る者の爲め高等普通學科を授くるを目的とす○中學校卒業者及同資格者を無試驗にて入學せしむ○學生は總て在學中徵兵猶豫の特典を受く○來る四月九日より新學期の授業を開始す入學志望者は成るべく始業前日迄に申出らるべし○學則は二錢郵券を添へて申込あり次第送附す

東京神田錦町　中央大學

中央高等豫備校

生徒募集

本校は高等學校、高等商、工業學校其他專門學校入學受驗者の爲準備敎育を施すを目的とす○中學校卒業者及同資格者は無試驗にて入學を許す○新學期は四月に始まり六月を以て終了、主として**高等學校**入學受驗の準備を爲さしめ來る四月九日より授業を開始す○入學志望者は成るべく始業前日迄に申出でらるべし○前年度各官立學校に於ける競爭試驗の成績頗る良好にして何れも優等の地位を占め登第者の數亦最も多し○學則は二錢郵券を添へて申込あり次第送附す

中央大學內　中央高等豫備校

見よ！興味ある文字に滿てる三月號

早稻田文學

小說

■開墾小屋……塚越亨生
■逼迫……山本勇夫
■火……中村星湖

■僕の頁……島村抱月

■作者の感想……アルツイバシエフ

最近思潮

▼戰亂と美術の將來
▼逝けるメビー博士
▼ブ氏の平和論
▼ミユンスタベルヒ
▼簡易村落劇場
▼藝術の發生學的奇觀
▼教員優遇法の發表
▼シ夫人の翻譯事業
▼來朝せる小杜氏
▼二月の美術界
▼二月の小說

『明暗』と『一兵卒の銃殺』と

●「一兵卒の銃殺」を讀む……正宗白鳥
●「明暗」を讀む……相馬御風
●人間を求めて……相馬泰三
●自分の世界と人の世界……本間久雄
●二つの作品……中村星湖

時評

▼敢てリファイメントを力說す……本間久雄
▼劇壇の時代錯誤……島村民藏
▼詩壇の一新著……日夏耿之助

附錄

堀川夜討（藝術座上演臺本）
松居松葉

■文藝の倫理性……稻毛詛風
■藝術の象徵性と鄉土的特質……森口多里
■大愚良寬……相馬御風
■廣津柳浪論……村山勇三
■父のこと（詩篇）……廣津和郞

三月號　定價二十八錢・郵稅一錢五厘　東京神田表神保町　振替東京二七〇番　合資會社　東京堂

（中付三の四）



小里

長田幹彦

宵の口までは吹く風もなく、ほつかりとしたいゝ天氣であつたが、夜が更けるに從つて、戸外は少しづゝ風だつてきて、十二時のなか退けになる頃には珍らしい師走風が新道の廓の表通りをぴゆうぴゆう吹いて通つた。それと一緒に素見の客の足もいつかばつたり途絶えて、偶に通過ぎる下駄の音も凍てたやうな冴えきつた音を家々の軒先へ響かせてゆく。筋向ふの鳥屋ではもう一時間も前から同じ都々逸の三味線がぽつんぽつんと聞えて、それにからむ妓達の笑聲ものの寂しくしかもそれさへ時折電線の唸めく音と一緒に吹きちぎられるやうに聞えなくなつてゆく。じつと風の音を聞いてゐると、耐らなく寂しくなつてくるやうな晩であつた。

松葉樓の小里はつきあひの宵花で一寸座敷へ顔をだしたゞけで、自前の客と云ふのはひとりもなく、賣れない朋輩の菊龍とたつた二人きりなか退け過ぎても生欠伸を噛み殺してゐるやうな顔をして張店に坐つてゐた。もうこの十二月へ入つてからこれで五晩もお茶を挽くので、さすがの小里も今夜ばかりは店の者に對して恥かしいやうな氣がする。どんな跛でも盲でもいゝからどうかして上つて客になつて貰ひ度かつた。さう思ふと戸外を通る足音が一々氣になつて、それがすいと店の前を通り過ぎてしまふとその度に氣がいらいらして來るのであつた。

漸次と夜が更けるにつれて、襟垢の冷たい縮緬の襟から夜寒が身内にしみ渡つてくる。朋輩の敷き捨てていつた十幾つの座布團が薄黄いぼやけたやうな電燈の灯影に次々と並んでゐるのをみると、かうした稼業をしてゐる女でなければ知らない情なさがしみじみと迫つて來る。軒先を鳴らしてゆく風の叫びはその心持ちを一層深いところへ追ひ落としてゆくのであつた。

小里が鳥羽の杉田樓からこの山田の新道へ鞍がへして來たのは去年の秋のことであつた。その間で浮いた幾らかの身代金は强慾な伯父のほまちになつて、小里は年季は三年でも五年六年身ぬきの出來ない突出しの娼妓でこの松葉樓へ身を沈めたのである。もう自分でもすつかり斷念めてゐるので、どうでもなれといふやうな捨鉢な氣にもならないではなかつたが、併しそれでもかうした晩には心の底の底から稼業が厭で耐らなくなつて來るのであつた。身ぬきをするなどゝいふことは今の證では及びもつかないことなので、それよりもいつそひと思ひに死んでしまひ度いと思ふやうなことが往々あつた。

松葉樓へ仕替へをした當座は小母さんや店の者の取廻しで、見立てのない客には出して呉れる、玉高

が上らないのを氣の毒がつて他の朋輩の名代などにも出してくれたので、相當に花も賣つてゐたが、それも三月四月と經つうちに漸次と數が減つて來て、手取りの客を澤山引くよりほかには仕樣がなくなつて來た。自分では隨分勤めてみる氣でゐても、鳥羽にゐる時分にひどい病氣をしたのが祟つて、夜毎に變る枕の數がつい受け切れなくなつて來る。小里さんは客扱ひが不親切だ、店の者の間では客が長くつづかないのでつひそんな噂が立つて來る。と、云つて小里にはもうそれをどうしようといふ氣もないのであつた。たとへその氣になつても體が云ふことを聞かなかつた。

店の正面にある時計はやがて寢呆けたやうな聲で一時を打つた。それを聞くと店口へ出て客を呼び込んでゐたお倉どんといふ引女は吹く風と一緒に家のなかへ飛び込んできて、

「おゝ、寒。明日は又雪かいな。」と、獨語を云ひながら店先の火鉢の傍へいつて宙腰に腰をかける。そして寒さうに肩を竦めて、眞紅になつた鼻の先を火のそばへもつていきながら、そこにあたつてゐる小母さんのひとりに、

「な、お繁どん、一遍戸外へ出て見なはれ。そら冷かあすに。これ見とおみい、私の手もこないにかぢけてしまふた。」と、云つて感覺がなくなつたやうに縮んだ太い指をのばしてみせる。

お繁どんと呼ばれた小母さんは悲く笑ひながらそれをみて、氣のなさゝうな聲で

「戸外は風がえらあすさかいなあ。ほんで空は曇つてますのかいな？」

「えら曇りや。今のさきまでお星樣が出て御坐つたけど、もう眞暗になつてしまふた。今夜は又雪かも分りまへんな。」と、云つて引女のお倉は店時計を見上げながら、

「ほ、今のは一時だしたんやなあ。私あんまり戸外が寂しうなつたさかい、二時かと思ふてましたんさ。此の鹽梅では小里はんに菊龍はんは又茶やな。」と、張店の方をそつと覗きながら云ふ。

小母さんは眉のあたりに深い皺を刻んでみせた。

小里はふつと自分の名が云はれたので店先の方へ眼を遣つたが、お繁どんやお倉どんの顔つきで大方話してゐることも讀めるので、妙にてれたやうな顔をしながら今度は二つ置いて向ふに坐つた菊龍の方を見た。菊龍は宵からの疲れで、襠裲の襟へ顎を埋めながらいつの間にかふらふら居眠りをしてゐる。襟脚の白粉が半分剝げて、そこから瘰癧を切つたあとが斜に黒く見えてゐた。

小母さんのお繁どんはそれを見ると皮肉な眼つきになりながら、

「菊龍はん、菊龍はん。もう一時間で退けるのやよつて、店つきで寢やんと置いて呉んなはれ。けつたい糞の悪い人やなあ。」と、大きな聲で云ふ。

菊龍はその聲で悸乎としたやうに眼を覺ました。そして小里の方を見ながら眼をしよぼしよぼさせて薄く笑つたが、その顔にはもう恥ぢも外聞もないといふやうな色が浮んでゐた。

小母さんはそれに疊みかけて、

「そやけど小里はんも菊龍はんも此頃のやうに茶ばかりではあかへんやないか。こんな晩に女ふたりで寢んならんのは、あんたがたかて辛うあつしやろに。……………」と、嘲すむやうに云ふ。

小里にはさう云はれるより、かうして寒い張店に坐つてゐる身の方がどれほど辛いか知れなかつた。

小里は首を垂れて、襠裲の前を掻き合はせた。

そこへ妙な投節のやうな唄が聞えたかと思ふと、ぴゆうと吹き過ぎてゆく風の音と一緒に四五人の素見客がどろどろと店口へ入つて來た。いづれも參宮の連中と見て旅宿の褞袍のうへから外套を羽織つて酒と寒さで紅くなつた頰に放恣な旅の氣持ちを現はしながらわいわい騷いでゐる。

「なんや、此處は二人しか殘つてゐやへんのか。どれもえらいすべたやなあ。はゝゝゝ。」さう云ふ言葉つきは大阪らしかつた。

　引女のお倉どんは店口へ驅け出ていつて、愛想笑ひをしながら頻りに馴れた辯口で遊興をすゝめたが袂を捕へられた眼鏡の男は、

「そないに云ふたかて、女ばかりは餘りもんに福はあらへんのやぜ。はゝゝゝ。それとも五十錢でええのやつたら上つたるがな。」

「五十錢でも何んぼでもよろしうあすに。どうぞ上つてやつて吳れやはらんか。」

素見の客はお倉をつかまへて淫りがはしいことを云つて調弄つてゐたが、やがて上る氣もないと見え

「さあ、往なう、往なう。」と、云つて又ぞろぞろ店を出てゆく。

　お倉はその後について戸外まで出ていつたが、少時すると戸外では大きな笑ひ聲が聞えて、

「あんな女買ふよりも、宿屋へ歸つて仲居なと口說いた方がまだ增しや。はゝゝゝ。」と、云ふ聲と一緒に冴えた下駄の音は上の方へ上つてゆく。

　お倉は顏をふくらしながら又歸つて來て、

「ほんまに錢も持たん癖に榮耀ばかり云ふて、せうもない客や」。と、口小言のやうに云ふ。

それと引違へに又店口にはひとりの男がしよんぼり入つて來た。外套も着ずに襟巻きだけを深々として鍔の廣い中折帽を阿彌陀に被つたその姿はひと眼みてこれも醉漢であることが分つた。

それをみると坐つてゐた小里はいきなりついと立つて店格子のところまで出て行きながら、

「ほ、お隣りの旦那はん、よう來なしたなあ。さ、上つて呉れやはらんか。」と、さも嬉しさうに云ふ。

お倉も傍へ摺り寄つて、

「まあま、旦那はん、えゝとこへ御座つた。今夜はどうでも上つて貰はんならのでつせ」。と、ごつごつした木綿づくめのその袂をとる。

それは松葉樓のすぐ裏隣りにある月見亭といふ小さな牛屋の主人で、小里は今迄にも三度ほど出てゐる客なのである。

小里は格子の下棧から手を出して、その客の肩を抑へながら甘えるやうに、

「なあ、旦那はん。どうぞ私頼みですに、上つて呉れやはらんか。私、今夜茶挽いてますのでつせ。可哀想やと思ふたらほんまに助けてお呉れんか。」

客は酒で紅くなつた眼を据ゑてじつと小里の顔を見てゐたが、やがて痩せた體つきにも似合はぬ太い聲で、押出すやうに、

「上つてもえゝけど、今日は、錢持たんよつてなあ。……」と、云ふ。

小里は懐を讀むやうな眼眸をして、

「持たんて、何んぼほどありますの？」

「何んぼあるや分らんけど、……」客はさう云ひながら懐から大きな革財布を出して、有りつたけ手の掌へさらけ出したが、小里はそれを數でよんでみて、
「さうかて九十五錢ほど有りますやないか。なあ、お倉どん、そんだけあつたら宜しいなあ。」と、今度はお倉の方を見る。
お倉は大きく合點いて、
「宜しうあすに、旦那はんのことやよつて負けときますわ。そのかはりもう遅うあすよつて、お酒もなにもよしにして早う寢なはれ。」
客は最初から上るつもりで來たとみえて、そのまゝよろよろしながら店階子を登つていつた。
小里はお繁に
「おばはん。ありがたと。」と、挨拶して、それなりいそいそしながらその後に引添うてゆく。
そのあとにはたつたひとり殘つた菊龍の耳へ、大戸を下ろす音ががたぴし響いていつた。退け過ぎの蕎麥賣りの聲が風の音の合間を寂しく下の町の方へ縫つてゆく。

二

月見亭の主人が案内されていつたのは二階座敷の一番奥にある四疊半の名代部屋だつた。そこには色の褪めかゝつた木綿の煎餅布團が敷きつぱなしにしてあつて、枕許のブリキおとしの火鉢には灰ばかりになつた炭火のなかへ吸ひさしの卷煙草が二本も三本も放り込んであつた。五燭の電燈は煤けた天井

や、ひどのいつた壁に紅黄く映つて、何處からともなく黴臭いやうな濕々した匂ひが漂つて來る。

「旦那はん。今夜はもう此處で寢てお呉れない。ほん寢るだけの錢ですよつて、氣惡うせんとなあ。」お繁はさう云つて、鼠色に薄汚れのした小夜着の裏をめくりながら、「そやけどあんたも時には藝妓はんの線香でも買うて、散財して呉れやはらんかん。小里はんだけではいきまへんぜ。」と、笑ひながらやがて廊下の方へ出てゆく。

それと引違へに小里が寒むさうに肩を縮めながら入つて來た。

「えらい久しうあすな。」と、云ひながら彼女は月見亭の主人の仙さんの肩へ手をかけて、「まあ、坐つてお呉れなしたらどうですに。」

仙さんは云はれるまゝにその布團の枕許へ坐つて、

「いつやつたかいな、もう三月ほどになるやろ。」と、浮かぬ聲で云ふ。

小里も男にしなだれるやうに坐つて、今部屋へ行つて着換へて來た紡績絣の羽織を氣にしながら、

「さうだす、さうだす。何んでもまだ暑い時分ですんな。ほんまに久しうあすなあ。私、家の廊下からあんたが働いてなはるのはようみてまつけど、……。」

仙さんはそれには答へなかつた。

小里は起きてゐても仕樣がないので、

「もう寢まほいな、寒むあすに。」と、甘えるやうに云つたが、仙さんは、

「今寢たら苦しうて叶はんぜ。大分醉うてるよつてな。」

「さうかて寢たら温たあすに。怪體な旦那はんやなあ。」と、云つて小里は笑ひながら仙さんの顔を覗き込んで、「それともなんでつか、おうちのお内儀さんに叱られまつかいな。」

「阿呆らしい。」

仙さんはさう云つて何か不愉快なことでも思ひ出したやうに眉を顰めながら側を向いてしまふ。そして袂からバットの箱を出して、竹のパイプへさして吸ひ出したが、その樣子が何か思ひありげなので、小里は、

「あんた、今夜はきつう鬱いでゐやすなあ。なんぞ心配でもありますのか？」と、お座なりを云ふ。

仙さんは今度はむしやくしやして耐らないやうな顔になつて、

「いや、心配ちうのやないけど、今俺うちの嬶と喧嘩して出て來たんやもん。」

「まあ、お内儀さんと喧嘩して？　厭らしい人。ほゝゝゝ。」と、云つて小里は噴笑してしまつたが、その時ふつといつぞや店の臺所で下女たちが集まつて隣りの月見亭で何やら夫婦の間に激しい云爭ひのあつた話をしてゐたのを思ひ出した。そればかりではない、仙さんと內儀さんとは此頃になつて漸次と仲が惡くなつてゆくといふ噂は誰れやらからも聞いたことであつた。小里はその話を思ひ出すと、急に可笑しくなつて、

「なあ、旦那はん、何んでそんなに喧嘩ちうやうなもんせんならんのだすいな。あんたが浮氣でもしなはるのやろ。」

「阿呆らしい、俺そんなことするもんかい、浮氣は嬶の方や。」と、云つたが、仙さんは急に思ひ返した

やうに、「そやけど婦天下ちうもんは可かんもんや。うちなぞは人の云ふほど婦が威張りもへんけど、時時癪にさわつて癪にさわつて叶はんことがあるのや。今夜かてそや、俺が一言云ふうちには向は十言も云ひ居るのやはけぇなあ。」

仙さんはさう云ふうちにも溫い家のなかへ入つたせゐか漸次と醉ひが廻つて來て、いつになく小里に向つて、しんみり身のうへ話しのやうなものを語り出した。內儀さんに對する不平は內儀さんと彼との間のそも逢ひ初めからの話を引出して、彼は愚痴を零すやうな調子で先々と物語つていつた。小里も初めは管を卷かれるぐらゐに思つて浮の空で聞いてゐたが、ふとしたことから引き入れられて、しまひには橫坐りに坐つたまゝ思遣りの深い顏をしながら一心に聞き入つてゐた。

仙さんは生れは大阪であつた。今でも何處かに田舍ものらしくない樣子が殘つてゐるが、彼は大阪も難波の生れで、家は相當な牛肉屋であつた。小供の時から遊廓で育つただけに惡い遊びなぞも早く覺えて、十七の時に家にゐた仲居を唆かして、家を飛び出して以來、京都、名古屋を食ひつめて到頭この山田へ流れ込んで來たのであつた。一緒についてゐた女は名古屋で因果を含めて女郎に賣つてしまふ、それからは身すがらになつて、四日市、津などをごろごろして步いた揚句到頭山田まで來てしまつたのであつた。

山田へ來ると間もなく仙さんはこの月見亭へ板前に住み込んだ。その時分先の亭主がまだ生きてゐて、何處か見處があるものとしてひどく仙さんを可愛がつた。仙さんも今度ばかりは妙に尻が落着いて珍らしく二年ほど辛抱した。その間に先の主人といふのは泥醉して、町端れの踏切で汽車に轢かれて死

んでしまつたのであつた。

跡に殘つた內儀さんのおきのは丁度その時仙さんよりも四つ上の二十七であつた。もとは此れも仲居あがりの女なので、主人の死んだあとはつひ閨寂しさに仙さんと出來てしまつて、それから間もなく二人は町の世話役の媒介で夫婦になつてしまつた。先の主人には二人の子があつたが、それは商賣の邪魔になるといふ名目のもとに松阪の在へ里子にやつてしまつた。

それからはもう二年の歲月が過ぎ去つてゐる。初めのうちは隨分夫婦仲もよくて、仙さんの方が若いだけに內儀さんは何んでも自分の方から持ちかけていくやうにしてゐたが、それもどうせ合はせもの丶こと丶て長續きはしなかつた。此頃になつて眼に立つやうに仲が惡くなつて來たのには何か原因がなくてはならなかつた。

小里は漸次と彼の話を聞いてゐるうちに、彼女は又彼女で鳥羽にゐた時分のことを思ひ出してゐた。丁度娼妓になつて間もなくついた客に、大阪の會社の汽船の船員をしてゐる男がゐた。その客にばかりはどうやら自分の方から惚れてかゝつてゐたやうな氣がするが、その客の言葉つきなり、身のうへなりが何處となくこの仙さんに似てゐるやうに思はれてならなかつた。生れが同じ大阪なので或はそんな氣がするのかも知れなかつたが、こんなにしんみり話し合つてみると小里は何かしらその船員が懷かしく思はれてならないのであつた。

小里はうつとり考へ込みながら浮の空で、

「そやけど、そないにして夫婦にならしたのに、何んで今になつて喧嘩なんかせんならんのだす？　私

ちやつたらほんまにええ人とやつたらどないにでも仲よう暮らしますにな。」

「いや、それちうのももうお互に厭氣がさしてるからやなあ。俺かてもう出來ることなら別れたい。」

「そんな薄情な、私それやさかい男は嫌ひ。」小里は睨むやうに仙さんを見て、やがてふと又話の調子を變へながら、

「もうお家ではお内儀さん寐てやはりまつしやろか？」と、いふ。そして聞耳をたてるやうに上眼をつかつてゐたが、すぐ庇間になつてゐる月見亭の方ではいくら近くても何の物音も聞えて來ない。小里は何か考へてゐるやうに、

「お内儀さんはあんたが家（うち）へ來てなはるのを知てやすか？」

「いや、そんなこと知らへんわ。」

小里は少し笑つて、

「そんなら宜しけど、世の中は妙なもんだんな。私しみじみ娼妓が厭になつて來た。」と、呟やくやうに云ふ。

仙さんは、

「何んでや？」と、聞いたが、小里はそれには返事をしなかつた。

小里は身の上話しや、ふと思ひ出した昔の男のことやらで妙に心が感傷的になつて、その晩、商賣氣を離れて仙さんに勧めた。夫婦喧嘩をして家を飛び出して來た荒んだ仙さんの心には又それがひどく嬉れしかつた。

二人が退けると間もなく、裏町の方で鶏がかすかに啼き出した。

三

それからは仙さんはちよくちよく松葉樓へ上つた。表口からでは眼にたつので、來る時にはいつでも裏の庇間にある切戸のところからこつそりお繁を呼んだ。そして一圓か二圓の端した遊びをして、夜のひき明方に又切戸からそつと歸つていつた。出る時にも入る時にも四邊を見濟まして路次の人眼に氣を配ばるので仙さんが松葉樓へ上ることは隣近邊の人達もまるで氣がつかなかつた。

仙さんが來ない日にも小里はよく彼の姿を遠眼に眺めることがあつた。小里の部屋は裏通に向いた方の角二階なので、そこの肱懸窓から少し首を伸ばすと、痩せす枯れた松の枝越しに月見亭の裏口が見えた。そのすぐ傍は料理場になつてゐて、ともすると仙さんが鯉口のうへから白の半前垂を懸けて雇人達と一緒にせつせと働いてゐるのが、ちらちらみえた。ある時は又内儀さんが襷がけで働いてゐる姿もみえた。色の蒼い、小柄な女で、いつも髪だけはきちんとしてゐるので、年よりも若くみえるのであつた。小里は仙さんと馴染みになるまでは氣にもとめなかつたやうなことが此頃では妙に眼に映つて來るのであつた。ひよつとして仙さんが此方の二階でも見上げてゐることがあると、小里は人には知れないやうににつこり笑つて相圖をしたりした。そんなことが漸次と小里の心を仙さんの方へ引きつけていつた。時とすると自分でも譯は分らずに、耐らなく逢ひ度くなるやうなことがあつた。

或日の午過ぎのこと、小里が所在なさに部屋で横になつてうとうとしてゐると、そこへ下女のおきち

高く、體もがつしりした男なので、しばらく爭つてゐるうちに今度は仙さんの方がたじたじして來る。仙さんはやがてばたばたと料理場の方へ遁げ込んでしまつた。

跡にはその若い者と內儀さんがたつた二人殘つた。內儀さんは壞れた髮を氣にしながら眞紅な顏をして頻りに泣い歎つてゐたが、やがて若い者は內儀さんの袖をひいて家の小陰の方へ連れ込んでいつた。そしてそこで何やら聲は聞えなかつたが頻りに內儀さんを慰めてやつてゐる樣子であつたが、少時すると若い者は四邊をそつと見廻はしながらいきなり內儀さんの肩を抱いてその頰へ頰摺りをした。

小里はそれを見ると眼を丸くして、

「まん、厭らしい。此處で私らが見てゐるのんが分らんのやなあ。」

おきちは袖で顏を半分隱しながら、

「向ふからやつたら見えしまへんですに。ほんまにえらいことしてなはる。」と、云つて聲を忍んでくすくす笑ひ出してしまふ。

小里はじつと二人の樣子を見入つてゐたが、何事か思ひついたやうに、

「な、おきちさん。あのお內儀さんは間男してなはるのと違ふやろか。」と、おきちの方をみる。

おきちはきよとりとした顏になつて、

「小里はん、あんた今頃そんなこと云ふてなはるのか、鈍な人！」と、云つて、噴き笑しながら、「あんたあこの旦那をお客にしてなはつて、何んにも知らずか？」

小里はてれたやうな顏をして、

「私、何んにも知らへんわ。ほんまに云ふとくれない。」
「ほゝゝゝ。ほんまにあんたもうつかりやなあ。あのお内儀さんはもうせんどからあの料理番はんと間男してなはつたんやさ。私髪結ひさんからも聞きましたんさ。」と、おきちは手柄顔に云ふ。
小里は呆れて、唯、
「さうでつか。」と、云つたぎりまぢまぢしてゐた。
おきちは猶ほも言葉をついで、
「昨日も髪結さんが來て話してなした。あの料理番はんちうのはそらまん腹の惡い人でな。なんでもあの家から旦那はんを追ひ出して、あとへ入らうばかりにかゝつてるのですて。……。」
小里はその話を折るやうに、
「ほて、なんやろか、旦那はんはお内儀さんが間男してやはるのを知つてゞつしやろか。」
「さあ、それがどうや分りまへんのですに。あないに喧嘩してやすところを見ると氣づいてなはるやうでもありますけど、そこはなあ、ほゝゝゝ。」
おきちは小里をつかまへて頻りに先々と饒舌をつゞけてゐたが、そのうちに月見亭でも内儀さんがいつの間にか奥へ入つていつてしまつたので、此方も興がなくなつて、到頭話もそれつきりになつてしまつた。
小里はそのまゝぼんやり二階の部屋へ歸つて來たが、あの内儀さんが間男をしてゐると聞くと何んだかひどく仙さんが可哀さうに思へてならなかつた。さつき料理番に追はれて家のなかへ逭げ込んでいつ

た仙さんの後姿も今見るやうだつた。小里は何かしら仙さんに逢ひ度くなつて、肱懸窓のところからそつと顔を出してみてゐたが、到頭彼は一度も姿を見せなかつた。

四

その晩、遲くなつてから又仙さんがひよつくらやつて來た。小里はそれとなく待ち設けてはゐたものの、來たと聞くと耐らなく嬉れしかつた。彼女はいそいそ店を仕舞つて、そのまゝ二階の部屋へ上つていつた。

仙さんはいつものやうに酒の匂ひをぷんぷんさせてゐたが、その晩は常になく小ざつぱりした銘仙の着物なぞ着てめかし込んでゐた。

小里は部屋へ入るなり仙さんの傍へいつてぺたりと坐りながら、

「なあ、仙さん。今夜ほんまに逢ひたあした。よう來て呉れなした。」と、云つて、その肩へ手を懸けたが、仙さんは笑ひもしずに妙に打沈んでゐる。

小里はその肩を突き動かして、

「ほんまに會釋ないな、何ぞ云ふて呉れやはらんかん。」と、甘えるやうに云ふ。

仙さんはそれでも押默つてゐたが、やがて力めて笑ひながら、

「俺今迄新町へいて飲んで來たんやさ。」と、云ふ。

「まあ、新町へいてなしたか。ほんまに腹の惡い人！　そなとこへいく錢があつたらなんで私のとこへ

早うに來てくれやはらんのですか。覺えてなはれ。」と、云つて、小里は仙さんの膝をぴしりと抓りあげたりする。

仙さんが酒を呉れと云ひ出したので、小里はお繁を呼んでその支度をして貰つたが、臺のものが來ると二人はそれを火鉢の前へ置いて、對向ひに坐りながら盃のやりとりをはじめた。仙さんは自分で欲しいと云つて置きながら、もう酒が喉へとほらないやうにぐつぐつと胸をならしてゐた。小里は妙に飲み度くなつてひとりで盃の數を重ねた。

仙さんは腰を落着けたせいか、漸次と醉つて來たが、やがて我慢してゐられないやうな顏になつて、「なあ、小さやん。俺實は今夜大阪へ往なうと思ふて出て來たんやぜ。」と、思ひもつかぬことを云ひ出す。

小里に呆れて、

「嘘や。ほんまにそんなことがよう云へたもんや。」と、半信半疑で云ふ。

「いや、ほんまに嘘やないわ。俺もうこんな山田みたいなところへゐるのんがけつたい糞が惡うなつたよつて、いつそ大阪へ往んだらう思ふてんのさ。」と、仙さんは漸次眞顏になつて云ふ。

小里もそれをみると首を傾けて、

「ほんまのことだすか、厭らしい。」

「ほんまや、俺が何んで嘘みたいなもん云ふかいな。ほんまに俺大阪へ往に度いのや、これみとみい、着物もちんと着て、あこにもそれ風呂敷包みがあるやろ、あれ持つて汽車に乘る筈やつたんさ。」

成程さう云へば風姿も變つてゐるし部屋の隅には黄色いメリンスの小風呂敷も置いてある、小里はふつと晝間の夫婦喧嘩のことを思ひ出して、ひよつとしたら仙さんがほんとにそんな氣になつてゐるのかも知れないと思はれて來た。小里の胸は妙に喘いで來た。

仙さんは眞顔になつて、

「俺もついせんど大阪の方の家から父親が病氣や云ふて來よつたよつて、一度はどうしても往なんならんのや。それに茲で親父でも死によりや俺も、大阪の方の店を引受けんならんし、それやこれやで一遍大阪へいて來たいのや。大阪へいけば今度こそ俺も花が咲くのやしなあ、ほんまにこんな山田みたいなとこけつたい糞が惡うてどもならんわ。」

小里は何んだかそんなことを云はれると心細くなつて、

「ほて、あんた大阪へいたらもうこの山田へは歸つといでしまへんのか?」と、訊く。

「そらもう歸らんにきまつたるがな。どうで家もきまりをつけていくのやさかい、……。」

小里はさういはれると益々悲しくなつて、

「そなこと叶はんわ。あんたがゐやはれへなんだら、私もうなつともならんわ。どうぞやさかい大阪へ往なんとおいてくんなはれ。」と、仙さんの手を握りしめながら云ふ。

仙さんはそのまゝ眼を瞑つて深い思ひに沈んでゐたが、やがて自分でも心細さうな聲音になつて、

「大阪へ往なゝんだら俺も何んぞ別なお商賣を初めんならんし、ほんまに今迷ふてんのや。どないにしたらえゝやろなあ。」

小里は默つてゐられなくなつて、

「ほんならあんたお内儀さんと別れなはるのか？」

「いや、別れるて、そんなことまだ極めたらへんけど、……」

「阿呆らしい、あんたはんなんぼ私に隱してなはつたかて、私ようよう知つてますに。」小里はさう云つて、仙さんの手をもう一度握りしめながら自分の方へ引寄せるやうにして、「あんたとこのお内儀さん惡い事してやすんやてな。私知つてまつせ。」

仙さんはそれを聞くとじいつと小里の顏をみつめてゐたが、少時すると苦笑ひをして、

「もう大方知つてるやろなあ。つい隣りのことやさかい。……」と、云つたが、急に力なく萎れて、「なんせ相手があの通りの亂暴者やよつて、今度ばかりは俺の方から手引いた方が賢いのや。あの女(をなご)とももとを云ふたら同じようにして出來たんやからなあ。」

「さうかてお内儀さんも餘りやないか。素人の女なんてそんなもんやろか？」

「何事も慾にかゝつては叶はんもんや。えらい目に逢はんうちに俺は往んでしまうたるのや。家の男に間男しられてのめのめ山田にもゐられへんやないか。」さう云ふ仙さんの顏には捨鉢になつたやうな激しい色が現はれて來た。自分の流浪時代のこともそれとなく思ひ返されて、彼は何糞つと云ふやうな氣になつてゐるらしかつた。

小里は帶の間へ手を突込んで頻りに考へてゐたが、急に悲しくなつて來たと見えて、袖口で眼を抑へながら、

「あんたが往んでおしまひたら、私どうしよう。此頃私ほんまに勤めはなれてあんたのことばかり思ふてますに。」

仙さんもほろりとして、

「俺かてさうや。今夜も餘程このまゝ往んでしまはふと思ふて、一度は汽車に乘つてみてが、何やしら急にお前に逢ひ度うなつたで、筋違橋で又降りて、新町を廻つて此處へ來たんや。相性ちうのか何ちうのか、俺もお前に別れるのが厭でなあ。」

さう云はれると小里は耐らなく嬉れしくなつた。惚れてゐるとは知らずに漸次と深間になつてゆくのが、自分でもはつきり分つてくる。仙さんに大阪へいかれてしまつた跡の寂しさ、遣瀨なさを思ふと、その思ひは一層強く胸に迫つて來るのであつた。

小里ははふり落ちる涙を頻りに袖口で拭きながら、

「あんた自分のことばかり云ふてなはるけど、ちつとは私の氣にもなつて呉れやはらんか。こないにしてゐたかて、私、借金はふえていくばかりやし、末に何ひとつ望みもない體やし、私、ほんまに此頃先のことを思ふと悲しいてならんのだつせ。」

小里は男の膝のうへゝ身を投げかけて、それから長いこと愚痴を零してゐた。鳥羽から此地へ仕替へて來たときの入譯や、親のない悲しい身の上、それから生ひ立ちのことまで細々と物語つた。小里は娼妓になつてからそんな話をしたのは例の船員の客とこの仙さんばかりで、前後にたつた二度より外そんな突きつめた思ひになつたことがないのであつた。

仙さんはじつと眼を据ゑて聞入つてゐた。

小里は憐れな身の上をすつかり物語つてしまふと、涙にぬれた眼をあげて、

「これだけ云ふたら、あんたにも私の身のうへが分りまつしやろ。これだけ云ふてもあんた大阪へ往なはるか。」と、膝を押し動かしながら泣き聲を出して云つた。

仙さんは默つてゐて返事をしない。

小里は思ひ迫つたやうに、

「こんだけ云ふても、どうでも大阪へ往なんならんのだしたら、私頼みだすさかい、どうぞ私も一緒に大阪へ連れていておくれない。どんな苦勞でもしますよつて、ほんまに連れていておくれない。」と、云ふ。

仙さんは途方に暮れて、

「そら連れていたら一番えゝのやけど、俺にお前の身ぬきするだけの腕があつたら、何にも女房に間男しられたりせんわ。そんなことは出來んこつちや。」

「さうかて、身ぬぎはせいでも、私さへ腹をきめたらどうでもなりますがな。」

「阿呆らしい、どうもならへんわ。」仙さんはてんで受け付けないやうに云ふ。

小里はそのまゝ默つてしまつたが、心では何か頻りに思ひ企んでゐることがある樣子だつた。少時するとふつと我れに返つたやうに、

「ほんまにこんな時に心中する氣になるのやなあ。」と、涙聲でしんみり云つた。

何處か遠くで拍子木の音が不意に起つて、それが漸次と此方へ近寄つて來る。それは二時の退けの報

らせであつた。
小里はやつと男の膝から體を起こして、
「もう退けや。早う寢まほいな。ほに寢て話しまほ。」と、云つたが、その時廊下の方から足音が聞えて、お繁が見廻りにやつて來たものとみえ、障子を細めに開けて、
「ほ、まだ寢やんと起きてやすのか。難儀やなあ。」と、云ふ。
小里はそれと一緒についと男の傍を離れて、寒さうに肩を慄はしながら、仙さんに、
「私、一寸あつちやへ行て來ますわ。あとでゆつくり話しまほな。」と、云ひ捨てゝお繁がごとごと云はないうちに此方が先を越して廊下へ出ていつた。
その晩は珍らしく廻しが一人あつたので、小里は店へいつて、札を返へすと、そのまゝ表二階の名代部屋へ上つていうた。その客は參宮の團隊客のひとりで、やけに東京辯をひけらかすやうな若い男であつた。小里はその男と寢ながら仙さんのことを頻りに思ひ續けてゐた。もしほんとに大阪へいくのだつたらどうかして一緒に行き度い、それをするには何か恐ろしいことをしなければ到底行ける見込みはないと思ふと小里は又急に悲しくなつて來た。自由廢業、遁走、心中、そんなことが次々と考へられた。
廻しから歸つてみると、仙さんはもう臥床へ入つてゐたが、臥床のなかで眠りもしずに眼をぱちぱちさせてゐた。彼は又彼で何か考へてゐるとみえ、暗い電燈の光の射しかゝつたその顏からは酒の醉ひが消えて、妙に悲しさうな色だけが殘つてゐた。
二人はそのまゝ曉方まで埒もないことを語りつゞけながら、どうしようといふ考へも極まらずに到頭

その夜を明かしてしまつた。

五

その翌日は仙さんも歸る氣がしないといふので、到頭朝から線香を戻して、流連してしまつた。さうなると何んだか何をするのも厭になつて、仙さんは寢てばかりゐた。

その日は恐ろしくいゝ天氣で、もう節分も近い昨日今日は空も何處となく春めいて、小里の部屋から眞向ふにみえる大きな料理屋の庭の白梅はいつとも知らぬ間にもう處々に花をつけてゐる。遠く朝熊、神路の山々は紫色に霞んで、木々の葉をみても、家々の屋根をみても雨が來ないので、白くかさかさに乾きゝつてゐる。裏の小路には汚い溝際を稽古がへりの雛妓(ふたついち)がお手玉をとりながら通つていつたりした。

小里は店の用を濟ますと、そのまゝ二階の部屋へ上つて、坐つたつきりになつてしまつた。男の財布をみるともうあと幾らも殘つてゐないので、午飯などは店から上るものを二つに割つて食べるやうにした。さうしてまでも彼女は仙さんを歸し度くなかつたのであつた。

もう朝つからひとつことを話し合つてゐながら午過ぎになつても話が極まらなかつた。なりゆきがさうなつて來てゐれば、又極まる筈がなかつた。片方は云はゞ妻に追はれて家を出てゆく男、片方は年期を入れて、軆を賣つてゐる女、それがいかに思ひ合へばとて死ぬより他にはどんなことをしたつて一緒になれる譯がなかつた。小里にはそれが悲しくて到頭又泣き出してしまふ、仙さんも日頃の元氣がすつかりなくなつて、しまひには自分までが貰ひ泣きしてしまつた。

午過ぎになつて仙さんはふと便所へ立つていつたが、その歸りに矢張り氣になるかして、部屋の廊下のところからこつそり月見亭の方を覗いてみてゐたが、どうしたのか彼はそれなりそこへ立つたきりになつて、なかなか歸つて來なかつた。

小里は少時すると自分も出ていつたが、

「あんた、なにしてゐやすの。お内儀さんのこと思ひ出してやすのと違ひまつか。」と、云ひながらふつと下を覗いてみた。と、丁度月見亭の裏庭のところには内儀さんと料理番の男が出てゐて、まさか此樓の二階から仙さんがみてゐようとは思はないので、二人は思ひつきり巫山戯あつてゐた。

あかあかと照り渡る日射しは物乾場へかけた洗濯物に光つて、五目を積んだところでは葱の切屑や、德利のかけらまでが明るく輝いてゐる。料理番の男は井戸端へ出て大きな樽の前へ腰をかけながら頻りに鍋を洗つてゐたが、内儀さんはすぐその傍の物乾場のところへ立つて、蓮葉に卷煙草を啣へながら何か頻りに浮々と饒舌つてゐた。髪も昨日とは見違へるほど綺麗に結つて、いつも塗つてゐる白粉が今日はとり分け濃いやうに見えた。

料理番の男は時々内儀さんの方を向いては笑つてゐたが、そのうちに惡巫山戯が嵩じて手で水を拯つてはさつと内儀さんの方へ懸けたりする。内儀さんも調子に乘つて、ついと小娘のやうにその傍へ寄つていつて、その肩をぴしりと打つたりする。きやつきやつといふ笑聲は仙さんの立つてゐるところまで手に取るやうに聞えて來た。そして臺所口のところでは仲居達が阿呆らしいといふやうな顔をして笑ひながら立つてみてゐた。

小里はさすがに呆れて、

「ま、えらいこつちや。お内儀さんのあの風はどうでつしやろ。せうもない……」と、云つてみてゐたが、仙さんが餘り默つてゐるので、今度はふとその顔を覗き込むやうにみた。仙さんはその時、片手を欄干へかけて、じつと息をつめながら月見亭の方を見下ろしてゐたが、その眼はどうやら血相が變つてゐた。唇は小刻みにぶるぶる慄へて、顔色は漸次と蒼ざめてゆく。

仙さんは少時すると、やつと口を切つて、

「あのすべた奴ッ、どうするか見て居れッ。」と、低いながら力強い聲で云つて、そのまゝ又ぷいと部屋へ入つてしまつた。

そこへ今度は引違へにお繁が雑巾バケツを持つた下女と一緒に上つて來たが、仙さんの姿をみると笑ひながら、

「旦那はん。おうちではえらい騒ぎですな。旦那はんは家で小里はんと居續けしてやはる。おうちではお内儀さんが、ほゝゝゝ。」と、云つてあとは笑ひに紛らかしてしまふ。その聲には何處か嘲けるやうな調子があつた。

仙さんは苦い顔をして笑ひもしなかつた。

小里ははらはらして眼顔でお繁の口を止めようとしたが、お繁はその時後を向いて雑巾懸けをしはじめたので、それには氣もつかず、やがて又、

「ほんまに世間はようしたもんや。これが兩方に知れたらえらいことになりますやろなあ。」と、獨語の

やうに云ふ。
下女は埒もなくげらげら笑ひ出してしまつた。
　廊下を拭いてしまふとお繁は又態とらしく笑ひながら、
「もう夕方まではお線香も買うて貰ひましたんやさかい、どうぞしておたのしみやす。なんぞ食りたなつたら卵でも持て來まほ。」と、云ひ捨てゝ降りていつてしまつた。
　仙さんはその足音が階下へ消えてしまふときつとした眼つきをしながらいきなり小里の手をとつて、自分の膝の傍へ引き据えた。そして少し慄へを帶びた聲で、
「な、小さやん。今えゝことと思ひついた。お前、もし俺が大阪へ往ぬのやつたら、どんなことをしてゞも一緒にいて呉れるか？」と、云ふ。
　その眼色が据つてゐるので、小里は心配さうにその顏をみながら、
「そなこと聞かんかて分つてますやないか。昨夜から何遍云ふたか分らしまへんですに。」と、態と笑ひをつくりながら云ふ。
　それを聞くと仙さんは四邊の氣勢を伺ふやうにじつと聞耳をたてながら、やがて聲を低くゝして、
「實は俺昨夜寢てから考へたんやけど、お前を大阪へ連れていくにえゝ方法があるのや。お前さへ腹を極めて呉れたらえゝのやけどなあ、……」
「そらあんた、ほんまに一緒に連れていて呉れやはるのだしたら、私、何んなとかてしますわ。私はもう死ねといはれても厭とは云はしまへんで。」小里はきつと仙さんが逃げろと云ふだらうと思ひながら云つた。

仙さんはそれを確かめるやうに、
「ほんなら俺と一緒に死ねと云ふたらお前はほんまに死んで呉れるのやなあ。」と、眞顔で云ふ。
小里は幾度か合點いた。
仙さんはそれを見ると又小里の方へ摺り寄つて、一段と聲をひそめながら
「お前がそれだけの覺悟を極めてくれてゐるのやつたら、譯もないことや。死ぬこと思ふたらどんなことかて出來るもんや。俺のためならそれも厭とは云はへんのやなあ。」
「何遍云ふたら得心がいくのだす？ほんまに諄。」と、云つて小里は仕方がなさゝうに笑つてゐたが、「そんなことばかり云ふてゐんと、早うからうせいならからうせいと云ふて呉れやはらんか。」
仙さんは一層張りきつた顏になつて、
今云ふがな、云ふたあとでお前厭はならんで。えゝか。」と、云つてもう一度小里の眼色をみたあとで、又四邊に氣を配りながら「あのほんまはな、大それたことやけど、あこの家へ火を放けるのや。」と、月見亭の方を顎でしやくつて見せる。その眼は蒼く光つてゐた。
小里はまさかと思つたので、笑ひながら、
「そんなてんがうは置いてくんなはれ。ほんまのこと云ふて呉れな私怒りまつせ。」
仙さんはそれを見ると、急にどうしたのかぱつと顏を紅くして、
「いや、てんがうやないのや。實は細かう話さんと分らんが、あこの家は今かて私の名義になつてるのやはけえ、あこが燒けると保險の金が七百圓ほど取れるのや。それを取つて、お前の身ぬきをして、そ

れで大阪へ行かうと、こないに思ふてな。」

小里はそれで眞顔になつて、

「ま、七百圓だすて？　それは燒けさへしたら唯で取れまんのか？」

「知れたことさ。そのために月々懸金がしてあるのやもん。それもついせんど、あれは去年の夏やつたかいな、その會社が出來て、俺にも是非入れと云ふものがあつたもんやて入つたんさ。大阪の火事の折かて俺の親父の店は他の家と違うて保險へ入つとつたばかりに二千圓からの金が唯入つて來たんさ。」

小里はしみじみ感心して、

「ま、二千圓、えらいこつちや。そやけど、ほんまに世の中て躑梅ようしたもんだすな。家が燒けてお金が取れるのやつたら恐いことありまへんな。」

仙さんはそこへつけ込むやうに、

「俺の家も七百圓から保險がつけたるよつて、燒けさへしたら、その金はまるまる俺の懷へ入るのや。その時嬶が何を云ふたかて、聞くことぢやない。燒け出されるだけでもえゝ氣味やないか。」さういふ眼のうちには嫉妬、憎惡、復讐、すべての感情が燃えてゐた。

小里はそのまゝぼんやり考へ込んでゐたが、やがて恐さうな顔になつて、

「火放けるてどうするのですいな、人に知れたらいきまへのやろ。」

「そら知れてるがな。誰れにも知れんやうに火事を出いて、燒いてしまはな可かんのや。もしそれが知れたら懲役にいかんならんよつてな。」

「さうでつしやろな。」

小里はさういひながら眼を逸らしてしまつた。その時彼女の眼にはこの松葉樓や、月見亭が一面の猛火に包まれてゐる光景がふいに映つて來た。彼女が鳥羽にゐる時分、廓のすぐ裏手の木挽工場に火事があつて、折柄の風で到頭十戸ばかり延燒したことがあつたがその時の物凄い有樣は今でも彼女の眼に殘つてゐるのであつた。いかに男のためとは云ひながら、どうしてそんな恐ろしい眞似が出來よう、人目を掠めて火をつける。そんな大それた眞似がどうして女の身で出來よう。さう思ふと、小里はそんなことを企む仙さんが急に恐いやうに思へて來た。今迄はうかと聞いてゐたことが身を責めて、小里は自分の身に何か大きな重荷でもくゝりつけられたやうにぞうつとして來た。

小里はしばらくすると急に泣きながら男の手を握つて、

「そんな恐いことをせんかて、まだ他に何ぞ仕樣がありそなもんやないか。私、火放けたりするのん叶ひませんぜ。死ぬのやつたらどもあらしまへんけど、……」

仙さんは急に蔑むやうな顏色になつて、

「それ見いな。厭ちうにきまつたると思ふたら、ほんまにさうやつた。そうかて死ぬこと思ふたら火放けるぐらゐ譯なしやないか。お前にその氣がないのやからあかんわ。」

「ま、會釋ないこと云はゝる。ほんなら私、こゝで死んでみせまほか。」

「阿呆らしい、口でなら何とでも云へるがな。ま、何ごともてんがうやと思ふて、今のこと誰れにも云はんとおいて呉れ。俺ももう一度考へ直してみるさかいな。」

それからは小里が何といつてももう仙さんはそのことをおくびにも出さなかつた。障子一杯にあたるほつかりした日射しを眺めながらぼんやりしてゐた。

夕方になつて線香がきれると仙さんは名殘惜しさうな顏をして到頭歸つていつた。これから何處へいくかと訊いても、仙さんは、

「さあ足の向くところへ行くんさ。」と、云ひながら態とらしく笑つてゐた。

小里は仙さんに別れてみると何となく悲しくてならなかつた。歸り際にあれほど誓つてはいつたものの、自分が云ふことを聞かなかつたので愛想を盡かして、たつたひとりで大阪へでも行つてしまつたのではなからうか。あの時火を放けるなどゝ云ふ大それたことは引受けなくても、もう少し何とか云つて置けばよかつた。自分ひとりこのまゝ殘されたらどうなることだらう。それよりもいつそ死んだ氣になつて、仙さんの云ふ通りにしようか、小里はそんなことなぞ考へるほど心寂しくなつて來た。

その晩、何處の男とも知れない客と寢ながら、小里はまんぢりともしずにそのことばかり考へてゐた。しまひにはどうしても默つてゐられなくなつて、他の話に紛らかしながら保險會社のことをその客に訊ねてみたが、その男は保險會社のなにかに情夫でもあるのかと思つたかして、捗々しく返事もして呉れなかつた。

晩方になつてうとうととしかけたが、火事の夢に襲はれて又眼が冴えてしまつた。

その翌日からどうしたのか又仙さんの姿は月見亭の裏庭でちよくちよく見懸けられた。小里は翌日の朝そのことを下女の口から聞いた時、ではきつと大阪の方は思ひきつて、内儀さんともともとの鞘へおさまつたのだと獨極めにきめて、自分もほつとしたのであつた。それにしても料理番の男の方はどうなつたのであらう。それも氣懸りにならないではなかつたが、兎に角仙さんがこの山田にさへゐて呉れゝば小里には文句はないのであつた。内儀さんとの間がどんなに仲がよくなつていかうがそれは問題ではなかつた。小里はそんなことには稼業をしてゐる女らしい斷念めをもつてゐるのであつた。

それからしばらくの間、仙さんはどうしてゐるのか、まるで松葉樓の敷居を跨がなかつた。初めのうちは小里もさして心配もしなかつたが、逢へない日がつゞくにつれ、又漸次といろんな疑ひやら心寂しさやらが出て來て、ひよつとしたら一番最後に逢つた晩、自分に愛想をつかしてしまつたのではなからうかと、しみじみ思ふやうになつて來た。あの時に仙さんの言葉に從はなかつたので、それで自分の本心を疑つて、こんな女に迷つてはゐられないとでも思つてたのではなからうか、何にしてもちつとも來て呉れないのが、小里には日一日に苦勞の種になつていつた。

ふとした拍子に裏庭で姿を見かけると、小里は我れを忘れてこつちから眼顔で來いといふ相圖をしてみせたりした。そんな時、小里には仙さんがどうも見て見ぬ振りをしてゐるやうに思へてならなかつた。以前は四邊に人影のない時には此方を見あげてにつこり笑つてみせたりしたのに、此頃ではたしかに眼に入つてゐながら此方を振り向きもしなかつた。

小里は日數が經つにつれ、妙に悲しく自烈つ度くなつて、或日のことどうしても我慢がしてゐられな

まに到頭、下女に駄賃をやつて、こつそり仙さんのところへ迎ひの手紙を屆けさせた。それには自分でも譯のよく分らぬ恨み辛らみの文言が並べてあつて、長さは一間もあらうかと思はれるほどの長手紙だつた。下女は隙を窺つて、裏庭の垣根の間からこつそり仙さんに手渡したからと云つて、さも手柄顏に態と小里の部屋へ上つて來てその樣子を話した。

その晩きつと來るに相違ないと思つて待つてゐたが、仙さんはどうしたものか到頭やつて來なかつた。大退けになつてもその姿が見えないので、小里は耐らなく悲しくなつて、いつそこつちから忍んでいつて、裏庭の塀の外へ立たうかとさへ思つた。それと一緒にたしかに愛想を盡かされたに相違ないと思ふ心は一層强くなつて、小里は何かなしに身も世もあられぬ心持ちになつていつた。

もだもだしながらどうしようかと思つて日を送つてゐるうちに或晩のこと、もう十二時過ぎてから仙さんが飄然とやつて來た。その日も醉つてゐて、階子を上る足どりはどうやら怪しかつた。

小里の喜びは他の眼には可笑しいほどだつた。長い間逢はなかつただけにもう人前を耻つてはゐられなくて、彼女はお繁さんがゐるにも拘らずぴたりと仙さんの傍へ摺寄つて、

「ほんまにあんた腹の惡い人や。」と、云つて涙ぐんでみせたりした。

仙さんは默つてにやにや苦笑ひをしてゐた。

その晩は初東風が吹いて、戶外は珍らしく物騷がしかつた。宵の口にはさほどでもなかつたが、十時頃から漸次と風力が添はつて、軒の出庇の鳴る音が騷々しかつた。それも小里には却つて嬉れしくて、靜かな晩よりも心持ちがしんみりとして、胸にありたけの口說がついついと口先へ出て來るやうな氣が

した。

小里はお繁がいつてしまふと、男の膝へもつれついて、さんざ恨みつらみを云つた。そして、涙を流しながら、

「あんたがそないに意地惡うしなはると、私猶ほのこと深うなつていくのだつせ。ほんまに此頃はづゝなうて、泣いてばかりゐましたんやさ。」

仙さんはその顏をみながら急に情にほだされたやうに、

「俺かてさうや。」と、口のなかで云つた。そして吶りながら、「俺もあれから大阪へいくのんもやめて、少時の間でもお前の傍にゐたさに、又厭な思ひをして家へ歸つたんやぜ。毎日叶はんことばかりあつても、お前のためやと思ふと、辛抱も出來るのやさ。」

小里は男の手をしつかり握りしめて、

「嘘にかてそないに云ふて吳れやはると私嬉れしいですに。」と、云つて、泣い欷りながら、「そないに思ふとくれやしたんに、なんで來て吳れやはらんのか。それだけが私、悲しいあした。」と、又恨みがましく云ふ。

「そないに云ふたかて、そら駄目やさ。來たいのは山々やつたけど、錢はなし、來られんもんは仕樣がないわ。」仙さんはさう云つて、口惜しさうな顏をしてゐた。

二人はそれから酒にして、大退け過ぎまで泣いたり笑つたりしてゐた。そしてお繁が見廻りにいつた時にはもう臥床へ入つてゐたが、それでも話聲だけはいつまでも聞えてゐた。

七

その晩曉方ちかくなつて、どう話がきまつたのか、一度寢んだ仙さんと小里とは又むくむく起き上つた。春とは云ひながら三時四時になるとじつくり冷えて來るので、二人は褞袍を着ながらぶるぶる慄へてゐた。

小里はなるべく音を立てないやうに戶棚をあけて、何やら掻き捜つてゐたが、やがてそのなかゝらぼろぼろになつた浴衣と肌襦袢とを取出した。仙さんはそれを受取つて表や裏を打返してみてゐたが、そのまゝそれを疊のうへゝひろげて置いた。そして枕許に置いてあつた古新聞を音のしないやうに揉んでそのうへゝかさねて、今度は火箸をとつて火鉢のなかに殘つてゐる炭火をつまんではそのうへゝのせた。仙さ指先がぶるぶる慄へるので小さな火種はともすると火箸の先から零れて灰のなかへ落ちてしまふ。仙さんはごくりごくりと唾を呑み込みながら、一生懸命に仕事をつゞけた。彼の顏色は漸次と眞蒼になつていつた。

火をのせてしまふと先へのせた方から古新聞がぶすぶす燻りだすのをやがて仙さんはそつと襤褸で包んで、そのまゝ小腋にかゝへて立ち上つた。そして慄へる足許を踏みしめながらまるで薄氷でも踏むやうにそつと部屋を出ていつた。

戶外では風の音が物凄く荒れ狂つてゐる。ひと吹き吹きつける度に棟木はぎいつと唸めいて、雨戶が身慄ひでもするやうに鳴りはためく。小里は息をつめてはらはらしながら聞耳を立てゝゐた。

仙さんは出ていつたきり長いこと歸つて來なかつたが、少時すると階子段の方からみしりみしりと足音が響いて、仙さんは猫のやうに忍び足に歸つて來た。そして部屋へ入るとすぐに臥床のなかへ藻繰込んで、まだ胸の動悸がおさまらないやうにぶるぶる體をふるはしてゐた。

小里も胸をはづませながら、そつと顔を寄せて、

「どうだした、誰れにも見られしまへなんだか？」と、慄へ聲で聞く。

仙さんは深い嘆息をついて、

「大丈夫や。下に石油をかけた炭俵を積んどいたよつて、火がつきさへすりや、もう此方のもんや。」

と、云ふ。その言葉つきは割に落着いてゐながら喉がからからに渇いてゐるので舌が縺れた。仙さんはむつくり起き返つて枕許の水壜から口移しにぐつぐつと水を飲んだ。

小里は大きく眼を瞬つて戸外の氣勢を伺つてゐたが、やがて何と思つたか又戸棚へ半分體をさし入れてごとごとしはじめた。

仙さんはそれをみると、半ば起き上つて心配さうに、

「何をしてゐるのや。」と訊く。

小里はちらと此方を振顧つて、

「私、大事なもんだけ片附けて置かんと、それちうときに慌てんなりまへんさかいな。」と、云ふ。

「そんなもんどうでもえゝやないか。今音をさせたらあかんがな。」仙さんはじりじりしながら云つたが、その時不意に階子の方で誰れかの足音がする。小里も仙さんも悸乎としてそのまゝこそこそと臥床

のなかへ入つてしまつた。

足音は漸次と此方へ近づいて來て、やがて障子ががらりと開いたかと思ふと、そこからはお繁の聲が、「ほ、寢んでゐなはるのか。」と、云ふ。そして「小里はん、小里はん。」と小里を呼び起こす聲が續いて聞えた。

小里が何とも返事をしないので、仙さんは仕方がなしに今眼がさめたやうな顔をしながら、「何んや。」と、云つて、態とらしい伸びをしながら寢返りを打つた。

お繁は部屋のなかへは入らずに、

「あの、なんやしらこゝは黄な臭うあすに。何んぞ燃しなしてか。」といふ。

仙さんは寢呆け聲をつくつて、

「うん、寢しなに煙草の殼を燃やしたよつて、その匂ひが殘つてんのやろ。」と、呟く。

お繁はそれで安心したやうに、

「それならよろしいけど、今夜は此の風だすよつて、氣注けてくんなはれ。」

さう云ひながらお繁は嚔をひとつしてそのまゝもと來た方へ歸つていつた。

小里は寢返りを打つて不意にじいつと仙さんの手を握つた。

お繁が歸つていつてからは風の音ばかりが雨戸にさわついてその外には何の物音も聞えない。二人は今か今かと聞耳をたてゝゐたが、いつまで經つても何の氣勢もしないので、仙さんは到頭我慢が出來なくなつて、今度は枕のうへゝ腹ん匐ひになつて兩手を耳へ押當てながらじいつと戸外の物音に聞き入つ

てゐた。

張切つた一分一分が過ぎてゆく。

仙さんはやがて何と思つたか、そつと起き上つて、電燈をぴちんと消して、眞暗闇のなかを肱懸窓の方へ匐つていつた。そして風の音の合間をみて、そこの雨戸を細めに開けてみたが、戸外は唯一色の闇で、向隣の娼樓の家根の處には風に洗ひ出されたやうな蒼白い銀河がぎらぎら輝いてゐるばかりである。

仙さんは眼を移して、今火を投げ入れた裏庭と思ふあたりをそつと覗いたが、そこらは濃い暗闇で何事もないやうにひつそりしてゐる。じつと見てゐるとそのうちにふと何か紅い火の粉のやうなものが一つ二つふらふらと暗を縫つて飛んでいつたが、その途端に暗の底でばちばちと異樣なもの音が聞えて、とみるまに月見亭の板場のところからは二尺ばかりの眞紅な焔がめらめらと燃え上る。四邊は急にぱつと明るくなつていつた。

仙さんは胸を躍らせながらそのまゝ雨戸をしめて又臥床のなかへ潜ぐり込んでしまつた。そして我れ知らず小さな呻き聲をたてながら五體をふるはせてゐた。

ものゝ五分も經たゝない間に、階下では雨戸を踏離すやうに開ける音が聞えて、誰れかゞ「火事やあ、火事やあ、だはんぞ來てえなあ。」と、消魂しい叫び聲をたてる。廊下はやがて人の足音でどたばたと騷々しく混雜して來た。

二階へはお繁が半狂亂になつて上つて來た。そして小里の部屋の前まで來ると電燈が消えてゐるのでぱたりと障子へ突當りながら、

「お隣りの旦那はん、月見亭の旦那はん。あんたとこ火事がいてますせ。お隣りの旦那はん。」と息を切しらながら呼び起こす。

仙さんも默つてゐられなくなつて、矢庭にがばと飛び起きた。そして、

「なんや、火事やて！」と、云ひながらさも慌てたやうに肱懸窓へ馳け寄つて、もう一度そこの雨戸を開けてみた。その戸の間から風は斜に吹き込んで、紅い火光がぱつと障子の面へ映つて來る。

「ほ、こらえらいこつちや、家が燒けてるのやなあ。」仙さんは悸乎としたやうに云つて、首を差し伸べて明るい階下をさし覗いたが、その時にはもう月見亭でも皆起きてゐて、板場の戸口のところでは寢着姿のしどけない内儀さんが何やら大きな喚めき聲を立てながら長い竿を持つて火先を叩き消さうとあせつてゐた。その傍には料理番の男が仁王立ちになつて、大きな樽のなかゝら汲み置きの水をバケツで掬つては一生懸命になつて打懸けてゐた。水がいく度に白い烟と一緒に火の粉がぱつと煙花のやうに飛び散つて、風のために二階の軒先の方まで煽り上げられてゆく。

お繁はおどおどしながら、

「まあ、旦那はん。早う歸つて上げなはらんかん。お家が燒けてますちうのに。」と、云つたが、小里はその肩を抑へて、

「そないに云ふたかて、今お出やしたら、家へ泊つてなはることがすぐに分りますやないか。」さう云ふ聲はひどく落着いてゐた。

お繁は

「さうかて、火事がいてるのに、そなこと云ふたかてあかんわ。」と、云つたが、階下が氣になると見えて、そのまゝ又あたふた階子を驅け降りていつてしまつた。

階下ではもう宙を飛ぶやうな足音が亂れて、いろいろな人の喚き聲がしつきりなしに聞えてゐた。荷物を戸外へ運び出したと見え、器物の打當る音や瀨戸物の壞れる音なぞも聞えてゐた。

仙さんは肱懸窓の下桟へ足を踏みかけて自分の家の裏庭の方を頻りに見てゐた。よくみると火光が明るく輝いた割には火が上つてゐなくて、自分の手で仕懸けて置いた炭俵や鋸屑がぱつと一時に燃え上つたゞけで、火先は料理場の出口の板羽目から軒先へかけて二間ほど燃えぬいてゐるばかりであつた。併し、横なぐりに路次の方から渦卷いて來る風が激しいので軒先についた火はあわや屋根裏へ廻らうとする、こゝ五分ばかりの間が大事になるか、それとも敢なく消し止められてしまふかの瀨戸際であつた。

仙さんは氣狂ひのやうに眼を据えてじつと成りゆきをみてゐた。

さすがに盛り場なので「火事」のひと聲を聞きつけると、方々から彌次馬が集まつて來た。路次口はみるみる黑い人影に塞がれて、そのなかを桶や鳶口をもつた若い者が顏だけ紅く火光に照されながら、

「危いぞ。」

「怪我しても知らんわい。」

などと叫びながらわいわい押分けて來る。

裏庭の井戸はまるで悲鳴のやうな音を立てゝ、それから汲み上げられる水は片端からざつざつと眞白な尾をひいて火先へ打懸けられる。誰れがどうなつてゐるのだかまるでごちやごちやになつて、激しい

叫び聲と一緒に十四五人の人影がその裏庭を行つたり來たりしてゐる。
一旦屋根裏まで燃えぬけた火先はそのうちに息を引くやうに暗くなつて來た。そして出庇のやうになつた料理場は窩口の先で散々に打こわされて、そのまゝへち曲つたやうになつてしまつたが、それと一緒に白烟が濛々と渦卷いて、四邊は漸次ともとの暗闇へ歸つてゆく。
「なんや、もう消えてしまふのか。阿呆臭い火事やなあ。」などゝ云ふ聲が路次の闇で聞えて、集まる時の早かつた彌次馬は散る時も呆氣ない程早かつた。一人二人づゝその足音が遠のいてゆく。
折角仙さんが身を賭して企んだ放火も大事に至らずに、極めて雜作もなく消し止められてしまつたのであつた。仙さんはきりきり齒がみをしながら火が消えてしまふまでじつと階下をみおろしてゐた。
火が消えると間もなく吹く風と一緒に東の空から眞珠色に夜が明けて來た。

八

夜がすつかり明け放れて、樓ぢうが又もとの靜けさに歸るとやがてお繁はさも安心したやうな顏色をして小里の部屋へ上つて來た。その時には仙さんももう斷念めて臥床へ入つてゐたが、小里は跡のことが心配になるのでその枕許へ坐つて煙草を吸ひながら途方に暮れたやうな顏をしてゐた。
お繁は部屋へ入るといきなり。
「旦那はん、まあ結構なことには大事にならいでえゝ鹽梅だしたなあ。ま、ほんまに私吃驚しましたわ。」と、云ふ。

仙さんは臥床のなかゝら眼だけだして
「俺も安心したわ。出るには出られんし、もし燒けでゝもしまふたらほんまになつともならへんわ。」
と、何喰はぬ顏で云ふ。
お繁は火の消えた時の模樣をくどくどゝ話したが、一番骨を折つて吳れたのは向ふ隣りの南海樓の若い者達で、彼等が屋根へ上つて死をめくつてそこから水を懸けたので大事にならずに消えたのだといふ。もしそれをしなかつたらこの風の力に煽られてどんな恐ろしい大火になつたか知れなかつた。そして風の向きが外宮樣の方へ向いてゐるといふので、信心家のお繁は勿體ないことゝだと頻りに云ひ續けてゐた。
小里はまだ胸の動悸が靜まらないやうな格好をして、
「ほんまに何から起つた火どつしやろなあ。きつと月見亭の料理番さんがお內儀さんと惚けてなして、板場の火を消すのんを忘れはつたに違ひない。せうもないなあ。」と云ふ。
お繁はそれを抑へて、
「いや、そうやないのやて。今南海樓の若い人が云ふてなはつた。なんでも放火やげな。火が消えてから調べてみたら、あの火元のところへ石油が流れてゐたんやげな。」
小里も仙さんもさすがにそのうへ訊きたゞすだけの元氣はなかつた。
お繁は今まで階下であつた放火の犯人の噂をしだして、なにか月見亭に恨みのある奴の仕業だらうと云うだ。そしてさんざ饒舌つたあとで、

「旦那はん。あんたもえゝ氣な人や。もう歸つて上げなはれ。朝早うにお禮廻りもしなはらなあきまへんで。」と、笑ひながら云つて又階下へ降りていつた。

仙さんはその足音が消えると小里の方を向いて、

「火つけたのはまだ誰れとも當りがついてやへんのやな。こら分るまい。」と、自ら慰めるやうに呟いて、がばと起き上つた。そしてそのまゝ又肱懸窓のところへいつて、そつと月見亭の樣子を窺つた。

裏庭には誰れも出てゐなかつた。明るい朝日が庇間から射し込んで、そこらは一面に水に濕れてゐた。物干竿にかけてあつた湯卷きや肌襦袢は泥塗れになつて方々へ落散つてゐる、井戸の釣瓶繩は切れて、そこらへ引散らかしてある。料理場の方はとみると、出庇になつたところだけが瓦を引剝られて、屋根ぐるみ前のめりにへち曲つてゐたが、母家の方には少しも火の燃えついた痕がみえない。燒け黑んだ板羽目や、障子や、雨戸が出火の際の慌たゞしい騷ぎやうを示すやうに四邊へ埒もなく落ち散つてゐる。すがすがしい朝日の光はその光景を何とも云へない程醜くゝみせてゐた。

仙さんは口惜しさうな顏をしてその光景をみてゐたが、その時、彼の眼には水溜りのうへに石油の流れたあとがぎらぎら浮いてゐるのがはつきり見えた。自分の犯した罪の痕のやうに、それは地のなかへ吸ひ込まれもしずに明るい朝日のなかに殘つてゐるのであつた。

仙さんはぐらぐらと眼が眩むやうな氣がした。

仙さんは歸るでもなく、居續けをするでもなくぶらぶら午過ぎまで小里の部屋へ寢てゐたが、それで

は却つて人に疑はれるだらうといふので、小里にすゝめられて到頭裏の切戸からこつそり歸つていつた。

小里はそこまで送つて出て、

「ほんなら又晩に來てくんなはれ。」と、名殘惜しさうに云つたが、仙さんは何かものに追はれるやうに、後を振顧りもしずにあたふた裏通りへ出ていつた。そして月見亭とは反對の通の方へ小走りに隱れていつてしまつた。

小里はたつたひとりになると妙に心細くて、不安な氣がして耐らなかつた。じつとしてゐると昨夜から今朝までの出來事がはつきり思ひ出されて、犯罪の經過を誰れかゞもう嗅ぎつけてゐるやうな氣がしてならない。仙さんとふたりでゐる時にはさまで恐ろしくもなかつたやうなことが、先々とひどく氣になりだした。この儘かうしてゐて、もし巡査でもやつて來たらと思ふと、小里は額口に冷汗が滲み出るほど切なくなつて來た。

いつもなら薄暗い自分の部屋でのびのびと晝寐でもするところを、小里はたつたひとりでゐる不安さに耐へられなくなつて、やがてそつと店口の方へ降りていつた。店口では朋輩が四五人集まつて、長い煙管で煙草を吸ひながら小母さん相手に火事の噂をしあつてゐたが、小里が降りてゆくと皆此方を振顧つて、なかのひとりは

「小里はん。昨夜はえらいことやつたな。隣りの旦那はんおうちへ上つてなしたんやてな。」と、さもいい話相手を見付けだしたやうに云ふ。そして小母さんのお繁までが、

「ま、こゝへ來て坐んなはれ。」と、自分の坐をゆづつたりした。

小里は皆からさうされるだけ人に顔見られるやうで辛かつた。それでも彼女は不安な眼光でそつと皆の顔色を見ながらおづおづ店火鉢の前に坐つた。

朋輩のひとりはそれを見ると、

「さうかて、小里はん。隣りへ火放けなしたのは旦那はんやちう疑ひがかゝつてゐるのだすてな。警察でも旦那はんが家へゐなはらんのが怪體やちうて、先刻にから家へ張り込んでゐなはるのやて。昨夜うちへ上つて一圓で今朝まであんたとしっぽり寐やんしたとちよつと巡査はんに惚けてあげなしたらどうだす。ほゝゝゝゝ。」

などゝ淫らな笑談を云つてはひつくり返つて笑つたりした。

その時店口で掃除をしてゐたお倉は俄かに顔色を變へて店へ飛び込んで來た。そして慌てきつた早口で

「えらいこつちや、今隣りの旦那はんが巡査はんに引かれて出て往なはつた。」と、云ふ。

店にゐたものは話の最中だつたので總立ちになつて、我れがちに下駄を突懸けて戸外へ出ていつた。

小里もはつとして半狂亂になりながら皆のあとから出ていつたが、とみると月見亭から四五軒先の往來を、仙さんが今送り出したまゝの風姿で巡査に引立てられながら歩いていつた。しよんぼり俛首れながら歩いてゆくその袂の影から捕繩で縛された白い手がちらちらみえてゐた。

晝日中なので廓の通りには恐ろしい人立ちがした。

小里は唇の色まで失つてぼんやり見送つてゐた。

その晩遲く先に拘引されていつた月見亭の內儀さんと料理番だけは警察から釋放されて歸つて來た

が、仙さんはその翌日になつても、翌々日になつても歸つて來なかつた。火を放けたのは仙さんだと云ふことが分つて、警察からすぐさま監獄へ送られたといふ噂がいつともなく廓へ聞えて來た。

小里にはその後警察からは何の沙汰もなくて、彼女はそれから二年の歳月を相變らず松葉樓で勤めてゐるのである。小里ももう今では仙さんのことも忘れるともなく忘れてはゐたが、それでも風の吹く晩などには時々思ひ出すことがあるといつてゐた。そして仙さんはどうしたと訊くと、彼女は「仙さんは今津の監獄へいてやはります。」と、云つてさすがに顔を曇らせるのであつた。

（をわり）

嫌疑

久米正雄

高等學校の寄宿生に、試驗期が來て二三日目の事であつた。競爭の激しさと、勉强の苦しさとに堪へ兼ねた結果であらう。誰れか東寮の廊下の隅へ、放火をした形跡が發見せられた。それは幸にして建物にまでは燃えつかずに、只放火の材料たる石油を注いだ古新聞と、その附近の床板を僅かに焦がしたに止まつた。けれども問題は全寮に擴がつた。而して色々と犯人が探索せられた。併しそれに關する手懸りは、今に至つて少しも得られなかつた。――

小林がその話を聞いた時、彼は自分だつてその位の事は、苦るしくなればやり兼ねないと思つた。而して今のやうにかう神經衰弱が嵩じて來ては、いつ何時自棄な心にならうとも測られぬと思つた。從つて寄宿舍のために此事件を患ふると云ふよりは、實際犯人の心持に同情する所が多かつたのである。

それほどに彼は今度の試驗が苦るしかつた。一體に頭腦がよくない彼は、試

驗になる前から可成りひどい神經衰弱に罹つてゐた。毎も晩春の頃から襲ふて來る憂鬱症に加へて、今年は家庭的な事情が彼を殆んど絶望的にさせた。家の方で郡役所の書記をしてゐた父が、突然職務をやめた爲め、今迄辛うじて續けて來た送金が、ぱつたり絶えて了つたのである。

彼には母はなかつた。故郷にはたゞ五十に近い父が、淋しい孤栖の十年を守つて、只管吾が子たる彼の成人を待つてゐるのであつた。貧しい中から學資を出して貰つてゐる彼は、毎月殆んど一錢の小遣ひもないやうな、切りつめた生活をして來た。寄宿舍に入つてゐれば、食料と舍費を拂つても、九圓の學費は二圓の餘りを生じた。けれども月二圓の餘裕は、一人の學生の小遣ひと稱するには、餘りに少額であつた。彼は參考書は勿論、教科書すら滿足に買ひ得なかつた。他の寮生らと共に、僅かの無駄食ひをする事も出來なかつた。時によると洗濯代さへ拂ひ兼ねた爲め、ひそかに水浴場へ行つて自ら襯衣の洗濯さへ敢てした。

併しその僅かな學費でも、毎月父が俸給の半ばを割いて、きちんきちんと送つて呉れる中はよかつた。それがどうしたものか今になつて、卒業にあと二ヶ月と云ふ時に至つて、はたと絶えて了つたのである。父がどう云ふ事情で、どう云ふ境遇に入つたのか、いくら問ひ合せの手紙を出しても、其後の音信さへすつかり切れて了つた。父の最後の手紙には、己はいつまでかうして郡書記なぞをしてゐても、生涯うだつの上る見込はないから、今の中に思ひ切つて辭職する。而して二三年來考へて置いた仕事があるから、專心それに從事する。その仕事さへ成就すれば、おまへの卒業を待つ迄もなく、己は日本での成功者の一人に數へられるだらう。その時になつたら己の無能を嘲つてゐた奴等に物を見せてやる。お

まへもそれを樂しみにして待つてゐて吳れ。それは長くて一二年の中だ。──こんな事がとりとめもなく書き立てゝあつた。彼はその手紙を見て、何とも云へぬ妙な心持になつた。それはもう五十に手の屆く父の思慮にしては、餘りに小供じみてゐる。而していつも昔流の候文で、簡單に用件だけ書いて來る父にしては、餘りに理路を失つてゐる。彼はふと、父が發狂したのではあるまいかと疑つた。けれどもさうと斷定して了ふのは、彼の肉親の愛情が許さなかつた。彼は疑ひかけて、慌てゝその疑ひを徹回し、而して辛うじて最後に、實は父が免職になつたのであるが、それを自分に匿くすために、わざと自發的にやめた如く、誇張して知らして來たのである、と云ふ推定に達した。けれどもそれはいづれにもせよ、彼に取つて容易ならぬ事態であつた。彼は早速詳しい事情を反問した手紙を出した。返事はなかつた。もう一度出した。それでもまだ返事はなかつた。彼はすぐにも歸鄕して、實相を確めたいと思つた。けれども學年試驗は目睫の間に迫まつてゐた。人々はその準備に夜も日も足らぬ有樣であつた。それに加へて、彼は生憎家へ歸るだけの旅費もなかつた。

「もうあとたつた一月だ。此處を卒業すればどうにかなる。石に嚙りついてもあと一月だ。」詮方なくかう呟いた彼は、どうにかして卒業前の此一月を、切りぬけやうと決心した。而してそれからは、實際三度の食事を二度に減じた。この寄宿舍の賄料は、一日分廿錢であつた。併し一食づゝ計算する場合には、朝食が五錢で、あとの晝と夕とは各々八錢宛であつた。それで彼は朝食と夕食だけで我慢する事に定めた。さうすると食料は、一ヶ月三四圓位で濟む筈であつた。かうして彼は專念勉強に沒頭しやうと思つた。

けれどもそれやこれやの煩悶は、彼をすつかり眞實の神經衰弱にして了つた。彼は机に向つても、只いろ〳〵と空汗(からあせ)を掻いてゐるだけで、勉强と云ふ程の業蹟も上らなかつた。外界は五月の終りで、物皆が初夏の光に輝いてゐるが、彼の心はその刺戟にも堪へられぬ程、暗く沈んで行くばかりであつた。

「こんな頭の調子で試驗が受けられるだらうか。」

彼は机に向つて幾度かから自問した。けれども彼はいくら頭が惡るくても、試驗を受けねばならない境遇にあつた。卒業をもう一年延ばして、ゆつくり靜養をするなぞと云ふ贅澤は、この一月の學費にさへ事を缺く此際の彼に、どうして考へられやう。全く石に噛りついても此處だけを切りぬけねばならない。彼はきー〳〵云ひさうな後頭部を鞭打して、やうやく試驗の準備に取りかゝつた。

試驗が來て初めの一二日は、どうかかうか無事に濟んだ。而して彼は苦しみに苦しみを重ねて、三日目の今日に到達した。——

時計臺の鐘が夜闇の中で遠く二時を打つた。小林は明日試驗のある獨乙語の本を前に置いて、先刻からぼんやり蠟燭の焔を見凝めてゐた。明日の獨乙語は、この學校でも苛酷な評點を附けるので有名な、某敎師の擔當に屬してゐる。彼は一學期にも二學期にも、殆んど零に近い注意點を取つてゐた。而して三學期の今度と云ふ今度に、それを償ふ優等點を取らなければ、そのため落第の悲運に立到るのが目に見えてゐた。それであるから彼は、今日晝の中から全力を盡して、その敎科書を調べ出したのであるが、十一時の消燈までに調べ終へた量は、僅か全體の三分の一にも滿たなかつた。消燈を豫告する小使の鐘

が鳴り、やがて室に點つてゐた三つの電燈が、尾を曳くやうにすうツと消えて行つた時、彼は舌打をして獨逸語の本を暗中に伏せた。併し茲で自暴自棄になつて了ふことは、即ち一年を棒に振る事である。――かう思ひ返した彼は、再び勇を鼓して蠟燭に火を點じた。

やがて彼の前には、黄色い光りがちら〳〵と搖れて、そこのレクラム本の細かい活字の上に落ちた。振り返つて見ると彼の背ろにも、灰色の壁の上に大きな弱い影法師が動いてゐた。

彼は心を落着けて讀み出さうとした。けれども一旦いら〳〵し出した頭は、再び靜まらなかつた。蠟燭の舌の伸び縮みが、第一に彼の神經に障つた。暫らくそれを堪らへて讀んでゐる中に、今度は眼が疲れて、讀んでゐる行と其次の行とが重なり出した。而して後頭部が變に熱して、背中を氣味の惡るい冷汗がすーつと走つて來た。

「もう駄目だ。」彼はかう呟いて、本を叩きつけた。けれどもまだ萬事を放擲して、寢室へ上つて了ふには、少しく未練が殘つてゐた。それで一旦叩き付けた本をもう一度取り上げ、念を押すやうに未だ調べ終へぬ頁を繙して見た。而してそれを、調べ終へた部分と比較し、更に今迄の時間と努力とを其上に割り當てゝ見ると、明朝までかゝつてもその殘餘――と云ふよりは大部分――を片附ける事は困難であつた。それに今迄調べ終へたと稱する部分も、顧みれば只漠然と眼底を一過したに止まつてゐた。

「これは到底駄目だ。」再び彼は心でかう獨語した。

ふと狂暴な心が彼の身の中に湧き立つた。彼は眼前にあつた本を、再び取り下げるや否や、畜生と叫び乍ら強く壁上に叩き付けた。激しく風を切つて壁に飛びついた五冊厚みのレクラム本は、一旦その壁

に粘りついたやうに見えたが、すぐ頁を飜してばさと床上に落ちた。

　彼はいくらか滿足したやうに、それを見やつた。而して彼のこの激しい動作で、一旦煽りを食つて黄色く横に流れ靡いた蠟燭の焔が、再び眞直に燃え靜まつた時、彼の血走つた眼は、飽く事を知らぬ獸のそれのやうに、爛々と暗の中を見凝めてゐた。

「やれ！やれ！」何ものかゞ彼の耳の中で囁いた。併しやれとは何を？——彼は自分の決心に自分から喫驚して四邊を見廻した。而してその考へを吾から振るひ落さうとするかの如く、激しく頭を左右に振つた。

「これは一と思ひに寢て了はう。」かう決心した彼は、急いで蠟燭を取ると、廊下へ出た。而していつもの通り西寮の西の階段を上らうとして、思はずそこに立佇つた。

　彼の足を止まらしめた觀物は、その廊下の隅に置いてある、紙屑入れの炭俵であつた。薄暗いカンテラの光りを浴びて、そこの階段の下に、影のやうに置いてある炭俵であつた。彼は見てはならぬものを見たやうに、はつと息を引き切つて、ぢつとそれに見入つた。

「おまへの探し求めてゐたものはあれだ。」何ものかゞ彼の耳の中で囁いた。

　彼は何ものにか引寄せられたやうに、そつと其炭俵の方に近づいた。而して右手に蠟燭を持ちかへて、再びまじ〳〵とそれに見入つた。見入りながら彼はこんな事を考へた。——この炭俵は彼の手の下さるるのを待つてゐる。彼は只右手に持つてゐる焔を、それに近づければいゝのだ。さうすればやがてそれは燃え上つて、階段に移り、床板に移り、天井に移つて、忽ち全寮が火となるであらう。而すれば明日の

試驗は延びるであらう。延びれば又何とか準備もつくであらう。……

彼がかうして想像の眼で漠然と、高い所から寮の燃ゑる光景を見下ろしてゐた時に、一人の巡視が猫の如く忍び寄つて、彼の肩を叩いた。巡視は彼の氣付かぬ中に、廊下を曲つて來たのであつた。彼は喫驚して振り向いた。

「こんな所で何をしてゐるんです。」黑い服を着た巡視は、彼の頭から爪尖まで見下ろし、又見上げて訊ねた。

彼は默つて慌しく巡視の眼を見返した。而して恐ろしく不利な地位にゐた自分を發見した。暫らくは言葉も出なかつた。

「何をしてゐたんです。」巡視は再び訊ねた。

「何もしてやしません。只立つてゐたんです。通りかゝりに紙屑を棄てやうと思つたんですが、烏渡思ひ出す事があつたものですから、立佇つて考へてゐたんです。」彼は氣力を回復して、やうやく答へた。

巡視の顏には强ひて作つたやうな微笑が浮んだ。

「さうですか。そんなら早く行つてお休みなさい。もうやがて三時ですよ。」

小林は出來るだけ沈着を裝ふて、階段を上つて行つた。而して登りきつた所で、何氣なしに下を見下ろすと、巡視はまだ怪しさうな顏をして、彼の方を見送つてゐた。

「はゝあ、巡視め己を疑つてゐるのだな、」と彼は思つた。「併し疑はれても仕方がない。己は現に想像では立派に放火したのだから。」

彼はかう思ひあきらめて寢床の中へ入つた。

床の中へ入ると又調べ殘した獨逸語の事が氣になり出した。而してそれに次いで當然起るべき落第の事、學資の事、父の事などが一齊に意識の中へ頭を擡げて來た。すべては彼に取つて暗黑であつた。絕望であつた。彼は世を擧げて、彼の生存を否定してゐるかのやうに感じた。彼は永い間寢つかれないで床上に轉反してゐた。

その中にやつとうと〳〵して來た。うと〳〵して來たと思ふと、突然騷々しい足音と、けたゝましい鐘の響によつて、彼は半眠の狀態から起された。

「火事だ。皆んな起きろ！」廊下をかう大聲で呼んで步るく聲が、はつきり小林の耳にも入つた。彼ははつと思つて飛び起きた。而して衣服を急いで引掛けると、慌てゝ廊下へ走り出た。そこゝの寢室の戶が明いて、寮生たちがばた〳〵と二三人づゝ溢れ出た。やうやく明けかゝつた薄暗がりの中で、西寮の廊下の端の方が白い烟に罩められてゐた。

小林が驅けつけた時、火はもう消えてゐた。それは二時間前に、彼が想像の放火をした、恰度その場所から起つてゐた。幸にして又僅かに燃え出したばかりの處を發見せられたため、階段の半面を焦がしたに止まつたが、火元は疑もなく先刻の炭俵であつた。彼は人々の後ろから其場所を覗き込んだ時、何だか息が窒まるやうに感じた。而して自分がその當の犯人であるかのやうな戰きを覺へた。何だか誰れかゞ何處かで自分の樣子を注意してゐるやうな氣がして、そこに居たゝまれなかつた。それで又急いで寢室へ歸つて、床の中にもぐり込んだ。

ふと彼は嫌疑が第一に自分にかゝりはしまいかと恐れた。自分は火の起こる二時間前に、確かにあの炭俵を前にして立つてゐた所を、巡視に見付かつた。それにしても飛んだ所から火が出たものだ。あんな所を見付かつた後で、こんな事が起るなんぞは、實に自分は運が惡るい。嫌疑を受けたら、一體何と云つて云ひ解いたものだらう。自分は確かに犯人ではない。それは自分が知つてゐる。併しそれは具に自分が知つてゐるだけだ。いくら犯人でないと云ひ張つた所で、嫌疑は嫌疑として永久に殘るであらう。——彼はつくゞゝと運命に呪はれてゐる自分を感じた。

「併し云ひ解ける所までは云ひ解かう。それから先きは仕方がない事だ。」

から呟いて彼は、布團を深く被ぶつた。疲れてゐたと見えて、又うと〱して來た。

その中に枕許で誰れかゞ「おい、おい」と呼んでゐるのに驚いて、小林は眼を醒ました。夜はすつかり明け放れて、窓には朝日が眩しく差してゐた。呼んでゐたのは同室の鎌田であつた。而してその後ろには寮の委員の安藤が立つてゐた。小林はそれを見た時、

「矢張り己に嫌疑がかゝつたな、」とすぐに直覺した。それで起き上り乍ら出來るだけ落着いて、

「何んだ。何か用かい。」と訊ねた。

「委員が君に用があるんださうだ。」鎌田は安藤の方を見乍ら、强ひて平靜に答へた。

「鳥渡君に聞きたい事があるんです。どうか一所に寮務室まで來て下さい。」安藤は屹と小林を見定め乍ら云つた。小林はその眼付の中に、旣に犯人として自分を取扱つてゐる底意を、明白に認め得た。而し

てそれを認めた瞬間に、何とも云へぬ不快な感じがこみ上げて來た。それでむつとしてかう答へた。

「さうですか。大方放火の嫌疑でせう。では顔を洗つてすぐ行きます。」

「いや、今すぐ來て下さい。待つてゐるですから。」委員は屹となつて云つた。

「僕だつて逃げたり匿れたりはしませんよ。」

「いや決してさう云ふ譯ではないんだが……成る可く早く片付けたいと思ひますからね。」

併し小林はそれ以上に逆らはうとはしなかつた。逆らへば更に疑ひを增すやうに感じたのである。而して委員の後に從つて、寮務室の階上にある、舍監室へ入つて行つた。

そこには舍監ともう一人の委員が、ひそ／＼と何か話し合つてゐた。安藤は小林を導き入れると、意味ありげな一瞥を殘して、室外に出で去つた。

「さあどうぞ。こゝへおいで下さい。」舍監は自分の卓子の前にある、倚子を慇懃に指した。それが如何にも小林には、そら／＼しい虛禮で、その冷たい叮嚀な言葉の裏には、まざ／＼とした嫌疑が、――飽く迄彼を犯人と信じ切つた態度が、潜んでゐるのだと思はれた。

小林は默つて腰を下ろした。訊問はすぐ初まつた。

「あなたを此處へお呼びしたのは、外でもありませんが、兩三回起つた寮の放火問題に關して、鳥渡お聞きしたい事があるんです。」

「はあ。」小林は顔を上げて、ちらと舍監を見返した。彼はかう云ふ切迫した場合に臨んで、猶、舍監が果してどんな方法で白狀させやうとするかに、鳥渡興味を感じたのであつた。

「實は昨夜あなたが現場附近に立つてゐたのを見たと云ふ人があるんですが、その時何かの過失で、あそこへ火種を落としたやうな事はなかつたでせうか。勿論故意にでなく。」

「さうですな。立つてゐたのは事實ですが、火種を落とした恐れは萬々無いと思ひます。」

「いや無論過失にですよ。私共はあなたが過つて火種を落としたかも知れんと、云つて下さるのを望んでゐるんですがね。過失は誰れにでもあるものです。それは罪にはならないのですからね。今度の事もきつと過失でせう。それに違ひないのです。」

「過失かも知れませんが、僕の過失ではないやうです。」小林は生徒監の釣り込み方が馬鹿にうまいなと感心し乍ら云つた。彼が眞の犯人だつたとしたら、もう此の第一線で降伏したかも知れない。而してすぐに「僕の過失かも知れません」位な事は云ふであらう、——と思つた。

「でもあなたは蠟燭を持つて立つてゐたと云ふではありませんか。」今度は傍から委員が口を出した。

「えゝ持つてゐました。併し寢室へ上るのに、蠟燭を持つて行くのは僕ばかりではありません。」小林は傍から餘計な事を云ふと感じたので、むつとして答へた。

この答へは、飽くまで彼を犯人だと信じてる委員に、圖太い奴だと云ふ感じを抱かせた。それで彼は今度は聲をあらゝげて云つた。

「證據が無いと思つて、白らばくれ給ふな。現に君が放火する處を見た人がゐるんだぞ。その人が出て來てから初めて白狀したんでは、君のためになるまいと思ふから、かうして穩に話をつけやうと云ふんぢやないか。君はその人が出て來ても飽く迄爭ひはないと云ふのかね。」

小林はこの詭計を内心可笑しいとは思ひ乍ら、餘りの事に腹が立つた。白狀を强ひる爲めには、訊問者がどんな詐欺的行爲を取つてもいゝと云ふ法はないと思つたのである。

「私が放火した處を見た人がゐる？それは誰れです。そんな人が居るんなら、呼んで頂きませう。」

委員は卓上のベルを二つほど押した。すると待つて居たやうに戶が開かれて、昨夜の巡視が入つて來た。凡べては豫定の計畫であることが小林にも分つた。

「君は先刻も云つた通り、此人が西寮の廊下の隅へ放火する處を確かに見たのですね。」委員は巡視に訊ねた。

「えゝ見ました。」巡視はちらと小林の方を見やり乍ら答へた。

小林はそれを聞くと堪へられぬ程腹が立つた。それで思はず大聲を出して巡視に食つてかゝつた。

「噓を云ひ給へ。君が僕の肩を叩いた時は、僕は何もしてなかつたぢやないか。」

「あの時はさうでした。併しあなたが放火したのはあの後です。私は何となく怪しいと思つたので、それとなく樣子を窺つてゐると、一時間ほど過ぎて又、あなたが下りて來たではありませんか。」巡視は我れと我が噓を信じるかの如き口調で云ひ爭つた。

「そんな事はない。僕はあれからずつと床の中にゐた。人を陷れやうと思つて、そんな出鱈目を云つて駄目だ。君はうそつきだ。」かう云つて小林は舍監の方を向き直した。「あなた方はこんな噓つきの云ふ事を信用して、僕を信用しないのですか。」

「いや、さう激昂してはいけません。」舍監は穩に云ひなだめた。「決してあなたを信用しない譯ではない

のですが、私共の唯一の手がゝりは、此巡視の言葉にあるのですからな。」
「ぢやあ君はどうしても僕を犯人だと云ふのですね。」小林は再び巡視を顧みた。
「まあさう思つたのです。」
「而してそれをあなた方は信じてゐるのですね。」小林は三度び舍監の方を向いた。
「反證の上がらない限り、お氣の毒ですが嫌疑を掛けない譯には行きません。」舍監は出來るだけゆつくりした口調で答へた。
「宜しうムいます。それ程迄にお考へなら、僕は此上云ひ解かうとはしません。口でいくら云つた處で、それは無駄です。併し僕はきつと僕の潔白を證明して見せます。」かう云ひ乍ら小林は、吾れと吾が決心に驚いた。
　彼の心に突然浮んだのは、死を以て汚名を雪ぐと云ふ一念であつた。激昂してゐる彼れには、此の戯曲的な行爲がすぐにも出來さうに思へた。而して殊には、死ぬのは今だと云ふ氣さへして來た。どうせ彼には凡べてが暗黑であつた。今までだつて、機會さへあればいつでも死ねたのだつた。――かう慌しく思ひ廻らした一瞬に、彼の眼には涙が浮んだ。而して彼の言葉は思はず戰るへた。
「きつと僕は自分の潔白を證明して見せます。」彼は再び繰り返した。
　舍監は默つてゐた。
「ぢや私共もそれを待つてゐませう。」暫らくしてから委員が云つた。
小林はその冷然とした言葉を聞くと、「今に見ろ。その時になつて驚くな」と思つた。而してこみ上つ

て來る憤怒を呑み込んで、
「ではもう御用はないんですね。無ければ歸して頂きます。」と云ひ乍ら立上つた。
舍監は只、「失禮しました。」と云つただけだつた。それが只此の堪へ難い侮辱を詫びた、形式的にもせよ唯一の言葉であつた。小林はそれを聞き捨てゝ、廊下へ出た。
外は櫻若葉に日が透いて、空には白ろく巾廣い光が滿れてゐた。小林の胸中に漲る憤懣は、どこへ遣つていゝか分らなかつた。兎に角何かの方法でこの汚辱は雪がなければならない。けれどもどうして？――それは彼にもまだ決心がつき兼ねた。先刻どこからともなく不意に落ちて來た、死の事も思ひ廻らされた。併しそれが果して最上の方法であるかどうか疑はれて來た。

けれども彼が室に歸つて、自分の机の上に置いてある一通の手紙を見た時、彼の決意は急に別な方向を取つた。
それは故郷で父が世話になつてゐる、隣家の主人から來たものであつた。それには冒頭に先づ驚いては不可ないと云ふやうな前置があつて、父の發狂が報告されてあつた。それによると父は、二ヶ月前人のとめるのも聞かずに職を辭して、以前から考案してゐた改良摺臼の發明に沒頭してゐたのであるが、二三日前食卓に座つてゐた時、不意に皿小鉢を箸で叩いて唄をうたひ出した。而して隣家の人が行つて見た時は飯櫃の上へ上つて踊りををどつてゐた、といふのである。
小林はそれを讀んだ時、「矢張りさうだつたか」と心で獨語した。今更涙も出なかつた。却つてあの嚴

格な父が、茶碗を叩いて踊り出したと云ふ光景を心で描いて、一瞬間可笑しくなつた。けれどもそれは全くの一瞬であつた。彼はその次に父が發狂したので安んじて死ねると思つた。父さへなければ、彼にはとうに死ねたのだつた。父あるがために、彼は生甲斐のない生を今迄生きて來たのだと思つた。而して今と云ふ今、父が發狂して呉れたのは、運命が彼に死を暗示して呉れたのだと取つた。

彼は即座に自殺を決行しやうと思つた。其時ふと先刻死んで汚名を雪がうと云ふ氣になつたのを思ひ出した。丁度それにも適當だと思つた。彼は何か辯解めいた事を書いた遺書を殘さうと考へて、机の引出しからそつと紙片を取り出した。

室には誰れもゐなかつた。彼は紙片を前にして、先刻受けた堪へ難い侮辱の、怨みつらみを述べ立てやうと思つた。けれども其時不思議に先刻の憤懣は去つてゐた。彼は强ひて冷然たる舍監の顔や委員の言などを思ひ出して、憤慨の感情を引立てやうとしたが、どうしてもそれは出て來なかつた。それは父の發狂と云ふ大事件を聞いた時、すつかり別な方向へ流れ去つて了つたのであつた。

彼は死んで行く者が、そんな小さな汚名などを雪いだ所で、何になると思ひ直した。それよりも寧ろ默つて死んで了つた方が、いくら立派だか知れないと思つた。而して更に又其上にわざと罪名を背負つて死んだら、猶ほ立派だとも考へた。自分なぞは何も世の中にいゝ事を殘して死ねる身分ぢやない。せめて他人の罪なりと背負つて、死んでやつた方が死甲斐がある。放火をした犯人だつて、別に深い企らみがあつての事ではあるまい。自分が罪を引受けてやつたなら、恐らくその罪人の胸の中にも、ある感謝の情が生れ出るに違ひない。而して良心が眼醒めて、二度とそんな罪を犯さぬやうになるかも知れな

い。その未知の罪人の上に祝福あれ。――と小林は聖者のやうな心になつて思ひ廻した。

彼は紙片を取つて簡單に、「われ吾が過ちを知る、」と書いた。而してそれを封筒に入れて表てへ舍監の宛名を記し、机の引出しを開けるとすぐ氣附く所へ入れた。

夜に入るのを待つて、小林はそつと寮を脱け出した。

街は初夏の灯影が、鮮かに交錯し合つて、白い着物を着た人の姿がその中にちらほらと明滅してゐた。小林はその明るい巷を逃れるやうに小路へ切れて、やがて平常から死場所と定めてゐる、谷中の墓地へ出た。闇の中で杉の香がしんとしてゐた。彼は物の蔓につかまつて、とある崖を下りた。下には黑く線路が横はつてゐた。

彼は崖の傍の叢に潜んで、時期の來るのを待つてゐた。神經が異常に緊張して、あらゆる物の音が、はつきり聞き分けられた。

遠く汽笛の鳴る音が、森を通して聞えて來た。彼はそれを待つてゐたのだつた。で、靜かに立上つて線路の方へ歩み寄つた。而して暫らくぢつと耳を澄ましてゐたが、其儘そこへ仰向けに寢た。夜露にしつとりした軌道が、彼の頸背(うなじ)の下に、冷たく枕されてゐた。彼の眼は眞つ直ぐに、自分の上に霽れ擴がつた夜空を見た。彼は絶えて見ない珍らしいものを見たやうな氣がした。而して遠い、小供の時のやうな氣持で、貪るやうにちか〳〵と瞬き合ふ星の群を見凝めた。

風のやうな音が近づいて來た。鐵軌を搖(ゆ)する微動が、彼の頸を撲るやうに傳はつて來た。彼は只眞つ

直に天を見上げてゐた。

眞つ黑な、大きな獸のやうなものが、嵐のやうに疾く通り過ぎた。――

線路番が奇麗に胴と首との離れた彼の死體を發見したのは、それから間もなくであつた。

「珍らしく覺悟のいゝ死人だ。」と彼は變を聞いて集つて來た人々に囁いた。

寮でもやがて彼の遺書が發見せられた。而してそれが舍監の手に致された時、舍監の顏には「それ見たことか」と云ふやうな微笑が浮んだ。併しそれこそ死者が當然希望してゐた微笑に他ならなかつた。

かくて死を以て贖つた汚名は、その儘暫らく寮生の間に誤り傳へられた。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區銀座三丁目　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　北區東梅田町　宮內立盛堂
京都市七條停車場前　三共社
仝　間之町七條　大盛社

○定價　金參拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

冊數／區別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本郷區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　必ず一割増の事
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢　及送料共）
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正六年二月二十七日印刷納本
大正六年三月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話小石川二九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

